京都府遺跡調査報告集

第129冊

国営農地再編整備事業「亀岡地区」関係遺跡 蔵垣内遺跡第4次・国分古墳群(I)

2008

財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター



(1) 調査地全景 (西上空から)



(2) D 1 地区全景 (上空から、上が北)

巻頭図版2 蔵垣内遺跡第4次·国分古墳群



(1) 国分29号墳横穴式石室全景(南から)



(2) D 4-1 地区全景 (西上空から)



(1) 国分 45 号墳全景 (南から)



(2) 国分 45 号墳横穴式石室全景(南から)

序

財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センターでは、京都府内の公共事業に伴う埋蔵文化財の発掘調査を行ってまいりました。この間、当調査研究センターの事業の遂行にあたりましては、皆様方のご協力を賜り、厚く御礼を申し上げます。

本書は、『京都府遺跡調査報告集』として、農林水産省近畿農政局の依頼を受けて行った平成 16・17・18 年度に実施した国営農地再編整備事業「亀岡地区」関係遺跡に関する発掘調査の成果を収めたものであります。本書が学術研究の資料として、また、地域の埋蔵文化財への関心と理解を深めるうえで、ご活用いただければ幸いです。

おわりに、発掘調査を依頼された農林水産省近畿農政局をはじめ、亀岡市教育委員会などの各関係機関、ならびに調査に参加、協力いただきました多くの方々に厚く御礼申し上げます。

平成 20 年 3 月

財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター 理 事 長 上 田 正 昭

例 言

- 1. 本書に収めた概要は、以下のとおりである。 国営農地再編整備事業「亀岡地区」関係遺跡 蔵垣内遺跡第4次・国分古墳群(I)
- 2. 遺跡の所在地、調査期間、経費負担者および概要の執筆者は下表のとおりである。

遺跡名	所在地	調査期間	経費負担者	執筆者
国営農地再編整備事業「亀	岡地区」関係遺跡			
蔵垣内遺跡第4次・国分 古墳群	亀岡市千歳町柳ヶ 辻・相模・蔵垣 内・藪ノ本・内垣 内・正田	平.17.3.11~3.16 平.17.5.23~平18.3.10 平.18.4.10~9.26	農林水産省近畿農政局	石崎善久 筒井崇史 松尾史子 輔 平井井神子 田中奈津 坂内裕志

- 3. 本書で使用している座標は、世界測地系国土座標第6座標系によっており、方位は座標の北をさす。また、国土地理院発行地形図の方位は経度の真北をさす。
- 4. 本書の編集は、調査第2課調査第1係があたった。なお、遺物の写真撮影は、調査第1課 資料係主任調査員田中彰が行った。

本 文 目 次

国営農地	也再編整備事業「亀岡地区」関係遺跡 平成 16・17・18 年度発掘調査報告	
蔵垣内遺	遺跡第4次・国分古墳群(I)	
はじめば	E	1
位置と現	環境	2
調査経過	圖	4
検出遺標	冓と出土遺物	6
1. D	1 地区	12
2. D	10 地区	103
3. D2	2 地区	116
4.75	・76 トレンチ	119
5. D3	3 地区	121
6. D	4 地区	128
7.80	・81 トレンチ、D 8 地区	187
おわりに	Z	196
	付 表 目 次	
付表1	調査年度および調査担当者一覧	1
付表2	蔵垣内遺跡第4次・国分古墳群調査トレンチ成果一覧	7
付表3	国分古墳群調査古墳一覧(1)	10
付表4	国分古墳群調査古墳一覧(2)	11
	挿 図 目 次	
第1図	調査地位置図および周辺主要遺跡分布図 (国土地理院 1/50,000 京都北西部)	3
第2図	蔵垣内遺跡第4次・国分古墳群調査区配置図	5
第3図	新規検出古墳分布図 (S=1/2,000)	8

第4図	国分古墳群分布図	9
第5図	D 1 地区検出遺構配置図 (1/300)	12
第6図	竪穴式住居跡 S H 31・32 実測図	14
第7図	竪穴式住居跡 S H 31・32 出土遺物実測図	15
第8図	国分 25 号墳墳丘測量図および断面図	16
第9図	国分 25 号墳石室実測図および再利用面敷石状遺構平面図	17
第10図	国分 25 号墳出土遺物実測図	18
第11図	国分 26 号墳墳丘測量図および外護列石実測図	20
第12図	国分 26 号墳土層断面図	21
第13図	国分 26 号墳石室および前庭部集石遺構実測図	23
第 14 図	国分 26 号墳石室内遺物出土状況実測図	26
第 15 図	国分 26 号墳出土遺物実測図 (1)	28
第16図	国分 26 号墳出土遺物実測図 (2)	29
第17図	国分 26 号墳出土遺物実測図 (3)	30
第18図	国分 26 号墳出土遺物実測図 (4)	31
第19図	国分 26 号墳出土遺物実測図 (5)	33
第 20 図	国分 26 号墳出土遺物実測図 (6)	34
第21図	国分 27 号墳墳丘測量図および土層断面図	36
第 22 図	国分 27 号墳横穴式石室実測図	37
第 23 図	国分 27 号墳出土遺物実測図	38
第24図	国分 28 号墳墳丘測量図	40
第 25 図	国分 28 号墳土層断面図	41
第 26 図	国分 28 号墳横穴式石室および閉塞石実測図	43
第27図	国分 28 号墳石室内遺物出土状況図 (1)	45
第 28 図	国分 28 号墳石室内遺物出土状況図 (2)	46
第 29 図	国分 28 号墳出土遺物実測図 (1)	48
第 30 図	国分 28 号墳出土遺物実測図 (2)	49
第31図	国分 28 号墳出土遺物実測図 (3)	50
第32図	国分 29 号墳墳丘測量図	52
第 33 図	国分 29 号墳土層断面図	53
第 34 図	国分 29 号墳横穴式石室および下層排水溝実測図	55
第 35 図	国分 29 号墳閉塞石実測図	57
第36図	国分 29 号墳石室内遺物出土状況図 (1)	58
第37図	国分 29 号墳石室内遺物出土状況図 (2)	59
第 38 図	国分 29 号墳出土遺物実測図 (1)	62

第39図	国分 29 号墳出土遺物実測図 (2)	63
第 40 図	国分 29 号墳出土遺物実測図 (3)	64
第41図	国分 29 号墳出土遺物実測図 (4)	65
第 42 図	国分 29 号墳出土遺物実測図 (5)	67
第 43 図	国分 29 号墳出土遺物実測図 (6)	68
第 44 図	国分 29 号墳出土遺物実測図 (7)	69
第 45 図	国分 29 号墳出土遺物実測図 (8)	70
第 46 図	国分 29 号墳出土遺物実測図 (9)	71
第 47 図	国分 29 号墳出土遺物実測図 (10)	72
第 48 図	国分 30 号墳丘測量図および土層断面図	73
第 49 図	国分 30 号墳石室実測図	74
第 50 図	国分 30 号墳遺物出土状況図	75
第51図	国分 30 号墳出土遺物実測図	76
第 52 図	国分 31 号墳検出状況平面図	77
第53図	国分 32 号墳墳丘測量図および土層断面図	79
第 54 図	国分 32 号墳横穴式石室実測図	80
第 55 図	国分 32 号墳遺物出土状況図	81
第 56 図	国分 32 号墳出土遺物実測図	82
第 57 図	国分 33 号墳墳丘測量図	83
第 58 図	国分 33 号墳墳丘盛土內遺物出土状況図	84
第 59 図	国分 33 号墳土層断面図	85
第 60 図	国分 33 号墳横穴式石室実測図	86
第61図	国分 33 号墳閉塞石実測図	87
第62図	国分 33 号墳遺物出土状況図 (1)	88
第63図	国分 33 号墳遺物出土状況図 (2)	89
第64図	国分 33 号墳出土遺物実測図 (1)	90
第65図	国分 33 号墳出土遺物実測図 (2)	91
第 66 図	国分 58 号墳石室実測図	92
第67図	国分 59 号墳石室実測図および遺物出土状況図	93
第 68 図	国分 59 号墳出土遺物実測図	94
第69図	土坑SX 41 および出土遺物実測図	95
第70図	土坑 S X 40 実測図	96
第71図	土坑SX 40 出土遺物実測図	97
第72図	掘立柱建物 S B O1・O2、柵 S A O1 実測図	
第73図	掘立柱建物 S B O1・O2、柵 S A O1 出土遺物実測図	99

第74図	D 1 地区包含層出土遺物実測図 (1)	100
第75図	D 1 地区包含層出土遺物実測図 (2)	101
第76図	国分 35 号墳横穴式石室検出状況平面図	103
第77図	D 10 地区検出遺構配置図 (1/200)	104
第78図	国分 36 号墳墳丘測量図	105
第79図	国分 36 号墳土層断面図	106
第80図	国分 36 号墳石室 1 実測図	107
第81図	国分 36 号墳石室 1 遺物出土状況図	108
第82図	国分 36 号墳石室 2 実測図	109
第83図	国分 36 号墳出土遺物実測図	111
第84図	国分 37·60 号墳石室実測図	112
第85図	国分 37·60 号墳石室土層断面図	112
第86図	D 10 地区土坑 S K 09・ S X 10・ S K 12 実測図	113
第87図	D 10 地区遺構・包含層出土遺物実測図	115
第88図	D 2 地区検出遺構配置図 (1/200)	116
第89図	D 2 地区竪穴式住居跡 S H 01・02 平面図	117
第 90 図	D 2 地区竪穴式住居跡 S H O1・O2 出土遺物実測図	118
第91図	75・76 トレンチ平面図 (1/250)	119
第 92 図	75・76 トレンチ出土遺物実測図	120
第93図	D 3 地区検出遺構配置図 (1/300)	121
第94図	掘立柱建物跡 S B 01、土坑 S K 25 実測図	122
第95図	D 3 地区出土遺物実測図 (1)	124
第96図	D 3 地区出土遺物実測図 (2)	125
第97図	D 3 地区出土遺物実測図 (3)	126
第 98 図	D 4 − 1 • D 8 地区検出遺構配置図 (1/300)	129
第99図	国分 43 号墳墳丘測量図および土層断面図	130
第 100 図	国分 43 号墳遺物出土状況図	131
第 101 図	国分 43 号墳出土遺物実測図 (1)	133
第 102 図	国分 43 号墳出土遺物実測図 (2)	134
第 103 図	国分 43 号墳出土遺物実測図 (3)	136
第 104 図	国分 44 号墳墳丘測量図および土層断面図	137
第 105 図		
第 106 図	国分 44 号墳出土遺物実測図 (1)	139
第 107 図		
第 108 図	国分 45 号墳墳丘測量図	143

第 109 図	国分 45 号墳土層断面図	144
第110図	国分 45 号墳外護列石実測図	145
第111図	国分 45 号墳横穴式石室実測図	147
第112図	国分 45 号墳遺物出土状況図 (1)	150
第113図	国分 45 号墳遺物出土状況図 (2)	151
第114図	国分 45 号墳鉄釘出土状況図	152
第 115 図	国分 45 号墳石室内上層遺物出土状況図	153
第116図	国分 45 号墳出土遺物実測図 (1)	155
第 117 図	国分 45 号墳出土遺物実測図 (2)	156
第118図	国分 45 号墳出土遺物実測図 (3)	157
第119図	国分 45 号墳出土遺物実測図 (4)	160
第 120 図	国分 45 号墳出土遺物実測図 (5)	161
第121図	国分 46 号墳墳丘測量図	163
第 122 図	国分 46 号墳土層断面図	164
第 123 図	国分 46 号墳石室実測図	165
第 124 図	国分 46 号墳前壁側見通し図	166
第 125 図	国分 46 号墳遺物出土状況図	167
第 126 図	国分 46 号墳敷石下部遺物出土状況図	168
第 127 図	国分 46 号墳出土遺物実測図 (1)	170
第 128 図	国分 46 号墳出土遺物実測図 (2)	171
第 129 図	D 4 - 1 地区土器溜まり S X 87 遺物出土状況図	173
第 130 図	D 4-1 地区石組土坑 S X 85・86 実測図	174
第131図	D 4-1地区遺構内出土遺物実測図 (1)	175
第132図	D 4-1地区遺構内出土遺物実測図 (2)	176
第 133 図	D4-2地区検出遺構配置図 (1/300)	177
第 134 図	D4-1・2地区 柱穴SP01・02・05、土坑SK04実測図	178
第 135 図	D 4-1 地区遺構内出土遺物実測図	179
第 136 図	D4-2地区遺構内出土遺物実測図(1)	180
第 137 図	D4-2地区遺構内出土遺物実測図(2)	181
第 138 図	D4-1・2地区焼土坑SX88・89、土坑SK06・21・22 実測図	182
第139図	D4-1地区包含層出土遺物実測図(1)	183
第 140 図	D4-1地区包含層出土遺物実測図(2)	184
第141図	D 4-1 地区包含層出土遺物実測図 (3)	185
第 142 図	D 4 - 2 地区 包含層出土遺物実測図	186
第143図	80・81 トレンチ検出遺構配置図 (1/300)	188

第 145 図 国分 41 号墳横穴式石室実測図	第
	第
第 147 図 国分 41 号墳出土遺物実測図193	第
	第
第 148 図 D 8 地区包含層ほか出土遺物実測図194	第
第 149 図 国分 45 号墳墳丘復原案 (1/200)197	第

図 版 目 次

図版第1	調査地全景 (南から)
図版第2	(1)調査地遠景(東から)
	(2)調査地近景(西から)
図版第3	D 1 地区全景 (真上から、上が北)
図版第4	(1) D1地区全景(南から)
	(2) D 1 地区全景 (東から)
図版第5	(1)国分25号墳全景(南から)
	(2)国分25号墳石室全景(南から)
図版第6	(1)国分25号墳遺物出土状況(西から)
	(2)国分25号墳再利用面全景(北から)
図版第7	(1)国分26号墳全景(南から)
	(2) 国分26号墳石室全景(南西から)
図版第8	国分 26 号墳石室全景 (南から)
図版第9	(1)国分26号墳前庭部集石検出状況(南から)
	(2) 国分 26 号墳土坑 S X 44 遺物出土状況 (南から)
図版第 10	(1)国分26号墳玄室内遺物出土状況(1)(東から)
	(2) 国分 26 号墳玄室内遺物出土状況 (2)(東から)
	(3)国分26号墳玄室内遺物出土状況(3)(北西から)
図版第 11	(1) 国分 26 号墳玄室内遺物出土状況 (4)(東から)
	(2)国分26号墳玄室内敷石検出状況(南から)
	(3)国分26号墳外護列石検出状況(西から)
図版第 12	(1)国分27号墳全景(南から)
	(2)国分27号墳石室全景(南西から)
図版第 13	(1)国分27号墳石室検出状況 (南から)

- (2)国分27号墳石室内耳環出土状況(西から)
- (3)国分27号墳周溝掘削作業(南東から)
- 図版第 14 (1) 国分 28 号墳全景(南から)
 - (2) 国分28号墳玄室内全景(南から)
- 図版第 15 国分 28 号墳石室全景(南から)
- 図版第16 (1)国分28号墳閉塞石検出状況(南から)
 - (2)国分28号墳石室内遺物出土状況(1)(西から)
 - (3)国分28号墳石室内遺物出土状況(2)(東から)
- 図版第17 (1)国分28号墳石室内遺物出土状況(3)(東から)
 - (2) 国分28号墳石室内遺物出土状況(4)(東から)
 - (3)国分28号墳前庭部遺物出土状況(東から)
- 図版第 18 (1) 国分 29 号墳全景 (南西から)
 - (2)国分29号墳石室全景(南西から)
- 図版第19 (1)国分29号墳閉塞石検出状況(南西から)
 - (2)国分29号墳玄室内敷石検出状況(北東から)
 - (3)国分29号墳玄室内棺台検出状況(北西から)
- 図版第20 (1)国分29号墳玄室内遺物出土状況(1)(北西から)
 - (2)国分29号墳玄室内遺物出土状況(2)(北東から)
 - (3)国分29号墳玄室内遺物出土状況(3)(北東から)
- 図版第21 (1)国分29号墳玄室内遺物出土状況(4)(南東から)
 - (2)国分29号墳玄室内遺物出土状況(5)(北から)
 - (3)国分29号墳玄室内遺物出土状況(6)(北西から)
- 図版第22 (1)国分29号墳羨道遺物出土状況(1)(西から)
 - (2)国分29号墳羨道遺物出土状況(2)(東から)
 - (3)国分29号墳羨道遺物出土状況(3)(西から)
- 図版第23 (1)国分29号墳前庭部遺物出土状況(1)(南西から)
 - (2)国分29号墳前庭部遺物出土状況(2)(南東から)
 - (3)国分29号墳作業風景(北東から)
- 図版第24 (1)国分30号墳全景(南から)
 - (2)国分30号墳敷石全景(南西から)
 - (3)国分30号墳遺物出土状況(南東から)
- 図版第 25 (1) 国分 32 号墳石室全景(南西から)
 - (2)国分32号墳玄室全景(南西から)
 - (3) 国分32号墳石室全景(北東から)
- 図版第 26 (1) 国分 32 号墳遺物出土状況 (1)(南から)

- (2) 国分32号墳遺物出土状況(2)(南から)
- (3)国分31号墳石室検出状況(南西から)
- 図版第27 (1)国分33号墳全景(南から)
 - (2)国分33号墳玄室内全景(南から)
- 図版第28 国分33号墳石室全景(南から)
- 図版第29 (1)国分33号墳検出状況(北から)
 - (2)国分33号墳閉塞石検出状況(南から)
 - (3)国分33号墳前庭部全景(南から)
- 図版第30 (1)国分33号墳石室内遺物出土状況(1)(東から)
 - (2)国分33号墳石室内遺物出土状況(2)(東から)
 - (3)国分33号墳墳丘盛土内遺物出土状況(南から)
- 図版第31 (1)土坑 S X 41 遺物出土状況 (北から)
 - (2)国分59号墳全景(東から)
 - (3)国分59号墳遺物出土状況(北から)
- 図版第32 (1)竪穴式住居跡SH32全景(南から)
 - (2)竪穴式住居跡 S H 32 遺物出土状況 (西から)
- 図版第33 (1)柵 SAO1、掘立柱建物跡 SB 01・02 全景(北から)
 - (2) 土坑 S X 40 遺物出土状況 (東から)
 - (3)銅鏃出土状況(西から)
- 図版第34 (1) D10地区全景(南から)
 - (2) D10地区全景(真上から、上が東)
- 図版第35 (1)国分60号墳石室全景(東から)
 - (2)国分37号墳石室全景(南西から)
 - (3)国分35号墳石室全景(南西から)
- 図版第36 (1)国分36号墳全景(南東から)
 - (2)国分36号墳石室1全景(南東から)
 - (3)国分36号墳石室2全景(南から)
- 図版第37 (1) 国分36号墳石室1遺物出土状況(1)(南から)
 - (2)国分36号墳石室1遺物出土状況(2)(西から)
 - (3)国分36号墳石室1遺物出土状況(3)(西から)
- 図版第38 (1) D 2 地区、75・76 トレンチ全景(真上から、上が北)
 - (2)竪穴式住居跡 SH 01・02 全景(北から)
- 図版第39 (1)竪穴式住居跡 SHO2遺物出土状況(1)(北から)
 - (2)竪穴式住居跡 S H O2 遺物出土状況 (2)(北西から)
 - (3)竪穴式住居跡 SH 01遺物出土状況(北から)

- 図版第40 (1)75トレンチ全景(北東から)
 - (2)75トレンチ検出石材廃棄土坑全景(北東から)
 - (3)76トレンチ全景(北東から)
- 図版第41 (1)D3地区全景(真上から、上が北東)
 - (2) D 5地区全景(真上から、上が北)
- 図版第 42 (1) 溝 SD03 全景 (西から)
 - (2) 土坑 S K 25 遺物出土状況 (東から)
 - (3) 掘立柱建物跡 S B O1 全景(西から)
- 図版第 43 (1) D 4 地区全景 (西から)
 - (2) D 4地区全景(南から)
- 図版第 44 (1) D 4 地区全景(北から)
 - (2) D 4地区全景(真上から、上が南)
- 図版第 45 (1) 国分 44 号墳全景 (南東から)
 - (2) 国分 43 号墳全景 (南から)
- 図版第46 (1) 国分43号墳石室内遺物出土状況(西から)
 - (2) 国分 43 号墳前庭部遺物出土状況 (1)(南から)
 - (3)国分43号墳前庭部遺物出土状況(2)(北から)
- 図版第 47 (1) 国分 45 号墳全景 (南から)
 - (2) 国分 45 号墳全景 (東から)
- 図版第48 国分45号墳石室全景(南から)
- 図版第49 (1)国分45号墳検出状況(南から)
 - (2)国分45号墳敷石除去後全景(南から)
- 図版第50 (1)国分45号墳玄室内遺物出土状況(1)(東から)
 - (2)国分45号墳玄室内遺物出土状況(2)(西から)
- 図版第51 (1) 国分45号墳玄室内遺物出土状況(3)(南から)
 - (2)国分45号墳玄室内敷石検出状況(南から)
- 図版第52 (1)国分45号墳銀装大刀出土状況(南から)
 - (2) 国分 45 号墳銀装大刀鞘尻金具出土状況 (南から)
- 図版第53 (1) 国分45号墳羨道遺物出土状況(1)(東から)
 - (2) 国分 45 号墳羨道遺物出土状況 (2)(南から)
- 図版第54 (1)国分45号墳南東辺列石全景(南東から)
 - (2)国分45号墳東辺列石全景(東から)
 - (3)国分45号墳墳丘断面(南東から)
- 図版第55 (1)国分45号墳排水溝状遺構全景(南から)
 - (2)国分45号墳玄室内上層遺物出土状況(1)(北西から)

- (3)国分45号墳玄室内上層遺物出土状況(2)(南から)
- 図版第56 (1)国分45号墳・国分46号墳全景(南東から)
 - (2)国分46号墳全景(南東から)
- 図版第57 国分46号墳石室全景(南東から)
- 図版第58 (1)国分46号墳石室内遺物出土状況(1)(北東から)
 - (2) 国分 46 号墳石室内遺物出土状況 (2)(北東から)
 - (3) 国分46号墳石室内遺物出土状況(3)(北東から)
- 図版第59 (1)国分46号墳石室内遺物出土状況(4)(東から)
 - (2)国分46号墳石室内遺物出土状況(5)(東から)
 - (3)国分46号墳石室内遺物出土状況(6)(西から)
- 図版第60 (1) 国分46号墳石室掘形完掘状況(1)(南東から)
 - (2)国分46号墳石室掘形完掘状況(2)(南から)
 - (3)国分46号墳墳丘断面(南東から)
- 図版第61 (1) D 4-1 地区上層、D 4-2 地区全景 (拡張前)(西から)
 - (2) D 4-1 地区上層全景 (拡張前)(北から)
- 図版第62 (1) D 4-1 地区土器溜まり S X 87 遺物出土状況 (南から)
 - (2) D 4-1 地区石組土坑 S X 85·86 全景 (南西から)
 - (3) D 4-1 地区柱穴 S P 05 全景 (南東から)
- 図版第63 (1) D 4-2 地区全景(西から)
 - (2) D 4-2 地区土坑 S K 04 全景 (南から)
 - (3) D 4-2 地区柱穴 S P 01 遺物出土状況 (南から)
- 図版第64 (1) D4-2地区土坑SK06全景(南から)
 - (2) D 4-2地区鉄刀出土状況(東から)
 - (3) D 4-2地区土坑 S K 88 遺物出土状況 (西から)
- 図版第65 (1) D8地区、80・81 トレンチ全景(東から)
 - (2) D 8地区、80・81 トレンチ全景(真上から、上が南)
- 図版第66 (1)国分41号墳全景(南東から)
 - (2)国分41号墳石室全景(南東から)
- 図版第67 (1) 国分41号墳遺物出土状況(1)(北東から)
 - (2)国分41号墳遺物出土状況(2)(北東から)
- 図版第68 (1)国分1号墳北西墳丘裾全景(南から)
 - (2)80トレンチ溝 SD09全景(北東から)
 - (3)80トレンチ東側包含層遺物出土状況(東から)
- 図版第69 出土土器(1)
- 図版第70 出土土器(2)

- 図版第71 出土土器 (3)
- 図版第72 出土土器(4)
- 図版第73 出土土器(5)
- 図版第74 出土土器 (6)
- 図版第75 出土土器(7)
- 図版第 76 出土土器 (8)
- 図版第77 出土土器 (9)
- 図版第78 出土金属製品(1)
- 図版第79 出土金属製品(2)
- 図版第80 出土金属製品(3)
- 図版第81 出土金属製品(4)
- 図版第82 出土金属製品(5)
- 図版第83 出土金属製品(6)
- 図版第84 出土金属製品(7)
- 図版第85 出土装身具類
- 図版第86 (1) D 4-1 地区土器溜まりSX87出土遺物
 - (2) D 4-1 地区石組土坑 S X 85 · 86 出土遺物
 - (3) D 3-1 地区土坑 S K 25 出土遺物
 - (4) D 4-2 地区土坑 S K 04 · 88 出土遺物

国営農地再編整備事業「亀岡地区」関係遺跡 平成 16・17・18 年度発掘調査報告

蔵垣内遺跡第4次・国分古墳群(I)

はじめに

この調査は、近畿農政局が実施している国営農地再編整備事業「亀岡地区」に伴い、近畿農政 局の依頼を受けて当調査研究センターが行った。

調査範囲は、京都府教育委員会と亀岡市教育委員会による試掘調査の結果をもとに、近畿農政 局をはじめとする開発部局と調整を行って決定した。

本報告では、付表1に示す平成16・17・18年度に調査を実施した蔵垣内遺跡・国分古墳群の調査成果を報告する。なお、蔵垣内遺跡・国分古墳群は調査面積、出土遺物が多く、今年度と次年度に分けて報告を行う。整理作業に際しては保存処理作業の急がれる鉄製品を多数出土した国分古墳群の整理作業を優先して実施したため、今年度は横穴式石室墳の検出された地区を中心に報告を行うこととした。今回報告しない蔵垣内遺跡第4次・国分古墳群、平成18・19年度に調査を実施した時塚遺跡第15次・17次については次年度に報告を行う。

本報告の執筆は、各調査担当者のほか、花園大学大学院生平井耕平・同梅村大輔・花園大学卒業生坂内裕志・京都府立大学大学院生田中奈津子・奈良女子大学大学院生安井蓉子が各々分担し

付表1 調査年度および調査担当者一覧

遺跡名称	所在地	調査期間	調査面積(㎡)	担当者	
蔵垣内遺跡第4次・国分古墳群	京都府亀岡市千歳町 柳ヶ辻・相模・蔵垣内・ 薮ノ本・内垣内・正田	平成17年3月11日 ~平成17年3月16日		調査第1係長 主任調査員 専門調査員	小池 寛 引原茂治 黒坪一樹
		平成 17年5月23日 ~平成 18年3月10日 平成 18年4月10日	18,620 ㎡	調査第1係長次席総括調査員主任調査員主任調査員専門調査員調査員調査員調査員調査員調査員調査員調査員調査負調額査第1係長	小池 寬富治雄樹久 果崎崇崇 而前井 池
		~平成 18 年 9 月 26 日		次席任任任門門 專問調調調調調調調調調調調調調調調調調調調調調調調調調調調調調調調調調調調	伊松引森黑岡石福筒村松尾,上大大大大大大大大大大大大大大大大大大大大大大大大大大大大大大大大大大大大

た。なお文責については各項の末尾に記した。

現地作業を実施するにあたり、京都府教育委員会・亀岡市教育委員会をはじめとする関係諸機関の協力を得、また、地元自治会、地権者、地元住民の方々のご理解とご協力をいただいた。記して謝意を表する。なお、発掘調査に係る経費は全額、近畿農政局が負担した。

(石崎善久)

位置と環境

蔵垣内遺跡・国分古墳群の所在する亀岡盆地は、大悲山付近を水源とする桂川(大堰川)が北西から南東に流れ、東西に二分されている。遺跡が位置する東岸地域は、桂川に向かって流れ込む七谷川・三俣川などの小河川が、段丘や扇状地を形成している。国分古墳群は牛松山の西側山麓から桂川の下位段丘面にかけて分布し、下位段丘面に広がる蔵垣内遺跡と一部重複する。

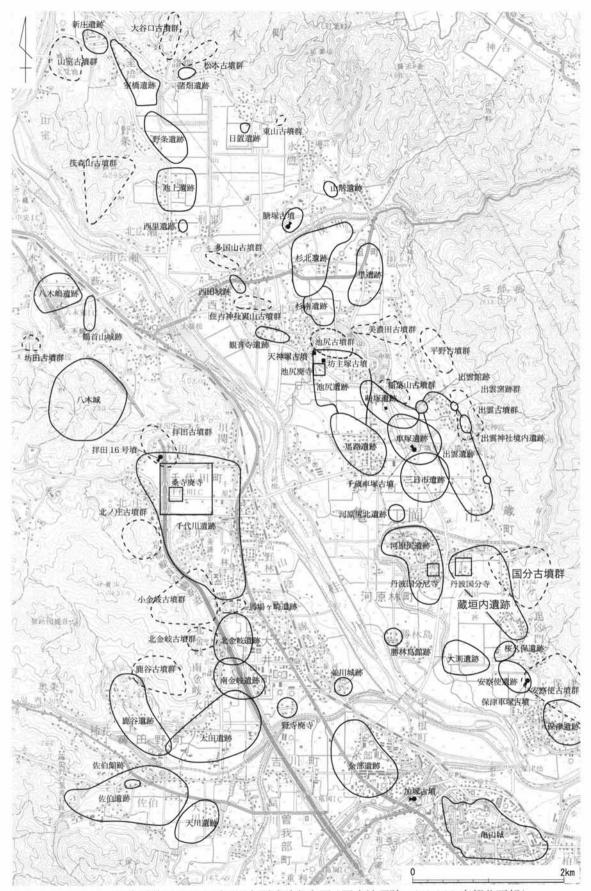
桂川東岸地域はこれまで開発に伴う発掘調査が少なく、西岸地域に比べ遺跡の様相が明らかではなかった。しかし、近年農地整備事業に伴う発掘調査によって、東岸地域の歴史的様相が明らかになりつつある。

亀岡市域で最も古い遺物として、鹿谷遺跡から縄文時代草創期に比定される黒曜石製の槍先形 尖頭器が出土している。ほぼ同時期のものとして千代川遺跡で出土したサヌカイト製有舌尖頭器 がある。土器としては、案察使遺跡から出土した大川式に位置づけられる押型文土器が縄文時代 早期前葉と最も古く、千代川遺跡でも縄文時代早期中葉の黄島式に位置づけられる押型文土器が 出土している。千代川遺跡では縄文時代を通じて遺物が出土しており、前期の玦状耳飾なども出 土している。後期には西岸地域で小金岐遺跡・太田遺跡など、東岸地域で車塚遺跡などでまとま った土器資料が出土している。晩期には大淵遺跡で土器棺が検出されている。

弥生時代の東岸地域は、前期に位置づけられる土壙墓などが池尻遺跡で検出されている。試掘 調査の結果、周辺に前期の遺跡が広がる事が確認されている。中期には池尻遺跡・時塚遺跡・馬 路遺跡・車塚遺跡などで方形周溝墓が検出されている。中期から後期にかけては、里遺跡・案察 使遺跡・時塚遺跡・河原尻遺跡などで竪穴式住居跡が確認されている。

西岸地域では、前期から後期の遺跡である千代川遺跡や、前期から中期にかけての環濠集落である太田遺跡などがある。中期には、余部遺跡や天川遺跡などで方形周溝墓や竪穴式住居跡などが検出されている。

亀岡盆地における前期古墳としては、鼉龍鏡・石製腕飾類・銅鏃・鉄鏃・鉄刀などが出土した 向山古墳 (円墳、径 30m以上)があるのみである。この時期の集落遺跡としては、西岸地域で 千代川遺跡、東岸地域で蔵垣内遺跡などがある。中期になると、保津山古墳や浄法寺1号墳など の径 10~30m前後の円墳のほか、東岸地域に坊主塚古墳・天神塚古墳、西岸地域に枡塚古墳・ 滝の花塚古墳・馬場ヶ崎1号墳・同2号墳などの一辺30~40mの中規模な方墳が築造される。 また、これらの規模に準じる古墳として時塚1号墳があり、同古墳の近隣には一辺10m内外の 小規模な方墳群の存在が新たに確認された。



第1図 調査地位置図および周辺主要遺跡分布図 (国土地理院 1/50,000 京都北西部)

京都府遺跡調査報告集 第129冊

後期の西岸地域では、全長 44m の前方後円墳として拝田 16 号墳が築造される。同古墳は、 亀岡盆地における導入期の横穴式石室を内部主体とし、玄室内には石棚・石障が構築されている。 このほかに石棚を有する古墳として、鹿谷古墳群をあげることができる。1872 年にウィリアム・ ガウランドが調査したことで知られている。調査された 6 基のうち 3 基が石棚を有しており、さらにそのうち 1 基は石障を付設するものであった。北ノ庄 4 号墳は玄室縦断面が凸型をする中高 式天井をもつ横穴式石室で、山陰地域に多く分布するものに類似する。また、13・14 号墳は九州系の横穴式石室をもつ。小金岐古墳群にも横穴式石室に石棚を有する古墳が確認されている。 このように、西岸地域の導入期の横穴式石室には紀伊・九州・山陰地域との関係が指摘されている。 古墳時代中・後期の集落としては、鹿谷遺跡・千代川遺跡などが確認されており、鹿谷遺跡は 100 基を超す竪穴式住居跡の存在が想定されている。

東岸地域では、後期に丹波地域最大の千歳車塚古墳が築造される。同古墳は全長 82 mの前方 後円墳で、採集された円筒埴輪から後期前半の築造と考えられる。一方、集落遺跡については、 調査例が乏しい状況であったが、近年の調査により池上遺跡・里遺跡・池尻遺跡・案察使遺跡な どで、竪穴式住居跡や土坑などが多数検出されている。

仏教伝来以降、飛鳥時代になると西岸地域には桑寺廃寺・観音芝廃寺・與能廃寺が、東岸地域では池尻廃寺が建立される。飛鳥時代から奈良時代にかけては池尻遺跡をはじめ、河原尻遺跡・車塚遺跡・時塚遺跡・馬路遺跡などにおいて大規模な掘立柱建物跡が検出されており、官衙的施設として考えられている。蔵垣内遺跡の西側には丹波国分寺や国分尼寺が存在し、その創建瓦が大量に出土した三日市遺跡では瓦窯群の存在が想定されている。また、丹波国の一宮である出雲神社も東岸地域に所在することをふまえると、飛鳥時代から奈良時代にかけて東岸地域は非常に重要な位置を占めていたと考えられる。

(梅村大輔)

調査経過

蔵垣内遺跡は七谷川の南に展開する段丘上に形成される遺跡である。遺跡は東西約900m・南北約1,200mの広範な範囲に展開しており、丹波国分寺も遺跡内に所在している。また、国分古墳群は牛松山から派生する支尾根の西麓に展開する古墳時代後期の古墳群であり、従来23基の古墳の存在が確認されていた。今回の調査地内には国分1号墳が存在し、これまでは単独の横穴式石室墳として考えられてきた。

平成 16 年度の調査は平成 17 年 3 月 11 日から 3 月 16 日にかけて、部分的な表土除去作業を 重機により実施した。

平成17年5月23日から基準杭等の設置業務、重機掘削・人力掘削作業を順次行った。調査はA~D地区の4地区に大別して実施し、中央から南半にかけての地区(A~C地区)を先行して実施することとした。10月7日にはラジコンへリコプターによる空中写真撮影を実施し、10月29日にはA地区を中心に第1回目の現地説明会を実施し、降雨の中約80名の参加を得た。



第2図 蔵垣内遺跡第4次·国分古墳群調査区配置図

京都府遺跡調査報告集 第129冊

年度後半には、B地区北半からD地区南半およびC地区南半の調査を中心に進めたが、近畿農政局・京都府教育委員会との協議を経て、水路部分の試掘調査を平成18年2月2日から面的調査と併行して実施することとなった。2月22日には遺跡の立地する段丘全体の風景を記録するため、セスナによる空中写真撮影を実施した。2月25日にはB地区を中心に第2回目の現地説明会を実施した。

A~C地区の面的調査および水路部分の試掘調査、D地区の一部の重機・遺構掘削作業を行い 平成17年度の調査は3月10日に終了した。

平成18年4月10日から残る地区の面的調査および、協議により決定された水路部分の面的 調査を実施した。水路部分の拡張区については各調査区の番号を付し、トレンチ名とした。

調査の進行に伴い、D1・D6地区で確認された石組遺構が横穴式石室であることが明らかとなり、また畦畔の石垣に使用されている石材中に石室の転用材と思われる大型石材が存在することが明らかとなった。この状況を受け、周辺部分の試掘調査を京都府教育委員会が実施した。その結果、総数37基の埋没古墳が確認された(第3図)。そのうち、D4地区の西側、D1地区の西側、D8地区・D9地区・D10地区で検出された古墳が追加調査の対象となり、調査を要する横穴式石室墳の基数は24基となった。協議の結果、追加された調査区に関しては、造成工事との関係から石室自体は上面の石材を移動する際に基底部まで破壊される恐れがあったため該当する石室内は完掘すること、周辺部については遺構・墳丘自体が削平されることはないと判断されたため最低限の断ち割りを実施することが決定された。なお、D4地区に関しては切土が他地区よりも多く、石室を含めた全ての遺構について調査を実施することとなった。優先して調査を実施した水路部分のトレンチについては平成18年6月22日に関係者説明会を実施した。平成18年8月19日には現地説明会を実施し、多数の参加者を得ることができた。ラジコンへリコプターによる空中写真撮影は、一定の地区の調査が終了した段階で適宜実施(5月26日・6月6日・9月15日)し、9月26日に全ての機材を撤収し、現地作業を終了した。

なお、調査・整理段階では各横穴式石室は地区ごとに略号STもしくはSXなどを用い、地区内での遺構番号を通しで付していたが、関係諸機関との協議の結果、国分古墳群として新たに番号が付された。本概要報告でも京都府教育委員会と亀岡市教育委員会と協議の上、新たな番号を付け報告する。なお、付表3・4には対照表を掲載しているので遺物実見の際には注意して頂きたい。

(石崎善久)

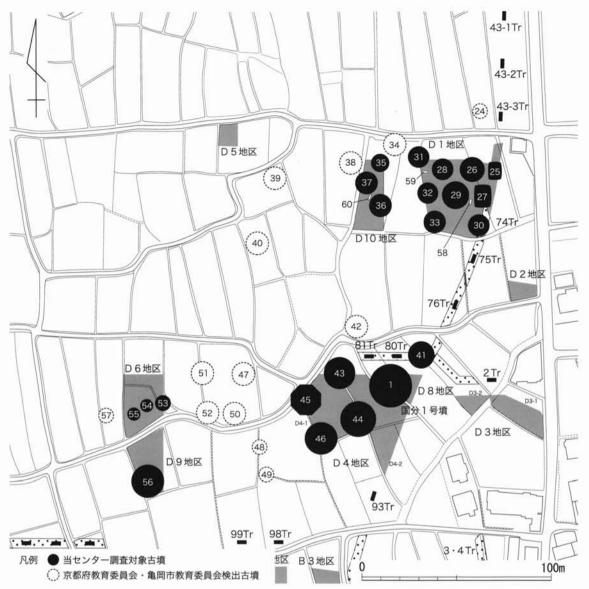
検出遺構と出土遺物

蔵垣内遺跡第4次・国分古墳群の調査で確認された成果は付表2に示すとおりである。

検出された遺構・遺物は縄文時代、弥生時代、古墳時代、飛鳥時代、奈良時代、平安時代、鎌 倉時代以降の各時期のものがみられる。詳細は本年度と次年度にまたがって報告するが、本項で は全体の概略について記す。

付表2 蔵垣内遺跡第4次・国分古墳群調査トレンチ成果一覧

地区	主要検出遺構	主要出土遺物	備考	地区	主要検出遺構	主要出土遺物	備考
A 1	竪穴式住居跡・土坑	須恵器・土師器		24	ピット	土師器・須恵器	拡張
A 2	掘立柱建物跡	須恵器		25	ピット	土師器・須恵器	拡張
A 3	竪穴式住居跡・土坑	須恵器・土師器・瓦器		27	竪穴式住居跡・焼土	土師器・須恵器	拡張
A 4	掘立柱建物跡・溝 竪穴式住居跡・土坑	須恵器・土師器		28	竪穴式住居跡 ピット	土師器・須恵器	拡張
	掘立柱建物跡			29	ピット		試掘
A 5	竪穴式住居跡・土坑 掘立柱建物跡	須恵器・土師器・陶磁器		35	土坑・ピット	土師器	拡張
A 6		須恵器・土師器・鉄製品		36	土坑		試掘
71.0	ピット	Marin Trabut avacua		38	土坑・ピット		試掘
B I - 1	土坑・ピット			39-1	ピット		試掘
B I - 2	土坑・ピット	土師器・瓦器・黒色土器		39-2	竪穴式住居跡 掘立柱建物跡・溝	土師器・須恵器	拡張
B 1-3	土坑・ピット			43-1	竪穴式住居跡?		試掘
B 1-4		土師器・瓦器・鉄製品		43-2	竪穴式住居跡?	弥生土器	試掘
n o	ピット	A.1	Mot ver und Mr	43-3	ピット	34-1-1-00	試掘
B 2	土坑・ピット	なし 土師器	削平顕著	74	ピット		DIE
В 4	溝・土坑・ピット	土師器・瓦器					編入
B 5	溝・土坑・ピット	土師器・瓦器・陶磁器		75	石材廃棄坑・ピット	土師器・耳環	拡張
B 6	溝・土坑・ピット	土師器・瓦器・陶磁器 鉄製品・石臼		76	土坑・ピット	土師器・須恵器 弥生土器	拡張
C 1	竪穴式住居跡 掘立柱建物跡	土師器・須恵器・瓦器		80 • 81	横穴式石室・土坑 溝・ピット	土師器・須恵器 弥生土器	拡張
	ピット			98	ピット		試掘
C 2	竪穴式住居跡・土坑	土師器・須恵器・瓦器		99	溝		試掘
С3	掘立柱建物跡 竪穴式住居跡・土坑	Environ Venezin Seut		100	土坑・ピット	土師器・須恵器・瓦器 陶磁器	拡張
C 4	竪穴式住居跡・土坑ピット			101	土坑・ピット	土師器・須恵器・瓦器 陶磁器	拡張
C 5	竪穴式住居跡 掘立柱建物跡	土師器・須恵器		102 ~105	土坑・ピット	土師器・須恵器・瓦器 陶磁器	拡張
C 6	竪穴式住居跡・土坑	十師器・須恵器		106-1	溝・ビット		試掘
	掘立柱建物跡	7,112.111		106-2	ピット		試掘
C 7	竪穴式住居跡・土坑 掘立柱建物跡	土師器・須恵器		107	土坑	土師器・須恵器・瓦器 陶磁器	拡張
C 8	竪穴式住居跡・土坑	土師器・須恵器		110	ピット	土師器・須恵器・瓦器	拡張
C 9	ピット(柵)	土師器・須恵器				陶磁器	11.00
D 1	横穴式石室・土坑 竪穴式住居跡	弥生土器・土師器 須恵器・黒色土器		112	土坑・ピット	土師器・須恵器・瓦器 陶磁器	拡張
	掘立柱建物跡	鉄製品		106-1	ピット・溝		試掘
D2	竪穴式住居跡	弥生土器		106-2	ピット	1 Accom (Accom (Accom) (Accom)	試掘
	掘立柱建物跡・土坑 溝	TEST CONTROL OF THE STATE OF TH		107	土坑	土師器・須恵器・瓦器 陶磁器	拡張
	土坑・溝 横穴式石室・土坑	土師器・須恵器・瓦器 土師器・須恵器・鉄製品		110	ピット	土師器・須恵器・瓦器 陶磁器	拡張
	ピット・溝			112	土坑・ピット	土師器・瓦器	拡張
D4-2	土坑・溝・ピット	土師器・須恵器・鉄製品		116	土坑・溝・ピット	土師器・須恵器・瓦器	拡張
D 5 D 6	遺構なし 横穴式石室	土師器・須恵器 土師器・須恵器・瓦器	土石流跡	119	土坑・溝・ピット	土師器・須恵器・瓦器 陶磁器	拡張
	掘立柱建物跡	鉄製品		132	掘立柱建物跡	土師器	拡張
D 7	溝・土坑・ピット	土師器・須恵器・瓦器		133	溝・ビット	土師器・瓦器	拡張
D 0	L' L	陶磁器・瓦・鉄製品		134	溝・ビット	土師器・瓦器	拡張
D8	ピット 構力学工会・港	土師器・須恵器		157	土坑・ピット		拡張
D 9	横穴式石室・溝ピット	土師器・須恵器・瓦器		158	竪穴式住居跡・土坑 ピット	土師器・須恵器 縄文土器	拡張
D10 2	横穴式石室・土坑 ピット	土師器・須恵器	試掘	159	竪穴式住居跡・土坑 ピット	土師器	拡張
3 • 4	溝・土坑・ピット	土師器・須恵器・石製品	拡張	160	竪穴式住居跡?		試掘
10	竪穴式住居跡	土師器・須恵器	拡張	161	ピット		試掘
	掘立柱建物跡	umah sacci	ASSESSMENT	182	ピット・溝		試掘
22	竪穴式住居跡	土師器	拡張		整形段?		

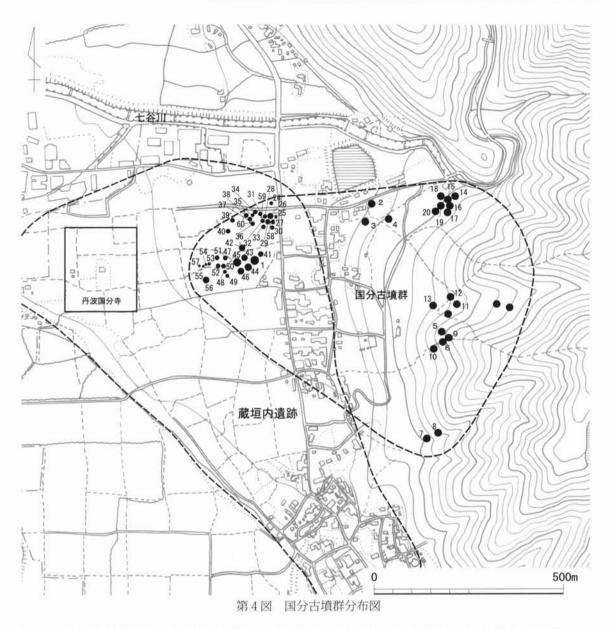


第3図 新規検出古墳分布図 (S=1/2,000)

蔵垣内遺跡では、D地区を中心とする遺跡北辺において弥生時代後期の竪穴式住居跡群を後・終末期古墳群とともに検出した。弥生土器はD3・4・8地区でも検出しており、さらに北で実施した試掘調査(43トレンチ)においても弥生時代後期と思われる遺構が確認されているため、遺跡の北東部には弥生時代後期の集落が展開しているものと考えられる。

国分古墳群は従来、23 基の古墳が谷部や丘陵裾に展開することが分布調査により知られていたが、今回の当調査研究センターおよび京都府教育委員会の調査により新たに31 基の古墳の存在が確認され、第4図に示すようにさらに広範囲に分布する様相が明らかとなった。試掘調査の実施されていない地区もあるため、さらに多数の埋没古墳の存在が予想される。D1・4・6・8・9・10の各地区で横穴式石室墳の調査を実施した。石室墳は出土遺物から古墳時代後期末から飛鳥時代にかけて築造されたとみられる。一部奈良時代の須恵器も出土する古墳があるため、なんらかの営みがなされていたとみられる。

石室墳は大きく削平を受けているものもあり、D4地区やD9地区では、大型の土坑を掘削し、



石室石材をその中に遺棄している状態のものが確認されている。これら、石室墳の大規模な削平がいつ行われたか明確にはしがたいが、80・81トレンチでは国分 41号墳の石室を削平した上面から瓦器が確認されているため、鎌倉時代に行われた可能性がある。

D5地区は今回の調査範囲の中では最も北東に設定された調査区である。この調査区では表土、床土を除去した段階で、青灰色細砂層の河川堆積と思われる土層を確認した。トレンチによる断ち割りを実施した結果、細砂層の下層から土石流の痕跡と思われる拳大から人頭大の円礫を多量に含む層を確認した。遺構は検出する事ができず、すぐ北を西流する七谷川の氾濫に伴う土石流により遺構が削平されているものと判断した。細砂層内からは摩滅、細片化の進行した土師質の土器片が少量出土したが時期を確定するには至らなかった。

 $B3\sim6\cdot D7\cdot 9$ 地区では中世の遺構群が密集しており、茶臼などの石製品や輸入陶磁器などの秀逸な遺物が多数確認された。とくに B6地区では大規模な溝を検出し、溝に区画された施設がある事が確認された。また、D7地区では中世の墳墓と思われる石組遺構や、道路側溝と思

付表3 国分古墳群調査古墳一覧(1)

地区	遺構	新罗旦	墳丘		石室 (規模はm)					主要出土遺物	備考
吧区	退幣	新番号	墳形	規模 (m)	形式	全長	玄室	羨道	全高	LL SK LLI LLASTO	WI -5
DΙ	S T 27	国分 25 号墳	不整方	長軸 10 短軸 7	無袖	5.6	幅 0.8	-	0.4	須恵器・土師器	中世再利用
	S T 28	国分 26 号墳	円	長軸 12 以上 短軸 12	右片袖	7.0	長 4.1 幅 1.5	長 2.9	1.1	須恵器・土師器 武器(銀装鉄刀・鉄鏃) 馬具(糟・鐙・鉸具・鞍金具) 工具(刀子) 装身具(耳環・棗玉・切子玉) 鉄釘・鉄地金銅貼飾金具	玄室内敷石 外護列石 前庭部礫敷遺構
	S T 29	国分 27 号墳	方	長軸 9.5 短軸 4.5 以上	不明	4.6	幅 1.2	-	0.9	須恵器・土師器 武器(鉄鏃) 装身具(耳環)	棺台
	S T 33	国分 30 号墳	円	径 13	無袖か	-	47	-	-	須恵器・土師器 装身具(耳環)	玄室内敷石
	S T34	国分 29 号墳	円	長軸 15 短軸 13	右片袖	7.7	長 3.5 幅 1.6	長 4.2	0.6	須恵器・土師器 武器(銀装鉄刀・鉄鏃) 馬具(槽・鎧・鉸具・鞍金具・ 革金具) 工具(刀子) 装身具(耳環) 鉄釘・鎹・金銅製環状金具	玄室内敷石 棺台 羨門部閉塞
	S T 35	国分 28 号墳	円	長軸 13.6 短軸 11.6		8.4	長 2.8 幅 1.2	長 5.6	0.9	須恵器・土師器 武器(鉄鏃) 工具(刀子) 鉄釘	棺台 羨門部閉塞
	S T 36	国分 33 号墳	円	径 11 ~13	無袖	7.6	幅 1.2	-	1.0	須恵器 工具(刀子)	玄室内敷石 羨門部閉塞
	S T 37	国分 32 号墳	円	長軸9 短軸8	無袖 (両袖 傾向)	4.1	長 1.3 ~1.5 幅 1.3	長 2.6 ~2.8	0.8	須恵器・土師器 武器(鉄鏃) 装身具(耳環)	
	S T38	国分 31 号墳	円?	径 14	無袖? (未掘)	-	==	-	-	未調査	石室内未調査 左側壁遺存
	S X43	国分 58 号墳	不明		小石室	1.7	幅 0.6	1-1	0.3	なし	
	S X39	国分 59 号墳	不明		小石室	1.4	幅 0.5	-	0.3	須恵器	
5Tr										耳環	近接して石室の 可能性有
D 4	S X 66	国分 44 号墳	円	径 15	不明	-	7.0	-	=	須恵器 武器(鉄刀)	破壊著しい
	S X77	国分 43 号墳	円	径 15 ~16	不明		70	1.71	1.00	須恵器 馬具(鐙)	石室本体は 調査区外
	S X80	国分 45 号墳	八角形	一辺約 6 南北 15 東西 15	両袖	9.1	長 3.4幅 1.9	長 5.7	1.0	須恵器・土師器・黒色土器 武器(銀装鉄刀・鉄鏃) 馬具(鞍金具・鉸具) 工具(刀子) 鉄釘	玄室内敷石 墳丘列石 羨門部閉塞
	S X81	国分 46 号墳	円	径 16 ~18	無袖 (右片袖 傾向)	7.6	長 3.3 幅 1.3	長 4.3 幅 1.2	0.6	須恵器 装身具(耳環) 武器(鉄刀・鉄鏃)	玄室内敷石
D 6	S X41	国分 55 号墳	円	長軸7 短軸6	無袖	3.0	幅 0.7	77	0.5	須恵器・土師器	
	S X42	国分 54 号墳	円	長軸 9.5 短軸 7.7	無袖	5.4	幅 0.95		0.7	須恵器・土師器 装身具(耳環)	
	S X 44	国分 53 号墳	円	長軸 15	不明	3以上	-	- T- 1	-	須恵器 鉄釘	石室内部分調査 平安再利用
D 8	S T01	国分 41 号墳	円	径 10	無袖	4.6	幅 1.2		0.6	須恵器	
D 9	S T 01	国分 56 号墳	不明 (破壊)	不明	不明	8.5	長 3.6 幅 1.6	長 4.9	0.6	須恵器・土師器 武器(銀装鉄刀・鉄鏃) 馬具(鐙・鉸具) 工具(刀子) 鉄釘?・錠	玄室内敷石

^{*}遺構欄には調査時の遺構名称を記載した。

^{*}新番号は国分古墳群としての遺構番号を記載した。 *なお、本報告では石室の左右については奥壁から前壁を向いた状態で左右の表記を行っている。

地区	遺構	新番号		墳丘		7	石室(規模	(ltm)		主要出土遺物	Atta -br.	
ARIC.	旭們	利雷写	墳形	規模 (m)	形式	全長	玄室	羨道	全高	工女山上起初	備考	
D10	石室1	国分 36 号墳	円	径約 10	無袖	6.2	幅 1.0	74	0.5	須恵器	同一墳丘内 2石室	
	石室2)	小石室	1.8	幅 0.7	1=	0.2	なし		
	石室3	国分 37 号墳	不明		不明	2.0	幅 1.0	22-	i ee	未調査	上面検出未調査	
	石室4	国分 60 号墳	不明		小石室	1.0	幅 0.6	-	0.4	未調査	部分調査	
	石室 5	国分 35 号墳	不明		無袖?	4.2	幅 0.8	-	-	未調査	上面検出未調査	

付表 4 国分古墳群調査古墳一覧(2)

われる溝などが検出された。この溝は現在の農道に沿って掘削されており、この農道が中世段階まで遡る地割であると判断される。この農道を中心に中世の遺構は分布密度を高めており、中世国分寺を中心とした遺構群とみることができよう。

B 1 地区はやや遺構・遺物が希薄であり、平安時代から中世の小規模な掘立柱建物跡や焼土坑などが確認されている。また、サヌカイトの剥片が1点出土している。

このB1地区の東の高所側にあるA2~5地区を中心とする地区では古墳時代後期から飛鳥時代を中心とする竪穴式住居跡群が検出されている。国分古墳群造営とほぼ同時期の集落として注目される。また、古墳時代前期に遡る住居跡もA4地区で確認されている。

 $A 5 \sim C 4$ 地区にかけては古墳時代前期を中心とする竪穴式住居跡群が検出されている。住居跡出土遺物中には鉄製品が存在することが注目される。また、 $A 2 \sim 6$ 、 $C 1 \cdot 2$ 地区では上層で中世の掘立柱建物跡群や土坑などを検出した。中世の土坑には掘形内から多数の角礫が出土するものが多く、その性格について検討を実施する必要がある。

C 5地区からC 8地区にかけても飛鳥時代を中心とした竪穴式住居跡群が検出されている。C 6~C 9地区では奈良時代の掘立柱建物群が検出された。特にC 8地区では周囲に囲繞施設をもつとみられる大型掘立柱建物跡が検出され、その性格について注目される。そのほか、C 8地区や 158・159 トレンチでは、遺構に伴うものではないが、サヌカイト剥片や縄文時代早期の押型文土器が出土している点は注目される。

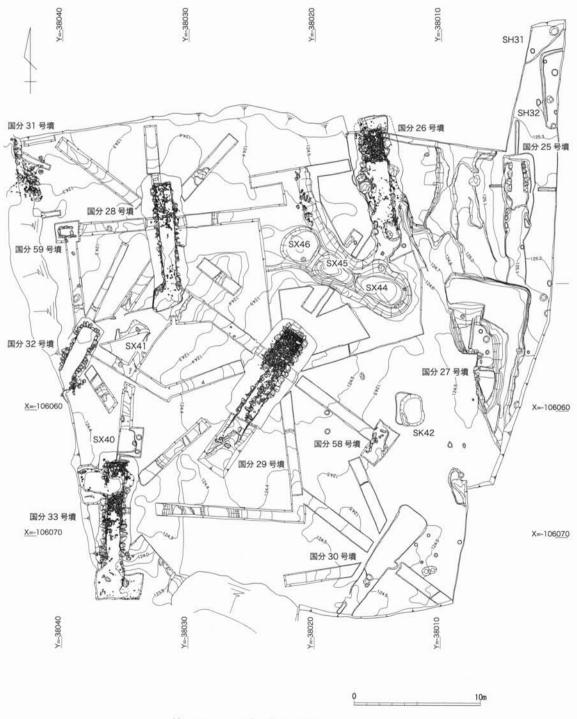
以上が蔵垣内遺跡第 4 次で検出された遺構群の概略である。以下、各地区ごとに遺構・遺物について概観していくこととするが、今年度は、D $1\sim$ D 4、D $8\cdot 10$ 地区、 $75\cdot 76$ トレンチ、 $80\cdot 81$ トレンチの概要について記す。

(石崎善久)

1. D1地区

D1地区は今回の調査対象地の中でも最も北東に設定した調査区である。調査区は概ね南西へむけて緩やかに下がる緩斜面を呈している。また、試掘43トレンチの状況から、北側には七谷川に向けて下がる緩斜面が存在するものと判断される。

D 1 地区は調査前には 2 段に分かれた階段状の水田が造成されており、西に位置する低位側の



第5図 D1地区検出遺構配置図 (1/300)

水田とは比高差約 1.5 mを測り、石垣で区画されていた。

当初、東側の水田の切土部分の面的調査を予定していたが、調査の進行に伴い、石室墳が検出された。この成果を受け、調査区西側を京都府教育委員会が試掘調査を実施したところ新たに石室墳が確認されたため調査区を拡張することとなった。先述の造成との関係から調査区東側については全面的な面的調査を実施したが、西側部分については石室の調査と部分的な墳丘の確認調査を実施したのみである。

この地区では弥生時代後期に属する竪穴式住居跡 2 基、古墳時代後期から飛鳥時代の横穴式石室墳 9 基、小石室を内部主体とする古墳 2 基、中世の掘立柱建物跡 2 棟、柵 1 条、土坑などを確認した。小石室についてはトレンチ調査により確認されたもののみであり、さらに埋没している可能性がある。遺構は表土・床土を除去した段階で確認され、基本的に包含層は形成されていない。遺構面は床土を除去した黄褐色粘質土、もしくはいわゆる丹波黒ボク層の上面に形成されている。

(1)弥生時代の遺構・遺物

弥生時代の遺構としてトレンチ北東部で、竪穴式住居跡2基を検出した(SH31・32)。後述する横穴式石室墳の流入土中や周溝埋土に多数の弥生土器が含まれているため、古墳造成により弥生集落の一部が破壊されているものとみられる。包含層や、石室から出土した弥生土器については別項で一括して報告する。

①竪穴式住居跡SH31(第6図上段)

以下、各時期ごとに遺構・遺物の概要を述べる。

遺構 調査地北東部で検出された竪穴式住居跡である。住居跡の南東辺を検出したに留まり、 大部分は調査区外であるが、南側では住居跡の掘形隅とみられる屈曲部を確認しているため、平 面は方形プランを呈し、主軸は北からほぼ 45°振る住居跡であると考える。

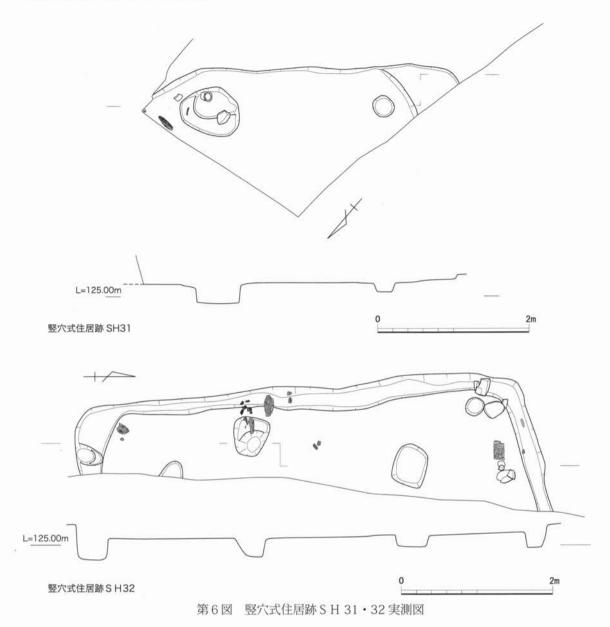
住居跡の埋土から多数の細片化した炭化材が検出されているため、焼失住居の可能性が高い。

住居跡の床面の掘形は南側がわずかに高まりを残して掘削されているが、いわゆるベッド状遺構と考えられるだけの明確な段は持たず、約5cm程度のゆるやかな段差があるのみである。主柱穴とみられるピットを住居内北側で確認している。また、南側でも小規模なピットを検出したが、規模がやや小さく、深さも浅いため主柱穴とは断定できなかった。

住居内では主柱穴内から第7図1の甕がほぼ完形の状態で検出されたほか、2のミニチュア甕が住居跡北側埋土中から検出された。その他、小片ではあるが高杯・甕等の破片が埋土内より検出された。

出土遺物(第7図1~4) 竪穴式住居跡SH31出土遺物として弥生土器4点を図示した。

1は甕である。口縁の一部を欠くもののほぼ完形品である。体部最大径は中位よりやや上半にもち、体部最大径から下半部に使用痕とみられる煤が付着している。口縁は「く」字状にのび、端部を上方に屈曲させる。外面下半部には顕著に左下がりのタタキがみられるが、上半は摩滅のため調整不明である。底部内面には放射状のハケの痕跡がみられるが、その他は摩滅により不明であるが、部分的に縦方向のナデが確認される。なお、体部内面には2か所の接合痕がみられる。



2はミニチュア甕である。口縁の一部を欠損する。「く」字状の単純口縁甕を模したものであり、 全体にナデにより調整される。

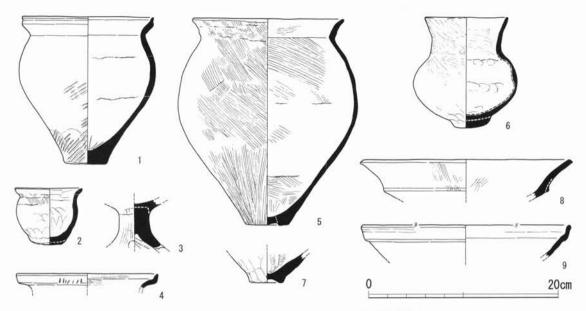
3は高杯脚柱部である。中実の短い脚柱から大きく開く脚にいたる。円形の三方透かしをもつ。 外面および杯部内面はヘラミガキにより、脚内面はハケにより調整される。

4は甕口縁の小片である。口縁は受け口状を呈し、口縁外端面にヘラ状工具による刻目を施す。

②竪穴式住居跡SH32(第6図下段)

遺構 竪穴式住居跡 S H 31 の南東で近接して検出された竪穴式住居跡である。住居跡の西辺を検出したが、大部分は調査区外である。住居は方形の平面プランを呈し、主軸はほぼ北にとる。南北方向の規模は約 5.7 mを測る。

住居跡の埋土中からは細片化した炭化材や焼土が検出され、竪穴式住居跡 S H 31 同様、焼失住居であると考えられる。炭化材の中には板状もしくは扁平な角材状のものが含まれている。これらの部材はいずれも住居跡の外側が検出レベルが高く、また、内側に傾斜するような状態で検



第7回 竪穴式住居跡SH31·32出土遺物実測図

出されていることから、焼失時に外側から住居内に倒れ込んだ住居の壁面もしくは屋根材を構成した部材と推測される。この他、住居跡北西隅では住居跡内に落ち込むような状態で 30cm 大の自然石が検出された。

住居跡内の遺構として、ほぼ完周する周璧溝、3基のピットを確認した。主柱穴についてはどのピットが相当するのか断定するには至らなかった。

遺物は住居跡北側床面直上でほぼ完形の甕 (第7図5)、壺 (第7図6)を検出した。細片化した炭化材とともに検出されており、焼失以前に住居跡内に存在したものとみられる。その他、細片化した弥生土器が住居埋土中から検出されている。

出土遺物 (第7図5~9) 竪穴式住居跡 S H 32 出土遺物は全て弥生土器である。その内 5 点を図示した。

5は甕である。検出時はほぼ完形であったが、被熱による劣化のためか取り上げの際、細片化してしまった。内外面とも被熱によるとみられる赤変が著しい。体部最大径から下半部には使用痕とみられる煤が付着している。口縁は緩やかに外反する単純口縁である。平底の底部はわずかに上げ底状に整形される。調整は内外面ともハケにより行われ、口縁外面にまで及んでいる。口縁端部はハケの後最終的に横方向のナデにより仕上げられるが、粘土帯の接合痕が遺存する。

6は直口壺である。5と接して検出されたがほとんど被熱していない。最大径をほぼ中位にも つ楕円形の体部にわずかに外反する長い口縁をもち、底部は突出底を呈する。内外面にハケが観 察される。

7は甕の底部片である。底径は小さく、上げ底気味に整形される。

8・9は高杯杯部片である。いずれも小片のため全容は不明であるが、9については鉢である可能性もある。8は有稜系、9は複合口縁系である。

(石崎善久)

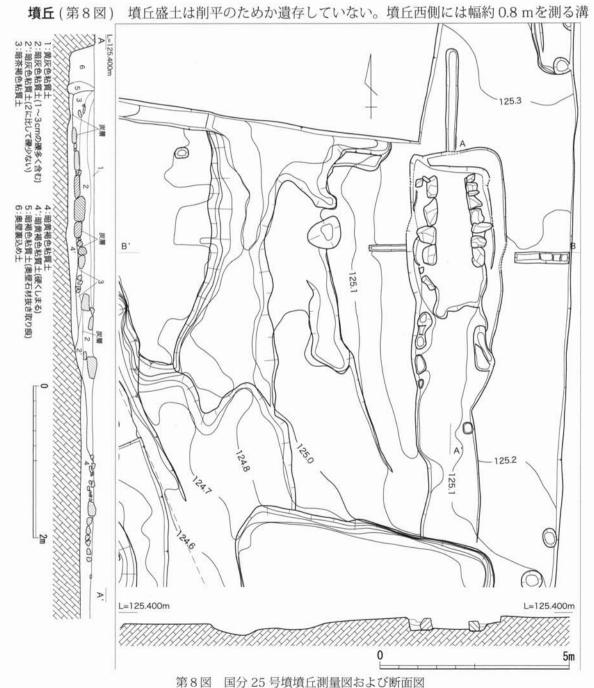
(2) 古墳時代の遺構・遺物

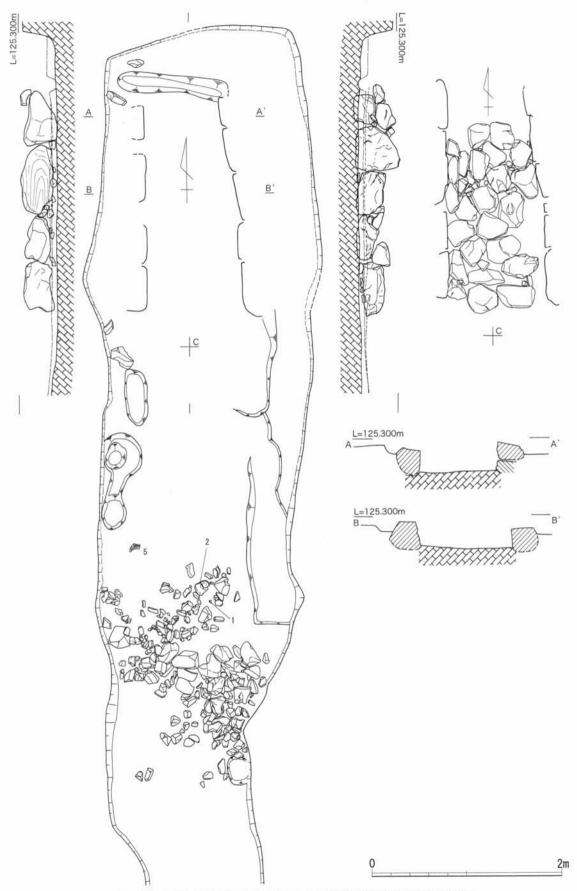
古墳時代に属する遺構としては、横穴式石室墳9基、小石室墳2基、これら古墳に伴うとみら れる土坑や溝などが存在する。いずれも古墳時代後期から飛鳥時代にかけての遺構群であり、古 墳時代前・中期に属する遺構・遺物は検出されていない。

以下、各遺構ごとに遺構と出土遺物について概観する。

①国分 25 号墳

位置 D1地区北東部に位置する。石室床面の標高は約125 mを測る。この地区では最も高 所に位置する古墳である。





第9図 国分25号墳石室実測図および再利用面敷石状遺構平面図

が検出された。溝はやや不整形な弧を描いているが、墳丘側面はほぼ直線的に掘削されている。 墳丘の北・東では区画施設を検出することはできなかった。

以上の点からこの古墳は不整形な方墳であると考える。規模については明確にはできないが、 石室の中軸を墳丘主軸とみた場合、おおよそ東西7m、南北10m程度であったと思われる。

石室(第9図) 内部主体は南に開口する横穴式石室である (1)。石室は大部分の石材が抜き取られ、玄室両側壁の自然石 (2) を用いた基底石のみが遺存している。残存する石室の規模は全長 2.3 m、奥壁幅 0.8 mであるが、玄門寄りでは幅 1 mを測り、「ハ」字状に開く平面プランを呈する。また、側壁の抜き取り痕から判断して、この石室は全長約 5.6 mを測る無袖の石室であったものと考える。

玄室内からは敷石状に置かれた扁平な石材が検出された。この敷石状の遺構に関しては石室内の土層の観察結果から、奥壁を抜き取った跡に再掘削され置かれたものと判断されたため、本来の石室に伴うものではないとみられる。敷石状遺構の上面には炭の堆積層が確認され、再利用時に何らかの行為に伴い石室内に堆積したものと判断する。出土遺物がないため、再利用時の時期を限定することはできない。

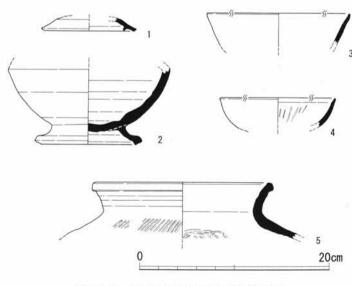
羨門に相当する部分で拳大から人頭大の集石を確認した。閉塞に伴うものの可能性が考えられるが、閉塞石にしてはあまりにも小振りであり、玄室内の敷石が掻き出された可能性もある。

石室前面には幅 1.4 m、深さ 0.2 m、長さ 4 mの溝状の掘形が認められた。石室前庭部あるいは墓道と考えられる。

墓壙はこの墓道状の溝と同時に掘削されており、平面「コ」字状の掘形を呈する。

遺物出土状況 遺物は羨門部の集石上で須恵器台付壺(2)が横位で、それに近接して須恵器 杯蓋片(1)、土師器杯片(4)が検出された。また、集石より玄門寄りの西側では須恵器甕片が それぞれ検出されている。

(石崎善久)



第10図 国分25号墳出土遺物実測図

出土遺物(第10図) 国分25 号墳に伴う遺物として、須恵器3 点、土師器2点を図示した。

1は須恵器杯G蓋⁽³⁾で、口縁部のみの小破片である。2は須恵器脚付長頸壺の体部下半以下の資料である。体部外面下半に回転ヘラケズリ調整を施した後、脚を貼り付ける。脚端部は平坦で内傾し、内方のみが接地する。底部内面に灰が付着する。5は須恵器甕である。口縁部外面と頸部内面に自然

釉が付着する。

3・4は土師器杯である。3は口縁端部がわずかに肥厚する。ヨコナデ調整を施すが、ミガキ調整や暗文は施されていないと考えられる。4は杯Cと考えられ、口縁部にヨコナデ調整を施し、外反させる。内面に放射状暗文がかすかに認められる。3・4はともに、胎土に細砂を含み、橙褐色を呈する。焼成は良好である。

(筒井崇史)

②国分 26 号墳

位置 D1地区北端で検出した横穴式石室を内部主体とする古墳である。国分 25 号墳、国分 29 号墳と隣接し、石室床面の標高は 124.4m を測る。調査の初期段階で石室の一部を確認し、トレンチ拡張時にその全容が明らかになった。なお、墳丘北側は調査区外である。

墳丘(第11図) 耕作地を造成する際に西側は大きく削平を受け、墳丘の大半と天井石、石室上部は失われたと考えられる。

墳丘は東側は弧状を呈する溝を掘削することにより基底を区画する。墳丘西側では、地山整形による基底部を検出した。これらの状況から、墳丘規模は、東西約12 m、南北12 m以上、西側基底部からの残存高1.2 mを測る南北に長い楕円形を呈する円墳と考える。また、基底部分は緩斜面に立地するためか、東側で標高124.2 m、西側で標高124.8 mと比高差0.6 mを測る。

盛土は東側および北側で確認した。土層断面の観察結果から、ベース面である黒ボク層から墓 壙を掘り込み、石室を墓壙上段まで裏込め作業を行いながら構築した後に、さらに石室構築と併 行して盛土構築がなされたものと判断される。

墳丘に伴う施設として、墳丘西側基底部で列石状の遺構を確認した。拳大の角礫から、30~50cm大の角礫を用いている。石材の状況から原位置を留めていない可能性が高いが、外護列石として基底部分に用いられていたものと考える。

墳丘の南西部には 3 基の土坑 (S X $44 \sim 46$) が連続して検出された。東側の土坑 S X 44 E 国分 26 号墳の墓道は連続している。この土坑は性格不明と言わざるを得ないが、後述する墓道の遺物と土坑 S X 44 の出土遺物に接合関係が認められることや、横穴式石室内から掻き出されたとみられる鉄製品が検出されたため、国分 26 号墳追葬時には掘削されていたと判断される。

石室(第13図) 南に開口する左片袖の横穴式石室である。石室はわずかに主軸を西に振る。 上述のように天井石と石室上部は失われている。羨道部も左壁の石材の大部分は抜き取られ遺存 していない。玄室左側壁も基底石が遺存するのみである。また、袖石も周囲が撹乱されており、 袖石周辺の石材自体が移動されている可能性が高い。一方、玄室右側壁は3~4段、奥壁も2段 目までが残存し、基底石は羨門部までほぼ残存する。石室に使用される石材は全て自然石であり、 人為的な加工痕は確認されない。

石室全長は $6.95\,\mathrm{m}$ 、玄室長約 $4.05\,\mathrm{m}$ 、玄室幅は奥壁寄りで約 $1.45\,\mathrm{m}$ 、玄門部付近で約 $1.77\,\mathrm{m}$ を測る。残存高は最も高い部分で、奥壁・右側壁がともに $1.1\,\mathrm{m}$ 、左側壁は $0.5\,\mathrm{m}$ を測る。また、袖部の長さは撹乱のためやや不明瞭ではあるが、およそ $0.3\sim0.4\,\mathrm{m}$ 前後であったと推測される。



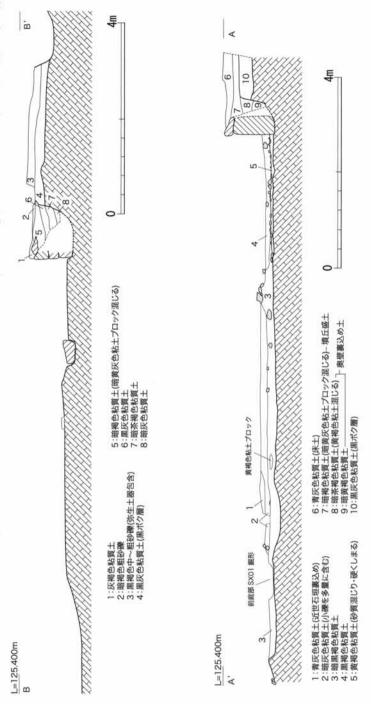
第11図 国分26号墳墳丘測量図および外護列石実測図

玄室は奥壁から2石目までが「ハ」字状に広がる胴張傾向の平面 プランを呈する。とくに左側壁側 の張りが顕著である。また、玄門 部左側壁側でも玄室幅を減じてい ることから、胴張石室を指向して いるものと考える。

奥壁は大型の石材 2 石を腰石として用いている。石材の形態や墓壙との関係から、ほぼ垂直に近い立位で用いているものと判断される。両石材間に生じるすき間には20cm程度の小石材を用いることにより面を揃えている。2 段目には長軸約0.6 m、短軸約0.3 mの石材を平積みしており、2 段目以降は側壁と同様の構造であったものと推測される。2 段目がわずかではあるが玄室内にせり出していることから、2 段目以降壁面には持ち送りがなされていたものと判断される。

また、両側壁は奥壁を挟み込む 形で構築されていることから、石 室の造成に際しては奥壁から設置 されたものと判断される。

右側壁は基底のみが遺存しており、奥壁にはやや縦軸の長い石材を用い、その他は長軸 0.5 ~ 0.7



第12 図 国分26号墳土層断面図

mの石材を平積みする。また、基底石下部には拳大から 20cm 大の小石材を墓壙との間に用い、 基底石の安定をはかり、上端の水平面を整えている。

袖石は、長・短軸とも1 m近い石材を用いている。周辺に撹乱が及んでいるため、この石材が どのように用いられていたのかは明確にはできない。また、袖石の下部には20~30cm 大の角 礫が露出しており、他の基底石同様、石材の安定と水平面の調整を行っている。右側壁羨道部は 羨門部の石材が遺存するのみであるが、石材の抜き取り痕からほぼ直線的なプランを呈していた ものと思われる。

左側壁は遺存状況が良く、基底から、最大で4段が遺存する。基底石には右側壁同様、長軸0.5~0.7 mの石材を平積みするが、玄門部のみ長軸0.9 m、短軸0.5 mの大型の石材を用いている。左側壁とは異なり、墓壙と基底石下部の間に調整用の小石材を用いることはほとんどない。2段目は基底石よりやや大型の石材を平積みする。基底石との間には小石材を用いることにより、2段目の壁面や水平面の調整を行っている。また、2段目は玄門部の大型石材と同じ高さに目地を通しており、この石材が高さの一定の基準を示していたものと推定される。3段目はさらに横方向に長い大型石材を多用するが、目地を通すことはなく、4段目で目地を通しているようである。また、玄門部3段目にはやはり大型の石材が用いられており、これが、奥壁側4段目と同しているることから、玄門部の石材が、石室構築の一定の基準を示しているものと考えられる。右側壁の持ち送りは3段目からわずかではあるが認められる。

玄室内には敷石が施されている。奥壁から約2.6 mの範囲に敷設されているが、断面の観察から、石室床面に一定の整地土を施した後に敷石を敷設したものと判断される。奥壁北西部には敷石の施されていない南北20cm、東西30cm程度の空間が存在するが、ここには後述する須恵器群が据え置かれており、追葬時に人為的にはずされた可能性がある。

また、玄門部から玄室内にかけて、拳大から人頭大の石材を集めた集石遺構が見受けられた (第13図)。当初、この石材については、閉塞石の下部構造の可能性を考えたが、位置的な問題や、 用材があまりにも小型であること、敷石に用いられている石材とほぼ同形態であることなどから 閉塞に伴うものではないと判断した。

この集石遺構は、石材のすき間や、下部に細片化した須恵器が多数検出され、また、土層断面 の観察結果から、羨道部が一定埋没した段階に構成されていることが分かった。

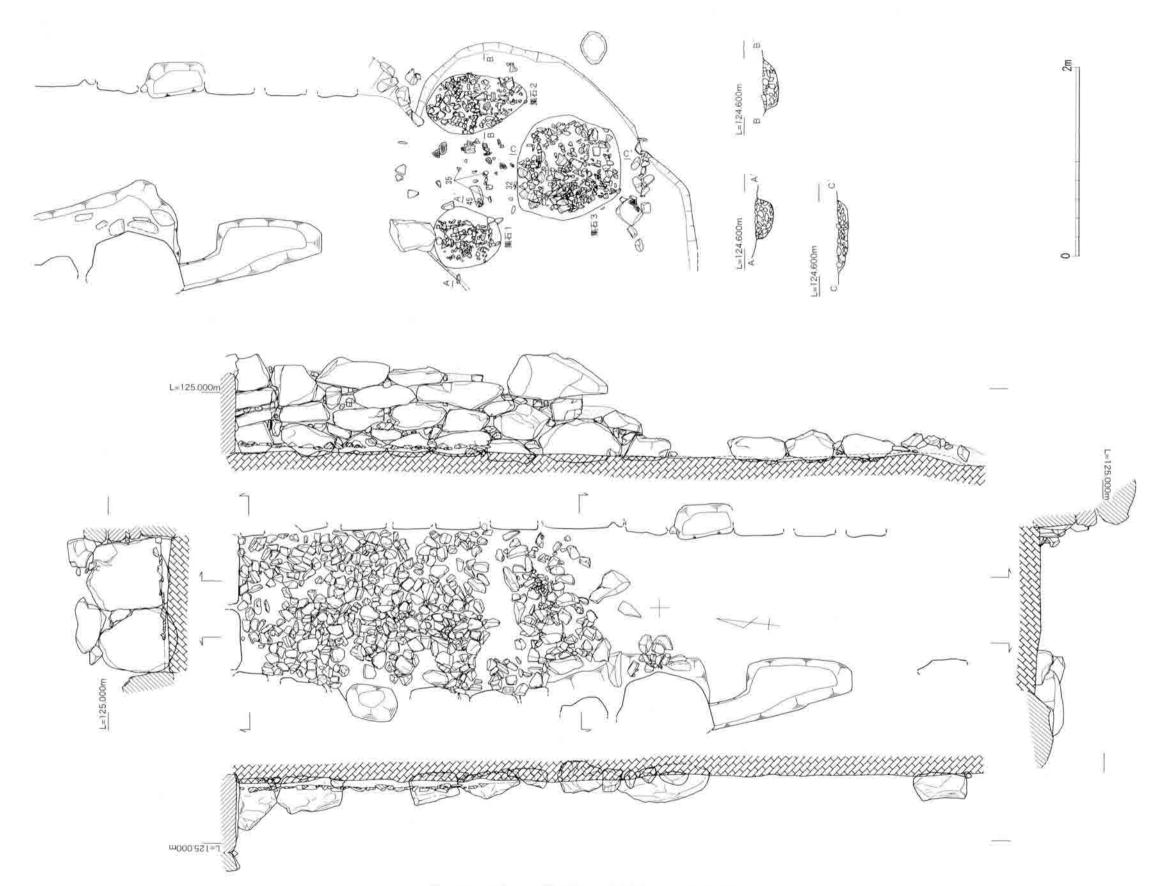
以上の点から、集石は追葬時に構成されたものと判断される。追葬時に、玄室内玄門付近の敷石を除去し、細片化した須恵器や鉄器とともに再集積した可能性を考えておきたい。石室外にまで持ち出していないのには何らかの理由を考える必要があろう。

この集石遺構と同一面の前庭部で、土坑内に円礫を集石した遺構を検出した。羨道が一定程度 埋没している段階で構築されているため、追葬時の祭祀行為に伴う遺構と考える。土坑は3基を 検出し、いずれも5~10cm 大の小礫を土坑内に充填している。土坑は羨門部の正面に1基、左 右の羨門先端の石材の南にそれぞれ1基ずつの計3基が配されている。また、この土坑上や、前 庭部では甕の細片が多数出土しているため、何らかの祭祀に伴う遺構と考える。

(坂内裕志)

遺物出土状況(第14図) 国分26号墳の出土遺物は大部分が玄室内からの出土である。玄室内でも、玄門部付近の集石遺構周辺から出土したものと、奥壁もしくは敷石上面から検出されたもので状況が異なる。

玄室奥壁側の左側壁付近では側壁に沿う形で大刀 (54) が検出された。この大刀は切先を開口部に向け、峰を左側壁側に向け敷石上にほぼ据え置かれた状態で検出された。この大刀は原位置



第13 図 国分26号墳石室および前庭部集石遺構実測図

を留めているとみられるため、大刀の西に頭位を北に向けた被葬者を想定することができる。先に述べたようにこの石室では追葬行為がなされているため、最終追葬にともなう人物の一人と考える。また、この大刀周辺からは細片化した木製鐙の柄先金具 (67・68)、刀子の茎 (61) が検出されている。大刀の南には須恵器提瓶 (41) が破片となって、また、須恵器壺 (39・40) が横位で検出されている。須恵器壺 (36) は、この位置にもっとも大型の破片が複数存在したが、玄門部集石から出土した小片との接合関係を持つため、これは最終追葬に伴うものではない。

玄室奥壁北西隅には多数の遺物が集積されていた。奥壁中央部には轡 (73)、金銅製花弁形飾金具 (70) が検出され、それに接して西では須恵器杯身 (13・14) が 14 は正位で、13 は逆位で各々検出されている。さらに鉸具 (71・72) や細片化した鉄鏃の茎 (58) などもここから出土している。奥壁北西隅の敷石の存在しない部分には須恵器蓋杯類が総数 11 点 (1・2・4・5・6・12・15・16・18・21・22) 積み重ねられていた。これらは必ずしもセットでは置かれておらず、杯身 (6・14・18・21) のように破片となっている個体も存在するが、この部分で検出された遺物群は玄門部集石から検出された小片とは接合関係を持たない。むしろ、完形個体群を移動させ何らかの要因でその場で破損したものが多い。一方、鉄器類は鉄鏃 (57) や鏃の頸部などの小片が多い。これらの遺物群の南には逆位で杯蓋 (3) が検出され、その周辺に鐙柄先金具片 (66・69) が確認されている。

玄室北西部は、玄門集石までの間、ほぼ遺物の出土はみられず、わずかに鉄製品として刀子 (69) の小片が存在するのみである。これは、玄門部集石の北西で検出された一対の耳環 (49・50) の存在から、南頭位で石室主軸に平行して埋葬された被葬者が存在したためと判断する。

玄門部集石では、集石上から、杯蓋(9)が逆位で、やや玄室寄りで杯身(17)が正位で、その上に脚部を欠損した高杯(30)が重ねられた状態で検出されている。この高杯(30)は集石の上面で確認された破片同士でほぼ完形個体に復原された。

また、小片化した個体 (杯身 19・20・23・24・25・26、杯蓋 7・8・10・11、高杯 31、 提瓶 43) が多く出土しているが、集石内の細片と下部の細片が接合するものが多数存在する。ま た、台付長頸壺 (35) はこの集石周辺で出土したもの以外に、前庭部や土坑 S X 44 で出土した 脚から体部の破片が接合した。この集石から羨門部にかけて鉄鏃 (55・56) が検出されている。

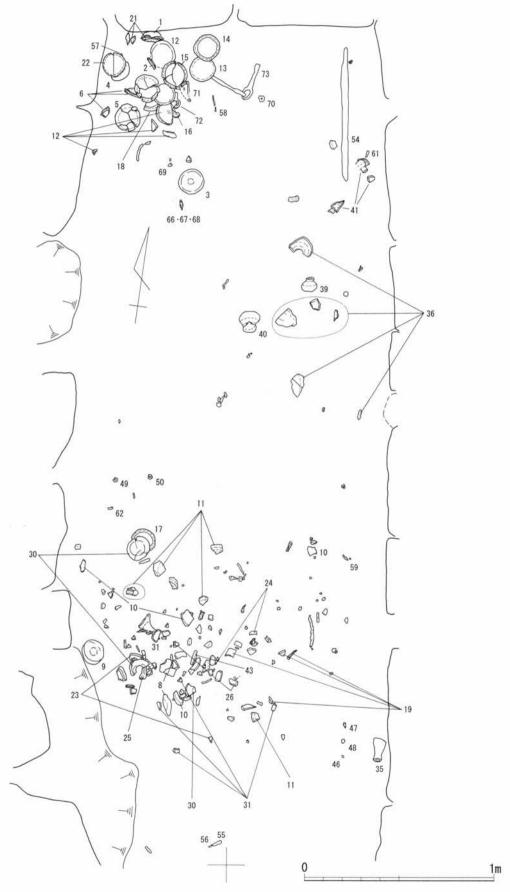
集石の北東、側壁よりには鉄鏃頸部 (59) や小片化した鉄器が検出された。

その他集石より東の羨門側で、玉類 (46~48) が検出された。

羨道部では、遺物の出土量は極めて少なく、鉄釘 $(63 \sim 65)$ や杯 (29) がやや浮いた状態で検出されている。

前庭部では S X 44 出土甕 (52・53) と接合関係にある細片化した甕が検出された。その他、 土師器杯 (45) や高杯 (32)、鉄鏃 (60) なども前庭部からの出土である。

前庭部と連続する土坑 S X 44 からは、甕 (52・53)、高杯 (34)、台付壺 (35)、鉄鏃 (74)、鉄 釘 (75)、円形座金具 (76)、鞍金具 (77・78) が出土している。前庭部からの転落、もしくは石室内より掻き出された遺物であると考える。



第14図 国分26号墳石室内遺物出土状況実測図

その他、図示されている個体のうち、蓋 (27・28)、高杯 (33) は土坑 S X 45 から、甕 (51) は 土坑 S X 46、椀 (38) は墳丘東側周溝埋土、台付壺 (37)、提瓶 (42・43) は国分 26 号墳を破壊 して構築された石垣の裏込め土、提瓶 (44) は右側壁の基底石抜き取り痕からそれぞれ出土して いる。

(石崎善久)

出土遺物(第15~20図) 国分26号墳に伴う遺物として、須恵器47点、土師器1点、玉類3点、 耳環2点、鉄器25点を図示した。

a. 土器類·玉類

 $1 \sim 11$ は須恵器杯H蓋である。 $2 \sim 5 \cdot 7$ は天井部外面に回転へラケズリ調整を施す。ただし、 $4 \cdot 7$ は一部ケズリ残しが認められる。これらは口径 $11.8 \sim 12.7$ cm、器高 $3.4 \sim 4.0$ cm である。そのほかの個体の天井部外面はヘラキリ後不調整もしくはナデ調整である。1 がやや大きく口径 12.8 cm、器高 4.0 cm であるほかは、口径 $10.8 \sim 11.9$ cm、器高 $3.5 \sim 4.1$ cm である。 $7 \cdot 10$ は胎土に多くの黒色粒を含み、8 は少量の黒色粒を含む。焼成は堅緻なものが多い。

 $12\sim26$ は須恵器杯Hである。 $12\sim16\cdot18\cdot19\cdot21\cdot22$ は底部外面に回転ヘラケズリ調整を施す。 $12\cdot14\cdot15\cdot19\cdot21\cdot22$ は一部にケズリ残しが認められる。これらは立ち上がり径 $10.4\sim10.9$ cm、口径 $11.5\sim12.3$ cm、器高 $3.0\sim3.6$ cm である $(^{\circ})$ 。そのほかの個体の底部外面はヘラキリ後不調整もしくはナデ調整である。これらは立ち上がり径 $9.8\sim10.4$ cm、口径 $10.9\sim11.7$ cm、器高 $3.0\sim3.9$ cm である。 $12\cdot23$ は若干焼け歪む。また、22 の底部外面にヘラ記号が認められる。 $18\cdot21\cdot23$ は胎土に黒色粒を多く含む。焼成は堅緻なものが多い。

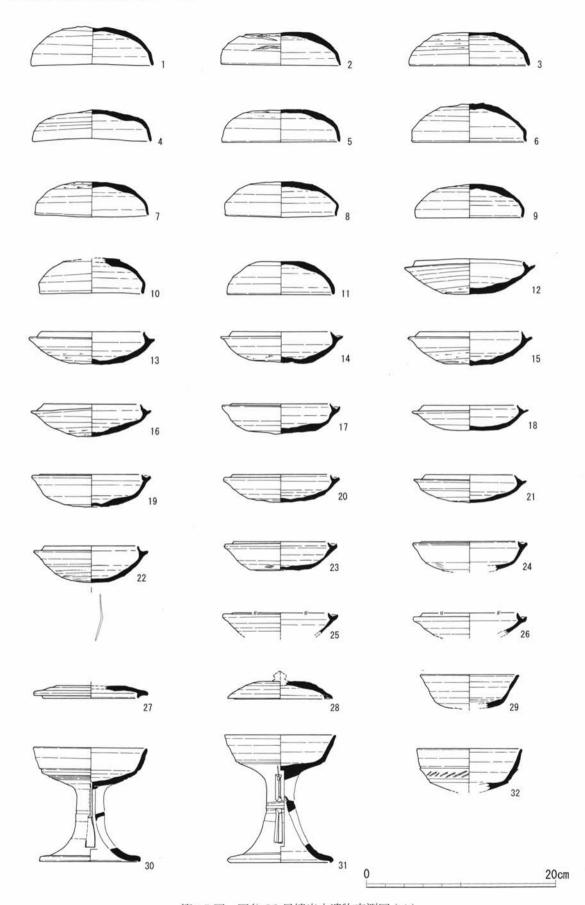
27・28 はかえりを有する須恵器蓋である。27 は高杯や長頸壺などの蓋である可能性が高い。 28 は杯G蓋である。つまみを欠損するが、天井部外面に回転ヘラケズリ調整を施す。2 点とも 周溝出土であるため、確実に国分 26 号墳に伴うものであるかどうか明らかでない。

29 は須恵器杯Gである。やや丸みを帯びた底部に外上方に直線的にのびる口縁部からなる。

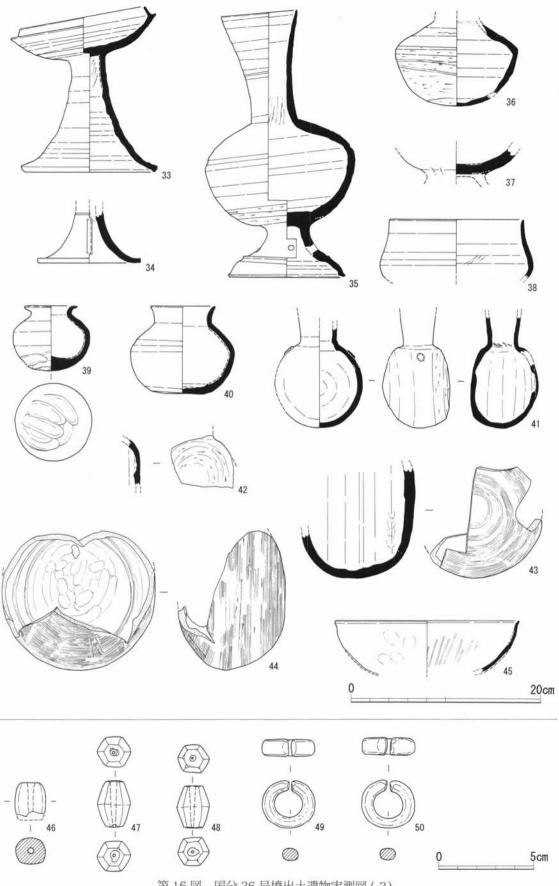
30~32 は須恵器無蓋高杯である。31・32 の脚部は、上下2段に透孔を有する長脚のものであるが、30 の上段は透孔ではなく、ヘラ状工具による切り込みで表現されている。ともに杯底部から口縁部へ立ち上がる屈曲部外面に沈線を1条施す。30 は口径11.8cm、器高12.3cm、底径10.4cmである。31 は焼成がやや軟質で、灰白色を呈する。口径11.6cm、器高13.8cm、底径10.6cmである。32 は脚部を欠損する。杯部外面に刺突文を施す。胎土に少量の黒色粒を含み、焼成は堅緻である。口径は11.0cmである。34 は30・31 と同様の高杯の長脚で上下2段に透孔を有する脚部の下半である。

33 は須恵器有蓋高杯である。周溝から出土したが、対応する蓋は出土資料中に認められなかった。脚部は杯部との接合部から、緩やかに「ハ」字状に開く。透孔は認められなかった。立ち上がり径 13.3cm、口径 14.1cm、器高 14.1cm、底径 13.6cm である。

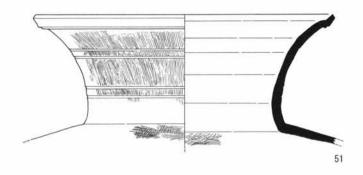
35 は須恵器脚台付長頸壺である。焼け歪むものの、開き気味の口頸部と、丸味を帯びた体部 に脚台が付く。口頸部外面に沈線が2条認められるが、灰を被っているため不明瞭である。体部

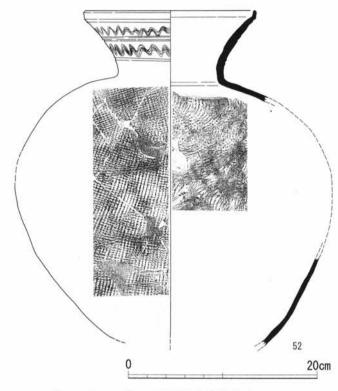


第15図 国分26号墳出土遺物実測図(1)



第16図 国分26号墳出土遺物実測図(2)





第17図 国分26号墳出土遺物実測図(3)

上半に沈線を1条施す。体部下半に は回転ヘラケズリ調整を施す。脚台 には直径0.8cmの円孔が4個穿たれ る。口径7.9cm、器高28.1cm、底径 12.1cm、体部最大径15.7cmである。

36 は須恵器長頸壺の破片である。 体部上半に沈線を1条施し、体部下 半から底部かけては回転ヘラケズリ 調整を施す。37 は須恵器脚台付長頸 壺の底部と考えられる。脚台は剥離 する。底部にヘラで透孔を穿つ際に 付いた切り込みが2本認められる。

38 は須恵器椀である。周溝出土であるため、本墳に伴うものであるかどうか不明である。体部中位の屈曲部から、内傾しつつ外反気味に立ち上がる口縁部をもつ。胎土に黒色粒を含む。淡灰色を呈し、焼成はやや軟質である。

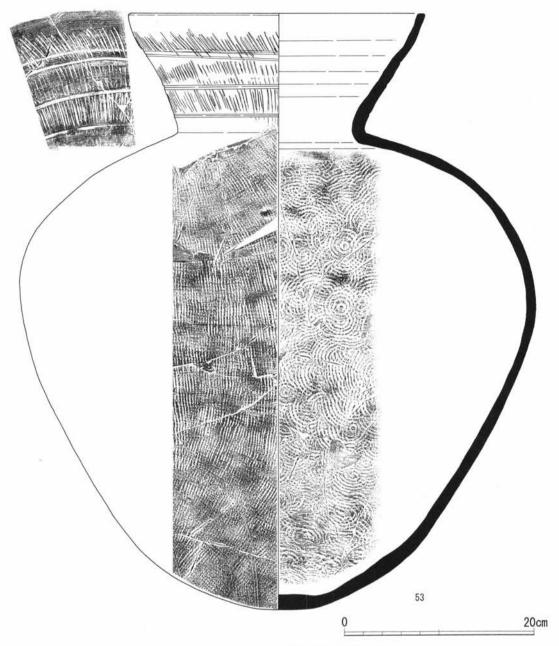
39・40 は須恵器短頸壺で、ともに 完形品である。39 は回転ナデ調整で、 底部はユビナデもしくはユビオサエ による圧痕がみられる。口径 4.6cm、

器高 4.9cm である。胎土に黒色粒を含む。40 の体部外面下半は調整不明である。底部外面はヘラキリ後不調整である。口径 6.8cm、器高 9.3cm である。外面の 1/2 程度は黒灰色を呈するが、基本的に灰白色で、焼成はやや軟質である。

 $41 \sim 44$ は提瓶である。 $41 \cdot 42$ はミニチュアと考えられる。41 を除く 3 点は破片で全体の形状は不明である。41 は口縁部と体部の一部を欠損するが、全体の形状を知ることができる。 $43 \cdot 44$ は体部下半の破片である。ともに外面は回転ナデ調整で整形した後、カキメを施す。内面にユビオサエ痕がみられる。

45 は土師器杯 C である。外面は器表面の剥離が著しいが、ユビオサエ痕がみられる。内面には放射状暗文が認められる。口径 19.4cm、残存高 5.4cm である。胎土に細砂や砂粒を含む。橙褐色を呈し、焼成は良好である。

 $51 \sim 53$ は須恵器甕である。いずれも周溝内に掘削された土坑状の遺構から出土した。51 は口縁部のみの資料である。回転ナデ調整の後、外面に縦方向のハケ調整を施す。その後、2条一



第18図 国分26号墳出土遺物実測図(4)

組の沈線を二組、計4条施す。口径は33.4cmで、かなりの大型品と推定される。52 は互いに接合しないか、接点がわずかしない破片を図上で復原したものである。口縁部は回転ナデ調整の後、外面を2条の沈線によって上下に区分し、それぞれに波状文を施す。下段の波状文の下にも沈線を1条施す。口径は26.0cmであるが、残存高は不明な点が多い。53 は全体の形状をおおむね復原することができた資料である。やや内湾気味の口縁部に、倒卵形の体部からなる。口縁部は回転ナデ調整の後、外面にヘラガキによる斜行文を施す。また沈線を3条施す。口径31.0cm、器高62.5cmである。なお、51~53の体部はいずれも、外面に平行タタキ調整を施し、内面に同心円状の当て具痕がみられる。

46 は琥珀製の棗玉である。一部を欠損する。残存長 1.8cm、最大径 1.6cm である。47・48

は水晶製の切子玉である。長さ 3.3 ~ 3.6cm、最大幅 1.7 ~ 1.8cm である。

(筒井崇史)

b. 金属製品

国分 26 号墳出土金属製品には、装身具としての耳環 2 点、鉄製品には武器、馬具、工具が存在する。その他に鉄釘がある。

49・50 は金環である。銅芯に金を施したものと思われる。大きさや質感、出土状況からセットをなすものとみられる。断面径 0.6 ~ 0.8cm、横軸 2.8cm、縦軸 2.6cm でほぼ同形同大である。表面の金は良質で不純物をほとんど含んでいないようである。全体に良好に遺存し、緑青の付着もほとんどみられない。

武器には鉄刀・鉄鏃がある。54 は鉄刀である。玄室東側壁に平行して切先を南にむけた状態で出土した。出土状況から被葬者の左脇に置かれたものと考えられる。茎の一部を破損するが、全長約77cmを測る。鐔は喰出鐔であり、鎺と一体につくられ、約0.2cm 突出する。鞘は茎寄りの部分が良好に遺存しており、表面に黒漆とみられる有機質の被膜が確認される。足金具は鉄地銀張であり、切先寄りのもののみが遺存する。吊金具部分を欠損している。

 $55 \sim 60$ は鉄鏃である。形態の確認できるものは全て長頸鏃である。著しく変形した個体が多く、また、鏃そのものに無関係な木質の付着が確認できるものも存在するため、追葬時に棺の下になったりして変形した可能性が考えられる。鏃身部は片刃式のもの $(55 \cdot 56)$ と、短い関をもつ三角形のもの(57)が認められる。箆被は棘状箆被のものと、台形箆被の両者がみられるが、玄室出土のものは棘状箆被、土坑 $S \times 44(74)$ と前庭部(60)から出土したものは台形箆被である。

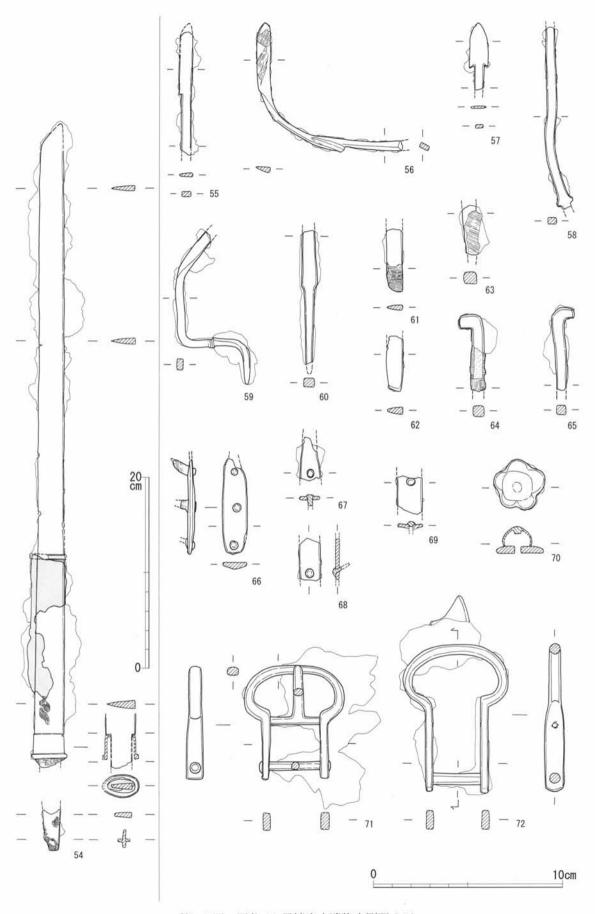
61・62 は刀子である。 2 点を確認した。両者とも茎のみが遺存している。現状では目釘孔を確認することはできない。

63~65 は鉄釘である。3点を確認した。いずれも、羨道部から出土していることや、欠損していることから追葬時に掻き出された可能性が高い。一辺6 mm 程度の断面方形の鉄棒の一端を曲げることにより頭部を作り出す。大きさからみて、木棺に使用されたものと考える。木質の遺存する64 から棺材の厚さは約2.5cm であったものとみられる。

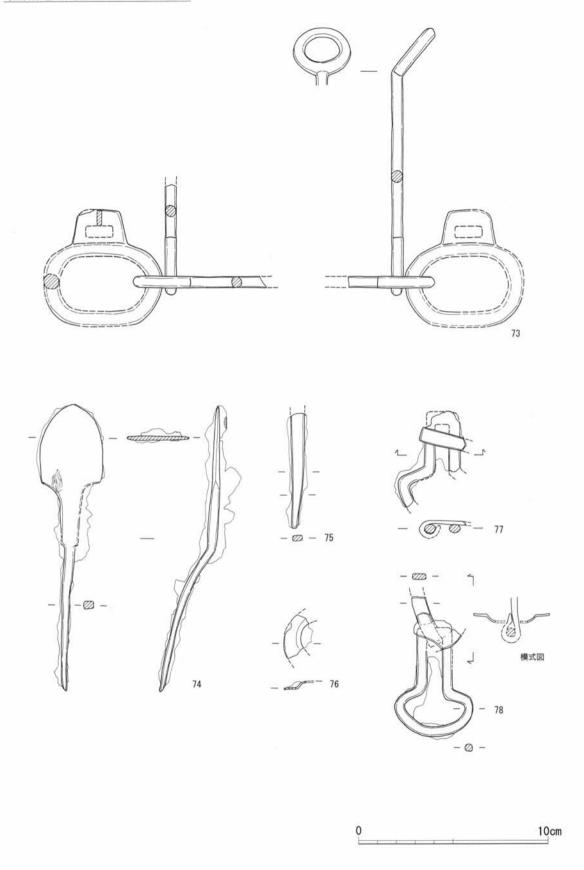
馬具には轡・鐙吊金具がある。73 は轡である。方形立間素環鏡板付轡であるが、銹着が著しく、復原展開模式図を示した。鏡板は長径 6.2cm、短径 4.4cm の楕円環上部に、厚さ 0.3cm、幅 2.8cm、高さ 1.7cm の板状立間を鍛接する。立聞孔は幅 1.4cm、高さ 0.6cm 程度とみられる。引手は長さ 14.2cm を測り、素環鏡板とともに銜外側端環に連結される。銜は二連銜であるが、内側端環は欠損している。現状での復原から銜の全長は 16cm 程度に復原できる。

 $66 \sim 69$ は木製鐙の吊金具である。鐙金具は柄先金具の一部が遺存する。66 は残存長 $4\,\mathrm{cm}$ 、幅 $1.2\,\mathrm{cm}$ 、厚さ $3.5\,\mathrm{mm}$ を測るやや小振りな造りである。壺鐙を固定する鋲が $3\,\mathrm{mm}$ があられる。鋲には縦方向の木目をもつ木質が遺存する。 $67 \sim 69$ は細片ではあるが、66 とほぼ同じ造りである。

70 は鉄地金銅製花弁形飾座金具である。馬具の装飾に使用された可能性が高い。5 弁の花び



第19回 国分26号墳出土遺物実測図(5)



第20図 国分26号墳出土遺物実測図(6)

らを象った花弁形の座金具に中空の円形頭部をもつ鋲が伴う。

71・72 は鉸具である。鉸具は力革と柄先金具を連接していたものとみられ、全長 6 cm のものと、7.8 cm のものが出土した。鐙靼自体は革製であったものとみられる。

土坑 S X 44 からは、国分 26 号墳の追葬時の掻き出し行為にともなうとみられる鉄製品が出土した。鉄製品には鉄鏃・馬具が認められる。

74 は鉄鏃である。鏃身は三角形を呈し、長い茎をもつ。

75 はその形態からみて鉄釘の可能性が高いが木質等の付着は認められない。

77・78 は鞍金具である。凸形の鉸具に足金具が銹着する。足金具は一端を長くして鞍に装着する形態のものである。78 には円形座金具が銹着している。76 はこれらに伴うとみられる円形座金具片である。

(石崎善久)

③国分 27 号墳

位置 国分 27 号墳は国分 25 号墳の南西に近接して位置する。石室床面の標高は 124.5 mを 測る。

墳丘 (第21図) 国分27号墳の墳丘は方形を呈する。西側は削平のため遺存していない。墳丘はほとんどが盛土によるものであることが墳丘の土層断面の観察から明らかとなった。また、第21図に示す横断面からは墳丘造成のため、墳丘緩斜面に平面「コ」もしくは「L」字形の平坦面を造成し、一定の整地 (第21図下段第8層)を行っている。

その後に基底石を据えるための小規模な墓壙の掘削がなされたものと判断される。墳丘はこの 平坦面内に盛土を施すことにより造成され、最終的には周囲に周溝状の溝が残されることとなる。 また、石室の構築は墳丘の盛土と併行して実施されたことが土層の観察から明らかである。

墳丘の規模は残存する部分で東西 4.5 m、南北 9.5 m、高さ 0.9 mを測る。

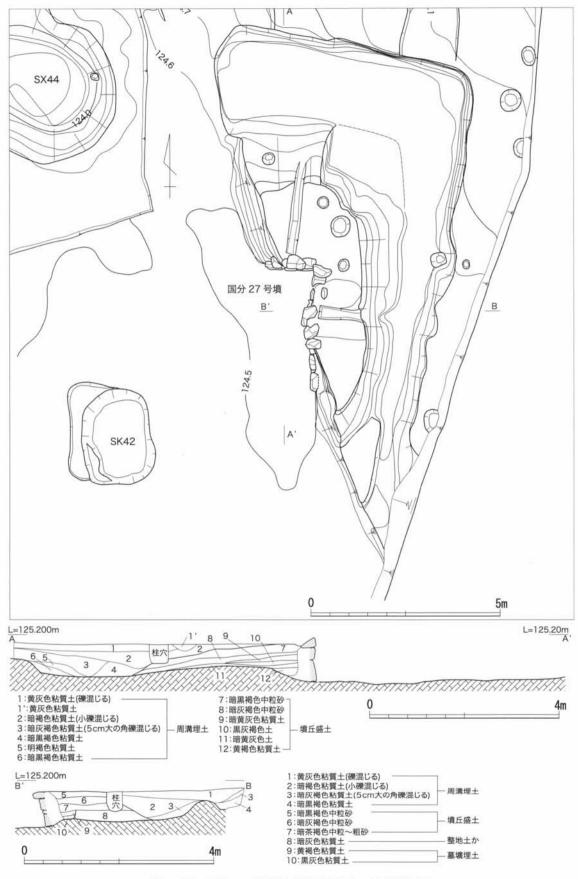
石室(第22図) 国分27号墳の内部主体は南に開口する横穴式石室である。

左側壁は玄室、羨道とも全く遺存しておらず、わずかに玄室奥壁側に石材の抜き取り痕が確認 されたにとどまる。玄門部側の抜き取り痕も確認できなかったため、袖部の有無については不明 である。

残存する石室の規模は抜き取り痕から復原される数値で、奥壁幅 1.2 m、全長 4.6 m、最大高 0.9 mを測る。

石室の構築に用いられる石材はいずれも自然石を用いており、人為的な加工痕は認められない。 奥壁は3段が遺存している。基底には3石のほぼ同規模の石材を据え付けている。2段目は各 基底石の間をまたぐようにして基底よりやや小振りの石材を3石据え付けている。3段目は1石 しか遺存していないが、基底および2段目とは異なり扁平な石材を平積みしている。壁面の持ち 送りは2段目より緩やかに行われている。奥壁と側壁は遺存する右側壁の状況から側壁が奥壁を 挟み込むように構築されていたものとみられる。

右側壁は3段分が遺存する。平面は羨道側がやや外側に屈曲しているため、「ハ」字状に開く

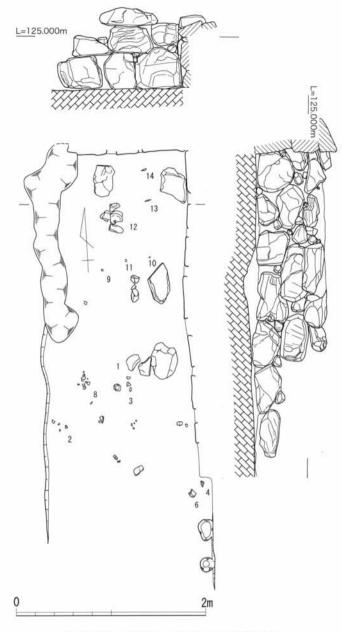


第21図 国分27号墳墳丘測量図および土層断面図

羨道をもっていた可能性もある。基底には奥壁寄りにもっとも大きな石材を用い、玄室および羨道側はほぼ同大の石材を平積みして基底としている。基底石上端の石材間には拳大の石を用いて水平面を調整し、2段目を積み上げているようである。2段目上端は比較的目地が通っているが、やはり小石材を用いることにより、水平面を作っているようである。3段目は基底に比してやや小振りな石材を平積みしている。また、持ち送りはわずかではあるが2段目から行われている。

石室構築に際しては比較的浅い墓壙 を掘削している。墓壙の輪郭は左側壁 羨道側でも確認することができた。墓 壙が浅い理由としては墳丘の項で述べ たように、整地土から墓壙を掘削し、 墳丘造成と一体化した石室構築を行っ ているためと考える。

また、玄室床面には棺台とみられる 扁平な石材が4石確認された。奥壁寄 りに2石、右側壁に沿って3石が並ん でおり、本来は6石からなる棺台であ ったと推測する。

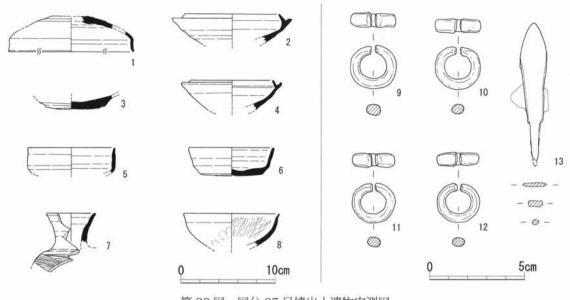


第22図 国分27号墳横穴式石室実測図

遺物出土状況(第22図) 国分27

号墳出土遺物は比較的少量である。石室の破壊に伴い持ち出された可能性もあるが、棺台が遺存 していることからみて玄室内北東部はほとんど最終埋葬時の状況を留めているものと判断され る。そのため、持ち出されたとみるよりは当初より遺物が少なかったと考えたい。

原位置を保っていると思われるものとして、耳環 4 点、鉄鏃 2 点がある。耳環は玄室中央部分から奥壁にかけて出土している。遺物の観察からは 11 と 12、9 と 10 がセットをなすとみられ、被葬者の装着状況を想定した場合、11・12 は移動しているものとみられる。また、奥壁寄りからは鉄鏃 2 点 (13・14) が切先を東に向けた状態で検出された。残念ながら 14 は豪雨に伴う土砂流入の際に破損してしまった。土器類は全て棺台よりも羨道寄りの部分で小片となって検出された。また、須恵器杯身(4) などはいずれも出土位置が本来石室石材の存在する地点に当たる



第23図 国分27号墳出土遺物実測図

ため、原位置を保っていないものと考える。その他、耳環 (10) に銹着した状態で歯牙 1 点が検出された。

(石崎善久)

出土遺物 (第23図) 国分27号墳に伴う遺物として、須恵器7点、土師器1点、耳環4点、 鉄器1点を図示し、報告する。なお、以下に報告する土器の残存率はいずれも1/2に満たない。

a. 土器類

1は須恵器杯H蓋である。破片資料を図上復原したもので、口径や傾きなども推測である。天井部外面に回転へラケズリ調整を施すが、頂部にはケズリ残しが認められる。灰白色を呈し、焼成は軟質である。2・4は須恵器杯Hである。短く立ち上がる口縁部と受部を有するが、底部は欠損する。3は須恵器杯Hの底部と思われる。外面はヘラキリ後不調整である。灰白色を呈し、焼成は軟質である。5・6は須恵器杯Gである。5はほぼまっすぐ立ち上がる口縁部を有するが、底部を欠損する。6は斜め上方に立ち上がる口縁部と平底の底部を有する。底部外面はヘラキリ後ナデ調整を施す。口径8.8cm、器高3.1cmである。7は須恵器平瓶の口縁部である。頸部から逆「ハ」字状に開く口縁部で、回転ナデ調整を施す。体部の一部が残存し、カキメが施されていたことがわかる。

8は土師器杯Cである。口縁部はヨコナデ調整、外面にナデ調整を施す。内面には放射状の暗文を施す。口径10.0cm、残存高3.4cmである。胎土に細砂や砂粒を含む。橙褐色を呈し、焼成は良好である。法量はやや小さいが、D4地区で検出した国分45号墳出土土師器杯に類似した特徴が認められる。

(筒井崇史)

b. 金属製品

 $9\sim12$ は金環である。断面径 $0.5\sim0.8$ cm、横軸 $2.1\sim2.4$ cm、縦軸 $2.1\sim2.3$ cm で、ほぼ

同形同大である。大きさや質感から 11 と 12、9 と 10 がそれぞれセットになるものとみられる。 いずれも銅芯に金を施したものである。11・12 は良好に金が遺存する。 9・10 は銀の含有量 が多いためかわずかに金の表面が黒みを帯びている。

13 は鉄鏃である。平根の鏃であり菱形の刃部をもつ。頸部の関は認められない。破損してしまったもう 1点 (14) も現地で確認した段階では同形式であった。

(石崎善久)

4国分 28 号墳

位置 国分 28 号墳は国分 26 号墳の東、国分 29 号墳の北西に位置する。また、国分 30 号墳の北西には国分 31 号墳、西には国分 60 号墳が存在し、周囲に密集して古墳が築造されているといえよう。石室床面部分での標高は 123.6 mを測る。

墳丘(第24・25図) 国分28号墳に関しては、盛土保存との関係から最低限の周辺部のトレンチ調査に留めている。石室主軸から放射状に配したトレンチの成果からは円墳であると判断された。その規模は南北軸13.6 m、東西軸11.6 mを測る。なお、国分29号墳とほぼ裾を接しているとみられるが、トレンチ内での観察から前後関係を示す資料を得ることはできなかった。

墳丘の造成に際しては、黒ボク層並びに暗橙褐色粘質土系の地山面まで周辺を整形し基底部を削り出している。盛土に関しては部分的ではあるが、墳丘の斜面の一部、および石室周辺で確認することができた。

石室(第26図) 国分28号墳の内部主体は南に開口する無袖の横穴式石室である。ただし、 袖石のルジメントと思われる用材が存在し、その部分を境に玄室と羨道で石材の用い方が変わる ため、両袖傾向であると考える。

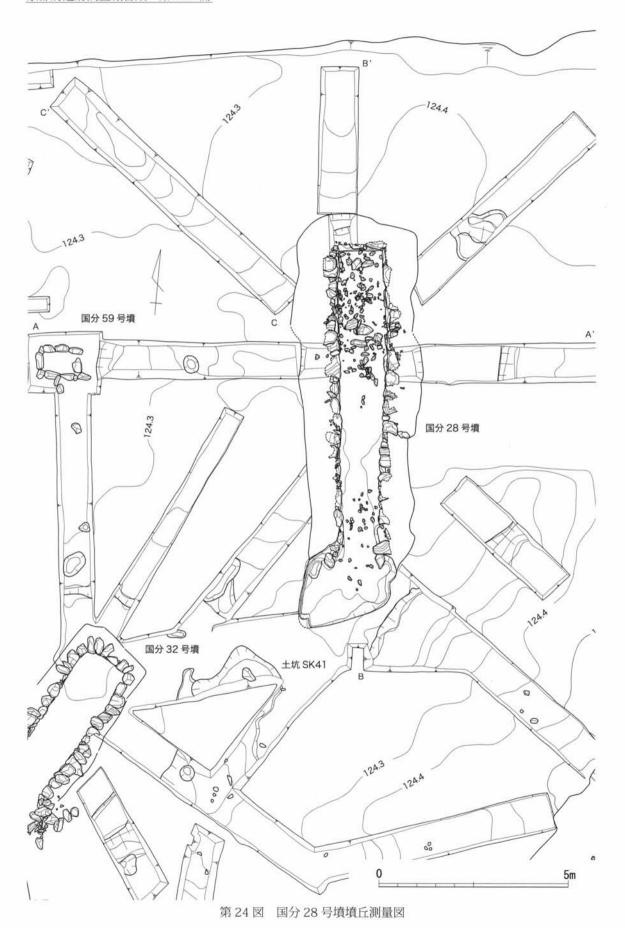
石室の遺存状況は比較的良好であり、石室上方は削平あるいは破壊のため、失われているもの の、基底部分に関してはほぼ羨門端まで完存している。

残存する石室の規模は、全長 8.4 m、奥壁幅 1.2 m、残存高 0.9 mを測る。なお、玄室に相当する空間の規模は奥壁から約 2.8 mを測る。

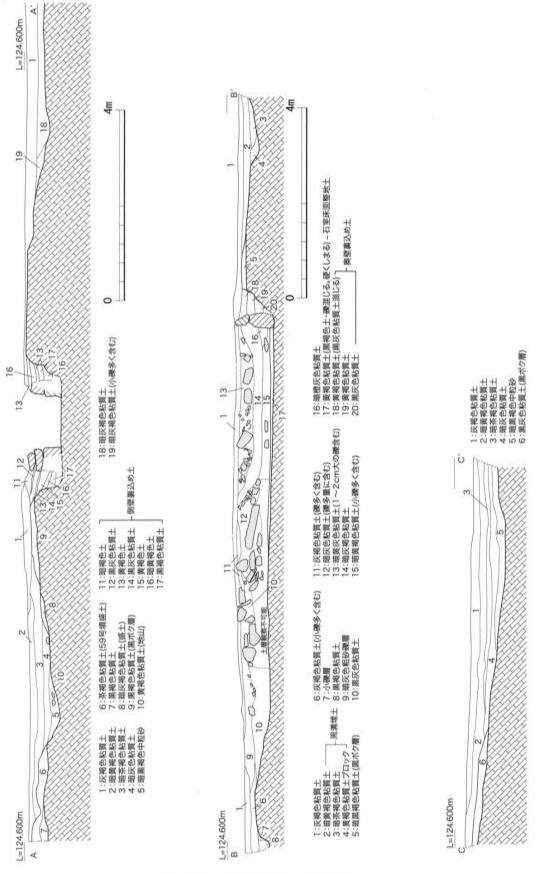
石室の平面プランは玄室部がほぼ長方形であるが、右袖石相当部付近から羨門へかけて右側壁は幅を減じている。そのため、玄門部で幅 1.2 mを測るが、羨門部では幅 0.8 mを測る。

天井石は上述したようにすでに失われていたが、羨道内には長軸 $1.2\,\mathrm{m}$ 、短軸 $0.7\,\mathrm{m}$ 、厚さ $0.3\sim0.4\,\mathrm{m}$ を測る扁平な大型石材が羨門側から転落しており、羨道部の天井石を構成していた石材の可能性がある。

奥壁は2段が遺存している。基底に2石の巨石を立位で用い、両石材間に生じたすき間に人頭大の石材を挟み込むことにより、壁面および水平面を整えている。また、右側壁側の基底石には自然の剥離面を埋めるように小石材が用いられており、奥壁の面を整えることを強く指向しているようである。2段目は基底に比すれば小振りではあるものの、右側壁側では長軸0.6 m、短軸0.4 mを測る大型石材を用いている。奥壁の持ち送りはみられず、ほぼ垂直な面を形成している。また、両側壁は奥壁を挟み込むように構築されている。



-40 -



第25図 国分28号墳土層断面図

京都府遺跡調査報告集 第129冊

右側壁は玄室側で2段、羨道側で3段が遺存する。石材はやや厚みのある自然石を用いている。 奥壁から約2.7 mの位置に縦方向の大型石材を用いることにより袖部を意識した構造となっている。玄室側は大型の石材を積み上げ、すき間を小石材を用いて整えることにより構築されている。 羨道側は袖部相当部より2石程度は大型の石材を用いているが、羨門部にかけては大小様々な石材を用い、場所によっては縦方向に石材を用いることにより壁面を構成している。石材の構築方法にも玄室と羨道の区分が存在するようである。羨門部端より、約1 m程度は石材による壁面がなく、掘形の地山面が露出している状態であり、この上端に3石分の石材が据え置かれている。壁面を構成するものというよりは、墳丘前面の化粧石のような用途と考えられる。壁面の持ち送りはほとんどみられず、ほぼ垂直に壁面を構成している。

左側壁も右側壁同様の構造をとるが、袖部相当部にはこの石室でももっとも大型の石材を据え付けている。また羨門端部には、右側壁と同様の化粧石を使用しているが、壁面を構成する石材として大型の石材を1石用いている点が特徴的といえよう。

羨門部の南側は西へ屈曲する前庭部状の掘形が認められ、墓道へと通じているものと判断される。この前庭部が屈曲しているのは他の古墳の立地により規制を受けている可能性がある。

閉塞は、羨門部付近で長軸約 0.4 m、短軸約 0.3 m程度の石材を積み上げることにより行っている。石材を除去する過程での土層の観察は不十分ではあるものの、閉塞石の下端が、床面の整地土もしくは、掘形の地山面に達していないことから最終埋葬時の状況を示しているものと考える。また、石室内縦断面の土層の観察結果から、この閉塞石より羨門側には前庭部と同じ堆積層が存在することが判明した。以上の状況から、天井石はこの閉塞石付近までしか存在していなかった可能性を考えたい。

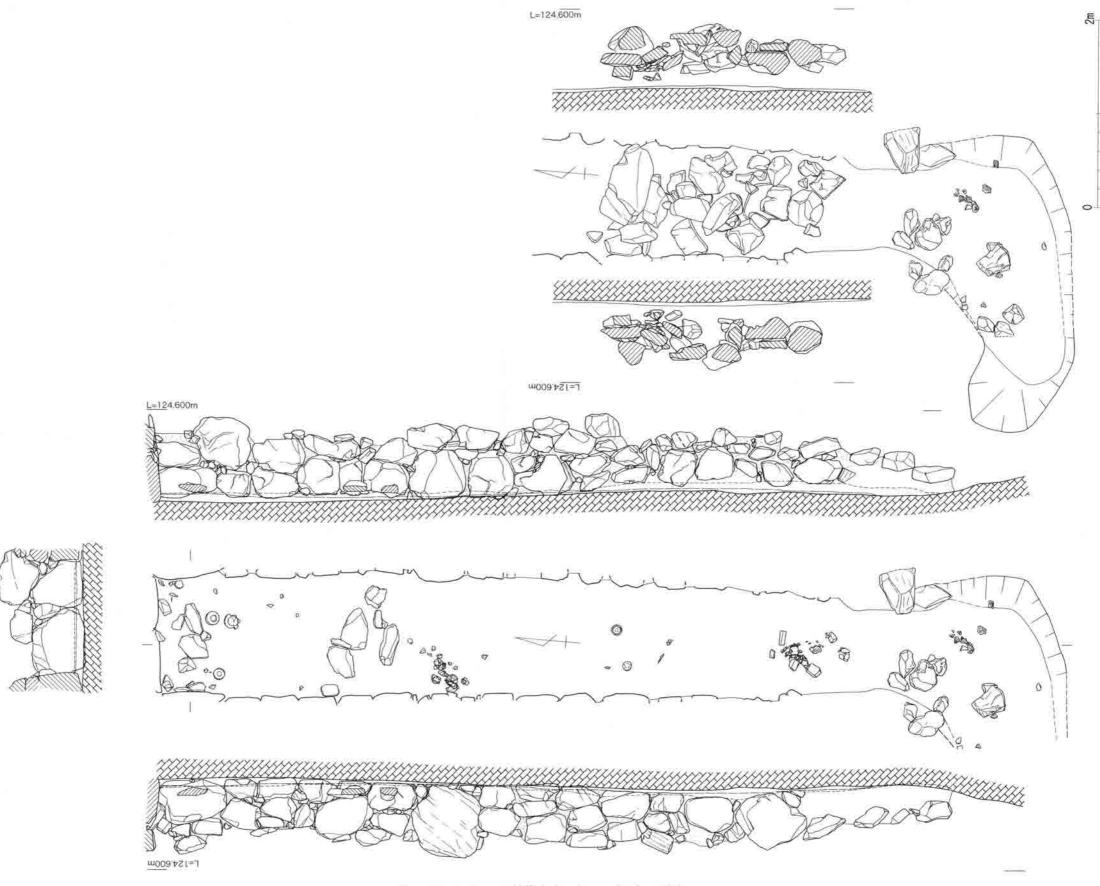
なお、石室の構築に際しては、黒ボク層から「コ」字状の墓壙を掘り込み、石材を裏込め土を 施しながら据えている。また、石室床面には、礫混じりの黄褐色粘質土を用いた整地を行っている。 その他、玄室奥壁から棺台と考えられる石材を検出した。やや大型の石材2石を並べ、玄門寄 り約1.8 mの地点に対をなす石材を配している。棺台の配置からは1棺の埋葬が想定される。

遺物出土状況 (第 27・28 図) 国分 28 号墳の遺物は玄室奥壁部分、右袖部相当部分、閉塞石を挟んで玄室寄りと羨門寄り、前庭部の 5 か所でまとまって出土している。

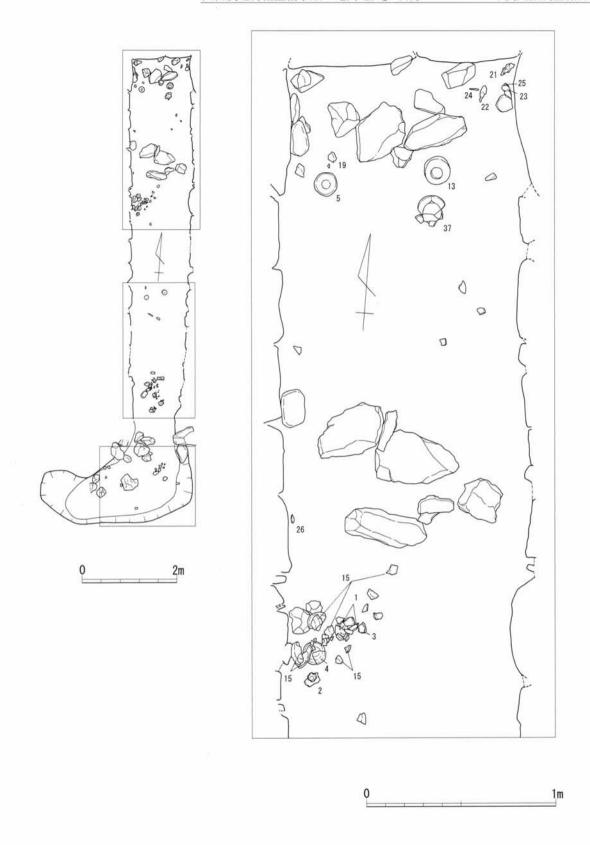
玄室奥壁寄りでは、棺台の北東から鉄鏃 (21~25) が検出された。形態からみて 23・24 は同一個体と考えられ、矢柄の装着を示す個体も存在するため、4本の鉄鏃が束ねて置かれていたものと推測される。棺台よりわずかに南側には正位置で須恵器短頸壺 (13)、土師器椀 (37) が検出されている。土師器椀は棺台検出レベルより明らかに高く、短頸壺の口縁とほぼ同一レベルで検出されており、後世の混入の可能性が高い。短頸壺も床面よりやや遊離した状態である。棺台の南西には土師器杯 (19) の破片と須恵器杯身 (5) が出土している。後者は正位置で据え置かれている。

この他棺台周辺では図示できないものの細片化した土師器が検出されている。

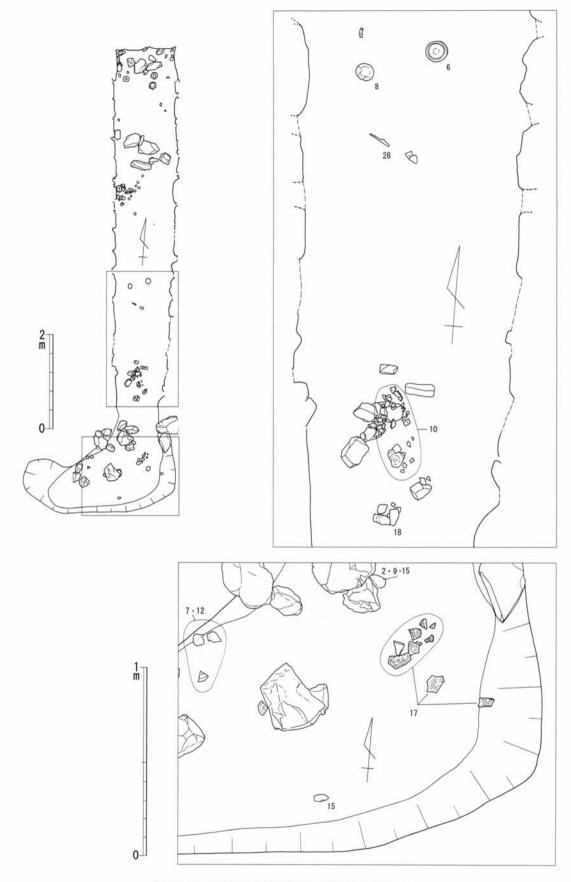
右袖相当部分では細片化した状態で須恵器横瓶 (15) が検出された。この部分には杯身 (4)が



第26図 国分28号墳横穴式石室および閉塞石実測図



第27図 国分28号墳石室内遺物出土状況図(1)



第28 図 国分28号墳石室内遺物出土状況図(2)

逆位で、杯身(2)小片、杯身(3)、杯蓋(1)がそれぞれ細片化した状態で検出された。なお、杯身(2)や横瓶(15)は前庭部出土の破片と接合関係にある。これらの土器群より玄室寄りに鉄鏃(26)が確認されている。

閉塞部から玄室寄りには須恵器蓋(6)、杯(8)が並んだ状態で蓋、杯とも逆位で検出された。 刀子(28)はこの須恵器から羨門寄りで切先を東に向けた状態で検出されている。

羨門部から前庭部にかけては高杯 (10) の杯部が細片化した状態で転落石の下から確認された。 さらにその南には土師器杯 (18) がやはり細片化して検出された。前庭部では化粧石の転落石か と思われる石材の上から、須恵器杯 (9) が検出された。また、周辺で須恵器杯身 (2) の破片が 検出された。前庭部では須恵器短頸壺 (12) や高杯 (11)、長頸壺 (16)、甕 (17)、土師器杯 (20) が破片の状態で検出されている。

その他、原位置を特定できていないが、鉄鏃 (27) は羨道部の埋土中から、鉄釘 (29・30) は玄室内の掘削作業中に出土している。特に鉄釘は木棺に使用された可能性が高く、土師器椀 (37) の存在が示すように、平安時代にこの石室のが新たに墳墓として再利用された可能性を示唆している。

(石崎善久)

出土遺物 (第 29 \sim 31 図) 国分 28 号墳に伴う遺物として、須恵器 17 点、土師器 3 点、鉄器 11 点を図示した。なお、石室の埋葬に伴う遺物と、石室に直接伴わない遺物とに分けて報告する。

a. 土器類

1は須恵器杯H蓋である。天井部外面はヘラキリ後不調整である。また補助ケズリがみられる。 天井部内面に不定方向のナデ調整を施す。ほぼ完形で、口径 11.8cm、器高 3.8cm を測る。

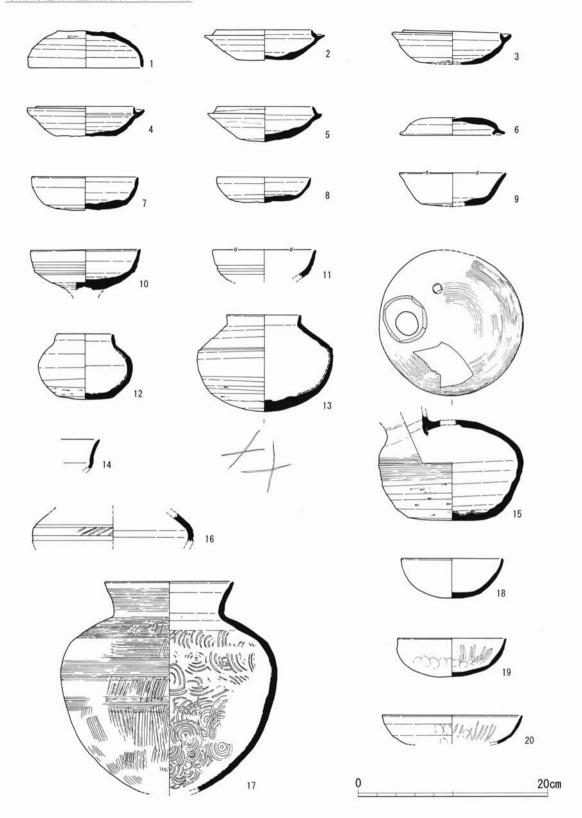
 $2\sim5$ は須恵器杯Hである。いずれも短く内傾する立ち上がりを有する。底部外面はヘラキリ後不調整である。 $3\cdot4$ には補助ケズリがみられる。2 は 2/3 程度残存し、 $3\sim5$ は完形ないしほぼ完形である。これらは立ち上がり径 $10.0\sim10.3$ cm、口径 $11.0\sim11.5$ cm、器高 $3.1\sim3.6$ cm を測る。杯H蓋、杯Hの胎土は、ともにやや粒径の大きい小石を含む。

6は須恵器で、器種はつまみが認められないものの、扁平な形態であることから、蓋と考えられる。天井部外面はヘラキリ後不調整である。天井部内面には不定方向のナデ調整を施す。かえり端部と口縁端部の高さはほぼ等しい。かえり径 8.9cm、口径 9.6cm、器高 1.9cm を測る。

 $7 \sim 9$ は須恵器杯である。いずれも底部外面はヘラキリ後不調整である。また8には補助ケズリがみられる。 $7 \cdot 8$ の口縁部は内湾気味に立ち上がる。口径 $9.7 \sim 11.0$ cm、器高 $3.5 \sim 3.7$ cm を測る。9 はやや平坦な底部から口縁部が外上方にのびるものである。小破片のため、法量は不明である。 $7 \cdot 8$ は杯H蓋を身にしたような形態で、杯Gとは異なる器種である。9 は杯Gである。

10・11 は須恵器無蓋高杯である。10・11 ともに脚部を欠いている。杯部外面に、10 は3条の沈線を、11 は2条の沈線をめぐらす。10 は杯部のみであり脚部を伴った痕跡はない。杯底部

京都府遺跡調査報告集 第129冊



第29図 国分28号墳出土遺物実測図(1)

をくぼませて脚部との接合を行いやすくしている。口径 14.4cm、残存高 4.4cm を測る。11 は 小破片のため法量は不明である。

12・13 は須恵器短頸壺である。12 は扁球形の体部に内傾気味の口縁部を有する。体部下半に反時計回りの回転へラケズリ調整を施す。底部外面はヘラキリ後不調整である。口径 5.9cm、器高 6.8cm を測る。13 は 12 に比べると大型品である。体部上位に 1 条の沈線を巡らせる。体部下半に時計回りの回転へラケズリ調整を施す。底部には「×」を 2 つ線刻したへラ記号がある。口縁部は短く、直立気味に立ち上がる。口径 7.6cm、器高 10.1cm を測る。

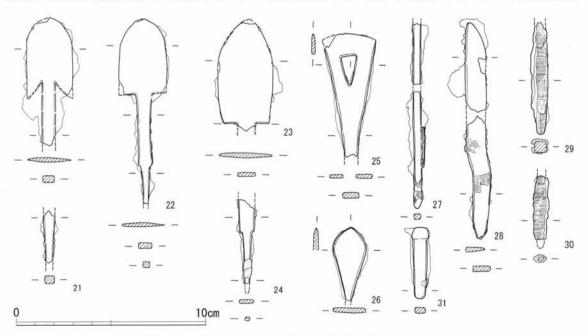
14 は須恵器であるが、小破片のため器種は不明である。高杯または杯の可能性が高い。

15 は須恵器平瓶である。ロクロ回転を利用して体部を成形した後、その口を閉塞し、別作りの口縁部を体部の一方に偏って差し込み、製作する。体部上半にカキメを施し、体部下半は時計回りの回転へラケズリ調整を施す。体部上面にはボタン状の把手が貼り付けられている。貼り付け位置からみて2個一対であったと考えられる。底部外面はナデ調整である。体部最大径15.2cm、残存高11.2cm、底径9.2cmを測る。

16 は須恵器長頸壺の体部中位付近の破片である。2条の沈線で区画し、ヘラによる刺突文を施す。

17 は須恵器甕である。口縁部は端部に内傾する面をもち、外面にカキメを施す。体部上位に最大径を有し、やや肩が張る形態を採る。体部上半は平行タタキ調整の後、横方向にカキメを施す。内面には同心円状の当て具痕が顕著に認められる。口径 13.3cm、残存高 22.1cm、体部最大径 23.0cm を測る。

18~20は土師器杯である。18・19はやや深い椀状の形態を呈する。18は摩滅が著しく調整は不明である。胎土もやや粗い。19は若干歪みが認められるが、口縁部にヨコナデ調整を施し、



第30図 国分28号墳出土遺物実測図(2)

京都府遺跡調査報告集 第129冊

内面はナデ調整の後に放射状の暗文を施す。外面と底部内面にはユビオサエ痕がみられる。胎土は密で、橙褐色を呈し、焼成は良好である。 $18\cdot 19$ はほぼ完形で、口径 $10.5\sim 11.2$ cm、器高 $4.0\sim 4.2$ cm を測る。20 は杯 A と考えられる。口縁部外面にヨコナデを施し、内面がわずかに 肥厚する。内面はナデ調整の後に放射状の暗文を施す。胎土は密で、橙褐色を呈し、焼成は良好である。口径 14.6cm、残存高 3.0cm を測る。

(梅村大輔)

b. 金属製品

国分 28 号墳出土金属製品には、武器、工具、その他のものとして鉄釘がある。相対的に出土 量は少なく、大型鉄製武器や馬具は検出されていない。

 $21\sim 27$ は鉄鏃である。 $21\sim 24$ は平根の鉄鏃である。いずれも鏃身部が三角形を呈する。 21 は腸抉をもつ。頸部の関の判明するものは直角関である。25 は透かしをもつ圭頭の鏃である。 茎部分を欠損する。26 は先端に刃部が形成されているため、鉄鏃と判断した。27 は長頸鏃の頸部である。

28 は刀子である。茎が屈曲し、無関である。茎には柄とみられる木質が遺存する。

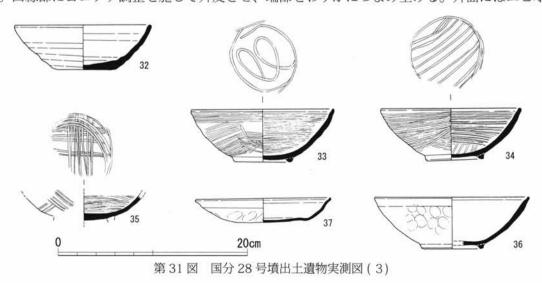
29~31 は鉄釘である。29·30 は横方向の木質が認められる。31 は方形の頭部をもつ。出土状況の項でも述べたが、後世の再利用に伴うものである可能性が高い。

(石崎善久)

c. 石室に伴わない土器

ここに図示するものは国分 28 号墳の石室内流入土から出土した土器である。これらの土器は 土師器杯 (37) を除いて第 25 図石室縦断面 13 層に相当する層位から出土しており、石室崩壊後 に何らかの原因で石室内に混入した遺物群である。その他、図示していないが、熙寧元寶 1 点が 同層から出土している。

32~37 は平安時代の土器である。37 は玄室床面より遊離した状態で出土した土師器杯である。口縁部にヨコナデ調整を施して外反させ、端部をわずかにつまみ上げる。外面にはユビオサ



工痕がみられる。内面にはナデ調整を施す。口径 14.1cm、器高 2.6cm である。平安時代中期の ものと考えられる。

32~36 は石室内に落とし込められた石材の間から出土した。32 は須恵器椀である。平底の底部からやや内湾しながら口縁部に至る。底部外面に糸切り痕がみられる。口径 14.3cm、器高4.8cm である。灰白色を呈し、焼成はやや軟質である。

33~35 は黒色土器椀である。33 は断面台形状の高台を有する底部からやや内湾気味に伸びる口縁部からなる。体部内外面に密にミガキ調整を施す。外面のミガキ調整は3分割である。底部内面に螺旋状暗文を施す。34 も体部内外面に密にミガキ調整を施す。外面のミガキ調整は4分割で施される。底部内面に平行線状暗文を施す。口径14.6~14.8cm、器高5.4~5.5cmと、法量もほぼ同じである。35 は高台が剥離した底部のみの資料であるが、おおむね33・34と同形同大のものと考えられる。底部内面には十文字状の暗文が施される。黒色土器椀はいずれも、胎土は精良で、黒色を呈し、焼成は良好である。

36 は瓦器椀である。内外面とも摩滅が著しいが、断面台形の高台を有し、口縁端部内面に沈線 1 条を施す。外面には成形時のユビオサエ痕が見られる。形態的には 33・34 の黒色土器椀に類似し、近接した時期の所産である可能性が指摘できる。口径 16.0cm、器高 5.6cm である。胎土に砂粒を少量含む。淡黒灰色を呈し、焼成はやや軟質である。なお、32~36 は、いずれも平安時代後期のものと考えられる。

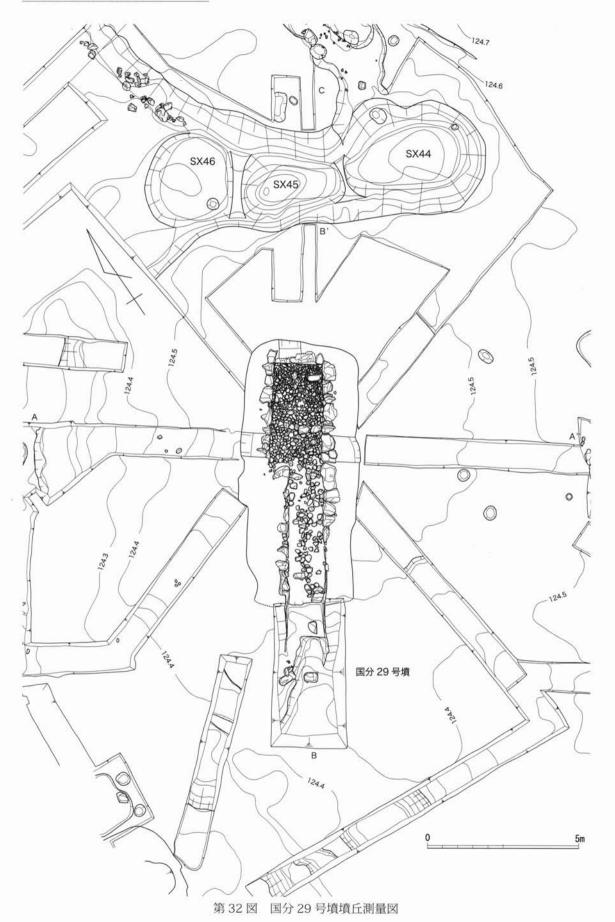
(筒井崇史)

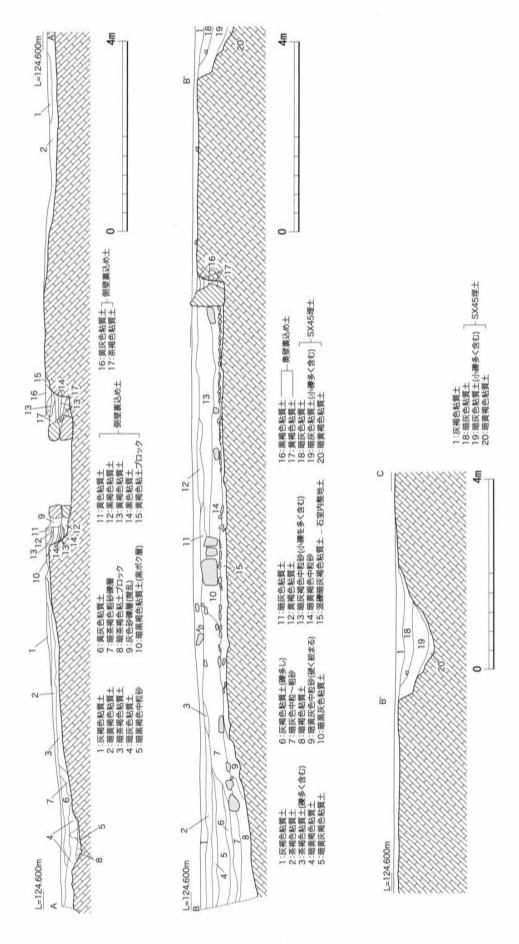
⑤国分 29 号墳

位置 国分 29 号墳は D 1 地区のほぼ中央に位置する。現状は水田耕作や、中世の造成によりほぼ平坦な地形を呈しているが、国分 33 号墳の項で述べるように、国分 29 号墳の南側には小谷地形が形成されていることが明らかとなった。したがって、国分 30・33 号墳はこの谷地形を挟んで存在する小規模な尾根稜線上に立地し、国分 29 号墳は谷地形の最奥部に立地しているということができる。

墳丘(第32・33図) 国分29号墳は国分28号墳同様、盛土保存との関係から最低限の周辺部のトレンチ調査に留めている。石室主軸から放射状に配したトレンチの成果からは円墳であると判断された。その規模は南北軸15m、東西軸13mを測る。

墳丘の造成は基底部を黒ボク層、暗橙褐色系の地山を掘削、整形することにより造り出している。なお、盛土の有無については確認することができなかった。地山整形は低位側に当たる墳丘西側で顕著であるが、高所側の墳丘東側ではわずかな傾斜変換点を形成するに過ぎない。当初の断ち割り段階では、墳丘北側は国分 26 号墳の項で述べた S X 45 がこの古墳の周溝を形成するものと考えた。しかし、周辺を拡張した結果、S X 44 ~ 46 は連続する土坑群であり、周溝とはいい難いことが明らかとなった。また、第 33 図の石室縦断面に示すように、S X 45 埋土 19 層は国分 29 号墳の裾を削平している可能性がある。この点から、S X 44 ~ 46 は国分 26 号墳に付随する何らかの施設である可能性を考えておきたい。





第33 図 国分29 号墳土層断面図

石室(第34図) 国分29号墳の内部主体は右片袖の横穴式石室である。石室は上半部が削平され、基底より2段程度が遺存している。また、袖石周辺には礫を多く含む青灰色粘質土の床土に類似した土層が入り込んでおり、袖石も抜き取られかけて、原位置から移動しているとみられる。しかし、両側壁とも羨門部まで基底部分は残存しており、石室床面自体も良好に遺存している。石室に用いられている石材は全て自然石であり、人為的な加工痕の観察されるものはない。

石室の規模は全長 7.7 m、奥壁幅 1.6 m、前壁幅 1.8 m、玄室長 3.5 m、玄門部幅 1.1 m、羨 門部幅 1.2 m、残存高 0.6 mをそれぞれ測る。

石室の平面プランは右片袖であるが、玄室は奥壁に比して、前壁幅の広いやや「ハ」字状に広がる平面形を呈する。

奥壁は2石の石材を立位で腰石として据えている。左側壁側の石材に大型石材を用いている。 この部分での持ち送りはみられない。また、側壁は奥壁を挟み込むようにして構築されている。

左側壁はやや小振りな石材を平積みして構築している。右袖部と対応する玄門部には大型の石材を用いており、玄室と羨道との空間を意識的に区画しているようである。玄室はやや小振りな石材を平積みし目地を通して2段目以降を積み上げるのに対し、羨道部はやや大型の石材を用いて目地を通しており、玄室と羨道での構築方法が異なる。持ち送りは、奥壁側ではほぼ垂直に近いが、前壁側では基底石から内傾させるようにして持ち送りを行っている。

右側壁は左側壁同様、玄室にやや小振りな石材を用いている。羨道部は基底にやや大型の石材を据え付け、目地を通した後、2段目以降は小型の石材を積み上げている。石材間には小石材を用いることにより、壁面や水平を整えている。

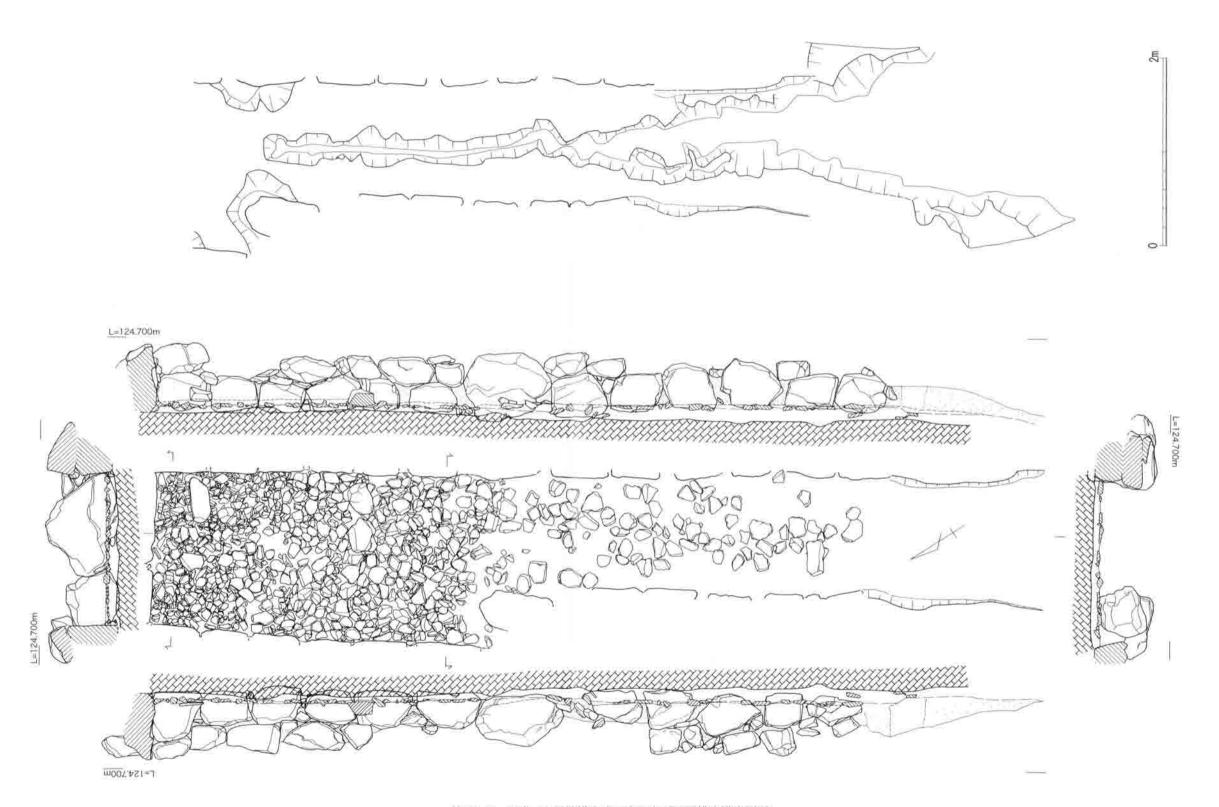
袖石は撹乱を受け、移動している。残存する部分から想定して、現状での袖石はおおよそ、90°回転しているようである。復原される袖部の幅は 0.8 mを測り、この石材と規模的に一致することから、おそらくこの石材 1 石を横位で据えていたものと判断される。

羨門部端には石材は配されておらず、墓道状の掘形をもって、墳丘端面にいたる。

玄室内には敷石が施されている。敷石は石室床面に整地土を入れた後に敷設されている。羨道 部にも密度は低いものの玄門部から羨門部にかけて敷石を施している。これは後述する排水溝と も関連する遺構であるとみられる。

敷石および、整地土層を除去した段階で玄門部から羨門にかけて排水溝を検出した。溝は幅約 20cm、深さ 10cm を測り、羨門部へかけて幅を増し、前庭部と一体化する。羨道部の敷石には、この排水溝の機能を補強する目的があったものと考える。

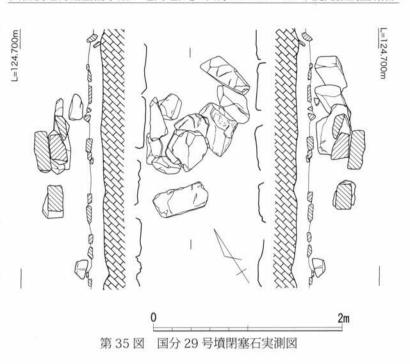
閉塞は羨道のほぼ中央付近で行われており、長さ 60cm、厚さ 20cm 前後を測る板状の石材の 集石を確認した (第 35 図)。この石材は玄室方向の左側壁側へ倒壊したような状況を示しており、 本来は板石を平積みして行われていたものとみられる。また、土層の検討が充分行えなかったた め明確にはし難いが、原位置を保っているとみられる閉塞石が、床面より遊離していること、玄 室側へ倒れ込んでいる閉塞石はほぼ床面上で確認されたことから、閉塞石の下部には一定の盛土 を行っていた可能性がある。



第34図 国分29号墳横穴式石室および下層排水溝実測図

この他、棺台と思われる石 材が玄室左側壁奥側で1石、 玄門部寄りで2石確認されて いる。石材間の距離は約2m を測る。

遺物出土状況 (第36・37 図) 国分29号墳では玄室 内、羨道部、前庭部から多数 の遺物が出土した。遺物はい くつかのまとまりをもって検 出された。奥壁北東隅では、 棺台とみられる石材の北に集 中して遺物が検出された。こ の部分では大刀 (57) が切先を

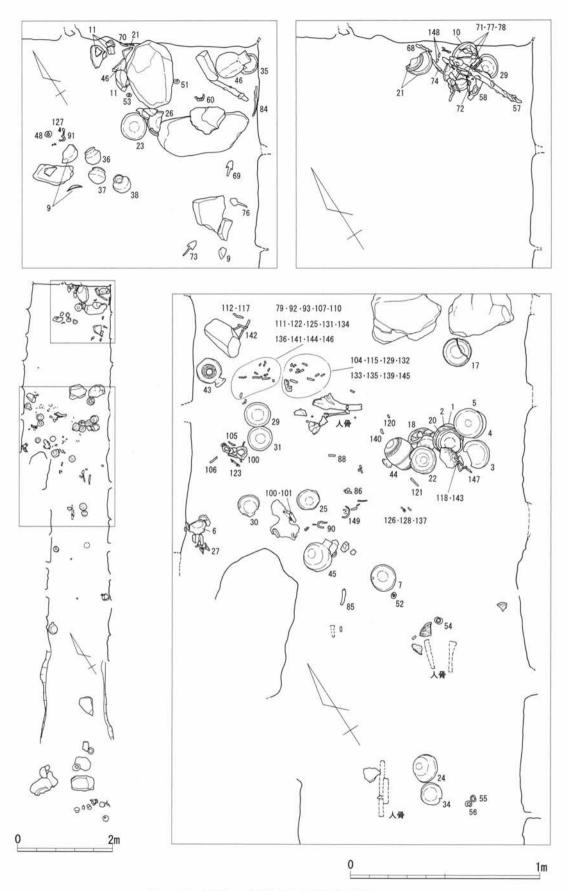


東に向け検出された。その周辺から鉄鏃群 $(61 \sim 65 \cdot 66 \sim 68 \cdot 71 \cdot 72 \cdot 74 \cdot 75 \cdot 77 \cdot 78)$ 、 鞘尻金具 (58) が検出された。鉄鏃は鏃身部を右側壁方向へ向けているものが多く、矢柄を装着し束ねられた状態で大刀とともに奥壁隅に立て掛けられていた可能性がある。刀子片 (85)、不明鉄製品 (148) もこの周辺から検出されている。これら、鉄器類の下になるように、土器類が検出された。奥壁隅には土師器椀 (35) が正位で据えられ、近接して提瓶 (46) が確認された。鉄鏃群の下からは、須恵器杯蓋 (10) が逆位で完形個体として、杯蓋 (11) は破片として杯身 $(21 \cdot 26 \cdot 28)$ が破片ではあるが正位でそれぞれ検出されている。 $(21 \cdot 28 \cdot 11)$ は破片となっていた。この須恵器の下部からは刀子 $(81 \cdot 83)$ が近接して検出された。刀子 (84) は切先を羨道側に向けた状態で側壁に沿って検出された。刀装具 (60) は床面より、若干遊離していたが、ほぼ大刀の南に近接して検出されている。

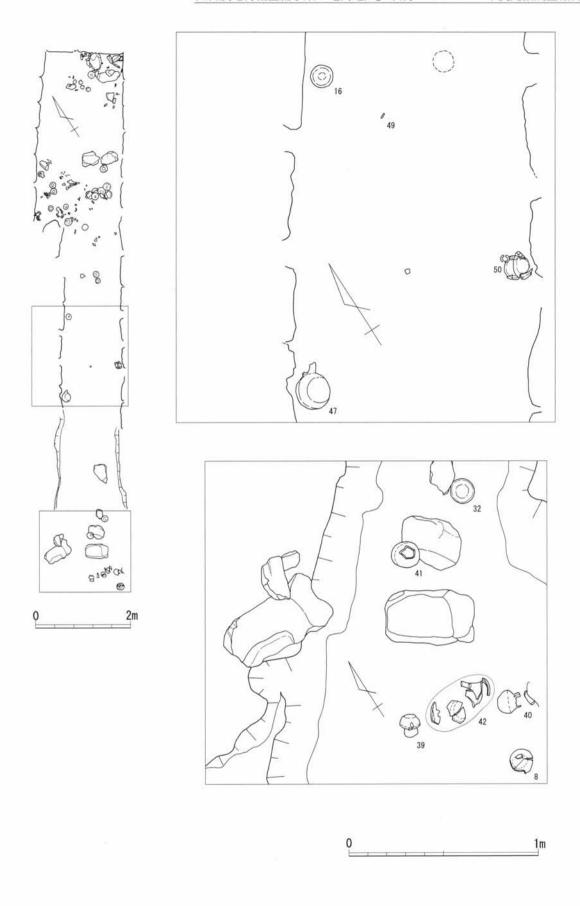
玄室奥壁ほぼ中央では転落した石材の東から耳環 (51)、西からは耳環 (53) が検出された。奥壁に接するようにして、杯蓋 (11)、杯身 (21)、提瓶 (46) の破片が検出された。転落石の南側では須恵器杯身 (26) が破片として検出されている。これらの破片として検出された土器群はいずれも奥壁北東隅のものと接合関係にある。完形品として、杯身 (23) が正位で、石材の南から検出されている。この他、鉄鏃 (70) が奥壁に平行して出土している。

奥壁北東より、やや玄門寄りでは、鉄鏃 (69・73・76) がそれぞれ確認され、杯蓋 (9) の破片もこの位置から検出された。

玄室内北西側には、小振りではあるが、棺台の可能性のある石材があり、その周辺でも、一定のまとまりをもつ遺物群が検出された。この石材の東には、須恵器壺 $(36 \sim 38)$ がまとまって検出された。杯蓋 (9) の破片が石材の南、北からそれぞれ検出されている。また、耳環 (48)、鉸具 (91)、鞍金具 (127) などの装身具と馬具の一部が石材の北に確認された。



第36図 国分29号墳石室内遺物出土状況図(1)



第37図 国分29号墳石室内遺物出土状況図(2)

京都府遺跡調査報告集 第 129 冊

玄室内奥壁右側壁側から玄室中央部にかけては、遺物が確認されず、空白地となっている。

玄室左側壁の棺台南側には須恵器の一群が検出された。杯身 (17) は正位で単体で置かれ、杯蓋 (4・5) は逆位で杯蓋 (5) を上にして重ねられていた。また、杯蓋 (3) は逆位で、杯身 (19) の上に杯蓋 (1) を逆位で、さらに上に杯身 (20) を正位で重ねている。玄室中央寄りには蓋杯のセット (2・18) が置かれ、その上に杯身 (22) が重なるようにして正位置で南から検出された。さらに南には横瓶 (44) が横位で口縁を玄室中央に向けて確認された。また、杯身片 (33) や甕細片がこの周囲から検出されている。鉄製品には、鞍金具 (118・120・121・126・128・137・140・143・147) がこの須恵器群の周辺に散乱しているが、集中度は袖部奥壁寄りには及ばない。

袖付近には轡 (94) と木製鐙 (102) がまとめて置かれ、すぐ北にもうひとつの木製鐙 (100) が 検出された。周辺から鉸具 (89・90) や鎹 (86・88)、鞍金具 (105・106・123)、革金具 (95・ 97・98) など、馬具を中心とした鉄製品が検出された。金銅製環状鉄製品 (149) もこの部分で鞍 金具、木質とともに検出されているため、馬具の装飾具であると思われる。この部分では、須恵 器杯身 (29・30・31) が正位置で、蓋 (14) が逆位で、提瓶 (45) は転倒した状態でそれぞれ検出 されている。

須恵器杯身(6・27)はいずれも袖石の撹乱土内で検出され、杯蓋(15)同様、原位置から若干移動していると判断される。

袖部から奥壁寄りでは扁壺 (43) が転落石を除去した段階で検出され、その北側で刀子 (79)、 鉸具 (92)、円形座金具 (93)、鞍金具 (107・110・111・122・125・131・134・136・141・ 144・146、104・115・129・132・133・135・139・145) が確認された。円形座金具と鉸具 があること、出土した鞍金具の大部分が、この部分に集中していることから、鞍金具を装着した 鞍がここに置かれていたと考える。

杯身 (29・31) の玄室中央寄りでは転落石の下から人骨が検出された。大きく変形してしまい、厳密に部位を特定 (5) することはできなかったが歯牙、脛骨、腓骨、頭蓋骨と思われ、関節していない状態から追葬時の片づけ行為により移動されたものと判断する。

玄門部付近では、杯蓋(7)が逆位で置かれ、その羨門寄りに一対の耳環(52・54)が検出された。この耳環から羨門にかけて、長管骨と思われる人骨片が出土している。また、右側壁寄りからは刀子(85)が壁面に沿って置かれていた。

さらに羨門寄りでは、左側壁に近い位置より耳環 (55・56) がセットで検出され、その西には 須恵器杯身 (24) が逆位置で、椀 (34) が正位置でそれぞれ検出された。この須恵器のさらに西からは尺骨と橈骨と思われる人骨が検出された。さらに羨門寄りでは、頭蓋骨と思われる人骨片と、 耳環 (49)、杯蓋 (16) を逆位置でそれぞれ検出している。特に耳環 (49) は明らかに閉塞石の下に なっており、2次的な移動を受けているものとみられる。

閉塞石外でも、左側壁に耳環 (50) と杯蓋 (12・13) が重ねられた状態で、右側壁羨門側では提 瓶 (47) が横位でそれぞれ検出されている。

前庭部では石材とともに、杯蓋 (8)、杯身 (32)、壺 (39・40・41)、高杯 (42) が検出された。

掻き出し行為に伴うものであるのか、前庭部での祭祀行為に伴うものであるのか明確にはできな かった。

(石崎善久)

出土遺物(第38~47図) 国分29号墳に伴う遺物として、須恵器46点、土師器1点、耳環9点、 金属製品93点を図示した。石室の基底石や床面への撹乱は他の石室に比べると少なく、比較的 多くの遺物が遺存していた。特に石室内から出土した遺物の完形率は高い。

a. 土器類

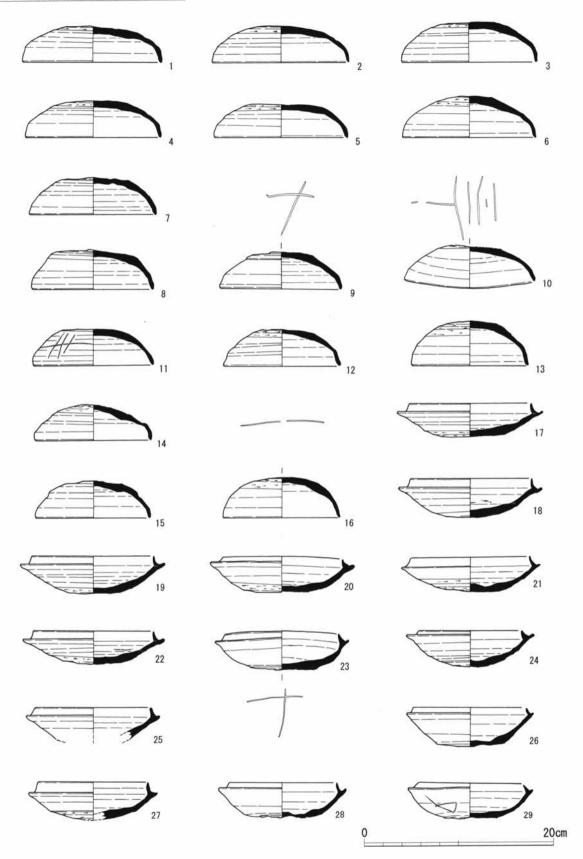
 $1\sim 16$ は須恵器杯H蓋である。 $1\sim 6$ は天井部外面に回転ヘラケズリ調整を施し、口径 14.0 ~ 14.5 cm と口径の大きい一群である。 $12\cdot 13\cdot 16$ も天井部外面に回転ヘラケズリ調整を施すが、口径 $12.2\sim 12.3$ cm とやや口径の小さい一群である。器高は $3.6\sim 4.6$ cm である。12 は天井部に若干ケズリ残しが見られ、線刻 1 条からなるヘラ記号が見られる。上記以外の個体の天井部外面は、ヘラキリ後不調整もしくはナデ調整である。口径 $12.0\sim 13.2$ cm、器高 $3.8\sim 4.3$ cmである。10 は焼け歪みが著しい。 $9\cdot 10\cdot 16$ は天井部外面に、11 は口縁部外面に、それぞれヘラ記号を描く。これらのうち、 $1\sim 4$ は、胎土に砂粒をやや多く含み、青灰色ないし淡青灰色を呈する。焼成は良好である。法量もほぼ同一であることから、同じ窯で同時期に製作された可能性が高い。5 も類似した特徴が認められる。8 は胎土中に黒色粒を含む。また、 $6\cdot 16$ は焼成が軟質で灰白色を呈する。杯H蓋は 15 を除き、完形ないし 5/6 程度残存するものである。

 $17 \sim 32$ は須恵器杯Hである。 $17 \sim 22 \cdot 27$ は底部外面に回転へラケズリ調整を施す。 $17 \sim 22$ は口径 $13.8 \sim 14.6$ cm、立ち上がり径 $12.6 \sim 13.0$ cm、器高 $3.5 \sim 4.1$ cm で、上記 $1 \sim 6$ に対応する法量である。27 は口径 12.5cm、立ち上がり径 11.6cm で、一回り小型である。上記以外の個体は底部外面がヘラキリ後不調整もしくはナデ調整である。口径 11.9cm ~ 12.9 cm、立ち上がり径 $10.8 \sim 11.9$ cm、器高 $3.3 \sim 4.2$ cm である。杯H蓋の天井部外面に回転ヘラケズリ調整を施さない一群に対応した法量である。30 は補助ケズリ $^{(6)}$ がみられる。23 は底部外面に、29 は体部外面にへラ記号を描く。これらのうち、 $17 \sim 20 \cdot 22$ は、胎土に砂粒を多く含み、淡黒灰色ないし淡青灰色を呈する。焼成は良好か、やや軟質である。杯H蓋 $1 \sim 4$ と同じく、同じ窯で同時期に製作された可能性が高い一群であろう。 $23 \cdot 26 \cdot 28 \sim 30 \cdot 32$ は黒色粒を含む。特に 30 はやや多く含む。 $25 \cdot 27$ は焼成が軟質で灰白色を呈する。また、この2 点を除き、いずれの個体も完形ないしほぼ完形である。

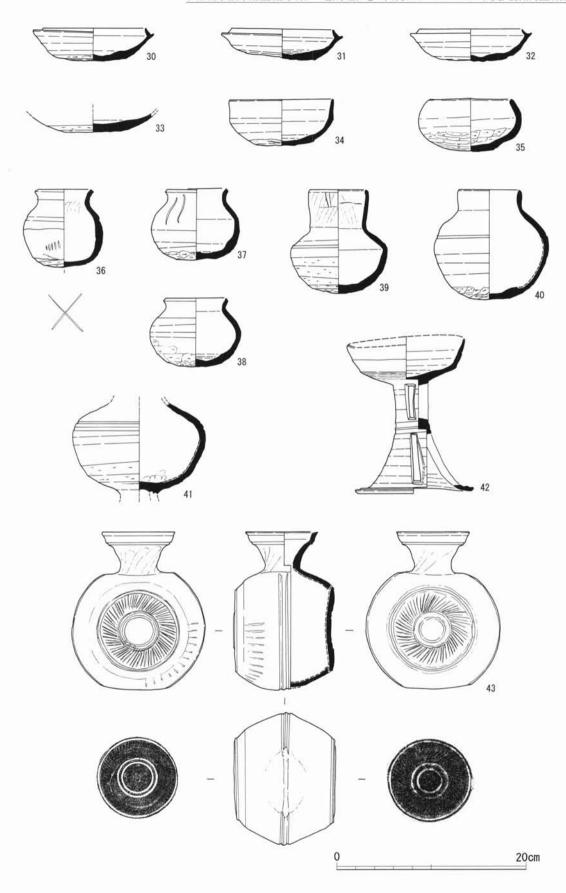
33 は須恵器杯Hの底部である。外面に回転ヘラケズリ調整が認められる。

34 は須恵器杯Gである。ほぼ直立する口縁部と、やや丸底気味を呈する底部からなる。底部外面にヘラキリ後粗いナデ調整を施す。口径 11.0cm、器高 4.8cm で、径高指数が 44 と、深手の器形を呈する。ほぼ完形である。

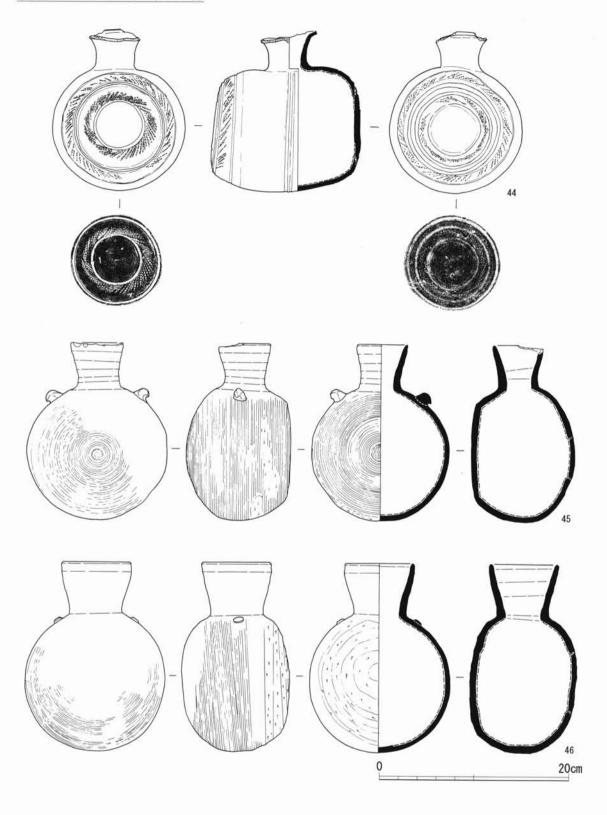
 $36 \sim 38$ は小型の須恵器短頸壺である。36 は長胴気味の体部を、 $37 \cdot 38$ はほぼ球形の体部を呈し、いずれも短く外反する口縁部を持つ。底部外面は手持ちによるヘラケズリ調整を施す。36 は底部外面に 1×1 のヘラ記号を、 10×1 のハラ記号を、 10×1 は肩部外面に 1×1 のハラ記号をそれぞれ



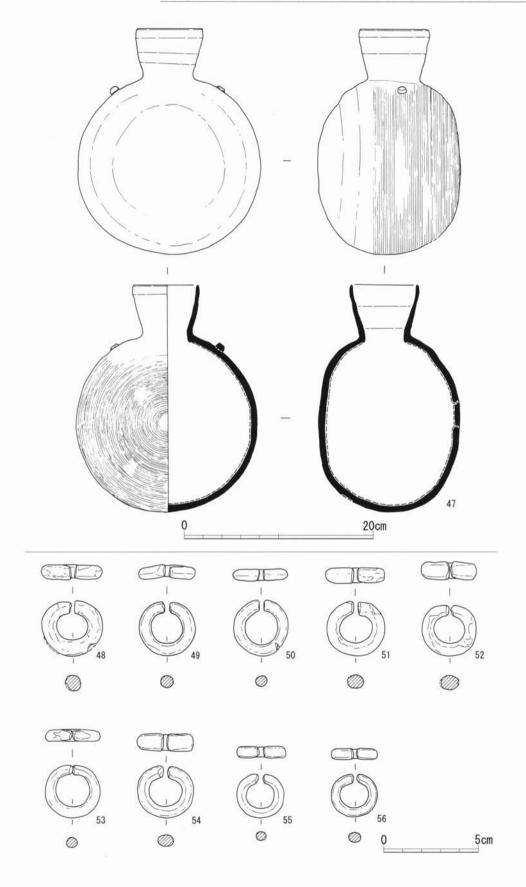
第38図 国分29号墳出土遺物実測図(1)



第39図 国分29号墳出土遺物実測図(2)



第40図 国分29号墳出土遺物実測図(3)



第41図 国分29号墳出土遺物実測図(4)

描く。口径 5.5 ~ 6.4cm、器高 7.3 ~ 8.2cm である。いずれも完形である。

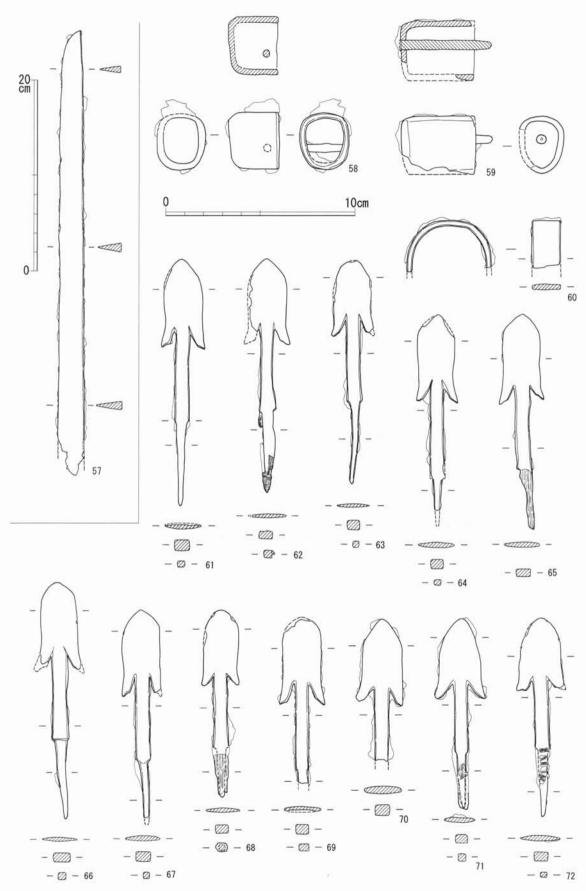
39・40 は中型の須恵器直口壺ないし短頸壺である。39 は直口壺である。丸底気味の底部から強く屈曲して肩部を形成した後、ほぼまっすぐ立ち上がる内湾気味の口縁部をもつ。屈曲部付近に沈線を1条施す。39 は口径 5.9cm、器高 10.9cm である。40 は短頸壺である。ほぼ球形の体部に、ほぼまっすぐ立ち上がる短い口縁部からなる。肩部に沈線を1条施す。底部は36~38 と同じく、手持ちのヘラケズリ調整を施す。40 は口径 6.3cm、器高 11.5cm で、胎土中に黒色粒をやや多く含む。どちらもほぼ完形である。

41 は須恵器脚付長頸壺の体部である。脚部と口頸部を欠損する。やや肩部の張る球形の体部を呈し、肩部に2条の沈線を施す。体部下半に回転ヘラケズリ調整を施した後に脚部を接合する。42 は無蓋高杯である。脚部は長脚で上下2段に透孔を有する。透孔の間には2条の沈線を施す。杯部外面には2条の稜線がめぐる。杯底部外面には摩滅気味であるが、カキメが施される。口径12.4cm、残存高16.6cm、底径11.8cmである。胎土中に黒色粒を含む。焼成はやや軟質で淡橙灰色を呈する。

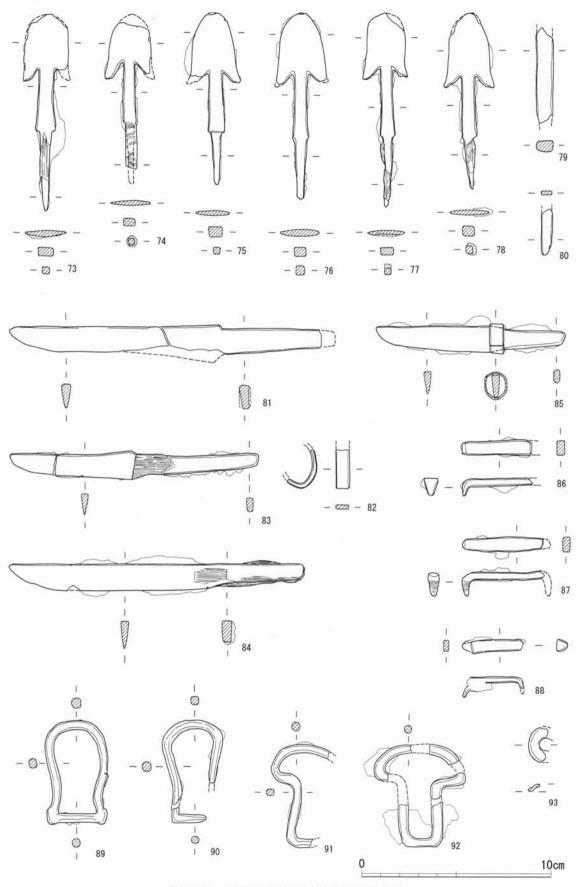
43 は須恵器特殊扁壺である。体部は横断面形が算盤玉形を呈し、外反する頸部に屈曲して外反する口縁部を持つ。口頸部の屈曲部には沈線を1条施す。体部は、須恵器杯A2点を合わせ口にしたような形状を呈する。両側面に直径9cm前後の円形を呈する施文部を持つ。施文部は、内側に沈線を2条施し、その周囲にヘラ状工具による刺突文を施す。さらにその外側に沈線を1条施して区画する。体部全体に回転ナデ調整を施し、一部に回転ヘラケズリ調整が見られる。体部中央の縦位の稜線に沿って、沈線を2条施す。底部は体部を押しつぶして製作している。長さ6.5cm、幅5.6cmほどの範囲が平坦になっている。口縁部の一部を欠損するものの、ほかは完存する。口径7.6cm、器高16.6cm、体部最大幅14.1cmである。青灰色ないし暗青灰色を呈し、焼成は堅緻である。

44 は小型の須恵器横瓶である。直径 14cm ほどの樽形の体部に、外反する口頸部をもつ。口縁端部は上方へつまみ上げるが、大半を欠損する。43 と同様に、両側面に直径 12cm 前後の円形を呈する施文部を持つ。施文部は、内側に沈線を 1 条施し、その周囲に櫛状工具による列点文を施す。その外側に沈線を 2 条施した後に再び列点文を施す。さらにその周囲に沈線を 1 条施す。体部中央には縦位に沈線を 2 条施す。口縁部の大半を欠損するものの、体部は完存する。器高 17.0cm、体部最大径 15.8cm である。胎土に黒色粒を少し含む。暗青灰色を呈し、焼成は堅緻である。

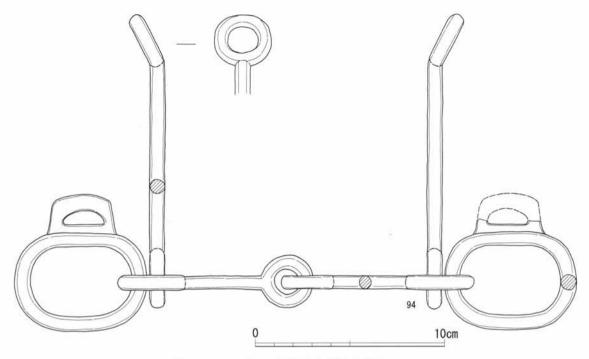
45~47は須恵器提瓶である。45・46は完形、47は口縁部の一部を欠損する。提瓶は、体部を回転ナデ調整で整形した後に閉塞し、別作りの口縁部を差し込む。45の体部は、閉塞部の反対側に回転ヘラケズリ調整を施した後、全面にカキメを施す。口縁部は直線的に外上方へのびる。把手は鉤状のものを両肩に付ける。口径 5.3cm、器高 13.6cm、体部最大径 14.8cm である。46の体部は閉塞部にカキメを施し、その反対側は回転ヘラケズリ調整を施す。口縁部は、やや内湾気味であるものの、直線的に外上方へのびる。閉塞側に灰を被るため、カキメが不明瞭である。



第42図 国分29号墳出土遺物実測図(5)



第43図 国分29号墳出土遺物実測図(6)



第44図 国分29号墳出土遺物実測図(7)

把手はボタン状のものを両肩に貼り付ける。口径 7.0cm、器高 19.9cm、体部最大径 15.9cm である。47 の体部は閉塞部にナデ調整を施し、その反対側にカキメを施す。口縁部はやや内湾気味に立ち上がる。把手はボタン状のものを貼り付ける。口径 6.8cm、器高 23.8cm、体部最大径 20.2cm である。

35 は土師器椀である。内湾する口縁部と丸底気味の底部からなる。口縁部にヨコナデ調整を施す。体部内外面にヘラケズリ調整を施す。外面は幅 6 mm 程度の細長いケズリ痕が確認できる。 完形で、口径 8.6cm、器高 5.6cm である。淡橙褐色を呈し、焼成は良好である。

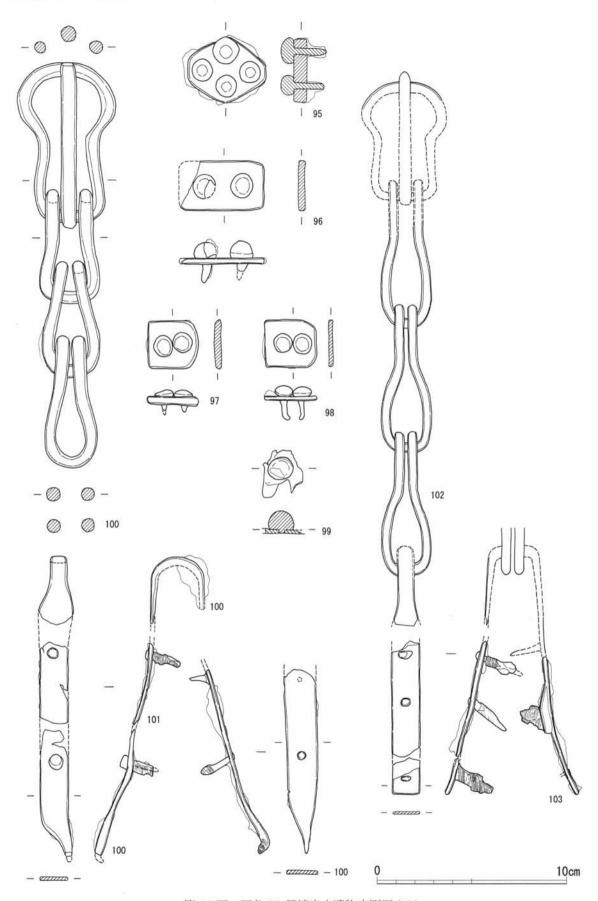
(筒井崇史)

b. 金属製品

国分 29 号墳出土金属製品には、装身具としての耳環類、武器、工具、馬具、その他のものと して鎹が確認される。また、環状金銅製品が 1 点出土している。

48~56 は耳環である。総数9点を数える。大きさや質感から確実にセットとなるのは以下の二対である。49・50 は表面にはメッキが遺存しておらず、白化した環体本体のみが遺存する。鉛、もしくは極めて鉛の含有量の高い銅とみられる。55・56 は他の耳環に比してやや小型品であるため、セット関係にあるものと考える。表面に金が良好に遺存するが、緑青の付着も著しい。48 はやや太身の作りでありセット関係を見いだすことはできない。金が表面に良好に遺存する。この個体は明らかに他の耳環に比して法量的に異質である。

その他のものについてはセット関係を断定することは困難であるが、出土状況から 51 と 53、 52 と 54 がそれぞれセットになる可能性が高い。51・53 は表面の鍍金もしくは銀がほぼ剥離している。52 と 54 には遺存状況は良くないものの金が認められる。

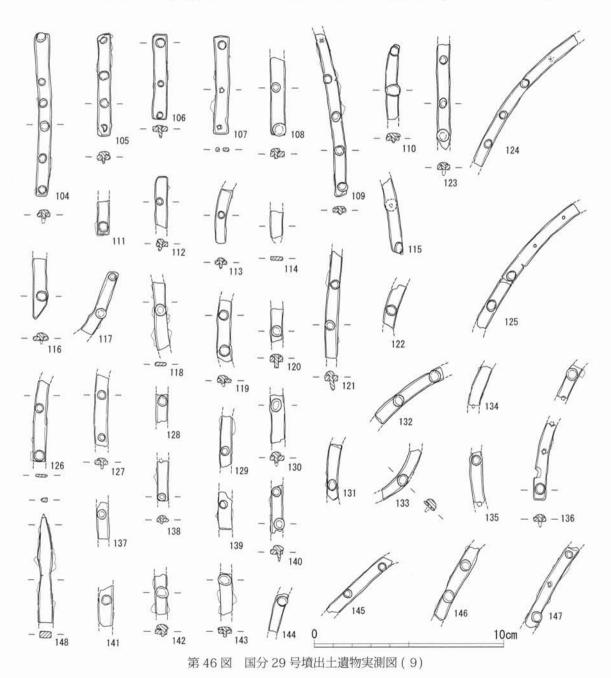


第 45 図 国分 29 号墳出土遺物実測図 (8)

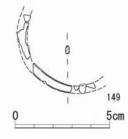
57~60 は大刀および刀装具である。大刀は刀身部の46cmが残存しており、関部や茎については細片化した状態で大刀周辺から出土しているが図示できない。58 は鞘尻金具である。円筒状の本体に直交する軸をもつ。59 は玄室掘削中に第13 層内から出土した鞘尻金具である。出土状況からみて確実にこの古墳に伴うものとは考えられず、セットを構成する大刀も存在しない。周辺の古墳の破壊に伴い混入した可能性がある。刀身に平行する鋲をもつ。60 は鞘口金具の可能性のある鉄製品である。欠損部が多いが、幅2.5cmを測る。直径4.4cm程度に復原される。

 $61 \sim 78$ は鉄鏃である。鉄鏃はいずれも平根式である。箆被は台形箆被であり、通常の腸抉をもつものと重ね腸抉をもつものが存在する。

79~85 は刀子である。背関をもつものと持たないものが存在する。81 には82の鎺が、85



-71-



には原位置を保った鎺が伴う。79・80 は刀子の茎と考えられる小片である。

86~88は小型の鎹である。「コ」字状に折り返された両端部には横 方向の木目が観察される。なお、86は図化後に小破片が接合し、完形品 に復原された。

第 47 図 国分 29 号墳 出土遺物実測図 (10)

馬具には鞍金具・轡・鐙吊金具・鉸具・革金具の各種が、ほぼ1頭分 確認される。

鉸具 $(89 \sim 92)$ は 4 点出土した。通常の鉸具のほか、「凸」状の鉸具本体をもつ、鞍金具と思われる個体 $(91 \cdot 92)$ がある。また円形座金具の破片 (93) が存在する。

轡 (94) は銹着が著しいため、復原展開図を示した。また鐙吊金具 (102) が銹着している。轡は方形立聞素環鏡板付轡である。鏡板は直径 0.8cm の鉄棒を長径 6.9cm、短径 5.2cm の楕円形に成形し、厚さ 0.3cm、幅 3.6cm、高さ 2.0cm の板状立聞を鍛接する。一方の立聞は破損している。引手および鏡板は銜外側端環に連結される。銜は二連銜であり、各々全長約 10.5cm を測る。

木製鐙吊金具は2個体を確認した。102 は轡に銹着してしまっており、鉸具の詳細は不明であるが、両者とも鉸具付きの3連兵庫鎖を用いた鐙靼に二又の柄先金具を取り付ける。柄先金具は102 では3鋲が見られるが、100 では柄先金具先端部を鋲先状に加工し、直接木製壺鐙に打ち込んで固定したものとみられる。

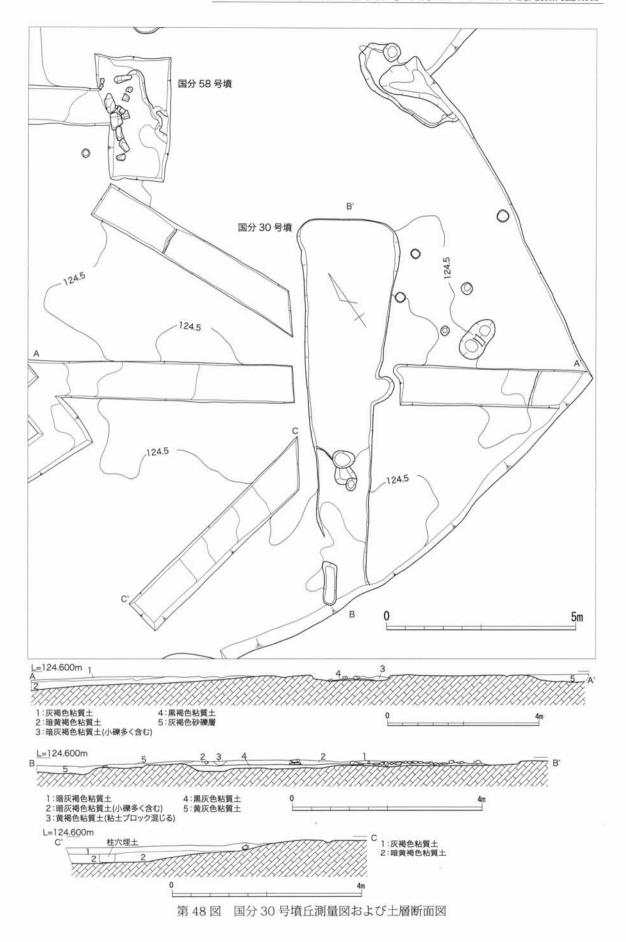
革金具 $(95 \sim 99)$ は方形のもの $(96 \sim 99)$ と、菱形のもの (95) の 2 種が認められる。前者は 2 か所、後者は 4 か所の鋲を各々もつ。図示していないが、図版第 72 最下段右の個体も菱形の革金具とみられる。

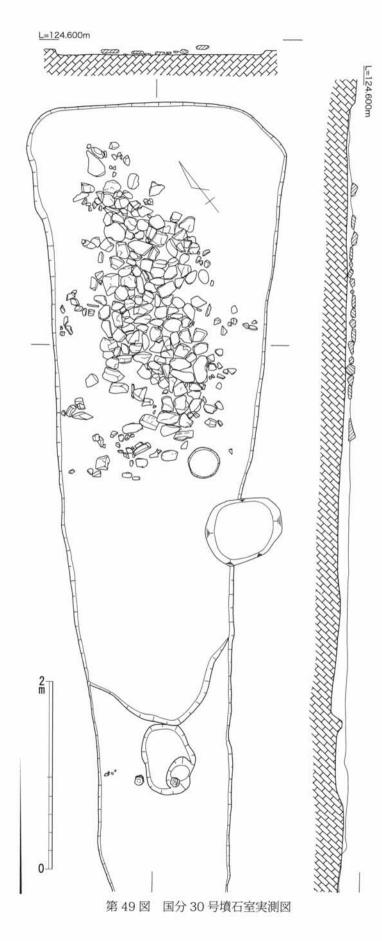
 $104 \sim 147$ は木製鞍の鞍金具である。細片化しているため全容は不明である。 $104 \sim 107$ は 両端が完結する直線的な形態をもつ。この金具の存在から鞍本体の周縁を縁取る金具と、磯金具 の周縁を縁取る金具が存在すると考える。いずれも幅約 $3 \sim 4$ mm、厚さ約2 mm を測り、鋲が 穿たれている。なお、鋲の穿たれる間隔には約2 cm 程度のものと、1.5 cm 間隔のものの2 者が 存在する。金具には黒漆とみられる有機質の付着するものが存在する。

148 は鞍金具と同一か所で出土しているが、先端が鋭利に造られている。刃部を形成しているとは思われないため、不明金具としておく。

金銅製円形金具 (149) は幅約 4 mm、厚さ 1.5 mm の銅板に鍍金を施したものである。直径 5 ~ 6 cm 程度に復原される。周辺から革もしくは木質と考えられる有機質が検出されたことや、轡・鐙・鞍金具・革金具と近接して出土しているため、木製の環状辻金具の飾金具もしくは鞍の飾金具であった可能性を考えておきたい。

これら、一連の鉄製品は、大刀1振、同一形式から構成される鏃の1セット、わずかな飾金具をもつ馬具の1セット (轡・鐙・鞍)を構成している。これらの鉄製品類が、耳環から想定される5人以上の被葬者に各々個別に副葬されたとは考え難い。したがって、これらの鉄製品は一人の被葬者の埋葬時に伴う副葬品であると考えておきたい。 (石崎善久)





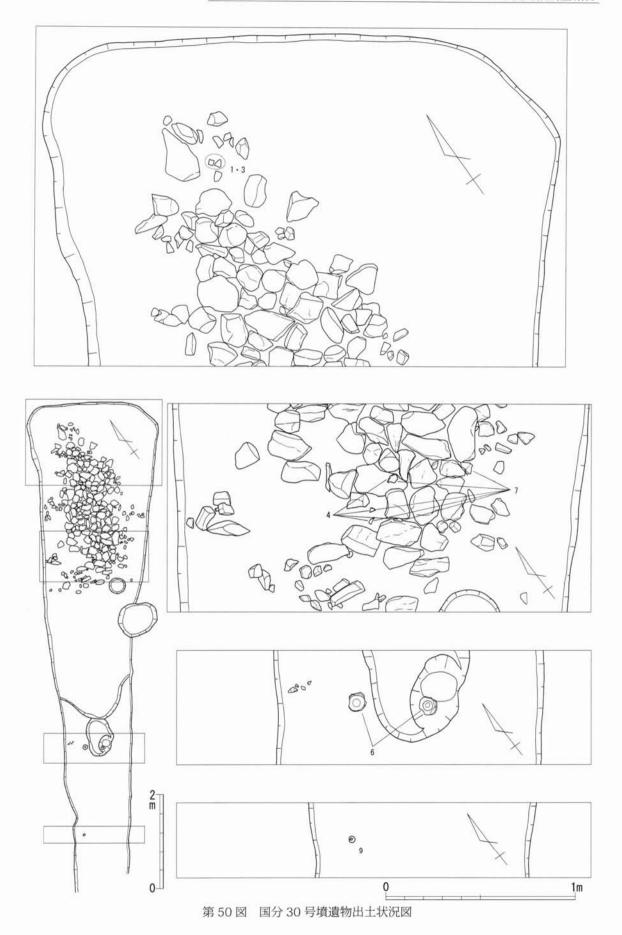
⑥国分 30 号墳

位置 国分 30 号墳は国分 29 号墳の南東、国分 27 号墳の南 に位置する。国分 29 号墳の項 で述べたようにこの古墳の立地 する地点は北から南西へ派生す る小規模な尾根稜線上に位置す るものと考えられる。石室床面 の標高は約 124.4 mである。

墳丘(第48図) 国分28・29号墳同様、この古墳についても墳丘は最小限のトレンチ調査を実施している。床土を除去した段階の平面的な土色変化から円墳であることを確認した。断面観察からは盛土の存在を確認することはできなかった。

墳丘は暗橙褐色系の地山を整形して基底部を造り出しているが、西側の整形は明確ではない。南西部に設定したトレンチでは明瞭に基底部が削り出されていることを確認した。また石室北東側からは周溝の一部が検出された。大部分が調査区外に存在するようであるが、高所側を区画する溝とみられる。これらの状況から国分30号墳は直径約13mの円墳であると考える。

石室(第49図) 石室本体は 全ての壁面を構成する部材が抜き取られ、本来の形式は全く不明である。重機掘削により、床 土を除去した段階で敷石の一部が露出するような状況であっ



京都府遺跡調査報告集 第129冊

た。そのため、この古墳の内部主体が横穴式石室であったのか否かすら不明であるが、周辺の状況から考えて南西に開口する横穴式石室である可能性が最も高いと考える。

埋葬施設に伴う残存する遺構は、石室の墓壙基底部分と敷石および、前庭部と考えられる溝状 の掘形である。

墓壙は全長 10 m、奥壁部分での幅 2.6 m、最南端での幅 1.1 mを測る。平面形は奥壁側が幅 広い三角フラスコに近い形態を示している。墓壙は奥壁から約 7 mの範囲が一段深く掘削されて おり、この部分が石室の空間を構成していた可能性が高い。墓壙底面は南に緩やかに傾斜しており、排水を考慮した形状を示していると思われる。墓壙の形状からみて、無袖の横穴式石室であった可能性がもっとも高い。

前庭部はこの一段深く掘削された墓壙と一体に掘削されており、直線的に南に延びている。また、前庭部北側中央には長軸 0.7 mを測る土坑が掘削されている。

石室に伴う施設として、床面に敷石が遺存していた。扁平な小振りの石材を用いており、長軸 3.6 m、短軸 1.2 mの範囲に敷設されている。おそらくこの部分が玄室に相当するものと考える。敷石は、墓壙内に整地を行った後に敷かれたことが土層の観察から明らかとなった。

遺物出土状況(第50図) ほぼ床面直上まで削平されていたため、遺物の遺存状況は良好ではない。玄室敷石上からは細片化した須恵器・土師器が検出された。これらはいずれも敷石上から検出されているため、この石室の埋葬に伴うものである。出土か所に大きな片寄りはない。

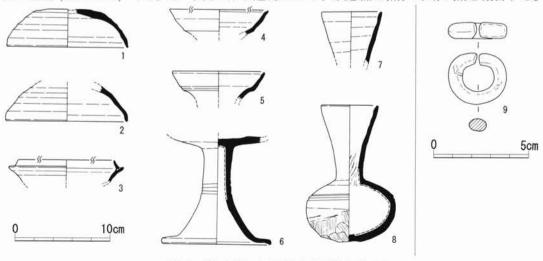
前庭部北側の土坑内からは高杯(6)が脚部を上にした状態で検出された。

また前庭部からは耳環(9)が検出され、追葬時の掻き出し行為があったものと推測される。

なお、須恵器長頸壺(8)は、国分30号墳周辺を重機掘削している際に出土したものであり、 原位置を特定することはできなかったものの、作業の状況からみてこの古墳に伴うものと判断し た。

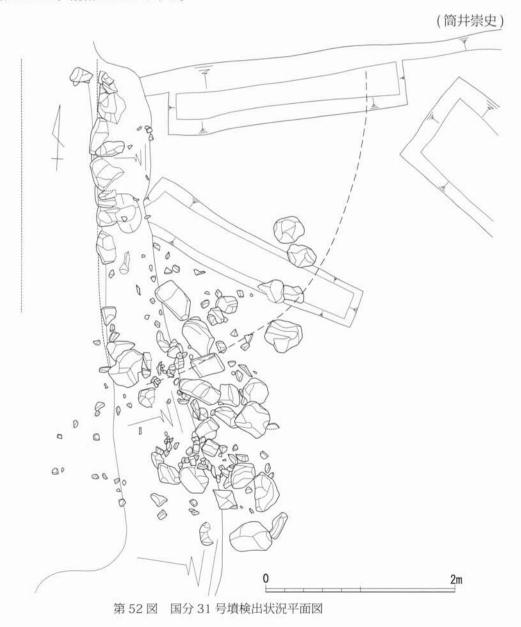
(石崎善久)

出土遺物 (第51図) 国分30号墳に伴う遺物として、須恵器8点、耳環1点を報告する。



1・2は須恵器杯H蓋である。ともに器高が高く同形態を採る。1の天井部外面はヘラキリ後不調整である。3は須恵器杯Hの小破片である。短く立ち上がる口縁部を有する。4・5は須恵器 の口縁部の破片と考えられる。5は外面に浅い沈線を施すが、4には認められない。6は須恵器高杯の脚部である。脚部中位付近に浅い沈線を2条施す。形態的に長脚で上下に2段の透孔を有する脚部に近いが、透孔は確認できない。7は須恵器提瓶の口縁部と考えられる。体部については不明である。全体に焼け歪みが著しい。8は体部が球形を呈する須恵器長頸壺である。体部中位付近に沈線を2条施すが、上段の沈線は非常に幅の狭いものである。体部下半から底部にかけてタタキ調整を施す。頸部内面に絞り痕が残る。口径5.9cm、器高14.6cm、体部最大径9.4cmである。

9 は金環である。表面には金が遺存するが遺存状況は悪い。環体は銅地である。断面径 $0.6 \sim 0.9 \text{cm}$ 、横軸 3.05 cm、縦軸 2.7 cm である。



⑦国分 31 号墳 (第52 図)

位置 D1地区調査区北西に位置する。この古墳は削平を免れることが明らかとなったため、 側壁であることを確認した段階で埋め戻しを実施した。そのため、空撮図化による平面図の作成 を行ったのみである。

現状での石室最下段基底の標高は約123.3 mを測るが、それより深くなることは明らかである。

墳丘 2方向に設定した断ち割りにより、円墳の可能性が高いことを確認した。このトレンチは、盛土保存がなされると判断された段階で掘削作業を中止しているためそれ以上の詳細は不明である。ただ、国分28号墳の北西に設けたトレンチでも基底部分と思われる傾斜変換点を確認しており、この部分から直径14m前後の円墳であると考える。

石室 (図版第 26) 南に開口する横穴式石室である。右側壁の一部分のみを確認した。全長 3.4 m以上を検出したが詳細については不明である。さらに石材は北側に連続しており、今回検 出した部分は羨道に相当するとみられる。

石室石材は人頭大から長軸 60cm 程度を測る石材を平積みしているようであり、最大で3段以上遺存していることを確認した。壁面にはわずかに持ち送りが認められる。

出土遺物 石室内の調査は実施しておらず、この古墳に伴う遺物を検出するに至らなかった。 (石崎善久)

⑧国分 32 号墳

位置 国分 32 号墳は国分 28 号墳の南西に位置する。国分 33 号墳と同一の枝尾根稜線上に 立地するとみられる。石室床面の標高は 123.7 mである。

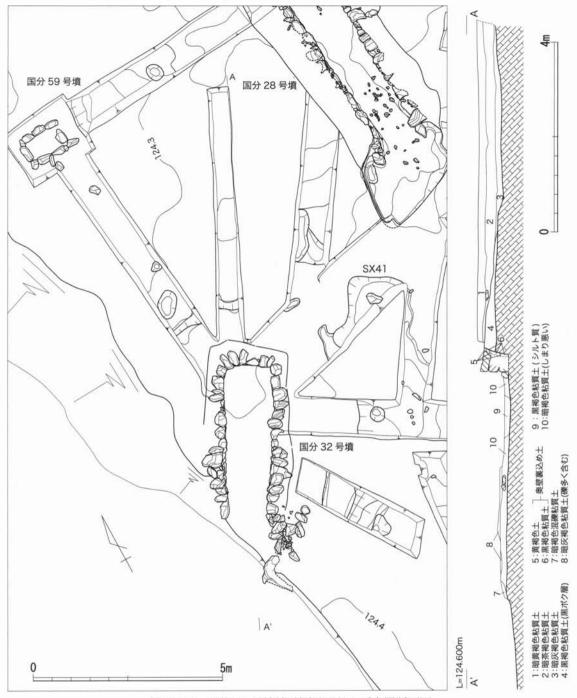
墳丘(第53図) この古墳についても墳丘は最小限のトレンチ調査によって実施している。 墳丘西側が大きく削平されており、トレンチを設定することはできなかった。トレンチ調査の結果、墳形については円墳であると判断される。墳丘は、地山もしくは黒ボク層を整形することにより基底部を造り出している。復原される墳丘の規模は南北約9m、東西約8mを測る。

石室(第54図) 国分32号墳の内部主体は南西方向に開口する横穴式石室である。石室の残存状況は比較的良好であり、天井石や石室上段は失われているものの、奥壁は3段、側壁は2~4段が遺存している。石室の石材は全て自然石であり、人為的な加工痕の認められるものはない。

石室の平面プランは無袖である。しかしながら、右側壁、左側壁とも玄門立柱ともいうべき石材を縦方向に用いることにより袖石とし、玄室空間と羨道を意識的に分離している。したがって、この石室は両袖傾向の無袖横穴式石室といえる。袖石の位置は平面プランからみれば、右袖のほうが、左袖よりも約 20cm 奥壁側に位置し、おおよそ1石分のずれが見受けられる。また、羨道は羨門部に向かって幅を減じている。

石室の規模は全長 4.1 m、奥壁幅 1.2 m、玄室長 1.3 \sim 1.5 m、玄室最大幅 1.3 m、羨道部幅 は最小で 1.0 m、残存高 0.8 mを測る。

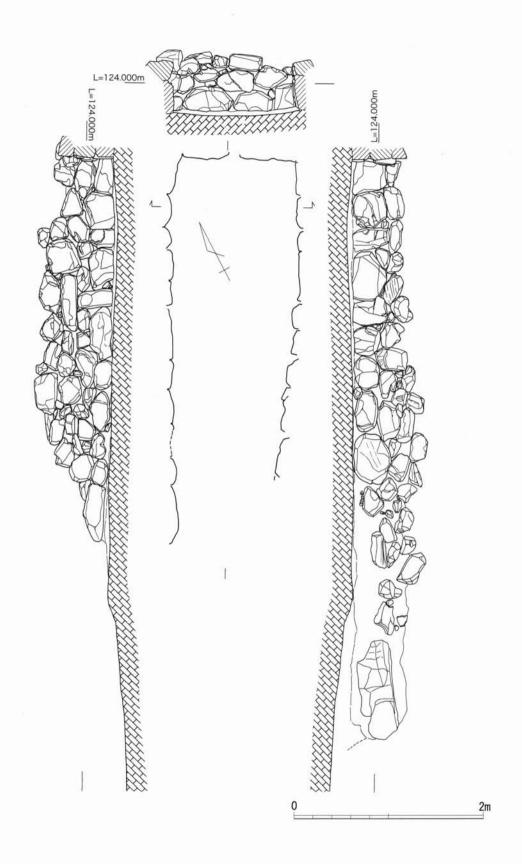
奥壁は基底部に3石の石材を用いている。この石材は側壁を構成する石材とほぼ同一規模である。2段目以降はやや小振りな石材を平積みして壁面を構築している。また、石材間には小石材



第53図 国分32号墳墳丘測量図および土層断面図

を用いることにより、水平や壁面を整えている。奥壁の持ち送りはほとんど見受けられず、ほぼ 垂直に構築されている。

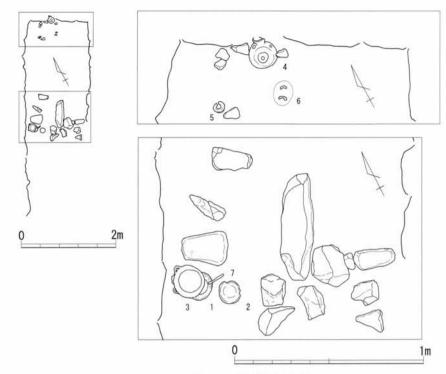
右側壁は玄室で3段が遺存する。袖を構成する石材は立柱状に立位で用いられ、その上段に玄室と羨道にまたがる石材を平積みしているのが特徴的である。玄室は基底石にやや大型の石材を用い2段目以降をやや小型の石材を用いて構築している。石材は縦方向の比較的長い石材を用いており、ほとんど目地は通されていない。羨道側は玄門寄りと羨門部にやや大型の石材を用いているが、その他の部分はやや小振りな石材を平積みし、石材間に小石材を用いて壁面を構成する。



第54図 国分32号墳横穴式石室実測図

玄室壁面の持ち送り は2段目以降を緩や かに持ち送る。

左側壁は、右側壁 に比して、やや大振 りな石材を多用する が、構築技法などは 右側壁と共通する。 なお、図示している 右側壁羨門側の石材 は後世の撹乱により 移動、再集積された 石材であるが、最も 南に位置するものは 天井石である可能性 がある。



第 55 図 国分 32 号墳遺物出土状況図

この他、石室玄門から羨道寄りに集石が認められた (第55 図)。石材は長軸 0.6 m、短軸 0.2 mの棒状の石材を最大とし、その他は 20cm 程度の自然石である。閉塞石とみるには構造的に貧弱であり、梱石のように空間の区画を示す機能をもったものと考えられる。

(石崎善久)

遺物出土状況(第55図) 国分32号墳では、奥壁中央で須恵器提瓶(4)が、基底石に挟まり込んだ状況で正位で検出された。提瓶の南では耳環(5・6)が対に並んで検出された。耳環の出土状況から被葬者は北に頭位を向けた状態で埋葬され、提瓶は頭部の近くに置かれたと考えられる。

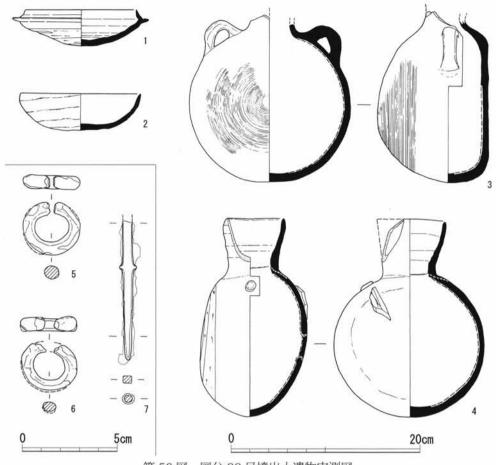
玄門部の集石付近では、須恵器提瓶(3)が横位で、須恵器杯H(1)は正位で重ねられた状態で検出された。また、鉄鏃(7)は、この須恵器杯の上から出土している。この須恵器の東側からは接するような状態で土師器杯(2)が正位で検出された。これらの遺物出土状況からこの古墳の被葬者は1体であり、集石より南の遺物群は供献されたものと考える。

出土遺物 (第56図) 国分32号墳に伴う遺物として、須恵器3点、土師器1点、耳環2点、 鉄器1点を図示した。

a. 土器類

1は須恵器杯Hである。受け部は水平にのび、立ち上がりは短く内傾する。底部外面に回転 ヘラケズリ調整を施す。底部内面に不定方向のナデ調整を施す。ほぼ完形で、立ち上がり径 11.6cm、口径 13.0cm、器高 3.9cm を測る。胎土に黒色粒を含む。

3・4は須恵器提瓶である。ともに体部は回転ナデ調整で整形した後に閉塞し、別作りの口縁



第56図 国分32号墳出土遺物実測図

部を差し込む。3は口頸部を欠いている。体部の両肩に環状の把手を貼り付ける。上半部に自然 釉がかかっている。閉塞側にカキメを施し、反対側には回転ヘラケズリ調整を施す。4の体部は 閉塞側に回転ナデ調整を施し、その反対側には回転ヘラケズリ調整を施す。口頸部はやや内湾気 味に立ち上がる。把手はボタン状の粘土塊を貼り付ける。体部に須恵器杯H片が融着している。

2は土師器杯である。口縁部が内湾気味に立ち上がる形態を呈する。粘土紐を螺旋状に巻き上げた痕跡が明瞭に認められる。摩滅が著しいものの、口縁部はヨコナデ調整、内面はナデ調整を施すことが確認できた。ほぼ完形で、口径 12.5cm、器高 3.8cm を測る。

(梅村大輔)

b. 金属製品

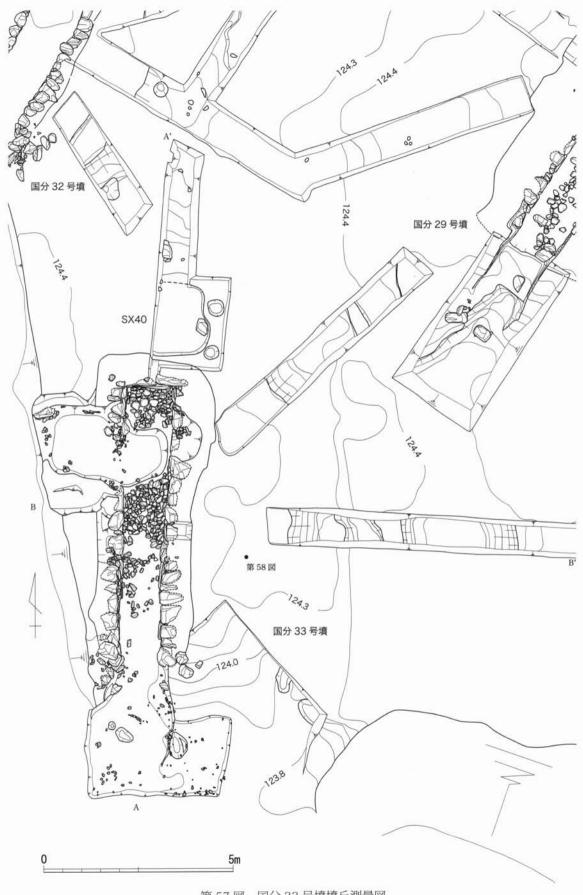
金属製品には一対の耳環と、鉄鏃 1 点がある。

5・6 は耳環である。出土状況からセットになるものと判断される。遺存状況は両者とも悪く、 表面の金もしくは銀はほぼ剥離し、銅芯が露出している。

7 は長頸鏃の頸部と茎である。棘状箆被をもつ。茎に木質はみられないため、矢柄に装着された状態であったかどうか判断できない。

(石崎善久)

⑨国分 33 号墳



第 57 図 国分 33 号墳墳丘測量図

位置 D1地区の南西隅で検出した横穴式石室を内部主体にもつ古墳である。石室床面のレベルは標高123.5 mを測る。国分33号墳と東に位置する国分30号墳との間には第59図に示すように小さな谷地形が存在するため、この古墳は調査区の西に存在する支尾根稜線上に立地するものと考える。

墳丘(第57図) 墳丘の西半分は後世の開墾により大きく削平されていた。墳丘の調査は、最低限のトレンチ調査にとどめるため、石室の中軸中心から放射状にトレンチを設定することにより実施した。

墳丘北側のトレンチでは、墳丘裾には地山を掘削した周溝をめぐらせ 第 58 図 ており、近接する国分 32 号墳と区画されている状況を確認した。土層 国分 33 号墳墳丘盛土内断面からは古墳の切り合い関係を認めることはできなかった。残存する 遺物出土状況図墳丘頂部付近には盛土が認められた。断面観察から墓壙内の石室裏込め土の充填作業を完了した後、石室築造と併行して行われていったものと判断される。また、墳丘の一部は中世の土坑 S X 40 に切られていた。

L=124.300m

墳丘東西方向に設定したトレンチでは、墳丘裾に地山面から掘削される幅 0.9 mを測る周溝を確認した。墳丘の盛土は奥壁側のトレンチ同様、石室の構築と併行してなされている状況を示しているが、このトレンチでは、石室側壁を押さえるように盛土を施した後、墳丘全体を覆うような形でさらに盛土が施されていることを確認することができた。

また、さらに東に位置する国分 30 号墳との間には小さな谷地形が存在することを確認した。 この谷地形の底面は平坦に整形されており、壁面も平滑に地山を整形していることから、国分 29 号墳に至る墓道としての機能を果たしていたものと推測される。

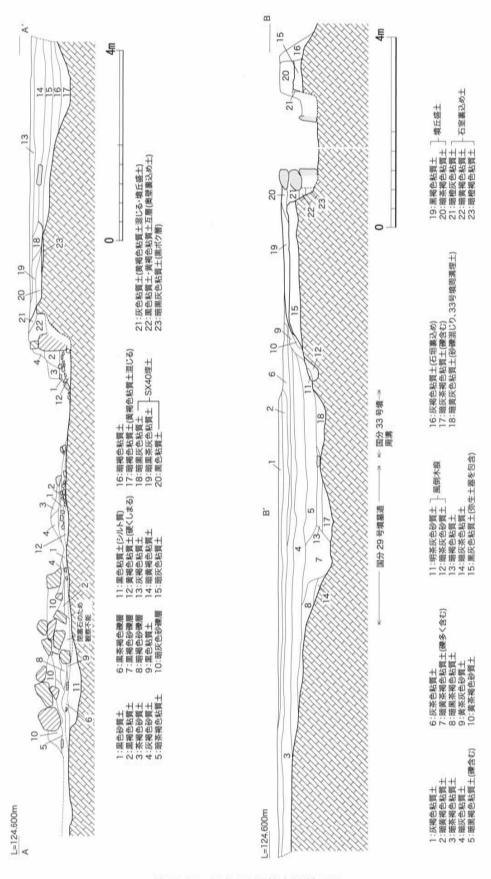
また、墳丘南東部は D 1 地区南辺の石垣を除去する際に面的に掘削した。この部分では地山を 整形した墳丘部分を確認することができた。

トレンチ調査の範囲では国分33号墳に伴う葺石、外護列石等の外表施設は確認できなかった。 以上の点から、墳形は基底を地山整形により行い、上部に盛土を施した円墳と判断され、直径 11~13 mに復原できる。また、石室主軸を中心に考えた場合、南北方向に長い楕円形の墳丘 であったものと考える。

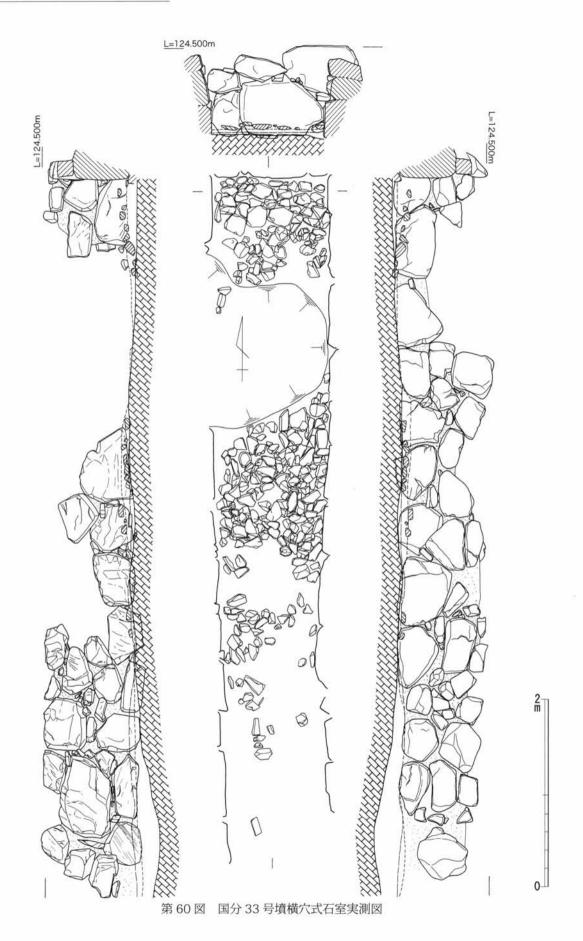
墳丘周辺の精査中に須恵器短頸壺 (第 64 図 12) が検出された (第 58 図)。口縁を上にし、同一個体の頸部破片が体部の下から検出された。埋納坑などの有無を確認するため、断ち割りを実施したが、埋納のための掘形等は確認できず、盛土内に埋め込まれた状態であった。墳丘や石室の築造途中における何らかの祭祀に伴うものと考えられる。

石室(第60図) 国分33号墳の内部主体は南に開口する無袖の横穴式石室である。

後世の撹乱により西側壁と床面敷石の一部を失い、天井石、側壁として用いられた石材も石室 内部に落とし込まれ、石室上側は削平されてしまっている。玄室床面も撹乱が及んでいる。しか しながら、両側壁は羨門部まで遺存しているものとみられる。



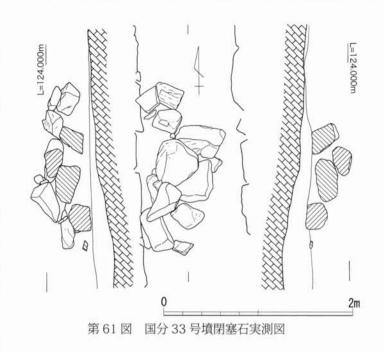
第59図 国分33号墳土層断面図



石室に使用される石材は全て自 然石であり、人為的な加工痕を持 つものは確認できなかった。

石室の規模は全長 7.6 m、玄室 幅 1.2 m、羨道幅 1.0 m、残存高 1 mを測る。

奥壁はやや大型の石材と小振りの2石を基底石として用い、玄室として必要な幅を調整している。2段目以上は3石を用いて構築している。基底では奥壁を両側壁が挟み込むように石材が据えられているが、2段目左側壁側では、側



壁に持たれかけさせるようにして、奥壁の石材が積み上げられている。持ち送りはほとんどみられず、垂直な面をなしている。

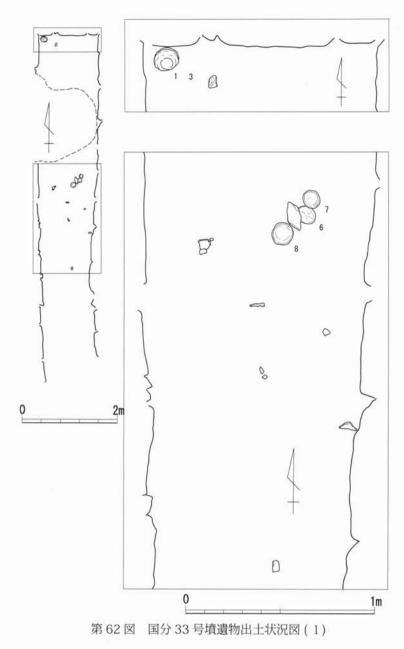
左側壁は2段から3段残存している。羨門付近は小振りの石材を多用して構築しており、石室 を構築している段階で羨道と玄室の空間区別を意識したものと推察される。玄室部にはやや大型 の石材を用いるが、石材間に小石材で壁面の調整を行ったり、目地を通すといった構築方法は認 められない。

右側壁は玄室付近での損壊が著しいが、2段から3段残存しており、羨門から2m付近までは40~50cm程度の石材を用い、そこから奥壁までは50~70cm程度とやや大型の石材を用いる。左側壁同様、玄室部にはやや大型の石材を用いるが、石材間に小石材で壁面の調整を行ったり、目地を通すといった構築方法は認められない。また、羨門部の石材は3段が遺存しているが、石材の主軸を東に振っており、羨道の壁面を構成するというよりは、開口部の化粧石として用いられたものとみられる。

閉塞は羨門部付近で行われている。板状の石材が玄室側に倒れ込んだような状況で検出された (第61図)。この状態から、石室の閉塞は板状の石材を立位に用いて積み重ねることにより行わ れたと推測される。

床面には、 $10 \sim 20 \text{cm}$ の扁平な石材で敷石を施す。玄室と判断した部分の大半は石材自体が失われていたが、敷石の範囲は奥壁から約 4.2 m まで敷設されている。また、奥壁より 20 cm 程度離れた位置に平坦な石材が 3 石、東西に一列、並んで検出された。棺台の可能性を考えることができるが、南側は大きく撹乱されているため断定はできない。

石室内の埋土は、第 59 図第 1 層が初期の石室内流入土と判断される。玄室側の 2 \sim 4 層は石室の崩壊以後に流入したものである。羨道側の 6 \cdot 8 \cdot 9 層は初期流入土と判断される。また、敷石の設置以前に床面に整地土が施されている状況が確認された。



この他、羨門部では閉塞石 除去後に床面から大きく掘り 込まれた土坑を検出した。排 水などの用途が想定される。

また、石室の前面には前庭 部の掘り込みが確認されてい る。前庭部は主軸をやや南西 方向に振る。

遺物出土状況 (第62·63 図)

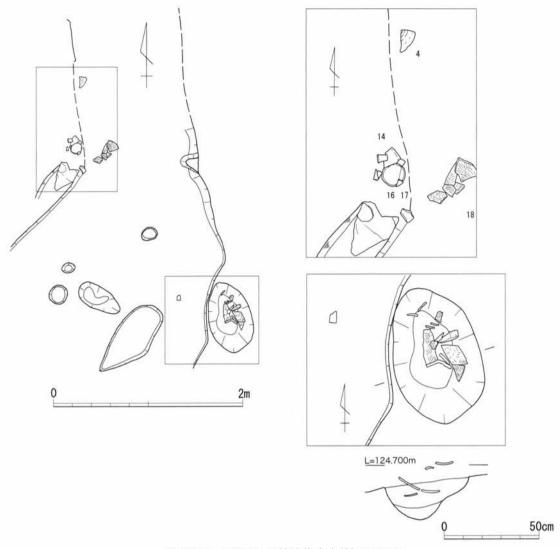
玄室内は撹乱が著しいためか、良好な状況で遺物は出土しなかった。奥壁付近と中央付近で須恵器・不明鉄製品が出土した。奥壁西側隅において須恵器杯H、同蓋がセットで出土している(1・3)。棺台と推測した石材の位置に近く、かつ正位置であることから、原位置を保っていると判断される。また、奥壁周辺から杯H蓋(2)が逆位で出土している。

玄室中央付近では、床面の 撹乱によってまきあげられた とみられる敷石の下から須恵

器杯が 3点 $(6 \sim 8)$ いずれも正位置で出土した。また周辺から不明鉄製品が出土している。羨道では須恵器杯H(4) 小破片が出土している。また、閉塞石を除去したところから、須恵器の無蓋高杯 (9) が出土した。

羨門および前庭部においても須恵器・土師器が検出された。羨門において須恵器の無蓋高杯 (10) が、杯 B 蓋 $(15\sim17)$ は 3 点とも逆位で重なるように羨門の西側で出土した。また、羨門からやや羨道部に入った位置で杯 B 蓋 $(13\cdot14)$ が出土している。出土状況から閉塞石設置後に置かれたものと判断され、直接的な埋葬に伴う祭祀ではなく、追善供養として供献されたと考えられる。

前庭部南東に位置する土坑からは須恵器甕 (18) が出土した。前庭部の広範囲に接合関係がみられる。底部が据え付けられた状態ではないことから、前庭部で何らかの機能を果たした後、破



第63図 国分33号墳遺物出土状況図(2)

却、埋納されたと推察される。

出土遺物 (第64·65 図) 国分33号墳に伴う遺物として、須恵器21点、鉄器3点を図示した。

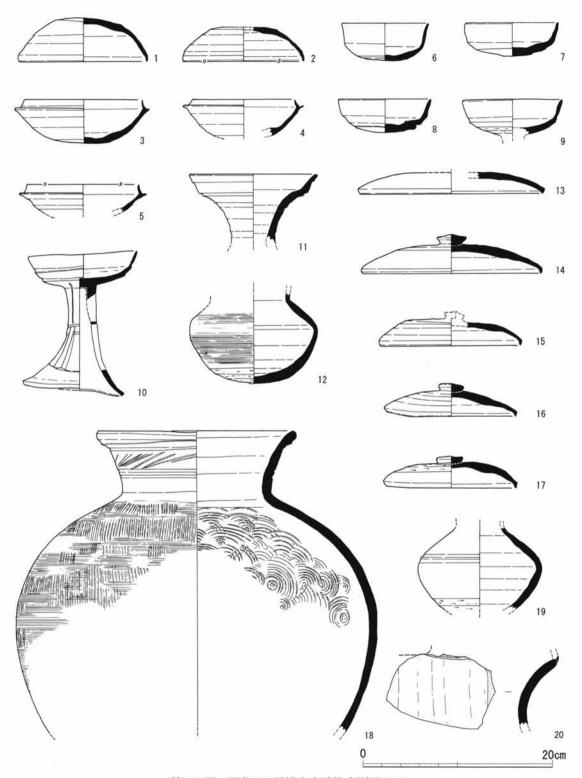
a. 土器類

1・2は須恵器杯H蓋である。1は天井部外面に時計回りの回転ヘラケズリ調整を、天井部内面に不定方向のナデ調整を施す。完形で、口径13.4cm、器高4.5cmを測る。胎土は密であるが、灰白色を呈し、焼成は軟質である。2は小破片のため法量は不明である。焼成が軟質で、摩滅が著しい。口縁部外面に沈線がめぐるが、稜線を意識したものではなく口縁部を丸く仕上げる際についたものと判断される。

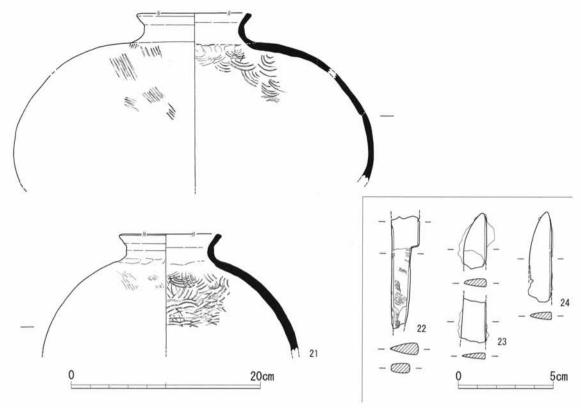
 $3\sim5$ は須恵器杯Hである。3 は立ち上がりが直立気味に上方へのびる。底部外面に回転へラケズリ調整を施す。器高が高く、底部は丸みを帯びる。完形で、立ち上がり径 12.4cm、口径 13.5cm、器高 4.7cm を測る。胎土、色調、焼成は1 と全く同じで、出土状況からもセット関係にあると考えられる。4 は立ち上がりが短く内傾しながら伸びる。立ち上がり径 10.8cm、口径 11.8cm、残存高 4.0cm を測る。5 は受け部が水平にのびる。

京都府遺跡調査報告集 第129冊

6~8は須恵器杯Gである。いずれもほぼ完形である。6は底部外面に回転ヘラケズリ調整を、 底部内面に不定方向のナデ調整を施す。口径 9.1cm、器高 3.9cm を測る。胎土は精良で、断面 は赤褐色を呈し、極めて緻密である。焼成は堅緻である。7・8は底部外面にヘラキリ後ナデ調 整を、底部内面に不定方向のナデ調整を施す。7は口径 9.6cm、器高 3.5cm、8は口径 9.1cm、



第64図 国分33号墳出土遺物実測図(1)



第65図 国分33号墳出土遺物実測図(2)

器高 3.6cm を測る。 6 と比べると胎土、製作技法に違いが認められ、生産地が異なっていると 判断される。

9・10 は須恵器無蓋高杯である。9 は杯部のみ遺存する。杯底部外面に回転ヘラケズリ調整を施す。10 は全体に大きく焼け歪んでいる。杯部は外面に2条の稜線をめぐらす。杯部内面には不定方向のナデ調整を施す。脚部中央に沈線を2条施し、その上下に透孔を3方向、計6か所穿つ。上部の透孔は切り込みを入れただけのものである。口径11.4cm、底径10.4cm、器高15.3cmを測る。

11 は須恵器 聴である。口頸部より外反して開いた後、端部付近でさらに角度を変えて外上方に伸びる。屈曲部に沈線を1条巡らせる。口径13.5cm、残存高7.4cmを測る。

12 は須恵器短頸壺である。体部中位付近に最大径をもつ。底部に時計回りの回転ヘラケズリ 調整を施す。体部外面にカキメを施す。体部最大径 13.6cm、残存高は 9.5cm を測る。

 $13 \sim 17$ は杯 B 蓋である。いずれも天井部は丸く笠形を呈し、口縁端部を下方に屈曲させる。 $13 \cdot 15$ もつまみを有していたと考えられる。16 は外面に自然釉が付着するため不明であるが、他の個体は天井部外面に回転ヘラケズリ調整を施す。口径 19cm 前後のやや大きい一群 $(13 \cdot 14)$ と、口径 14cm 前後の小型で口縁端部の屈曲が明確な一群 $(15 \sim 17)$ がある。前者は灰白色を呈し、焼成はやや軟質である。後者は青灰色ないし暗青灰色を呈し、焼成は堅緻である。17 はやや粒径の大きい砂粒を含む。

18は須恵器甕である。口頸部は外反し、口縁端部外面は肥厚する。その直下に沈線を1条施す。

京都府遺跡調查報告集 第 129 冊

口縁端部は丸くおさめる。口頸部は2条の沈線を施して上下に区画し、上段に刺突による斜線文を施す。体部は平行タタキの後、横方向にカキメを施す。内面には同心円状の当て具痕が顕著に認められる。口径20.6cm、残存高31.8cmを測る。

(梅村大輔)

19 は須恵器長頸壺の体部である。肩部に沈線を2条施す。底部外面に回転ヘラケズリ調整を施す。

20 は須恵器横瓶の破片と考えられる。内外面とも回転ナデ調整を施す。21 は須恵器横瓶である。互いに接合しない破片を図上で復原して図示している。口縁部は回転ナデ調整を施す。体部外面はタタキ調整の後、丁寧なナデ調整を施してタタキの痕跡をほとんど消す。内面には同心円状の当て具痕がみられる。

(筒井崇史)

b. 金属製品

国分33号墳出土鉄製品は全て刀子である。22は茎と刃関部分が残る。茎には横方向の繊維を巻いた痕跡が確認される。23・24は刃部の破片である。23には若干の研ぎ減りが認められる。 (石崎善久)

10国分 58 号墳

位置 国分 29 号墳の南東に設置したトレンチ内で検出した。国分 29 号墳の南東、国分 27 号墳の南西、国分 30 号墳の北西に位置する。これら 3 基の古墳の推定墳丘裾外に位置している

E = 124.600m

第66図 国分58号墳石室実測図

ため、選地に当たっては意図的に墳丘を避けているものとみられる。石室床面の標高は 124.3 m前後である。

墳丘 トレンチ断面の観察や、平面的な精査によっても明確な盛土や区画施設を検出することはできず、無墳丘あるいは低墳丘の古墳であったと考える。

石室(第66図) 石室は大きく撹乱を受けているが、残存部内法で幅0.6 m、長さ1.7 mを測る小石室である。北壁および西壁基底部分が遺存している。その他の壁面については石材の存在を確認できなかった。壁面は長軸40cm、高さ15~20cm程度の自然石を平積みして構築する。南側が削平されているため、竪穴系の埋葬施設であるか、横穴系の埋葬施設であるか明確にできない。

床面には扁平な石材が検出されたが、壁面を

構成する石材が転落したものである可能性もあり、その性格については不明である。

墓壙は残存部で長さ2.6 m、幅1.3 mを測る素掘りの形状をとる。南側は削平のため不明である。 出土遺物 出土遺物はない。

(石崎善久)

11国分 59 号墳

位置 国分 28 号墳の墳丘西側を確認するために設定したトレンチで検出した。 D 1 地区の北西に位置する。石室の床面は標高 123.7 m前後を測る。国分 28 号墳の周溝外に位置し、国分 31 号墳の推定墳丘外に位置する。

墳丘 平面的に墳丘は確認できなかったが、第25図に示すとおり、盛土とみられる土層をトレンチ断面で確認している。そのため、低墳丘をもつものとみられる。周辺に設定したトレンチでは地山を整形した痕跡などを明らかにすることはできず、墳形については不明である。

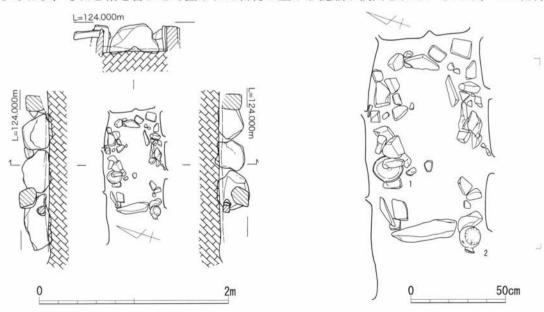
石室(第67図) 東西方向に主軸をとる小石室である。東側には壁面が構築されていないことから、横穴系の埋葬施設と考える。

石室は基底石の上面まで削平されており、基底石のみが遺存している。また、2段目以上に用いられたと思われる小石材が床面や埋土中から検出された。

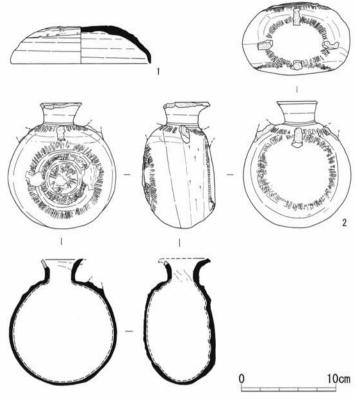
石室は、東西に主軸をとり、規模は全長約 1.4 m、奥壁幅約 0.45 mを測る。

奥壁は1石の自然石を用いており、左右両側壁はそれぞれ3石分が遺存している。左側壁の東側の石材は抜き取られており、本来は4石が基底石を構成していたと判断される。また右側壁では上端に目地を通すため、棒状の石材を小口積みしている。

石室内には小型の石材が散乱するものの、石室を構築する石材と判断されるため、床面の敷石 は当初より施されていなかったと考えられる。なお、開口部寄りの棒状の石材は石室床面に密着 しており、それと軸を合わせて置かれた石材の上から提瓶が検出されているため、この石材につ



第67図 国分59号墳石室実測図および遺物出土状況図



第68図 国分59号墳出土遺物実測図

いては、埋葬空間とそれ以外の空間を区画する梱石としての意味を もつものと考える。

遺物出土状況(第67図) 石室 内北側壁寄りで須恵器杯H蓋(1) が逆位で、転落石の下部から出土 した。また、右側壁開口部寄りで 須恵器提瓶(2)が出土した。先述 のように、この提瓶は石材上から 検出されている。

出土遺物 (第 68 図) 1 は須恵 器杯H蓋である。天井部外面に反 時計回りに回転ヘラケズリ調整を 施す。口径 14.6cm、器高 3.9cm を測る。胎土に黒色粒を少量含む。 青灰色を呈し、焼成は良好である。 2 は小型の須恵器提瓶であるが、

外面に櫛状工具による列点文を広範囲に施している点が特異な印象を与える。提瓶の製作は、体部を回転ナデ調整で整形した後に閉塞し、別作りの口縁部を差し込んでいる。口縁部の一部は打ち欠いたように欠損する。外面の文様は、閉塞側に同心円状の区画線を施し、それに沿って3重の列点文を施す。反対側の面は、外周部に1重の列点文を施す。この列点文の外側には回転へラケズリ調整を施し、内側にはヘラキリ後ナデ調整を施す。肩部にも頸部の回りを1周するように列点文を施す。把手は4方に痕跡をとどめているが、すべて欠損する。胎土には黒色粒を少量含む。色調は暗青灰色を呈し、焼成は堅緻である。

(梅村大輔)

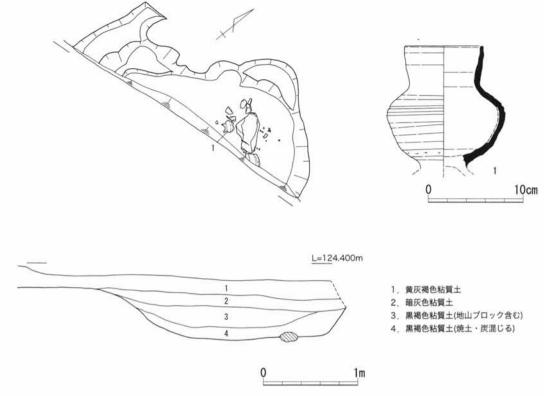
⑫土坑SX41(第69図)

位置 国分32号墳の北東に設置したトレンチ内でその一部を検出した。

遺構 土坑 S X 41 は平面隅丸長方形になると推測される素掘りの土坑である。土坑は地山面から掘削されている。位置的には国分 32 号墳の墳丘裾に相当するが、国分 32 号墳の墳丘との切り合い関係などについては明らかにできなかった。検出面での規模は短軸 0.7 m、長軸 2.0 mを測る。なお、土坑の南東に設置したトレンチではこの土坑の掘形を検出することはできなかった。そのため、仮にこの土坑が方形であれば、ほぼ先述の規模に収まるものと考えられる。

土坑床面からは 40cm 程度の自然石と須恵器台付壺が検出された。

埋土は床面直上に、炭や焼土塊を含む黒褐色土層が厚く堆積している。壁面には火を受けた痕跡は見受けられないため、周辺で火を用いた何らかの行為を行い、その際の炭・灰などを廃棄し



第69図 土坑 S X 41 および出土遺物実測図

た土坑の可能性がある。

(石崎善久)

出土遺物 1は須恵器脚台付直口壺である。脚台は欠損するものの、体部は完存する。口縁部も 1/2 程度遺存する。口縁部はわずかに内湾し、口縁端部は内傾する面を持つものの、ほぼ丸くおさめる。体部最大径付近には沈線を 2 条施す。底部に回転ヘラケズリ調整を施した後に脚台を貼り付けていると考えられる。口径 8.1cm、体部最大径 12.5cm、残存高 13.0cm である。

(筒井崇史)

(2)中世の遺構・遺物

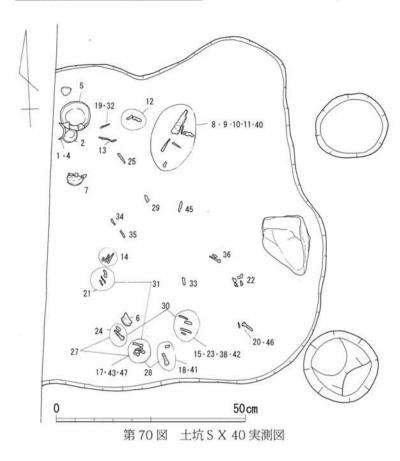
中世の遺構として、国分 33 号墳の北側に設置したトレンチから検出された土坑 SX 40、国分 27 号墳の墳丘覆土を切って構築された柵 SA 01、掘立柱建物跡 SB 01・02、国分 58 号墳の北東で検出された土坑 SK 42 などがある。ただし、調査区の西側部分は床土を除去しただけの状態であり中世の遺構面に達してはいない。そのため、下層にはさらに多くの遺構が存在するものと考えられる。

以下、主要な遺構・遺物について概観する。

①土坑SX 40(第70図)

位置 国分33号墳の北、墳丘確認のためのサブトレンチ内で確認された。

遺構 南東に主軸をとる不整形な土坑であるが、本来は北西方向に主軸をとるものであったと 推定される。遺構自体は削平されないためサブトレンチ内で必要な調査を実施したに留まる。検 出面からの深さ約 20cm を測る。断面の観察 (第59図)から国分33号墳の北周溝埋没後に掘



削されている。

遺物出土状況 土坑内から は釘を中心とする多数の鉄製 品と土師器が検出された。ま た、遺構の南東には人頭大の 亜角礫が1石検出された。

釘の検出状況から推して、ほぼ真北から 45° 振る形で木製容器が納められていたものと考えられる。釘の配置から想定される木製容器は幅約 $65\,\mathrm{cm}$ 、長さ $130\,\mathrm{cm}$ を測る。この釘群の北から小刀(8)と不明鉄製品($9\sim11$)が検出された。また土師器は $2\sim6$ が重なった状況で釘と同一レベルかそれより低い位置から、1 はこの

土師器群の南から検出されている。

以上の釘や土師器の出土状況から、この土坑 S X 40 は木棺を納めた木棺墓であった可能性が 高いものと判断する。

また、土坑の東から2基のピットが検出されたが、この土坑との関連については不明である。 出土遺物(第71図) 土坑SX40出土遺物には、土師器・鉄製品がある。またSX40のH7・ F20として取り上げた瓦器と鉄器があるがこの遺構外からの出土である。

a. 土器類

1~7は土師器皿である。1のみ口径14.8cm、器高3.2cmを測る大型品である。

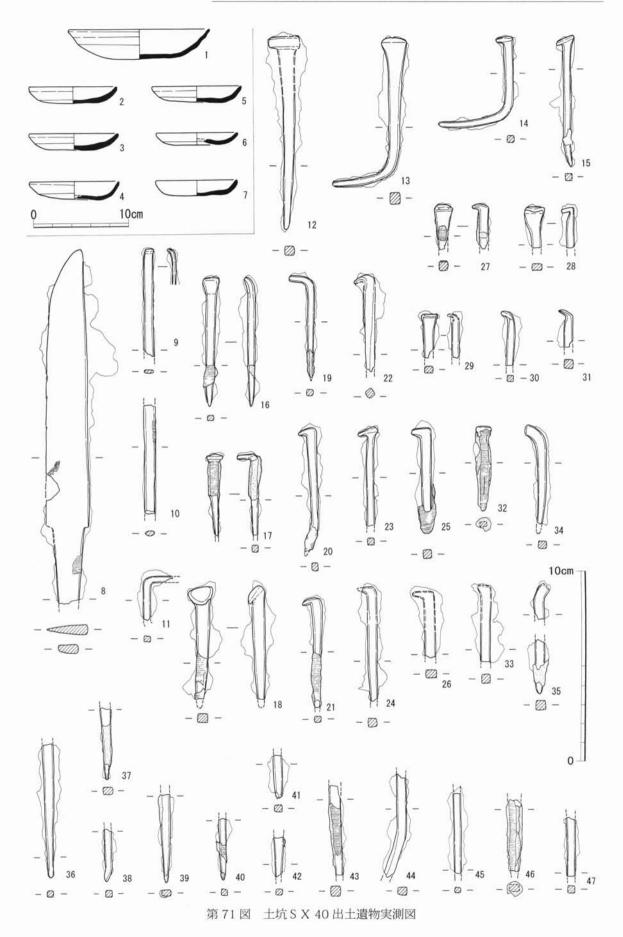
b. 鉄製品

鉄製品には、小刀およびその周辺から出土している不明鉄製品と鉄釘がある。

8は小刀である。残存長 18.6cm、刃部幅 2.3cm を測る。錆のため肉眼での観察は困難であるが、両関であると判断する。茎の一部は欠損し、肉眼観察では目釘孔は確認できない。茎には横方向の、刀身部には縦方向の木質がみられることから刀装具に納められていたものとみられる。

9・10 は不明鉄製品である。断面や質感から同一個体とみられる。幅 0.5cm、厚さ 0.2cm を 測る板状の鉄製品である。一端をわずかに折り曲げている。また、10 には横方向の木質が観察 される。

11 は直角に曲げられた棒状鉄製品である。 $9 \sim 11$ の用途は不明であるが、小刀 (8) に近接して検出されていることから、小刀に関連する遺物群と推測される。



− 97 **−**

京都府遺跡調査報告集 第129冊

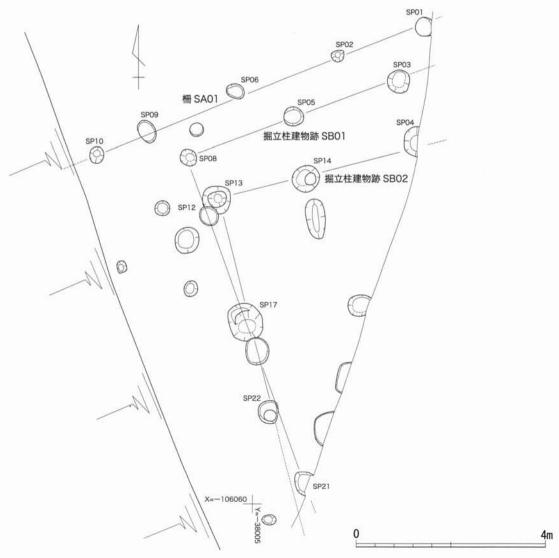
 $12 \sim 47$ は鉄釘である。頭部の認められるもの 24 点、先端の確認できるもの 17 点を数えるため、最低 24 点が存在する。全長 10cm 前後を測る大型品 $(12 \cdot 13)$ と $4.5 \sim 7$ cm を測る中型品がみられる。いずれも断面方形を呈する鍛造品である。また、折り曲げられたものが 2 点 $(13 \cdot 14)$ 確認される。12 は頭部を方形に作り出すようであるが、13 は明瞭な頭部を形成しない。中型品である $14 \sim 35$ は頭部の形態から扁平に叩き延ばした後、屈曲させるもの $(14 \sim 31)$ 、明瞭な頭部を形成しないもの (32)、頭部をわずかに折り曲げるもの $(33 \sim 35)$ の 3 者が認められる。多数の鉄釘には木質が付着し、木材に打ち込まれていたことは明らかであるが、検出状況や遺物その物から木製容器の形態を復原することはできなかった。

(石崎善久)

②柵SA01、掘立柱建物跡SB01・02

位置 調査区南東部に位置する。埋没している国分27号墳の周溝埋土と墳丘を切る。

遺構 (第72 図) 掘立柱建物跡 S B 01 は東西 2 間 (4.8 m) 以上、南北 2 間 (7.2 m) 以上の掘

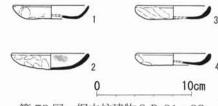


第72 図 掘立柱建物 S B 01 · 02、柵 S A 01 実測図

立柱建物跡である。柱穴 SP 12 も西側柱列上に位置するが、この建物に伴うものか判断できない。

掘立柱建物跡 S B 02 は掘立柱建物跡 S B 01 に切られる。東西 2 間 (4.4 m) 以上、南北 1 間 (2.8 m) 以上の建物である。主軸を掘立柱建物跡 S B 01 より東に振る。

柵 S A 01 はこの建物群の北に近接する東西方向のピット群である。



第73 図 掘立柱建物 S B 01・02、 柵 S A 01 出土遺物実測図

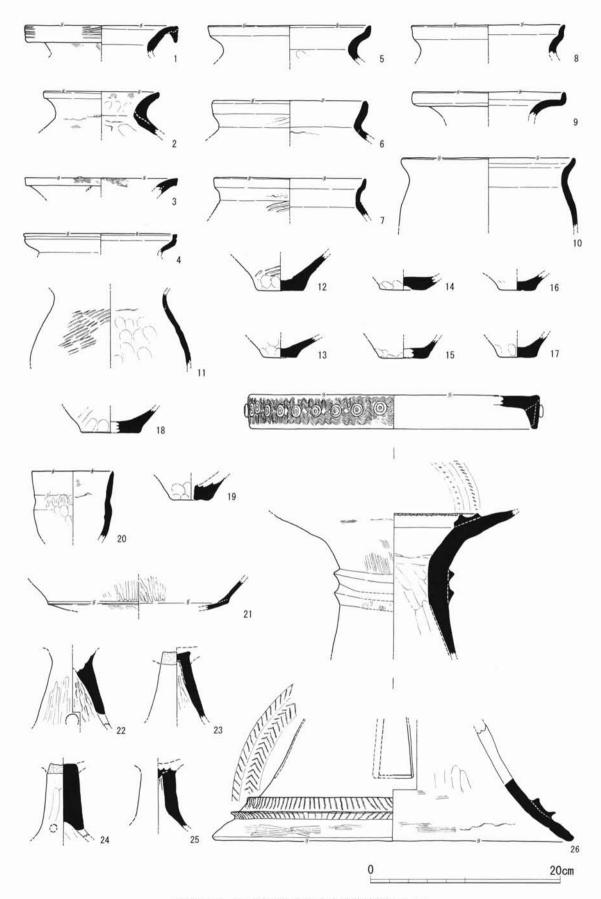
出土遺物(第73図) この建物群出土の遺物として土師器 4 点を図示した。いずれも土師器 皿である。1 は柱穴 S P 09、2 は柱穴 S P 08、3・4 は柱穴 S P 14 からそれぞれ出土している。 1・3・4 はやや上げ底気味の形態を示している。

(石崎善久)

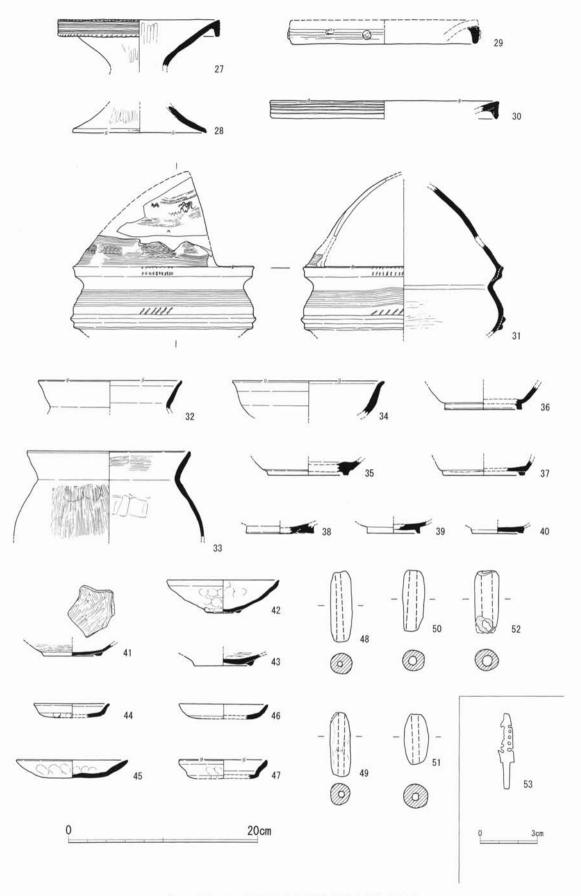
(4)包含層出土遺物 (第74・75図)

D1地区では、石室内への混入や周溝埋土、墳丘盛土などから弥生土器が比較的多く出土した。 また、石室内埋土や周溝埋土からも奈良時代から中世にかけての遺物が出土した。弥生土器の多くは後期後半に位置づけられ、D1地区北端で検出した竪穴式住居跡と同時期のものと考えられる。これらの弥生土器は古墳が分布する範囲にも集落域が広がっていたことを示すものと考えられる。一方、奈良時代から中世にかけての遺物は、この間に古墳の破壊が行われ、何らかの土地利用が進んだと考えられることから、それに伴うものであろう。ただし、出土量自体は少ない。

1~31 は弥生土器である。1 は垂下口縁をもつ広口壺である。口縁部外面に5条の擬凹線を 施す。2・3は口縁部外面にやや幅広の面を持つ広口壺である。4~10は受け口状を呈する甕 もしくは壺の口縁部である。4は口縁部外面に沈線を1条施す。5・8・10は内外面とも摩滅 が著しく調整は不明である。6はあまり受け口状を呈しない。7は体部外面にタタキ調整を施 す。9は大きく受け口状を呈するもので、広口壺の口縁部と考えられる。11は甕の頸部から体 部最大径付近にかけての破片である。外面にタタキ調整、内面にナデ調整を施す。12 ~ 18 は 甕の底部である。12・18 は外面にタタキ調整を施す。14 はドーナツ底を呈する。19 は復原径 0.6cm 程度の円孔を伴う有孔鉢である。20 は鉢または壺と考えられる。外面にハケ調整やユビ オサエ、内面にナデ調整を施す。21 は高杯の杯部の破片である。内外面とも縦方向のミガキ調 整を施す。22 ~ 25 は高杯脚部である。いずれも脚端部を欠損する。24 は中実であるが、その 他は中空である。22・24は外面に縦方向のミガキ調整を施す。26は器台である。互いに接合 しないため3つに分けて図示しているが、胎土や色調から同一個体と判断した。形態や透孔、突 帯などからあまり例をみない形式の器台である。口縁部が垂下口縁を呈し、外面に波状文を施し た後、円形浮文を 2.5cm 程度の間隔で貼り付ける。口縁部内面に突帯を貼り付ける。突帯には 山状の突起が2条巡り、それぞれの頂部に刻み目を施す。筒部外面にも断面三角形の突帯を2条 貼り付ける。筒部外面は摩滅するものの、部分的にハケ調整が確認できる。脚部には長さ5cm 以上の方形の透孔がみられる。また、脚端部付近に突帯を貼り付ける。口縁部内面の突帯と同様、



第74図 D1地区包含層出土遺物実測図(1)



第75図 D1地区包含層出土遺物実測図(2)

京都府遺跡調査報告集 第129冊

山状の突起が2条巡り、それぞれに羽状の刺突文を施す。脚端部外面にはミガキ調整を施す。胎土は細砂や1~3 mm 程度の砂粒を含むが、比較的良好である。全体に淡褐色を呈し、焼成は良好である。27・29・30 は器台の口縁部である。いずれも垂下口縁部の外面に擬凹線を施すが、27 が上下に刻み目を施す。29 は円形浮文を貼り付ける。28 は器台もしくは高杯の脚裾部である。外面は縦方向のミガキ調整を施す。31 は手焙り形土器である。破片であるため、図上で復原的に実測した。覆部外面には櫛描き直線文と櫛描き波状文を交互に施す。体部は、受け口状口縁を有するもので、端部と口縁部外面に刻み目を施す。なお、覆部は口縁部内面に接して立ち上がる。体部上半にも櫛描き直線文と刺突文を施す。体部最大径付近に突帯を貼り付ける。全体の調整は主にナデ調整による。胎土は1 mm 前後の砂粒を含む、やや粗である。淡褐色を呈し、焼成は良好である。

32・33 は土師器甕である。ともに口縁端部がわずかにつまみ上げたような形状を呈する。33 は口縁部外面にヨコナデ調整を、口縁部内面に横方向のハケ調整を施す。体部外面縦方向のハケ調整を施す。33 は土坑 S X 45 の出土で、国分 26 号墳の築造時期に近い所産である可能性がある。口径 17.0cm、残存高 8.9cm である。

34 はやや厚手の須恵器杯または椀である。 $35\sim 37$ はいずれも高台を有する須恵器杯 B である。35 はやや厚手で、 $36\cdot 37$ とは器形が若干異なる可能性がある。

38 は緑釉陶器椀の底部である。高台を削り出す。内面に釉薬が認められる。39・40 は釉薬が認められないが、緑釉陶器椀の底部である可能性が高い。あるいは無釉陶器の可能性もある。ともに高台は削り出す。

41 は黒色土器椀の底部である。断面方形の高台を貼り付ける。内外面ともミガキ調整を密に施す。42 は瓦器椀である。内外面とも摩滅気味であるが、ユビオサエやナデ調整を施す。断面台形に近い高台を貼り付ける。43 は瓦器椀の底部である。

44 は口縁部が外反する土師器皿である。45 は口縁部が斜め上方に伸びる土師器皿である。と もに口縁部にヨコナデ調整を施す。46 は中型の土師器皿である。内外面ともユビオサエ痕が多 くみられる。47 は底部から強く屈曲して立ち上がる口縁部を持つ土師器皿である。

48~52は土錘である。長さ5.5~7.5cm、直径2.2~2.5cmである。土錘の時期は不明である。 53は国分29号墳羨道埋土中から出土した銅鏃である。一部欠損するもののの、両側に各5個の円孔がみられる。全長は4.0cmである。銅質が悪く、劣化が著しかったので、土ごと取り上げたため、断面の形状は確認できていない。形態から弥生時代の銅鏃と考えられる。

(筒井崇史)

2. D 10 地区

D 10 地区は、D 1 地区の西側約 30m に位置する。京都府教育委員会の試掘調査によって横 穴式石室の存在が想定されたため、まず横穴式石室の位置および標高を確認することとなった。 その結果、古墳3基(石室5基)を検出した。国分35・37・40号墳については盛土保存される ことになったため、国分36号墳に伴う石室2基のほか、土坑3基についての調査を実施した。

(1) 古墳時代の遺構・遺物

①国分 35 号墳

位置 調査区北東部において、水田の床土直下で石材の一部を確認した横穴式石室である。

墳丘 墳丘は、水田の造営により大部分が失われており、不明である。

石室(第76図) 石室自体は盛土保存されることとなったため、平面形のみを確認した。石室は南西方向に開口し、長さ4.2 m、幅約0.8 mである。主軸はN58°Eを測る。石室内周辺

から出土した遺物がないため築造時期は不明である。

②国分 36 号墳

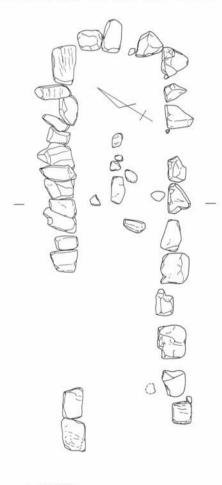
位置 D 10 地区の南東部で検出した横穴式石室を 内部主体とする古墳である。 D 1 地区から続く丘陵稜 線上に立地している。

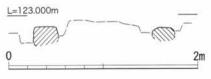
墳丘(第78図) 墳丘中央から西半分は石材を廃棄した土坑によって大きく破壊されていた。石室が破壊されたのは、石材廃棄土坑から出土した遺物によって、近世の水田造成によるものと考えられる。調査では、明確な墳丘を確認することはできなかったが、北西側に周溝と考えられる溝があり、南側には周溝を兼ねた墓道が掘削されている。この墓道と溝から推定される墳丘の形態は不整形な円形で、規模は直径約10mである。

石室 国分 36 号墳では墳丘の中央に位置する石室 1 と墳丘南西裾部に位置する石室 2 を確認した。

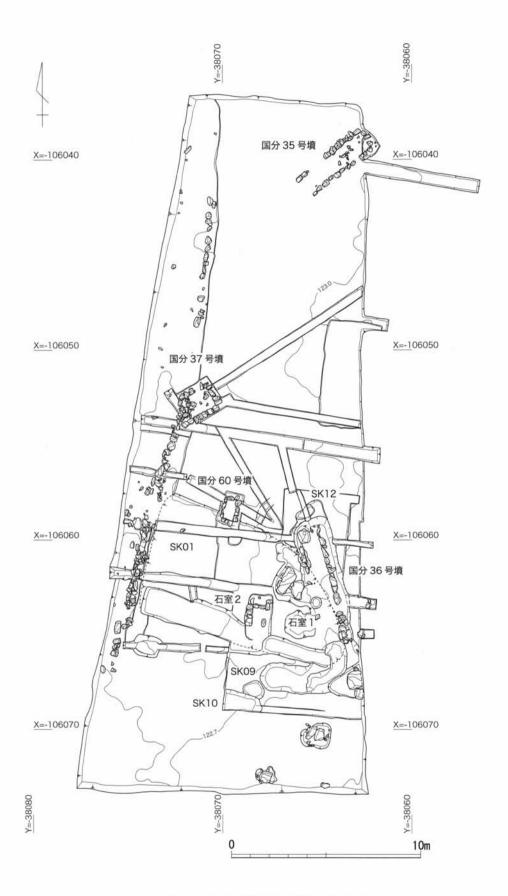
a. 石室1(第77·78·80図)

検出状況 南東に開口する無袖式の横穴式石室である。石室の主軸はN8°Wを測る。石室は北部と南西部が撹乱によって削平されており、石材は東側壁と西側壁の一部が残存しているだけであった。石室の規模は、全長6.2 m、幅1 mを測る。西側壁は奥壁寄りの基底石が3石、東側壁は基底石と2段目の一部が遺

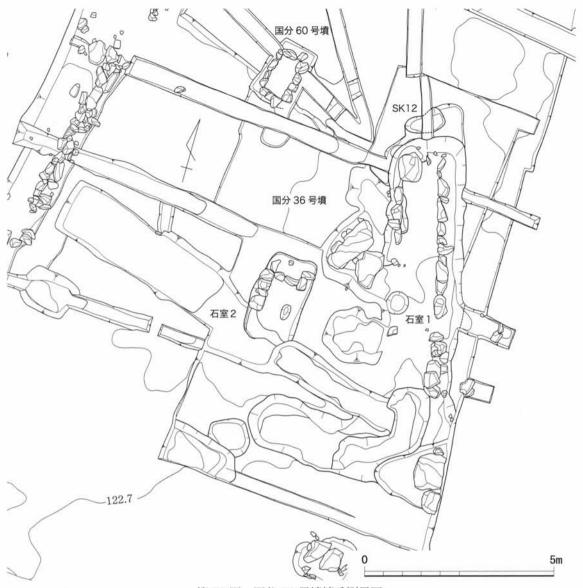




第76図 国分35号墳横穴式石室検出状況平面図



第77図 D10地区検出遺構配置図(1/200)



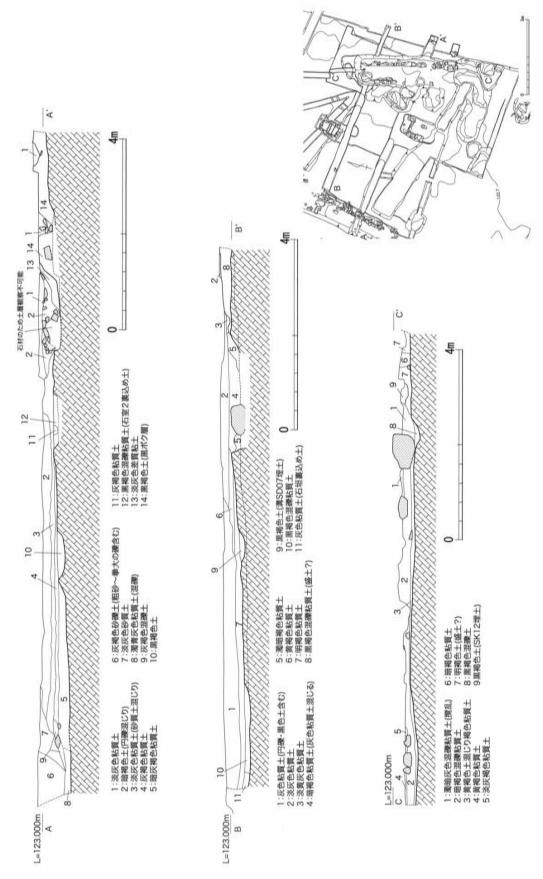
第78図 国分36号墳墳丘測量図

存していた。奥壁は撹乱により破壊され、西側の石材は玄室側に倒された状態で検出した。閉塞の状況は不明であるが、奥壁から 5.3m の地点で墳丘外に向かって急傾斜することから、この傾斜変換点あたりに閉塞部が想定される。

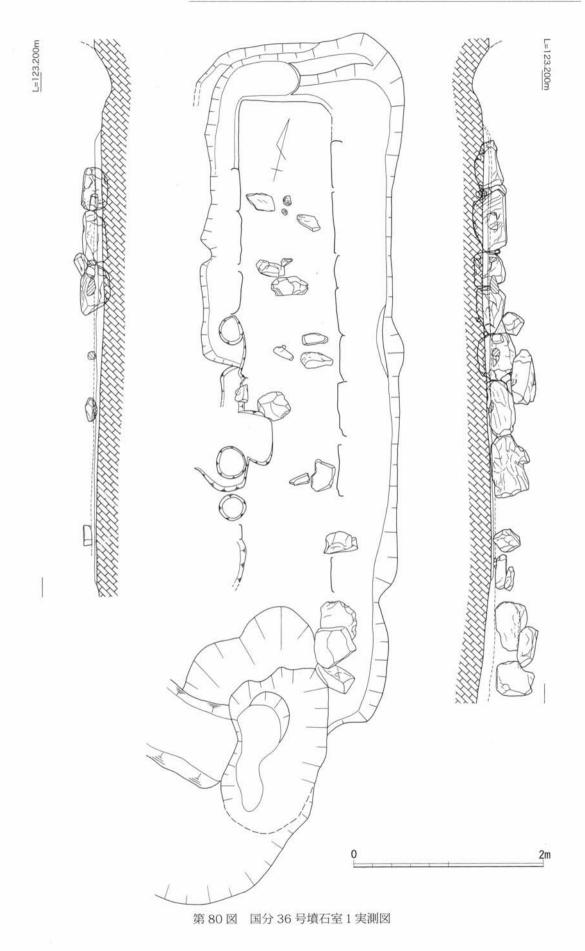
墓壙は隅丸方形である。底面には基底石を据え付けるための掘形が掘削されているが、いずれ も不整形である。玄室の床面は奥壁に向ってわずかに低くなっており、それを調整するかのよう に床面から埋葬面まで整地土が施されている。出土した遺物から追葬もしくは再利用されたと考 えられるが、断面観察ではそれに相当する埋葬面は確認されなかった。

床面には平らな面を上にした石材が複数あり、棺台と推定される。また、羨道の南端部分から 墳丘に沿って西側に向う墓道が掘削されている。

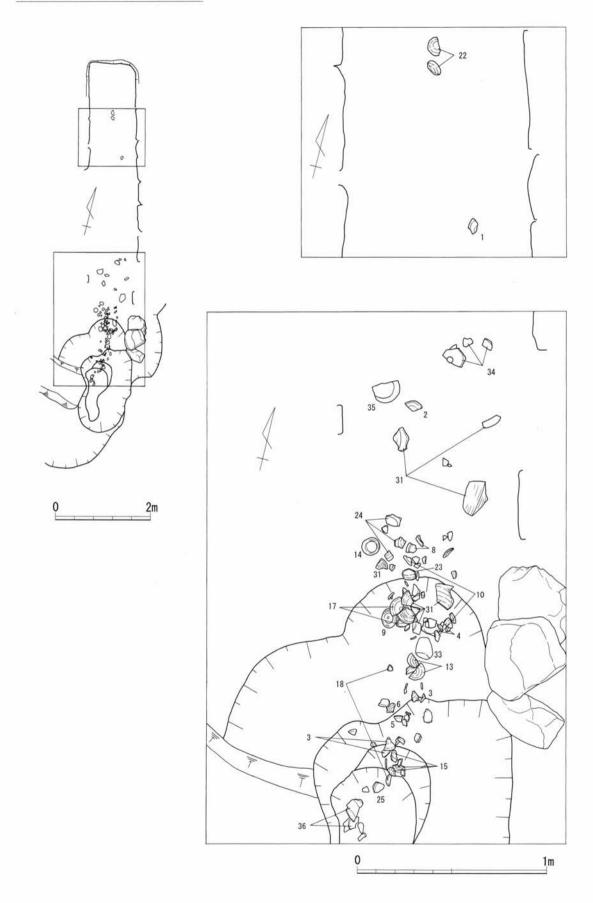
遺物出土状況(第81図) 石室1では奥壁付近、羨道部と墓道の境目付近、墓道西部で遺物が出土した。奥壁付近の床面では須恵器杯(1・22)が出土した。羨道部と墓道の境目付近および墓道西部で出土した遺物はほとんどが破片資料で原位置を保っていない。両者は接合関係にあ



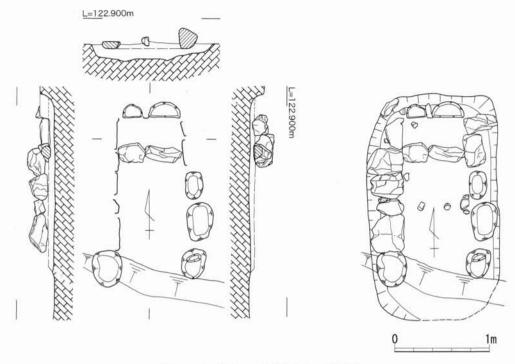
第79図 国分36号墳土層断面図



- 107 -



第81 図 国分36号墳石室1遺物出土状況図



第82図 国分36号墳石室2実測図

り、広範囲に散布することから追葬または再利用の際に玄室から掻き出されたと考えられる。遺物は羨道部付近で出土した杯 B の蓋と身 $(34 \sim 36)$ 以外は飛鳥時代の須恵器である。器種は杯 G の蓋と身が多く、他は壺 $(31 \cdot 33)$ や平瓶 (32) が数点ある程度である。土師器は暗文の施された杯 (37) 以外は破片が数点出土した。杯 B の蓋と身は、出土レベルが床面より $20 \, \mathrm{cm}$ 高いことと D 1 地区で同時期の追葬が見られることから追葬または再利用によるものである可能性が考えられる。

b. 石室2(第77・78・82図)

検出状況 南西に開口する小型の無袖式の横穴式石室である。石室の主軸はほぼ真北をとる。石室の遺存状況は悪く、西側壁と東側壁の一部の1段目が残存していたに過ぎない。残存部から推定される規模は、全長1.8 m、幅0.7 mである。また、羨道や閉塞部も撹乱による削平のため、詳細は不明である。石材は人頭大のものが多い。

墓壙は、石室を構成する石材がぎりぎり入る規模で南西部に開口する「コ」の字状の平面プランである。残存する規模は長軸 2.45 m、短軸 1.4 mを測る。墓壙底面と埋葬面の間には整地土が施され、床面を平坦に仕上げている。基底石は墓壙底面にそのまま置いて整地土に埋め込んで据え付けているようである。埋葬面は 1 面である。床面には、 2 石の石材が奥壁から 0.4m の位置に東西方向に並べて据えてあり、棺台と推定される。

遺物出土状況 石室掘形の埋土や整地土から土師器および須恵器の破片が出土しているが、図 化しえない。築造時期を示すような土器は出土しなかった。また、西側壁の石材抜き取り穴から 不明鉄製品1点が出土した。

(松尾史子)

出土遺物(第83図) 国分36号墳に伴う遺物として須恵器36点、土師器1点を報告する。なお、ここでは追葬もしくは再利用に伴う遺物も含めて報告する。

1 は須恵器杯H蓋の可能性が高い破片である。ただし、石室 1 からは須恵器杯Hが出土していないので、混入の可能性もある。 $2 \sim 9$ は須恵器杯G蓋である。天井部外面に回転へラケズリ調整を施した後につまみを貼り付ける。口径は 10cm 内外であるが、つまみの形状に違いがみられる。2 はかえりの端部が口縁端部よりも突出する。 $3 \cdot 4 \cdot 7 \cdot 8$ は胎土に黒色粒を含む。淡青灰色を呈し、焼成は堅緻なものが多い。

 $10 \sim 29$ は須恵器杯である。このうち、 $13 \cdot 17 \cdot 18 \cdot 21 \cdot 22 \cdot 25$ は、須恵器杯H蓋の天地を逆転したような形態を呈する。特に $13 \cdot 17 \cdot 21 \cdot 25$ は形態的に杯H蓋の可能性もあるが、上述のように杯Hが出土していないので、杯として報告する。27 は焼け歪みが著しいが、杯Aに近似する形態特徴を持っている。そのほかの個体はいずれも杯Gである。 $28 \cdot 29$ は杯Gの底部と考えられる。これらの底部はいずれもヘラキリ後ナデ調整、もしくは不調整である。 $10 \cdot 14 \cdot 17$ は黒色粒を含む。特に 14 は黒色粒を多量に含む。淡青灰色を呈し、焼成は堅緻なものが多い。

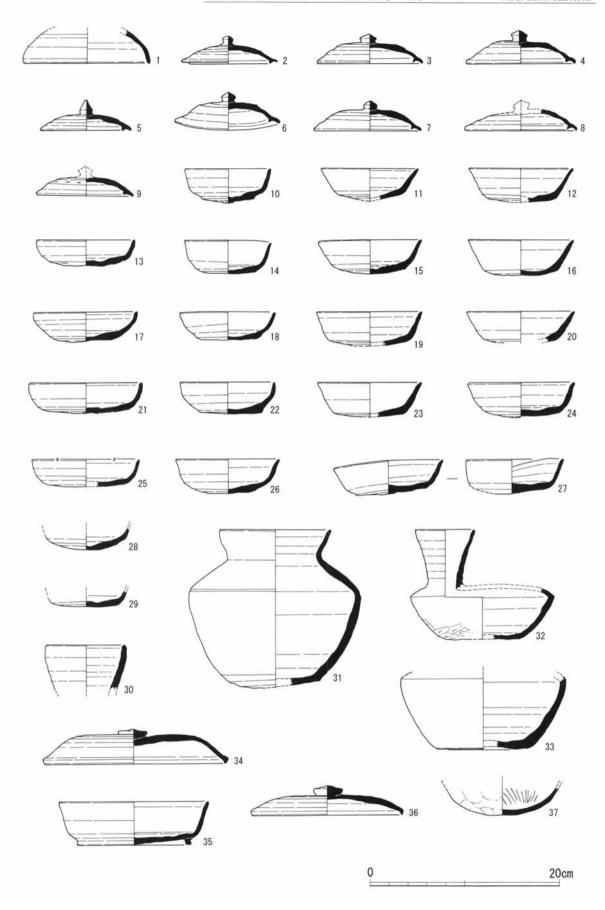
30 は提瓶の口縁部と思われる。31 は須恵器壺である。内外面とも回転ナデ調整で、底部外面はヘラキリ後不調整である。体部最大径付近に沈線を1条施す。口径11.6cm、残存高16.5cmである。胎土は密で、淡灰色を呈し、焼成は良好である。32 は須恵器平瓶である。直接、接合しない口縁部片と体部片を図上で復原したもので、最大径は推定値である。口縁部・体部上半は回転ナデ調整、体部下半は手持ちヘラケズリ調整、底部外面はナデ調整を施す。暗青灰色を呈し、焼成は堅緻である。33 は須恵器壺の体部下半の破片である。内外面とも回転ナデ調整で、底部外面はヘラキリ後ナデ調整を施す。

34 は須恵器杯 B 蓋である。器高の高い笠形を呈する。天井部外面はヘラキリ後ナデ調整を施す。また、天井部外面に灰を少量被る。口径 18.8cm、器高 3.7cm である。35 は須恵器杯 B である。焼け歪みがあるものの、口径 15.6cm、器高 4.6cm、底径 10.8cm である。34・35 は胎土に細砂を少し含み、青灰色ないし淡青灰色を呈し、焼成は堅緻である。36 は須恵器杯 B 蓋である。天井部は笠形を呈し、口縁端部を下方に屈曲させる。天井部外面に回転ヘラケズリ調整を施した後、つまみを貼り付ける。口径 15.8cm、器高 3.2cm である。胎土に細砂を少し含み、淡黄灰色を呈し、焼成はやや軟質である。形態的には D 1 地区で検出した国分 33 号墳の前庭部で出土した須恵器杯 B 蓋とほぼ同形態で、ほぼ同一の特徴を有する。

37 は土師器杯である。口縁端部を欠損する。内面はナデ調整の後、放射状暗文を施す。また、 外面にユビオサエを施す。胎土に細砂をごく少量含む。橙褐色を呈し、焼成は良好である。

以上の土器のうち、 $1\sim29$ は初葬時に近い時期を示す遺物と考えられ、 $34\sim36$ は追葬もしくは再利用時の遺物と考えられる。

(筒井崇史)



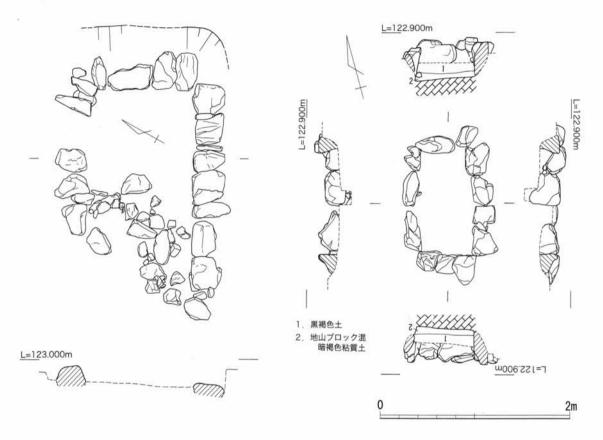
第83図 国分36号墳出土遺物実測図

③国分37号墳(第84図左)

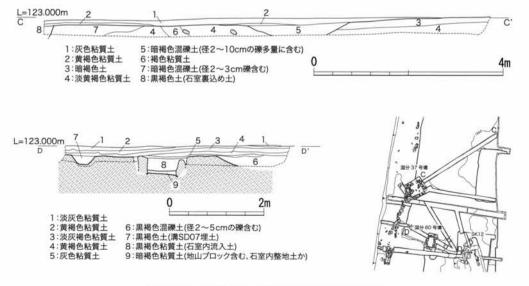
位置 調査区中央部の西寄りで確認した横穴式石室である。調査区西部では表土直下で近世以降の水田整備に伴う南北方向の石垣を検出し、石室を壊していることを確認した。

墳丘 墳丘は水田の造営により大部分が失われており、墳形や規模等は不明である。

石室 石室自体は盛土保存されることとなったため、平面形のみを確認した。石室は南西方向



第84 図 国分37・60 号墳石室実測図



第85図 国分37・60号墳石室土層断面図

に開口する幅約1 m、長さ2 m以上の横穴式石室で、主軸は N60° E を測る。入り口付近が近世以降に造られた石垣に壊されているため全体の規模は不明である。石室周辺の精査において須恵器片が出土しているが、石室内から出土した遺物がなく、築造時期は不明である。

④国分60号墳(第84図右)

国分36号墳と国分37号墳の墳丘の境に位置する、長さ1m、幅0.6mの竪穴系小石室である。石室の主軸は、N8°Eを測る。国分36号墳の墳丘断ち割り調査において確認したが、石室自体は盛土保存されることなったため平面形のみを確認したにとどまる。石室内中央部の断ち割りの断面観察により墓壙床面より5cm上で土色の違いを確認し、床面と判断した。出土遺物がなかったため築造時期は不明である。

(2)その他の時代の遺構・遺物

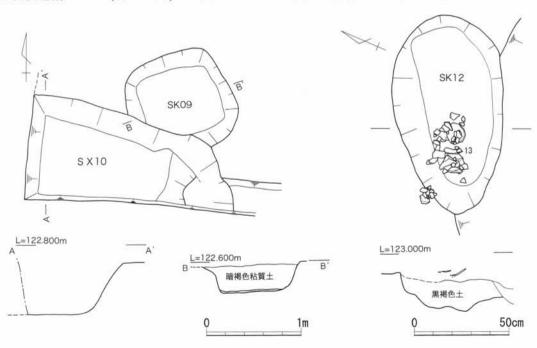
①検出遺構

土坑 S K 01 国分 36 号墳の墳丘を削平した際に石室の石材等を廃棄した土坑である。出土 遺物から近世以降に調査地一帯を水田開発した際に掘削されたと考えられる。

土坑 S K 09(第86図) 国分36号墳の墓道の南西で検出した一辺約1 m、深さ0.3 mの隅丸方形の土坑である。南西隅はS X 10 に削平されている。土坑の壁面は全面被熱しており、底には炭層が約2 cm 堆積していた。出土遺物がないため時期は不明である。

土坑 S K 12(第86図) 国分36号墳の石室1の北で検出した長さ1m、幅0.6mの楕円形の 土坑である。土坑の南西部分は石室1の北西部分とともに撹乱により削平されている。土師器甕が1個体分まとまって出土した(第87図13)。

土坑状遺構 S X 10(第86図) 土坑 S K 09 と重複する遺構である。一部検出したのみで、全



第86図 D10地区土坑SK09·SX10·SK12実測図

体の形状は不明である。須恵器片が出土したが、時期は不明である。

②出土遺物 (第87図)

ここでは、古墳以外の遺構および精査中や断ち割り等から出土した遺物について報告する。D 10 地区で明らかに遺構に伴うものは、土坑 S K 12 から出土した土師器甕 1 点のみで、それ以外は精査作業や石室検出作業、遺構面の有無を確認するための断ち割り作業中に出土したものである。全体として弥生時代や古墳時代の遺物は少なく、奈良時代以降、特に中世の遺物が多い。中世段階の遺構はほとんど確認されていないが、これは石室の破壊がこの時期以降に行われるとともに、何らかの土地利用が行われた結果と考えることができよう。

 $1 \sim 3$ は弥生土器の壺または甕の底部である。3 はタタキ調整が施される。弥生時代後期のもので、D1 地区で検出した竪穴式住居跡などと同時期の遺物である。

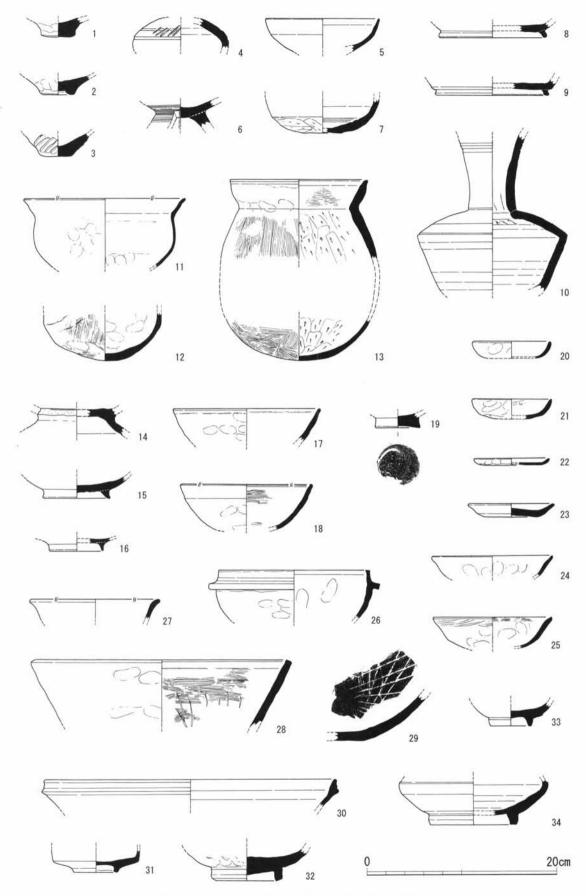
4~7は須恵器である。4は 中の本部上半と考えられる。穿孔は確認できない。肩部に沈線を 2条施し、ヘラによる刺突文を施す。5は高杯の杯部と考えられる。6は高杯の杯部と脚部の接 合部と考えられ、外面にカキメを施す。方形の透孔が確認できる。7は短頸壺の底部の可能性が ある破片である。外面に手持ちのヘラケズリ調整を施す。いずれも古墳時代後期から飛鳥時代に かけてのもので、D10地区で検出した古墳や周辺に存在すると考えられる未調査の古墳に伴う ものと考えられる。

8・9は須恵器杯Bの底部である。10は須恵器長頸壺である。口縁端部と底部を欠損する。同一個体と思われる破片を図上で復原した。口頸部外面に沈線を2条、体部最大径付近に沈線を1条施す。全体に回転ナデ調整を施す。11~13は土師器甕である。11はやや薄手の甕である。12は甕の底部と考えられる。13は土坑SK12から出土したものである。破片が多数あったものの、接合できなかったため、図は推定である。口縁端部をわずかに斜め上方につまみ上げ、頸部は「く」字状に屈曲する。口縁部内面に横方向のハケ調整を施す。体部外面は縦方向のハケ調整を、体部内面は縦方向のケズリ調整を施す。口径は14.4cmであるが、器高は不明である。これらは奈良時代のものと考えられる。

14 は須恵器脚付壺の脚部の接合部と考えられる。15 は灰釉陶器椀の底部である。内面に灰釉がかかる。16 はやや摩滅するものの、黒色土器椀の底部と考えられる。

17 は瓦器椀で、摩滅が著しい。18 は瓦器椀と同形態である。淡茶褐色を呈することから土師器椀の可能性もある。内面にミガキ調整を施す。19 は土師器杯または皿の平高台を呈する底部である。底部外面に糸切り痕がみられる。 $20 \sim 23$ は小型の土師器皿である。 $20 \sim 22$ は手づくねの成形であるが、23 は底部外面に糸切り痕がみられ、回転台成形と考えられる。 $24 \cdot 25$ は中型の土師器皿である。ユビオサエやナデ調整で整形する。25 は口縁部内外面にハケ調整を施す。26 は瓦質土器の羽釜である。小型品もしくはミニチュアである。27 は青磁椀の小破片である。 $28 \cdot 29$ は瓦質土器の擂鉢である。28 は内面にヨコハケを施した後に摺目を施す。30 は信楽焼の鉢である。 $31 \sim 34$ は近世陶器の椀である。

(筒井崇史)

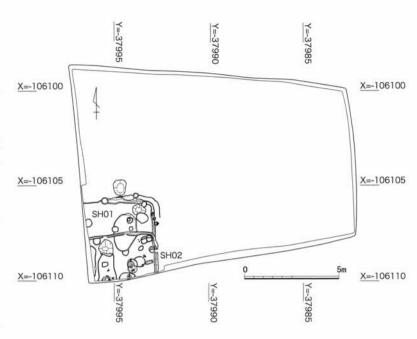


第87図 D10地区遺構・包含層出土遺物実測図

3. D 2地区

D 2 地区は D 1 地区の 南東部に設定された地区 である。基本的な土層は D 1 地区と同様であり、表 土・床土を除去した段階 で、橙褐色粘質土系の地山 面を検出した。削平のため か黒ボク層は確認されな かった。

この地区では南西部で 弥生時代後期の竪穴式住 居跡2基を検出した。また、



第88図 D2地区検出遺構配置図 (1/200)

床土や耕作土中には瓦器や近世陶磁器の小片が含まれていたが当該期の遺構については検出する ことはできなかった。

以下、2基の竪穴式住居跡と出土遺物について概観する。

①竪穴式住居跡 S H 01(第89図)

遺構 方形の平面プランを呈する竪穴式住居跡である。遺存状況は極めて悪く、検出面から掘 形床面まで数 cm しか遺存していない。後述する竪穴式住居跡 S H 02 に切られている。

検出状況での規模は東西4m、南北2mを測り、主軸はほぼ北にとる。

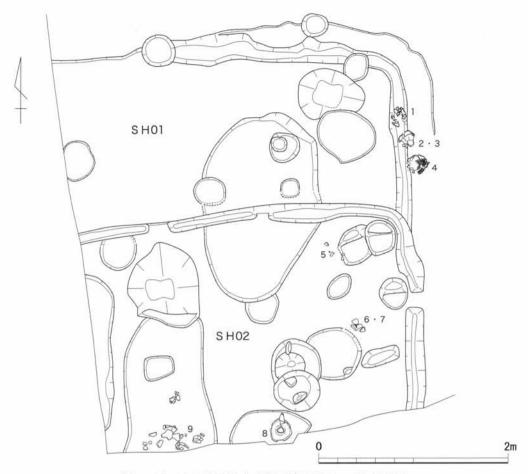
住居跡に伴う施設として周壁溝およびピットを検出した。周壁溝は住居掘形壁面より東側では やや内側に掘削されている。また、北側では途中で途切れている状況が観察されたため、住居内 を完周するものではない。

ピットは住居北東隅のものが深く掘削されており、主柱穴である可能性が考えられたが、対になるピットを確定することはできなかった。また、床面中央は緩やかなレンズ状に窪んでおり、竪穴式住居跡 S H 02 床面下部でもこの遺構が確認されている。

出土遺物は東周壁溝上から掘形壁面までの床面で3個体の壺・甕 (第90図 $1\sim4$)が並べられたような状況で検出された。周壁溝床面に接していないことから周壁溝が一定程度埋没してから据え置かれた可能性がある。

出土遺物(第90図) 竪穴式住居跡 SH 01 出土遺物はすべて弥生土器である。石器、鉄器などは検出されていない。そのうち 4 点を図示した。いずれも検出時に劣化が進行しており、取り上げ段階で細片化してしまった。

1 は壺である。体部下半のみ遺存する。扁球状の体部を呈し、突出底をもつ。底部は被熱のため剥離が著しい。体部最大径から下半にかけて煤が付着しており、煮沸具として使用されたとみ



第89 図 D 2 地区竪穴式住居跡 S H 01 · 02 平面図

られる。調整は内面にハケが観察される。

2・3は甕である。検出状況からみて同一個体である可能性が高い。口縁は単純口縁であり内 湾気味に立ち上がる。摩滅が著しいが、外面に左下がりのタタキが観察される。底部は平底を呈 し、外面にはタタキが認められる。両者とも暗灰褐色の色調を示している。

4 は壺の底部である。突出底をもつ。底部中央には不整形な窪みが認められるが、これは突出 底を付す際の整形が充分でなかったために生じた可能性が高い。被熱のためか赤変している。

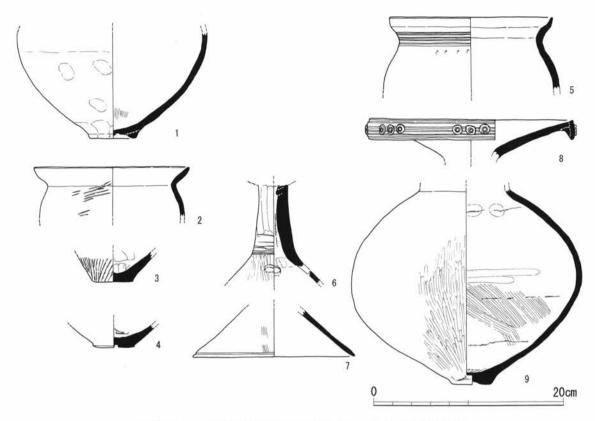
②竪穴式住居跡 S H 02(第89図)

遺構 竪穴式住居跡 S H 01 の南に位置し、同住居跡を切る。また、東辺がほぼ一致することから、竪穴式住居跡 S H 02 を建て替えたものである可能性が高い。

検出状況での規模は東西 2.4 m、南北 3.6 mを測り、主軸はほぼ北にとる。

遺構の遺存状況は悪く、竪穴式住居跡 S H O1 同様、掘形床面まで数 cm を測るにすぎない。 住居に伴う施設として、周壁溝・ピット・土坑などが検出された。ピットには切り合いを持つも のがあることから、竪穴式住居跡 S H O1 に伴うものも存在するとみられるが、抽出するには至 らなかった。そのため、主柱穴についても特定できていない。検出部における周壁溝は、途切れ ながらも住居壁面に沿って完周する。

遺物は住居床面から細片化した甕(第90図5)、高杯(第90図6・7)が、南辺中央の土坑で



第90図 D2地区竪穴式住居跡SH01・02出土遺物実測図 (番号は遺構内の番号に対応)

は土坑上面から器台 (第90図8)が逆位で、その西に位置する土坑内からは壺 (第90図9)が 細片化した状態で検出された。

出土遺物(第90図) 竪穴式住居跡 S H 02 出土遺物はすべて弥生土器である。そのうち 5 点を図示した。

5は受け口状口縁をもつ甕小片である。頸部には櫛描直線文が1条巡る。被熱による赤変、劣化が著しい。

6・7は高杯脚部である。出土位置や胎土からみて同一個体であるとみられるが、接合関係はない。6は中空の脚柱部をもち、外面にはヘラ状の工具による平行直線文が施される。7はやや内湾気味に広がる脚部をもつ。脚外端面に1条のヘラ描沈線文を施す。両者とも被熱が著しい。

8は器台である。杯部はほぼ完存する。垂下する口縁をもち、口縁外側面は4条から成る擬凹線文と3個一組の円形浮文により加飾する。この個体も被熱による赤変が著しい。

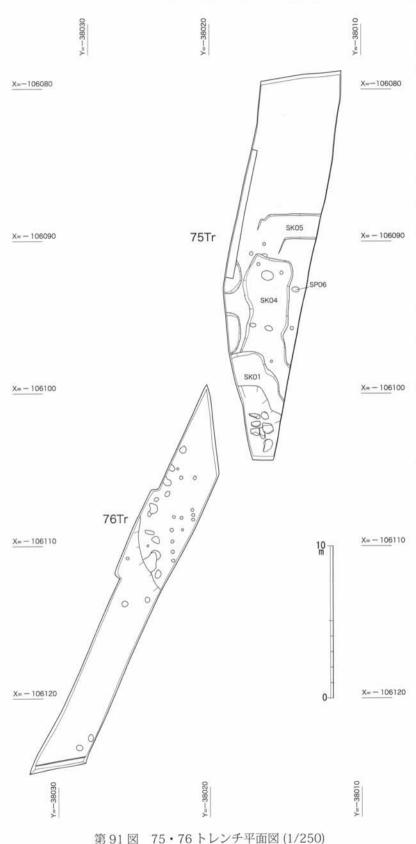
9は壺である。頸部より上並びに体部上半の大部分を欠く。扁球形の体部にやや上げ底気味となる突出底を付す。内面は縦方向のハケ、外面は縦方向のヘラミガキにより調整する。竪穴式住居跡 S H 02 出土土器の大部分が被熱しているのに対し、この個体はほとんど被熱していない。

なお、図示したものを含め、竪穴式住居跡 S H 02 出土土器の大部分が被熱しているが、竪穴式住居跡 S H 02 では焼失などの痕跡を示す状況は確認することができなかった。

(石崎善久)

4. 75・76 トレンチ

75・76トレンチはD1地区の南に位置する用水路に相当する部分に設定されたトレンチであ



る。試掘調査の結果、遺物、 遺構を検出したため、拡 張したトレンチである。

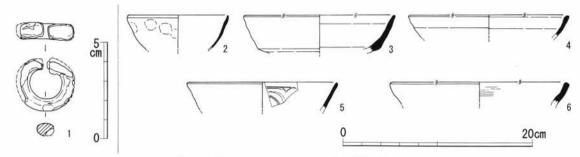
①検出遺構 (第91図)

75トレンチでは表土・ 床土を除去した暗橙褐色 の地山面上で不整形な土 坑(SK01・04)や溝状 の遺構(SK05)、ピット などを検出した。ピット については調査範囲が狭 小なため、建物として復 原することはできなかっ たが、土坑のうち横穴式 X=-106100 石室墳に関連する遺構(S K01)を確認した。

土坑 S K 01 土坑 S K 01 はトレンチ南側で検出された不整形な掘形をもつ土坑であり、土坑内からは多量の石材が検出された。

石材は拳大の小礫から 一辺1m以上の大型石材 まで多数の自然石が確認 された。なお、大型石材 を除去することができず 完掘には至っていない。

出土遺物は小片が多く、 当初、この土坑の性格・ 時期について明らかにす ることができなかったが、



第92図 75・76トレンチ出土遺物実測図

掘削作業を進めるうちに銀環(第92図1)が土坑内より検出された。

このことにより、この土坑 S K 01 は近隣の横穴式石室墳を破壊し、その石材を廃棄した土坑として判断するに至った。石室は D 4 地区や、 D 8 地区の石材廃棄土坑のあり方からみて、高所側に存在する石室を解体し、低位側に土坑を掘削しその土坑内に石材を遺棄する例が多いため、土坑 S K 01 の高所側すなわち東の調査区外に存在する可能性が高いと考える。

また、この土坑 S K 01 の存在から溝状遺構 S K 04・ S K 05 は古墳の周溝の可能性があることを指摘しておきたい。

76 トレンチは 75 トレンチの南に設定されたトレンチである。両トレンチの間には水田を区画 する石垣が設けられ、両者の比高差は約 1.6 mを測る。

このトレンチでは床土を除去した段階で北側は暗橙褐色系の地山面もしくは黒褐色粘質土 (黒ボク層)となり、小規模なピット群が検出された。一方、南側は自然の緩斜面を形成しており、その上面に暗灰色粘質土が堆積している状況が確認された。この暗灰色粘質土内には細片化した弥生土器・須恵器などが含まれている。

遺構はこの暗灰色粘質土上で小規模なピットを検出した。また、この土層を掘削し、下層遺構 の検出に努めたが明確な遺構を確認することはできなかった。

②出土遺物 (第92図)

75・76トレンチでは出土遺物の大部分が細片化しており、図示することができたのは6点の 遺物にとどまる。なお、細片のため図示できないものの、出土遺物の大部分は弥生土器である。

1 は 75 トレンチの土坑 S K 01 より出土した銀環である。断面長楕円形の銅芯に銀を施している。遺存状況は悪く、表面の剥離、錆の進行が著しい。

2は75トレンチのピットSP 06から検出された瓦器椀片である。表面の摩滅が著しい。

3~6は76トレンチの包含層から出土している。遺構に伴うものはなく、いずれも小破片である。3は須恵器杯である。直線的に立ち上がる体部をもつ。4は須恵器杯身である。やや内湾する口縁をもつ。5は青磁椀小片である。6は瓦質鍋口縁である。内面には横方向のハケが観察されるが、これは一次調整を行ったものが、ナデ消されずに残ったものと判断される。

(石崎善久)

5. D 3地区

D3地区は、D1地区の南約 90m に位置する。D3地区は、対象地が農道によって東西に分かれるため、東側の調査区をD3-1地区、西側の調査区をD3-2地区として調査を行った。

D3-1地区では、弥生時代後期の自然流路、中世土坑・柱穴などを検出した。このほか時期 不明の掘立柱建物跡や、近世以降の土坑・撹乱なども確認した。D3-2地区では、古墳の周溝 の可能性がある溝、中世の土坑・柱穴などを検出した。ここでは両調査区の遺構を合わせて報告 する。

(1)弥生時代の遺構・遺物

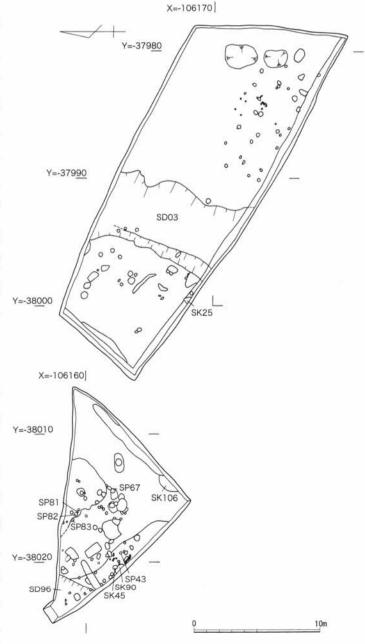
①検出遺構

自然流路 S D 03(第93図) 弥生時代の遺構と考えられるものは、D3-1地区のほぼ中央で検出したSD03のみである。おおむね北から南に向かって流れると考えられる。検出長9.8m、幅4.5m、深さ0.3mである。遺構自体は、調査区南壁に沿って断ち割りを行ったものの、自然流路と判断したため完掘していない。精査中に流路の上面から弥生時代後期の土器片などが出土した(第95図1~10)。

②出土遺物

自然流路 S D 03(第95図1~ 10) 1~9は弥生土器、10は土 錘である。

1は器台である。口縁部外面に 擬凹線文を4条施し、竹管文の円 形浮文を貼り付ける。2~5は受 け口状の口縁を呈する甕である。 細部の口縁形態は異なる。6は口 縁部が「く」字状を呈する甕また は鉢である。7は壺肩部の破片で、 直線文の上に刺突文、下に半円文



第93 図 D 3 地区検出遺構配置図 (1/300)

を施文する。8・9は甕の底部と考えられる。

(2) 飛鳥時代の遺構・遺物

①検出遺構

溝SD96(第93図) D3-2地区の西端で検出した溝である。埋土から須恵器杯G蓋(第97図63)が出土したことから古墳の周溝の可能性が高いと判断した。検出長3.0m、幅2.8m以上、深さ0.25m前後である。溝の西肩は調査区外であった。この周溝をもつ古墳の墳丘を当初、東側に想定していた。しかし、東側で検出された遺構は土坑や柱穴のみで、古墳に関連するような遺構は検出されなかった。また、出土遺物も中世の土器のみで、古墳に伴うような遺物は出土しなかった。以上のような検出状況から、SD96を伴う古墳は西側に存在すると考えられる。

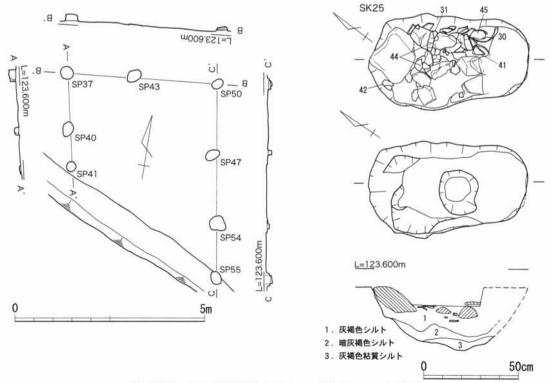
②出土遺物

満SD96(第97図63) 溝SD96からは須恵器・土師器・瓦器・陶磁器などが出土した。ここでは、古墳の可能性を示唆する須恵器杯G蓋を取り上げる。口径10.8cm、残存高2.5cmで、口縁部から天井部にかけての破片である。天井部に回転ヘラケズリ調整を施す。

(3)中世の遺構・遺物

①検出遺構

土坑 S K 25(第94 図右) D 3 -1 地区の中央部南壁に接して検出した土坑である。平面形は隅丸長方形を呈し、長さ 0.8m、幅 0.5m、深さ 0.3m である。土坑の一部は現畦畔の下に潜り込んでいた。土坑内からは多数の土器とともに、 $10\sim 25$ cm 程度の角礫が出土した。出土した土器には瓦器椀・皿、土師器杯・皿がある (第96 図 $30\sim 55$)。



第94回 掘立柱建物跡SB01、土坑SK25実測図

土坑 S K 106 D 3 - 2 地区の南東隅で検出した土坑である。遺構の東半部は調査区外にあるため、半円形状の土坑として検出した。直径約 1.8 m、深さ 0.1 m前後mである。土坑からは土師器皿、瓦質土器鍋・羽釜、須恵器擂鉢・甕などが出土した (第 96 図 56 ~ 62)。

柱穴 $D3-1\cdot 2$ 両地区とも多数の柱穴を検出したが、建物跡の可能性のあるのは、時期不明の掘立柱建物跡 SB01(後述)のみである。D3-2 地区では、建物跡としてはまとまらないものの、多くの柱穴からこの時期の遺物が出土した。なお、上述した以外の土坑や溝からもこの時期の遺物が出土している (第95 図 $11\sim 29$)。

このほか、D 3-2 地区の中央北寄りで、大量の角礫が無秩序な状態で検出された。当初は古墳の石室が破壊されたものではないかと考え、上述の溝 S D 96 もこれに伴うものと考えた。しかし、調査を進めた結果、これらの礫の間からは瓦器椀など中世の土器が出土するものの、古墳の兆候を示す遺物も、遺構の状況も確認されなかったため、この遺構は古墳ではないと判断した。また、仮に中世の遺構としても構造や性格が明らかでなく、最終的に人為的な遺構ではないと判断した。なお、この礫の周辺や溝 S D 96 からは中世段階の遺物が多数出土した(第 97 図 $65 \sim 89$)。これらの土器は包含層出土遺物として、項を改めて報告する。

②出土遺物

柱穴 SP82(第 95 図 $11 \sim 15$) $11 \sim 13$ は瓦器椀である。いずれも摩滅のため調整は不明である。13 は口径 12.1cm、器高 4.4cm である。14 は土師器皿である。15 は瓦質土器の羽釜である。

柱穴SP 43(第95図16・17) 16・17は土師器皿である。

柱穴SP83(第95図18・19) 18・19は土師器皿である。

土坑 S K 90(第95 図 20・21) 20 は瓦器椀である。内面はミガキ調整を施す。高台は断面 三角形を呈する。21 は土師器皿である。平底の底部に外反する短い口縁部をもつ。

柱穴SP 45(第 95 図 22・23) 22・23 は土師器皿である。22 は外面に二段ナデ調整を施す 大型の皿である。23 は底部に糸切り痕を残す小型の皿である。

溝SD96(第95図24) 24 は瓦器椀である。口縁部はヨコナデ調整を施して屈曲を有する。口縁端部内面には沈線を施さない。内面にミガキ調整を施す。SD96 は上述したように古墳の周溝である可能性が高いが、溝からは中世の土器が一定量出土しており、埋没した時期を示していると考えられる。

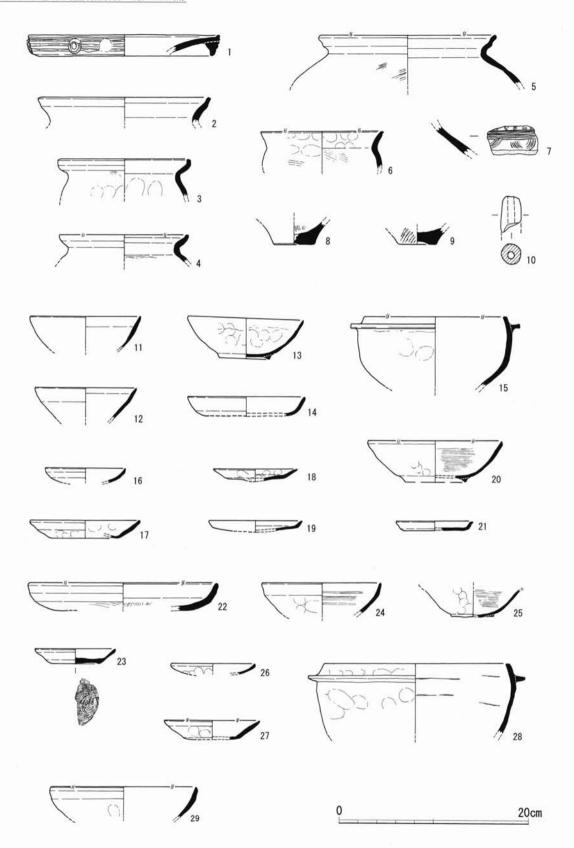
柱穴SP 81(第95 図 25) 25 は瓦器椀である。低い高台を有する。内面にミガキ調整を施す。 柱穴SP 11(第95 図 26) 26 は土師器皿である。

溝SD 03(第95 図 27) 27 は土師器皿である。口縁端部をわずかにつまみ上げる。

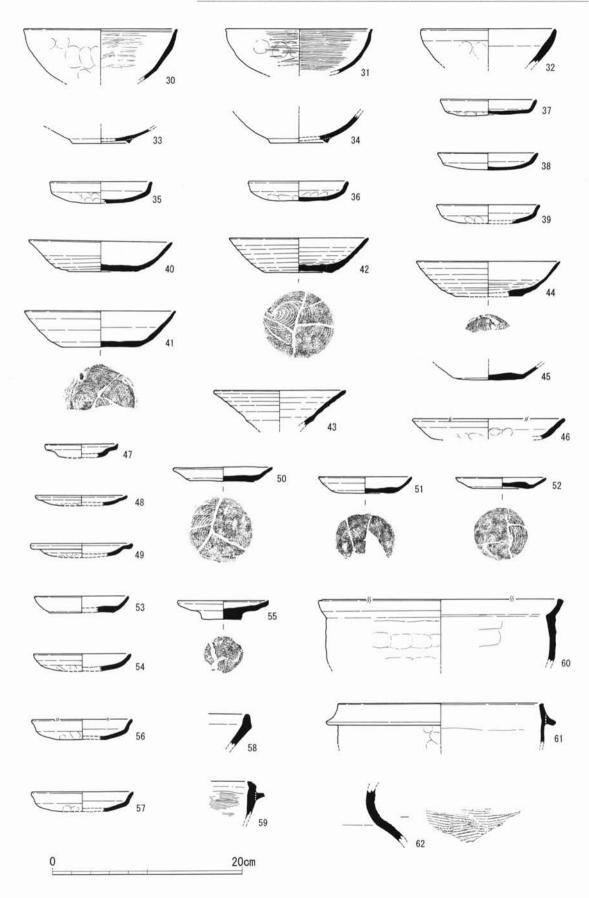
柱穴SP 67(第95 図 28) 28 は瓦質土器の羽釜である。

柱穴SP 22(第95 図 29) 29 は瓦器椀である。口縁端部内面に沈線を施さない。内外面とも 摩滅のため調整は不明瞭である。

土坑SK 25(第96 図 30~55) 30~34 は瓦器椀である。30~32 は口縁部から体部にか



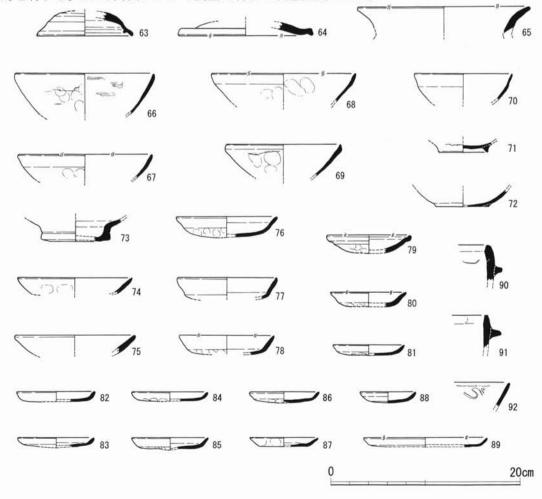
第95図 D3地区出土遺物実測図(1)



第96図 D3地区出土遺物実測図(2)

けての破片で、口縁端部内面に沈線を 1 条施す。 $30\cdot 31$ は体部がやや丸味を帯びて立ち上がる。 32 はやや厚手の個体である。口径は $14.0\sim 16.0$ cm である。 33 は高台の断面形が三角形状を呈する。34 は高台の断面形が台形状を呈し、丸味を帯びて立ち上がる。 $35\sim 39$ は瓦器皿である。口径 10cm 前後、器高 2 cm 前後で、ほぼ同形同大のものである。ただし、 $37\cdot 38$ はやや器高が低い。 $40\sim 45$ は土師器杯である。43 はいびつなためやや小型に復原しているが、いずれもほぼ同形同大の形態を呈する。口径 $14.2\sim 15.8$ cm、器高 $3.4\sim 3.8$ cm である。全体に回転ナデ調整を施し、底部外面に糸切り痕がみられる。 $46\sim 55$ は土師器皿である。46 はやや大型の皿で、外面に二段のヨコナデ調整を施す。 $47\sim 49$ はいわゆる「て」字状口縁を呈する小型の皿である。 $50\sim 53$ は底部外面に糸切り痕を残す小型の皿である。54 はナデ調整やユビオサエで整形する小型の皿である。55 は底部外面に糸切り痕が見られる平高台の皿である。

土坑SK 106(第96図56~62) 56・57 は土師器皿である。ともに口縁部にヨコナデ調整を施して外反させる。58 は東播系の須恵器鉢の口縁部である。60 は瓦質土器の鍋である。口縁部にヨコナデ調整、外面に横方向のユビオサエ痕が残る。59・61 は瓦質土器の羽釜である。59 は口縁部がわずかに内方へ屈曲する。内面に横方向のハケ調整を施す。61 はな斜め下方に伸びる鍔を有する。62 は外面にタタキ調整を有する須恵器甕である。



第97図 D3地区出土遺物実測図(3)

(4)時期不明の遺構

掘立柱建物跡 SB01(第 94 図左) D3-1 地区南東部で検出した。南側は調査区外に伸びると考えられる。柱穴の間隔や並びは不揃いであるが、桁行き 3 間 (5.1 m) もしくはそれ以上、梁間 2 間 (4.0 m) である。土器の細片を出土した柱穴もあるが、時期を決定するには至らなかった。

(5)包含層出土遺物

ここでは精査中や遺構の検出中に出土したもの、明らかに混入と考えられる遺物を包含層出土 遺物として報告する (第 97 図 64 \sim 92)。

64 は D 3-1 地区で検出した土坑 S K 25 に混入していた須恵器杯 B 蓋の破片である。奈良 時代のものと考えられるが、この時期の遺構は D 3 地区では確認していない。

 $65 \sim 92$ は D 3 - 2 地区で精査中および角礫検出中などで出土した土器である。

65 は土師器甕である。形態から奈良時代のものと考えられる。

 $66 \sim 72$ は瓦器椀である。 $66 \sim 70$ は口縁部から体部にかけての破片で、口縁端部に沈線を施さない。66 の内面にはわずかにミガキ調整を確認できるが、 $67 \sim 70$ は摩滅のため、調整を確認することはできない。 $71 \cdot 72$ は底部で、71 は断面三角形のやや高めの高台が貼り付けられる。72 はやや低い高台が貼り付けられる。

73 は土師器椀もしくは杯の底部である。底部が大きく凹む形態を呈する。底部外面に糸切り痕が残る。

 $74 \sim 89$ は土師器皿である。口径 $10 \sim 12$ cm 程度の中型の一群 $(74 \sim 78)$ と、口径 $7 \sim 9$ cm 程度の小型の一群 $(79 \sim 87)$ がある。79 は口縁部がいわゆる「て」字状口縁を呈する。またもう一回り小さい土師器皿もある (88)。89 はやや口径が大きく復原することができる破片である。今回図示した個体では底部に糸切り痕の残るものは見られない。いずれもユビオサエやナデ調整で整形し、口縁部にヨコナデ調整を施す。

90・91 は瓦質土器羽釜の口縁部の破片である。長さ1 cm 程度の短い鍔がつく。

92 は青磁椀の破片である。

66~92は中世のものと考えられる。

(筒井崇史)

6. D4地区

D 4 地区は、D 1 地区の南西約 100 mに位置する。隣接して、今回の整備事業から現状保存ということで地区除外された国分 1 号墳が位置する。調査区は当初、国分 1 号墳の南西側とその南側の水田に設定した。前者を D 4 - 1 地区、後者を D 4 - 2 地区として調査を開始した。その後、埋没した古墳の存在が確認され、D 4 - 1 地区の西側の水田についても、調査区を拡張し、調査を実施した。

D 4 地区では、最終的に、古墳 4 基 (国分 43 号墳~ 46 号墳)、国分 1 号墳の周溝、平安時代の石組み土坑、中世の土坑・柱穴などを検出した。このほか、古墳周溝などから少量の弥生後期の土器が出土している。このことから、遺構は検出されなかったものの、D 4 地区周辺では弥生時代後期の生活領域が広がっていたと考えられる。

(1) 古墳時代の遺構・遺物

①国分 43 号墳

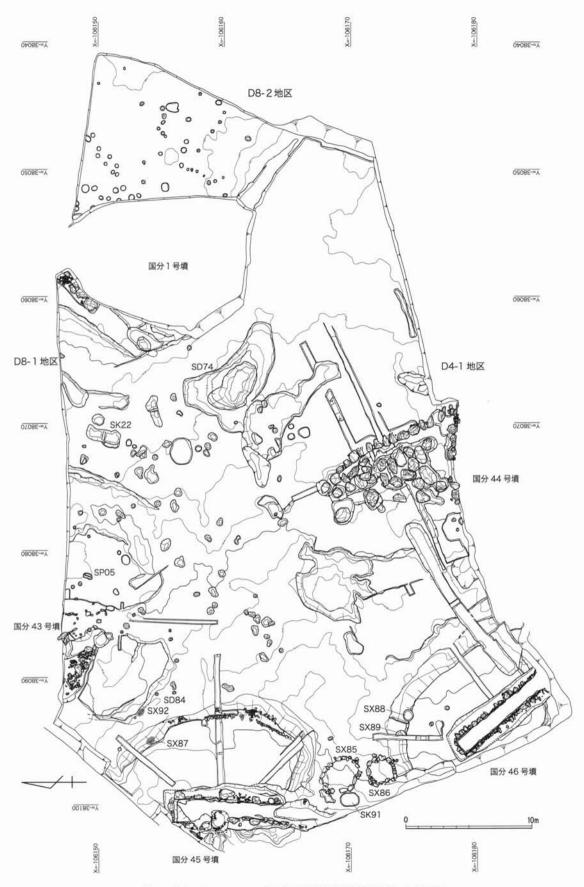
位置 国分 43 号墳は、D 4 - 1 地区北端で検出した古墳である。墳丘の大部分は、調査区外で、南に開口する横穴式石室の羨道と前庭部を確認した。東側に 15 mほど離れて 1 号墳が位置する。南西側には周溝を共有して国分 45 号墳が位置する。羨道床面の標高は 121.5 mである。

ところで、国分 43 号墳の前面は東西約 25 m、南北約 10m の比較的広い空隙地が広がっており、D 1 地区のように古墳が密集するような状況ではない。

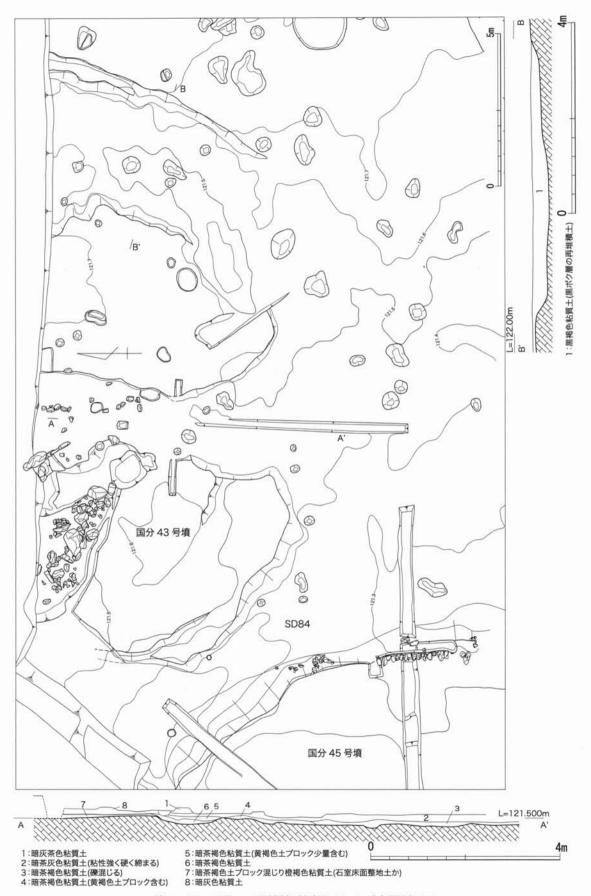
墳丘(第99図) 上述のように、横穴式石室の羨道と前庭部、およびそれに伴う墳丘を確認したのみで、墳丘の大部分は調査区外に位置する。また、墳丘そのものの削平も著しく、羨道部では石材の抜き取り穴を確認したのみで、石材は残存していなかった。石室の西側壁に相当する石材は、現在の畦畔に伴う石垣として再利用されていたため、大きく動かされていた。この石垣の西側には長さ6.5 mほど、幅3.0 m以上の不整形な土坑が掘られており、古墳に伴うと思われる遺物のほか、奈良時代から中世にかけての土器が多数出土した。

墳丘の西側では弧状を呈する周溝SD84を検出した。この周溝は幅4m前後、深さ0.2m前後で、前庭部へとつながる。また南西側で検出した周溝も弧状を呈するが、国分45号墳と共有するよう状況にあり、墳丘側の周溝肩も弧状を呈する。なお、検出した周溝から復原できる古墳の規模は、直径15~16mほどの円墳と考えられる。

石室 国分 43 号墳の石室としては、羨道に相当する箇所を確認したものの、石材はすべて抜き取られるなど、いっさい残存していなかった。羨道の掘形は、東側では確認できたが、西側は大規模に攪乱されており、不明である。羨門は、石室掘形がいったん狭くなり、再び「ハ」字状に開いて前庭部に至る、もっとも狭い部分に位置したと考えられる。ここに近接して検出した石材の抜き取り痕が、羨門部に相当するのかもしれない。以上から検出した羨道の規模は、検出長が 4.0 m、掘形幅が 2.2 m以上と考えられる。羨道掘形底面上で 10 ~ 25cm ほどの角礫を一直線に並んだような状態で検出した。前庭部までは至らないものの、排水溝等に伴う可能性がある。



第98図 D4-1 · D8地区検出遺構配置図 (1/300)



第99図 国分43号墳墳丘測量図および土層断面図



第100図 国分43号墳遺物出土状況図

ただし、掘形等は確認できなかった。

遺物出土状況 (第 100 図) 羨道では須恵器杯H(4・5)・同蓋(1)・杯G(11・12・14)・ 高杯脚部 (23)、不明鉄器 (41) などが出土した。完形で出土したものは杯H(4)のみで、ほかは 破片の状態で出土した。また、何らまとまりも認められなかった。したがって、羨道に副葬され た遺物と思われるが、石材の抜き取りなど、石室を破壊した際に攪乱されてしまったと考えられ る。

前庭部では須恵器杯H(3・6)・杯G(13・15)・腿(25~27)・提瓶(28、ミニチュアか)・ 甕(33~35)、土師器甕(36)、馬具(39・40)などが出土した。 腿・提瓶(25~28)が完形に近い状態で出土したほかは、破片化しているものが多い。須恵器の甕(33~35)は、接合しなかった破片も含めて前庭部の広範囲から土器片が出土した。前庭部の前面に供献されていた須恵器甕の存在が想定できる。これらは接合作業を試みても、完形まで復原できるものがほとんどなかったことから、大規模に撹乱されていると考えられる。また、馬具(39・40)も本来は石室内に副葬されている遺物であるが、前庭部から出土していることから、掻き出された可能性がある。

須恵器杯 (20・21)・ 聴 (24) は周溝埋土から出土したもので、必ずしも国分 43 号墳に伴うものとは限らない。また、須恵器脚台付広口壺 (32) は周溝内のほぼ同一地点でまとまって出土した。周溝内に供献、もしくは墳丘や外堤側から転落した可能性が考えられる。

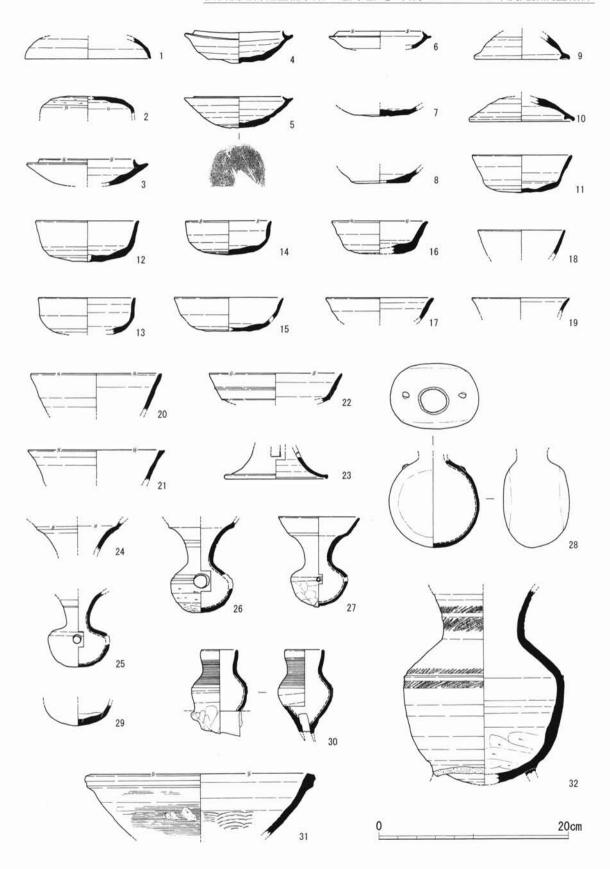
このほか、羨道西側で中世から近世にかけて掘られたと考えられる土坑を検出した。そこから須恵器杯H蓋(2)・杯G蓋(9・10)・杯G(16)・土師器杯(38)などが出土した。本来、国分43号墳に伴う遺物であったと考えられる。

なお、調査は羨道の一部と前庭部に限られたため、ここで報告する遺物が国分 43 号墳に伴う 遺物のすべてではない。

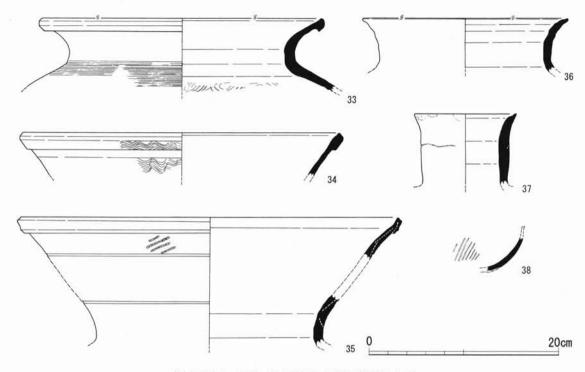
出土遺物 (第 101 ~ 103 図) 国分 43 号墳に伴う遺物として須恵器 37 点、土師器 1 点、鉄器 3 点を報告する。

a. 土器類

- 1・2は須恵器杯H蓋である。1は口縁部の破片、2は天井部の破片である。2は天井部外面に回転へラケズリ調整を施す。ただし、2は天井部が平坦であることから杯の可能性もある。
- $3 \sim 8$ は須恵器杯Hである。3 は破片であるが、天地も含めて杯Hかどうか定かではない。全体に摩滅気味で、焼成が軟質である。淡灰色を呈する。 $4 \cdot 5 \cdot 7 \cdot 8$ の底部外面は、いずれも ヘラキリ後不調整、もしくはナデ調整である。4 は焼け歪みが著しいが、完形である。立ち上が り径 $9.4 \sim 10.0$ cm、口径 $10.7 \sim 11.2$ cm、器高 3.5cm である。胎土に黒色粒を多く含む。6 は 器高が他の個体に比べて著しく低いのが特徴である。7 も胎土に黒色粒を含む。
- 9・10 は須恵器杯G蓋である。どちらもつまみを欠損するものの、天井部は回転へラケズリ 調整を施していると考えられる。9 は外面に自然釉が付着する。口径は 10.8cm である。10 は 外面に灰を被る。口径は 9.3cm である。ともに淡青灰色を呈し、焼成は堅緻である。
 - 11~16 は須恵器杯Gである。口縁部が底部から外上方に開くもの(11・12・15・16)と、



第101図 国分43号墳出土遺物実測図(1)



第102図 国分43号墳出土遺物実測図(2)

わずかに外反しつつもほぼ直立に立ち上がるもの (13・14) とがある。11 の底部はヘラキリ後 丁寧にナデ調整を施す。12 は底部外面はヘラキリ後不調整である。また補助ケズリが施される。

 $13 \sim 15$ は底部外面に回転ヘラケズリ調整を施す。 $13 \cdot 14$ はわずかに外反する直立気味の口縁部を有する。16 はヘラキリ後ナデ調整である。やや厚手の製品である。13 は胎土が精良で、色調は器表面が暗青灰色、断面が赤褐色を呈する。焼成は堅緻で、他の個体とは胎土・色調が異なることから、生産地が大きく異なる可能性がある。他の個体は胎土に細砂を含み、淡青灰色ないし暗青灰色を呈する。焼成は堅緻である。また、 $17 \sim 19$ も杯 G である可能性が高いものの、底部を欠損するため詳細は不明である。口縁部はいずれも外上方に開く。

20・21 は須恵器杯または椀と考えられるが、小破片で詳細は不明である。

22·23 は須恵器高杯である。22 は杯部の破片で、外面に 2条の稜を設ける。23 は脚部の破片で、 透孔が認められる。

24~27 は須恵器 聴で、いずれも小型品である。24 は頸部の破片である。25 は口縁端部を欠損するものの、頸部に細い沈線を2条、肩部に沈線を1条施す。体部に径0.9cmの穿孔を施す。残存高7.9cmである。焼成が軟質で摩滅が著しい。灰白色を呈する。26 も口縁部を欠損するが、頸部に沈線を2条、肩部に沈線を1条施す。体部に径1.6cmの穿孔を施す。体部下半には回転へラケズリ調整を施す。残存高9.6cmである。27 は頸部から口縁部へと屈曲する部分に段差を設ける。体部中位付近に浅い沈線を1条施す。体部下半はナデ調整を施す。口径8.5cm、器高9.3cmである。26・27 は青灰色を呈し、焼成は堅緻である。29 は聴の底部と考えられるが、焼成が軟質で摩滅が著しい。灰白色を呈する。

28 は小型の須恵器提瓶である。口縁部を欠損する。内外面とも摩滅が著しく、調整痕は遺存

しない。肩部にボタン状の把手を貼り付ける。25と胎土・色調・焼成が類似する。

30 は須恵器子持器台に伴う小型の直口壺で、器台の口縁部に接合されている状態が確認できる。頸部から肩部にかけてカキメを施す。器台の口縁部を底部で挟み込むようにして接合している。接合部はユビナデを施す。口径 3.8 ~ 4.1cm、残存高 9.1cm である。31 は須恵器子持器台の口縁部と考えられる。口縁端部外面は突帯状に肥厚する。体部外面にカキメを施し、内面に同心円状の当て具痕が残る。復原口径は 23.0cm であるが、全体に焼け歪みがみられ、口径はもう少し大きい可能性がある。30・31 はともに胎土中に黒色粒を含み、暗青灰色を呈する。焼成は堅緻である。したがって、30 と 31 は同一個体である可能性が高いと考えられる。

32 は須恵器脚台付直口壺である。口縁端部と脚台を欠損する。頸部外面に2条の沈線と、櫛 状工具による刺突文を連続的に施す。体部最大径付近にも沈線を2条施し、その上下に櫛状工具 による刺突文を施す。壺本体は丸底で、体部下半外面には回転へラケズリ調整を施すが、外面 は広く灰を被るため詳細は不明である。内面にはナデ調整を施す。残存高 20.3cm、体部最大径 17.1cm である。胎土に黒色粒を少量含む。淡青灰色を呈し、焼成は堅緻である。

33~35 は須恵器甕の口縁部である。それぞれ形態が異なることから、国分 43 号墳では少なくとも3個体が存在したと考えられる。33の口縁部は頸部から短く立ち上がって外上方に開く形態を呈し、口縁端部外面が突帯状に肥厚する。肩部外面にカキメを施す。部分的にカキメに先行するタタキ調整が確認できる。内面に同心円状の当て具痕がみられる。青灰色を呈し、焼成は堅緻である。34 は口縁端部外面が突帯状をなし、突帯と口縁部外面に 5~6条の波状文を施す。外面には自然釉が付着する。灰褐色を呈し、焼成は堅緻である。35 は直接接合しない破片を図上復原したものである。口縁端部外面が肥厚する。外面に沈線を2条施し、上段の沈線と口縁端部外面との間に櫛状工具による刺突文を施す。淡青灰色を呈し、焼成は良好である。いずれも小破片のため法量は不明である。胎土や色調が互いに異なることから、生産地が異なる可能性もある。

37 は須恵器であるが、器種や天地は不明である。前庭部から33 などと出土した。

36 は土師器甕である。頸部に明瞭な屈曲部はみられず、緩く外反する口縁部を持つ。小破片であるが、強いヨコナデ調整によって 4 条程度のナデの痕跡がみられる。胎土はやや粗く、橙褐色を呈する。焼成はやや軟質である。綾部市域を中心に京都府北部に比較的多く分布する、いわゆる「青野型」甕である (7)。

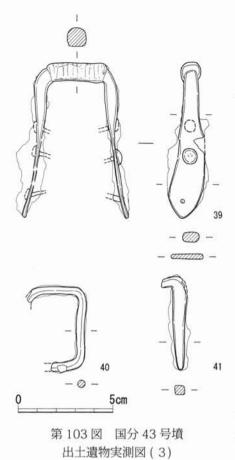
38 は土師器杯である。口縁端部を欠損する。小破片であるが、内面に放射状の暗文を施していることが確認できる。胎土は細砂を含むものの密である。橙褐色を呈し、焼成は良好である。

(筒井崇史)

b. 金属製品

国分43号墳出土金属製品には、馬具と鉄釘がある。

39 は木製鐙の柄先金具である。壺鐙を固定する鋲が、左右とも3か所認められる。鐙靼との連接部は断面半円形を呈し、他の部分より厚い造りとなっている。



40 は鉸具である。断面円形の棒状の素材よりつくられる。差し金は欠損し、認められない。

41 は鉄釘である。他の鉄製品とやや質感が異なり、後世の混入遺物である可能性がある。頭部は折り曲げることにより造り出される。木質等の付着は認められない。

(石崎善久)

②国分 44 号墳

位置 国分 44 号墳は、D 4 - 1 地区の南端中央で検出 した古墳である。国分 1 号墳の南西側にほぼ接して位置 する。標高 121.5 m付近に立地する。

墳丘 (第 104 図) 墳丘は完全に削平されていたが、周 溝が部分的に遺存していた。検出できた周溝は北東部と 北西部から西部にかけての部分である。前者は幅 1.5~ 2.5 m、深さ 0.1~0.2 mと非常に浅く、北東部がやや広 く深めの土坑状を呈する。後者は幅 2.5~5.0 m、深さ 0.15~0.4 mで、北西部がやや広く深い土坑状を呈する。 後者の周溝内埋土の観察から、茶灰色粘質土で周溝の大 半が埋没した後、部分的に平安時代の土器を少量含む暗

橙褐色粘質土が堆積している。その直上には現水田の床土が確認できた。また、墳丘の南端は、 比高差 50cm ほどの段差をもって、南隣りの水田となることから、削平されていると考えられる。 残存した周溝から墳形・規模を復原すると、直径 15 mほどの円墳と考えられ、石室主軸方向に 長い楕円形を呈していた可能性もある。

石室(第105図) 内部主体は、他の古墳同様、横穴式石室であるが、大規模に破壊されており、左側壁の基底石以外は原位置をとどめていなかった。石室の破壊によって生じた石材は、ほぼ同一地点に、廃棄を目的とした大規模な土坑を穿って、そこに落とし込んで処分をしていたことが確認できた。また、残存していた左側壁基底石についても、平面形が緩やかに弧を描いており、また、水田の地境の石垣の基底として利用されていたことからすべてが原位置を保つとは限らない状況であった。

遺物出土状況 国分 44 号墳に伴う遺物は、石室の破壊に伴い、石材を廃棄した土坑内から出土したものが大半を占め、原位置にあるものは全く認められなかった。また、遺物の大半は破損しており、完形に接合・復原できるものも少なかった。 4 は左側壁石材の間から出土したが、原位置を保つものかどうか判断できなかった。また、21 は石材廃棄土坑周辺の堆積層中より出土した。このように石室の破壊が著しく、遺物の出土状況も不確かなため、本来の副葬品の様相は不明である。

出土遺物 (第106・107図) 国分44号墳に伴う遺物として須恵器24点、土師器2点、鉄器



第104 図 国分44 号墳墳丘測量図および土層断面図

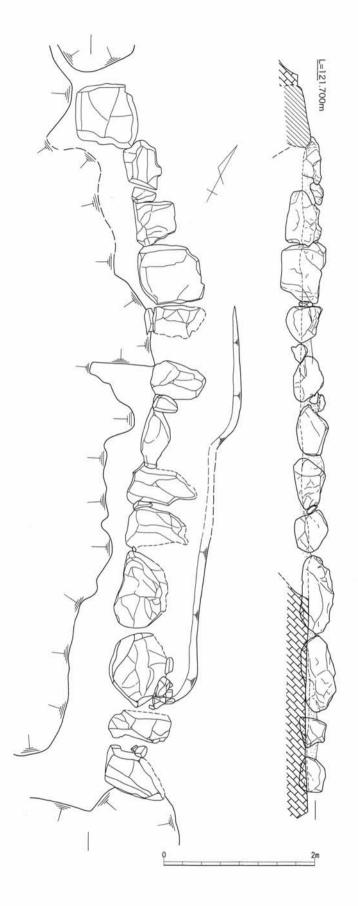
4点を報告する。

a. 土器類

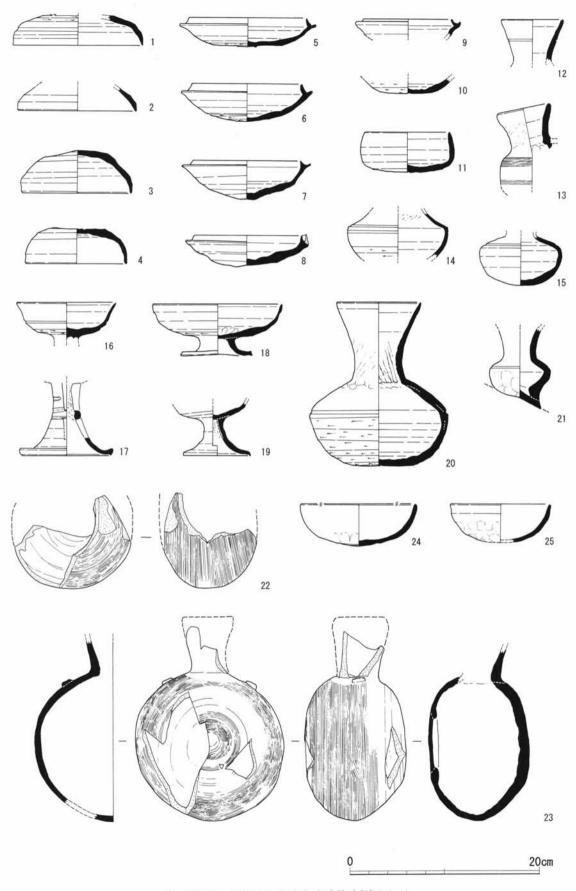
1~4は須恵器杯H蓋である。 1は天井部外面に回転ヘラケズ リ調整を施す。また、外面に浅 い沈線を施す。口径13.6cmで ある。3も天井部外面に回転へ ラケズリ調整を施すが、口径は 11.5cm ほどしかない。器高は 4.5cmである。4はやや平坦な 天井部を呈し、その外面はヘラ キリ後不調整である。補助ケズ リが確認できる。口径10.5cm、 器高3.8cmである。いずれも青 灰色ないし暗灰色を呈し、焼成 は堅緻である。

5~10は須恵器杯Hである。 5~8は底部外面に回転ヘラケズリ調整を施す一群である。口径11.2~12.3cm、器高3.1~4.1cmである。5は胎土に黒色粒を少し含む。いずれも暗青灰色ないし淡青灰色を呈し、焼成は堅緻である。9は5~8に比べると小型の杯Hである。10は杯Hの底部と考えられ、外面に回転ヘラケズリ調整を施す。暗灰色を呈し、焼成は堅緻である。

11 は須恵器椀である。平底気 味の底部に、やや内湾気味に立 ち上がる口縁部からなる。底部 外面はヘラキリ後不調整で、内 面に不定方向のナデ調整を施す。 口径 8.8cm、器高 4.2cm である。 青灰色を呈し、焼成は堅緻であ



第 105 図 国分 44 号墳横穴式石室実測図



第 106 図 国分 44 号墳出土遺物実測図 (1)

る。

12 は須恵器提瓶の口縁部と思われる。外面に沈線を1条施す。

13 は須恵器平瓶の口縁部から体部にかけての破片である。口縁部は回転ナデ調整、体部外面にカキメを施す。口縁部外面に絞り痕がわずかにみられる。

14 は須恵器短頸壺の体部片と思われる。やや薄手の作りで、最大径付近に沈線を2条施す。 体部下半に回転へラケズリ調整を施す。15 も須恵器短頸壺の体部と考えられる。肩部に沈線を 1条施す。体部下半はナデ調整である。15 の胎土は比較的精良である。

16~19 は須恵器高杯である。16 は高杯杯部である。外面に沈線を1条施し、杯底部に回転へラケズリ調整を施す。口径10.4cm、残存高4.0cmである。17 は上下2段に透孔を有する長脚の高杯脚部である。透孔の間に2条の沈線を施すほか、上段に途中で消える沈線を1条確認できる。底径9.3cm、残存高7.5cmである。18 は低脚の脚部を有する高杯である。杯底部外面に回転へラケズリを施した後、脚部を接合する。脚部に透孔は認められない。口径13.5cm、器高5.4cm、底径7.4cmである。19 は杯部を欠損する高杯脚部である。脚部は17と18の中間の高さであるが、若干焼け歪みがみられる。脚部に透孔は認められない。底径7.0cm、残存高5.5cmである。いずれも胎土に細砂を含み、淡青灰色ないし暗青灰色を呈し、焼成は堅緻である。

20は須恵器長頸壺である。平底に近い底部をもつやや扁平な体部と頸部が太めで大きく逆「ハ」字状に開く口頸部からなる。口頸部には回転ナデ調整を施すが、内外面ともに成形時の絞り痕が認められる。体部最大径付近に沈線を1条施す。体部下半に時計回りの回転ヘラケズリ調整を施す。ほぼ完形で、口径8.7cm、器高17.1cm、体部最大径14.5cmである。淡灰黄色を呈し、焼成は堅緻である。

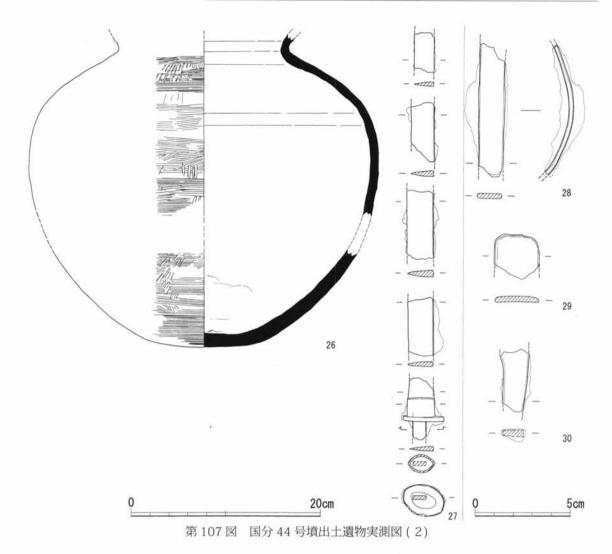
21 は須恵器子持器台に伴うミニチュアの長頸壺と考えられる。口縁端部を欠損するものの、 体部外面に沈線を1条施す。体部下半にはユビオサエ、ナデ調整を施す。残存高 8.4cm である。 灰白色を呈し、焼成は軟質である。

22・23 は須恵器提瓶である。22 は体部の破片である。外面は全体にカキメを施し、内面は 回転ナデ調整を施す。23 は口縁部や体部の一部を欠損するものの、ほぼ全容を知ることができる。 閉塞側はカキメを施し、その反対側は回転ヘラケズリ調整の後ナデ調整を施す。肩部にボタン状 の把手を貼り付ける。残存高 20.4cm、体部最大径 15.6cm である。

26 は須恵器甕である。口縁部を欠損する。また体部と底部は直接接合しないので、図上で復原した。体部外面に平行タタキ調整を施した後カキメを施す。内面には丁寧なナデ調整を施す。復原された体部最大径は 36.8cm である。

24・25 は土師器杯である。ともに丸底気味の底部に、内湾気味に立ち上がる口縁部を有する。 24 は口縁部にヨコナデ調整を、低部内外面にユビオサエやナデ調整を施す。25 は口縁部にヨコナデ調整を施してわずかに外反させる。内面はナデ調整、底部外面にはユビオサエ痕がみられる。 いずれも胎土に細砂を含み、焼成は良好である。色調は24 が淡橙褐色、25 が橙褐色を呈する。

(筒井崇史)



b. 金属製品

国分 44 号墳出土金属製品としては武器、不明鉄製品がある。出土状況から確実にこの古墳に 伴うとみられるのは鉄刀のみである。

27 は鉄刀である。 5 片の破片が確認されているが、同一個体と思われる。刀装具の付属する部分が遺存しており、鎺と別造りの鐔が付属する。鐔は楕円形を呈しており、透かしなどの装飾はみられない。大刀は両関形式と思われる。

28 は幅 1.2cm の板状の鉄素材を湾曲させた鉄製品である。鋲などは確認されず、性格は不明である。

29 は方形の板状鉄製品である。平・断面形から革金具の可能性があるが、鋲などを装着した 痕跡は肉眼では観察できない。

30 は錆膨れが著しいが、刀子である可能性の高い個体である。

(石崎善久)

③国分 45 号墳

位置 D4-1地区の拡張区の北西部で検出した横穴式石室を内部主体とする古墳である。北東部に周溝を共有して国分43号墳が位置する。南側には8mほど離れて国分46号墳が位置する。

京都府遺跡調査報告集 第129冊

両者の間は周溝と呼ぶにはやや広く、古墳と古墳の間に広がる空隙地である。石室床面の標高は 120.8 mである。

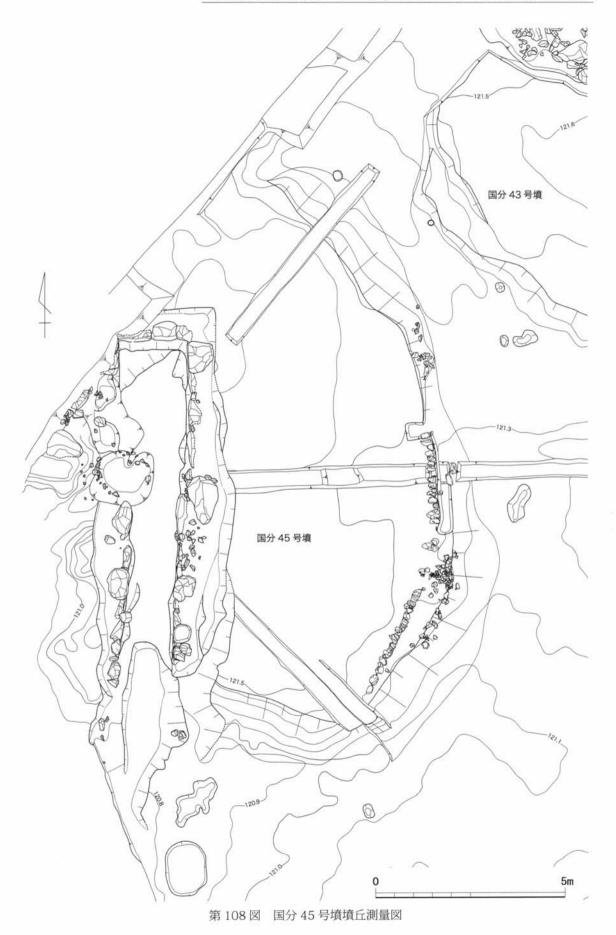
墳丘(第108図) 墳丘は、北側を農道によって、また西側も水田の造成によって、大きく削平されていた。墳丘上半部と石室上部も後世の削平によって失われていた。このため墳丘の高さや上部の構造は不明である。周溝は北東に位置する国分43号墳と共有するような状況で検出した。一方、墳丘の東側から南側にかけては、墳丘裾を検出した。

墳丘は、地山の整形と盛土によって構築されている。墳丘の築造方法等を確認するため、中央に東西方向の断ち割りを実施し、土層の観察を行った(第109回上段の土層断面図参照)。古墳の築造はまず、地山と築造以前の堆積土である黒褐色粘質土(黒ボク再堆積層、9層)を整形し、基底石を据えるための墓壙を掘削する。石室の構築と合わせて黒褐色粘質土と黄褐色粘質土の互層(5層)、黄茶色土ブロック混じり黒褐色粘質土(6層)、淡黄褐色砂礫混じり土(8層)、黒褐色土ブロック混じり黄茶色砂礫混じり土(4層)、暗茶色砂礫混じり土(3層)と順次墳丘の盛土を行う。次に黄茶色砂礫混じり土(2層)が盛られるが、墳丘中央側から周溝側に向かって傾斜していることから、2層の盛り上げ以前にいったん墳丘をある程度の高さまで構築していたと考えられる。この高さが天井石の上まで達していたかどうかは、墳丘上部が完全に削平されていたため不明である。2層以降、黄褐色土ブロック混じり黒褐色粘質土(7層)、黒ボク層を盛り上げた黒褐色粘質土(1層)を盛り上げて墳丘を完成させるようである。7層・1層ともに、古墳築造以前の堆積層である黒ボク層を盛り上げたものと考えられる。

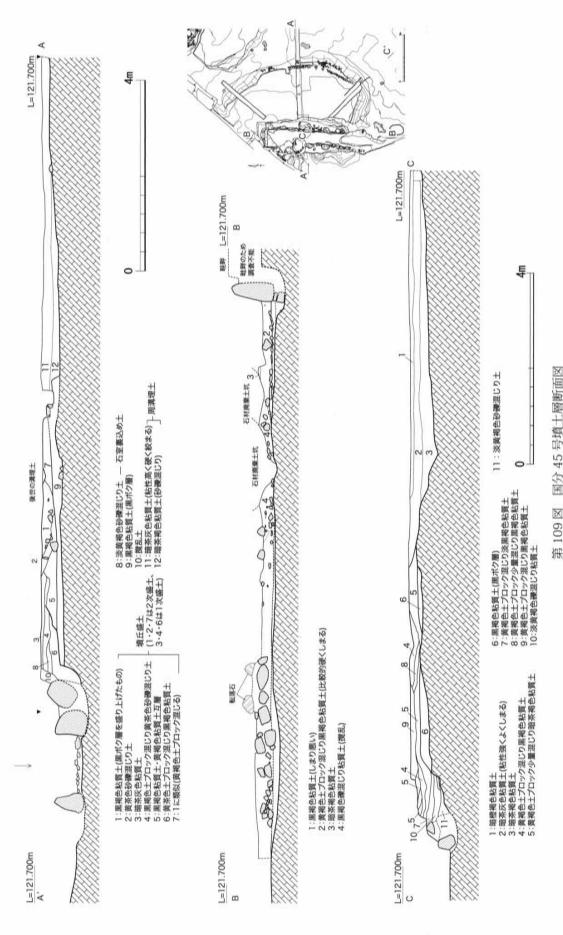
以上から2層以前の盛土を墳丘構築時の1次盛土、2層以後を盛土を墳丘構築時の2次盛土と考えたい。なお、断ち割りの際に2層の基底部でやや大型の角礫を複数検出した。1次盛土の構築時に土留めなどを目的として設置された墳丘内の列石の可能性もあるが、墳丘南東方向や北東方向に設定した断ち割りでは確認できなかった。墳丘の調査はこれ以上実施していないため、詳細を明らかにすることはできなかった。

外表施設としては、外護列石が認められる (第 110 図)。墳丘斜面に 10~30cm に角礫が方向を違えて直線状に並んだ状態を 2 か所検出した。この列石は、墳丘の東辺と南東辺にあたり、墳丘の外側に向けて角礫の小口を揃えて面をなしている。列石は東辺が 3.0 m分、南東辺が 3.15 m分を検出した。列石の墳丘下位側にはほぼ同じ大きさの角礫が認められた。また、東辺と南東辺が接する部分の石は攪乱されており、明確な稜角を確認することはできなかった。列石は、ほぼ 1 段分のみ残存しており、残存高は 0.1~0.15 mほどであるが、本来、何段積まれていたかは不明である。列石の基底の標高は、東辺で 121.35~121.40 m、南東辺で 121.30~121.40 mで、南東辺の南端が若干低く、東辺はほぼ水平である。石材は墳丘盛土(黄褐色土ブロック混じり黒褐色粘質土、上述の 7 層)を少し掘り窪めて据え付けている。列石は墳丘の北東辺と石室前庭部周辺では確認できなかったが、同様の石材が墳丘斜面や裾から出土しており、本来は列石が存在したものと考えられる。

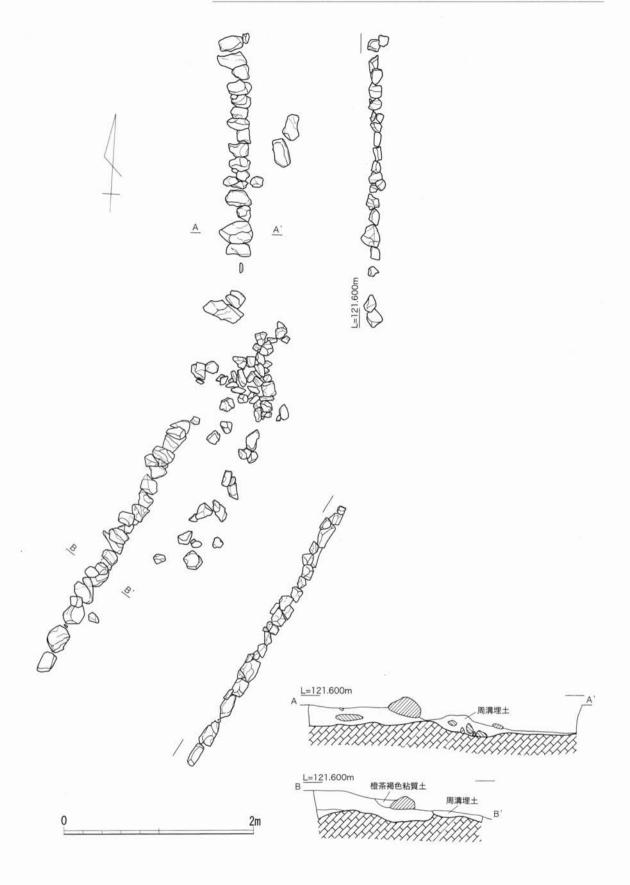
なお、墳丘の削平された時期は、石材の廃棄された土坑から中世の土器が多数出土しているこ



-143 -



-144 -



第110図 国分45号墳外護列石実測図

とから、その頃の可能性が高いと考えられる。

境形の復原 この列石によって区画された古墳の形状について復原を試みたい (第 149 図参照)。まず、検出した東辺および南東辺の列石を、石室の中軸線で反転すると、南辺が東辺や南東辺に比べて若干長くなる (復原値約 10 m)ものの、方形や円形ではなく直線的な多角形の 5 辺を復原することができる。これを東辺の中央で、北へ折り返すと、やや不整形ではあるが、列石が八角形を呈するように復原することができる。したがって、国分 45 号墳は不確定な要素も多いが、墳形については多角形、おそらく八角形を意識したものである可能性が高い。復原した対向する辺の長さは約 15 mである。

ただ、国分 45 号墳の墳丘裾は、石室正面で標高 120.8 m、東辺列石の東側で標高 121.2 mと、列石そのものが墳丘裾ではなく、墳丘斜面にある。したがって墳丘裾は列石よりも外側にあり、裾の形状は八角形とはならずやや不明瞭である。

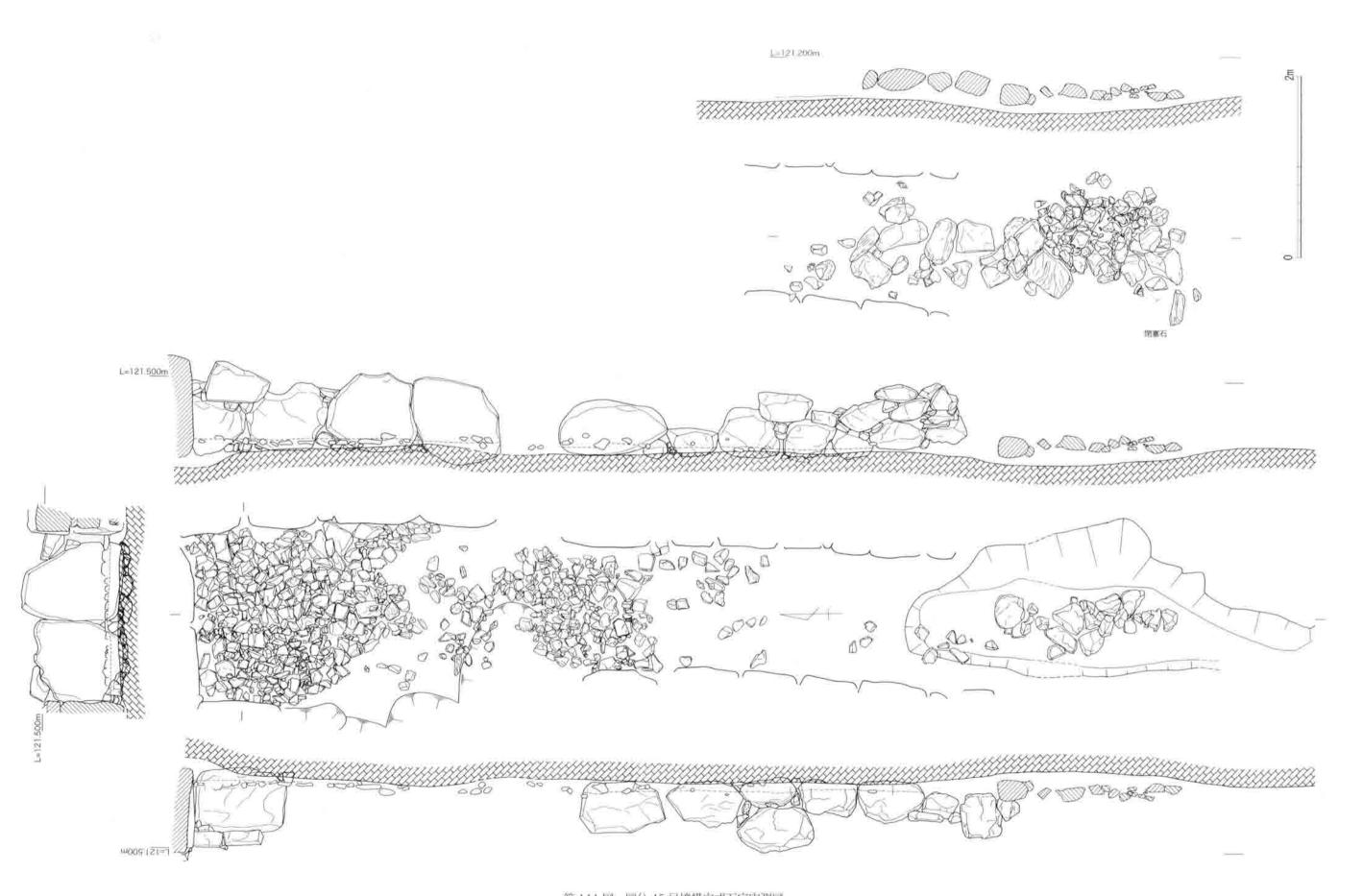
このように、不整形な八角形であることや列石の外側に墳丘裾が存在することなどから、天皇や皇族の墓として採用される、いわゆる八角墳とは同一視することはできない。八角墳は正八角形であることが多く、墳丘裾を示す切石が丁寧に並べられているなど、墳丘構造上、国分 45 号墳との格差は著しい。これは墳丘の規模や副葬品の内容についても言える。

したがって、国分 45 号墳は、墳形としては八角形を意識した古墳である可能性は高いものの、 天皇陵や皇族の墓として採用された八角墳とは大きく異なると考えられる。むしろ、地方におい て稀に確認される多角形墳の一種と考えておきたい。

石室(第111図) ほぼ真南に開口する両袖式と推定される横穴式石室である。大型の石室であったため石室は大きく破壊されている。石室の上半部は全く残存せず、そこで用いられていた石材は、古墳のすぐ西側に穿った廃棄用の土坑か、石室内に落とし込まれていた。奥壁と石室の左側壁は比較的残存するものの、右側壁は、玄室部分の石材の多くが抜き取られていた。左側壁でも、袖石と思われる大型の石材は、南側へ倒されているような状況であった。

以上のような石室の破壊状況を踏まえて、石室の形式を復原すると、左側壁が袖石と思われる石材を境に壁面が一直線にならないこと、この部分を境に玄室側の石室幅が 1.8 m前後であるのに対して、羨道側の石室幅が 1.3 m前後となることから、国分 45 号墳の石室形式は両袖式であると推定される。したがって石室の規模は、石室全長は 9.14 m、奥壁寄りの玄室幅は 1.85 m、玄門寄りの羨道幅は 1.38 m、羨門部付近の幅は 1.46 mを測る。玄室長は袖石と思われる大型の石材が検出された位置を考慮して復原すると、3.40 mと推定される。羨道長は 5.74 mと考えられる。残存高は奥壁で 0.97 m、玄室の左側壁で 0.86 mで、本来の玄室高や羨道高は不明である。主軸は N 1 ° Wである。なお、石室に用いられている石材は全て自然石で、人為的な加工痕の認められるものはない。

玄室の奥壁は、幅 $0.85\sim0.9$ m、高さ $0.97\sim1.13$ mと、やや大型の石材 2 石を立位に用いている。この大型石材と据え付け穴の間には、 $10\sim20$ cm 程度の石材を挟んでいる。玄室の左側壁は基底石 4 石で構成される。 2 段目は奥壁寄りの 1 石のみ残存する。奥壁から 3 石目と 4 石



第111 図 国分45 号墳横穴式石室実測図

目はかなり大型の石材を使用する。基底石どうしや基底石と2段目の隙間には $10 \sim 20 \text{cm}$ 程度 の石材を挿入する。玄室の右側壁は大きく攪乱されており、奥壁寄りの基底石1石とその2段目 のみが残存していたにすぎない。基底石は大型の石材を使用するが、2段目は小型の石材を使用する。なお、壁面の持ち送りは確認できない。

左袖石は羨道部の石材の裏側に倒されている状態で検出した。石材の長さは 1.2 mほどあり、 大型の石材を使用していたことがわかる。右袖石は抜き取られていて不明である。

羨道の石材は、玄室の石材に比べて小型である。左側壁は基底石 7 石と 2 段目の一部が残存していた(幅 $0.45\sim0.7$ m、高さ $0.3\sim0.55$ m)。ただし、玄門部寄りの 1 石のみは大型の石材(幅 1.2 m、高さ 0.6 m)を横位に使用する。羨門部ほど小型の石で構成されており、 3 段積み上げている。右側壁は左側壁よりも若干大型の石材を使用している(幅 $0.4\sim0.92$ m、高さ $0.3\sim0.5$ m)。基底石 8 石と 2 段目 1 石のみが残存していた。右側壁では若干の持ち送りが認められる。左側壁も若干の持ち送りがあるようである。

玄室は、掘形の底面に若干の土を敷き、その上に 10~20cm 大、稀に 30~40cm 大の偏平な石を、奥壁から玄門より南へ1 mまでの羨道内に敷いている。玄室の敷石は羨道の敷石に比べて若干大きい石材を使用している。敷石は、東側では平坦になるように敷いているのに対して、西側では若干、粗雑に敷かれ、面も揃っていない。この違いが、追葬等に伴う敷き直しなのか、石材の抜き取りに伴う攪乱の影響なのかは不明である。敷石よりも若干高い位置でほぼ同大の石を数個検出した。棺台の可能性もあるが、対になる石が確認できなかったので、確定することはできなかった。

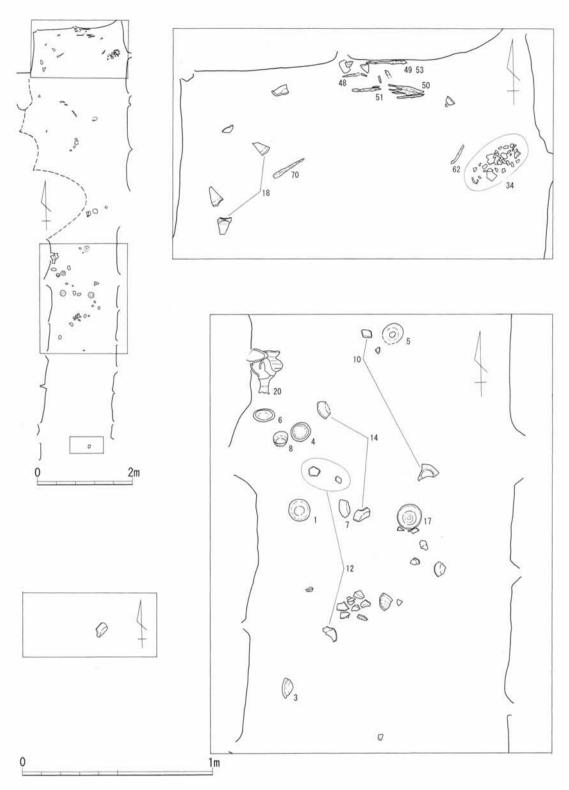
石室の閉塞状況については、羨門部付近で全長 30 ~ 50cm、幅 25 ~ 35cm ほどの、やや大型の角礫が複数まとまって見つかったので、これらを使用して閉塞が行われていたと考えられる。ただし、羨門部を完全に閉塞しているような状況ではなかったため、これらが当初からの閉塞状況であったかどうかは明らかでない。また、土砂を利用して閉塞していた可能性もあるが、土層断面等の観察からは確認することはできなかった。

閉塞石を除去すると、羨門部付近から石室の前面にかけて全長約 $4.5 \, \mathrm{m}$ 、幅 $1.2 \sim 1.7 \, \mathrm{m}$ 程度 の溝状の遺構を検出した。遺構内で $10 \sim 30 \, \mathrm{cm}$ 程度の角礫がまとまった状態で検出したので、排水溝等の可能性も考えたが、羨道から玄室へ向かっては伸びない。またこの溝は南西方向の調査区外に伸びていくようである。したがって、石室の前庭部を形成していたと考えられる。

石室の掘形は、全長 10.2 m、幅 3.6 mを測り、隅丸長方形である。掘形は検出面から 0.8 m の深さまで掘削し、石室基底石を設置している。掘形底面はほぼ平坦で、基底石を据えるための据え付け穴を設けている。特に奥壁では 15cm 前後の深さの据え付け穴を設けている。石材の裏込めは、淡茶褐色砂礫混じり土、淡黄褐色礫混じり粘質土、黄褐色土ブロック混じり淡黒褐色粘質土を順次、版築状に行っている。撹乱等により十分観察できていないが、玄室ではおおむね基底石まで、羨道で2段目ぐらいまでが掘形内に納まる。それ以降については石室の構築と墳丘の盛土は同時に行われたものと考えられる。なお、石室掘形の北西部分は現在の畦畔および石室破



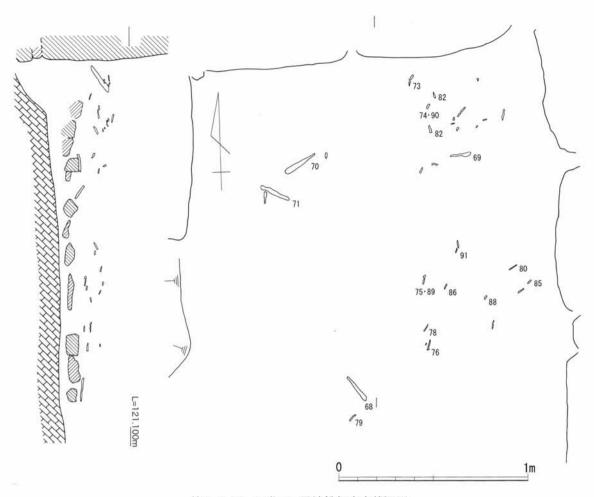
第112 図 国分45号墳遺物出土状況図(1)



第113 図 国分45号墳遺物出土状況図(2)

壊時の撹乱によって不明である。

遺物出土状況(第112~115 図) 国分45 号墳に伴う遺物の出土地点は、大きく、玄室で出土したもの、玄門部寄りの羨道で出土したもの、羨門付近から前庭部にかけて出土したもの、の3か所にわけることができる。また、玄室内上層から平安時代の再利用に伴うと考えられる遺物



第114 図 国分45号墳鉄釘出土状況図

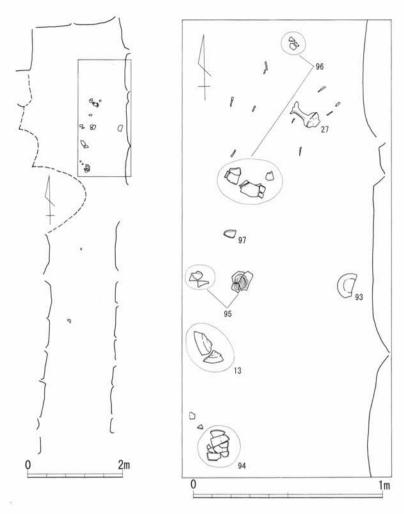
が出土した。なお、国分45号墳では、耳環や玉類などの装身具は出土しなかった。

玄室内出土遺物としては、須恵器高杯・脚台付長頸壺、土師器杯、銀装大刀・鉄鏃・刀子・鉄 釘などの鉄製品がある。

奥壁寄りで銀装大刀や鉄鏃が出土した。銀装大刀 (42) は奥壁に沿って出土した。床面よりも浮いた状態で出土したことや柄の部分が切先に比べて若干高い位置で検出したことなどから、本来は奥壁に立て掛けられていたものが、石室内にある程度の土が流入した後に倒れたものと考えられる。大刀の周辺や下層から鉄鏃 (48 \sim 53 \cdot 55 \sim 57) が出土した。これらは切先を東に向けた状態で、ややまとまって出土している。一部には敷石に銹着したものもみられた。大刀の周辺で出土した鉄鏃 (48 \cdot 50 \cdot 52 \cdot 55 \cdot 57) は、大刀が倒れたときに若干動いたものと考えられる。したがって、10 本程度の鉄鏃が束となって、床面に切先を東に向けて置かれていたと推定される。

玄室の東側北寄りの敷石の直上で土師器杯がまとまって出土した (30・32~35・38・39)。 これらはほぼ完形の状態で出土したもの (30・33)、破片化して出土したもの (32・34・35・38・39) などがある。これら土師器杯は、後述する鉄釘の出土範囲とほぼ重なるが、床面直上で出土していることから、木棺内に副葬された可能性もある。33 は伏せた状態で敷石の直上で出土した。玄室の西側では、須恵器高杯 (18)、須恵器脚台付長頸壺 (21)、須恵器聰 (26) などが出 土している。これらの土器 群は後述する羨道出土遺物 に比べるとやや古相の特色 がみられる。玄室中央では、 骨のほか、大刀に関わる金 具(43)や不明鉄製品(61) などが出土している。

玄室内では上記の土器類や鉄器類のほか、鉄釘が出土している (第114図)。 鉄釘には大小の2種類がある。大型の鉄釘は4点(68~71)あり、70・71は近接して出土しており、68・69とも0.8~1.1mほど離れて出土している。大型の鉄釘は玄室内に無秩序に散った状況であり、また、木質も残存しないため、木棺に使用されたものかどうか不明である。なお、これら



第115 図 国分45号墳石室内上層遺物出土状況図

4点は敷石の直上から出土しており、敷石と銹着したものもあった。小型の鉄釘は少なくとも 20点 $(73\sim92)$ あり、玄室奥壁寄り東側に偏って出土している。これらの鉄釘は、後述するように平安時代の遺物が出土していることや、石室の破壊に伴う撹乱のため、原位置をとどめていない可能性もある。しかし、比較的まとまって出土していることや、出土標高が $120.85\sim121.0~m$ の間に限られること、木質が認められること、などから鉄釘の出土範囲に木棺が存在したと考えられる。出土した鉄釘のうち 74 は垂直方向に検出できたことから木棺の蓋を止めていた鉄釘である可能性がある。以上から、全長 1.3~m程度、幅 0.5~m内外の木棺の存在が想定できる。

羨道内出土遺物としては、須恵器杯H(3)・須恵器杯G蓋 $(4\sim6)$ ・須恵器杯 $G(7\sim16)$ ・須恵器杯B(17)・須恵器長頸壺(20)などが出土した。これらのうち、16を除いては玄門部付近から羨門へ向かって3mほどの範囲にまとまって出土した。比較的完形に復原することができたものが多いものの、逆位のものや破片化していたものがみられることから、副葬当時の状態を示しているとは考えられない。玄室内出土の土器類に比べると、若干新しい傾向にある。

美門部から前庭部にかけての出土遺物としては、須恵器杯H蓋(2)、鉄器(58・60・66)などがある。これらは前庭部の埋土から出土しており、上述の礫群よりも出土標高で言えば下位に当

たる。石室内から掻き出された可能性もあるが、遺物の残存状況や出土点数、石室内の状況などから本墳の石室に伴うものではない可能性もある。

このほか、玄室内では、床面から 10cm ほど上層において、平安時代のものと思われる黒色 土器椀 (96) や須恵器杯 (93・94)・椀 (95) などが出土した (第115 図)。ほぼ完形に復原できることや出土標高が 120.9~ 121.0m でほぼ揃うことから、石室の再利用が行われていたと考えられる。ただ、土層断面の観察を行ったが、再利用に伴う明確な面を確認することはできなかった。また、これらとほぼ同じ標高で須恵器脚付短頸壺 (27) が出土した。これはもともと国分 45号墳に伴うものではなく、後世の混入品の可能性もある。

出土遺物 (第 116 ~ 120 図) 国分 45 号墳に伴う遺物として須恵器 29 点、土師器 11 点、 鉄器 52 点を報告する。また、平安時代の再利用に伴う遺物として須恵器 3 点、土師器 1 点、黒 色土器 1 点を報告する。

a. 土器類

1・2は須恵器杯H蓋である。1は摩滅のため調整不明である。口径11.1cm、器高2.9cmである。淡橙褐色を呈し、焼成は軟質である。2の天井部外面は回転ヘラケズリ調整を施す。補助ケズリがみられる。淡青灰色を呈し、焼成は堅緻である。図示していないが、1・2とは別個体が出土している。

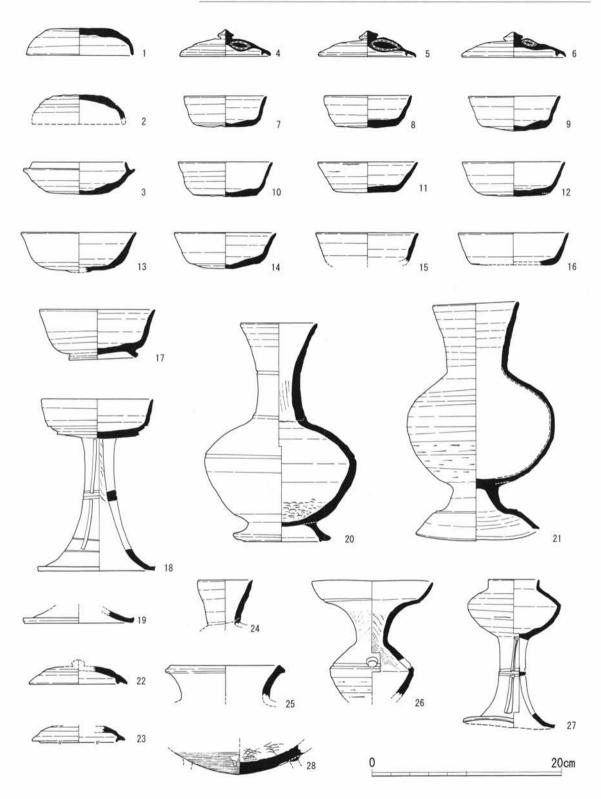
3 は須恵器杯Hである。底部外面はヘラキリ後不調整である。ほぼ完形で、立ち上がり径 9.7cm、口径 10.9cm、器高 3.5cm を測る。淡青灰色ないし灰色を呈し、焼成は良好である。

 $4\sim6\cdot22\cdot23$ は須恵器杯 G 蓋である。 4 は天井部外面に回転ヘラケズリ調整を施す。 5 の天井部外面はヘラキリ後不調整である。 6 は外面調整は不明である。これらは口径 $8.2\sim9.6$ cm、最大径 $9.5\sim10.9$ cm、器高 $2.5\sim2.9$ cm を測る。 $22\cdot23$ は天井部外面に回転ヘラケズリ調整を施す。 23 はかえりの端部が口縁部よりも下方に突出する。いずれも淡青灰色を呈し、焼成は堅緻である。

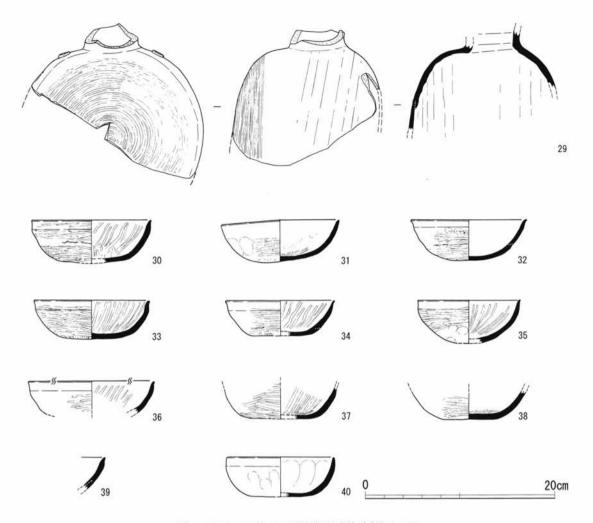
 $7 \sim 16$ は須恵器杯 G である。おおむね平底気味の底部に外上方に直線的に伸びる口縁部からなる。法量から、口径 11cm 以上のもの $(13 \cdot 16)$ 、口径 10.5cm 前後のもの $(11 \cdot 12 \cdot 14 \cdot 15)$ 、口径 $9.5 \sim 10$ cm のもの $(9 \cdot 10)$ 、9.3cm 以下のもの $(7 \cdot 8)$ の、 4 群に分けることができる。いずれも底部外面はヘラキリ後不調整であるが、補助ケズリを施すもの $(7 \cdot 8 \cdot 14)$ とそうでないものがある。淡青灰色を呈するものが多く、焼成も堅緻なものが多い。 14 は灰白色を呈し、焼成もやや軟質である。

17 は須恵器杯Bである。高台は焼け歪んでいる。底部外面はヘラキリ後不調整である。口径 12.2cm、器高 5.4cm を測る。灰白色を呈し、焼成はやや軟質である。

18は須恵器無蓋高杯である。杯底部は平坦で、強く屈曲して斜め上方にまっすぐに立ち上がる。 屈曲部付近には稜が2条みられる。脚部は、上下2段に透孔を有する長脚のもので、透孔は3方 向に穿孔される。透孔の間に2条の浅い沈線を施す。脚部の内面には絞り痕がみられる。外面の 1/3と杯部内面に灰を被る。口径11.7cm、器高17.9cmを測る。暗青灰色を呈し、焼成は堅緻



第116図 国分45号墳出土遺物実測図(1)



第117図 国分45号墳出土遺物実測図(2)

である。

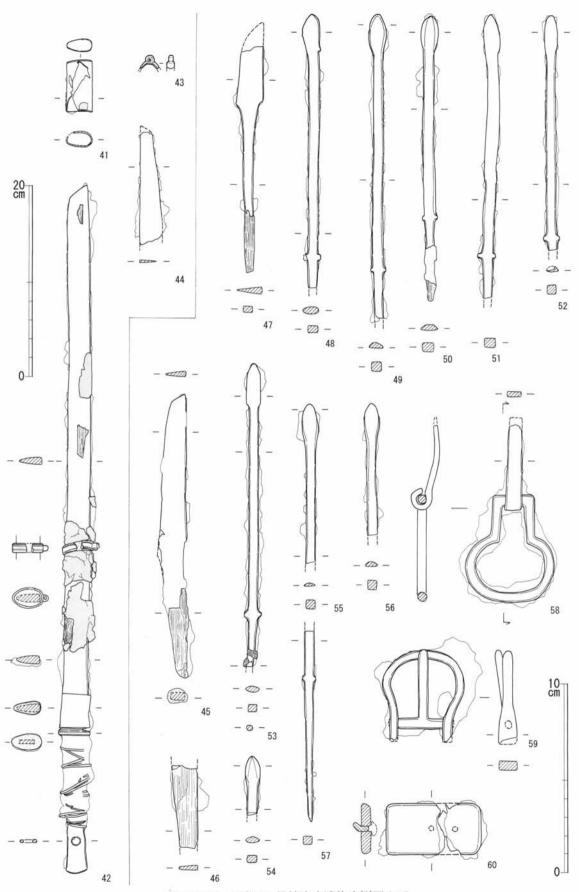
19 は須恵器高杯の脚端部である。18 とほぼ同形態の小破片であるが、石室奥壁の裏込め土の掘削中に出土したものである。底径 11.4cm である。

20 は須恵器長頸壺である。体部最大径付近に沈線を1条施す。高台の高さが約2cmと高めの高台で、端部内面が接地する。体部下半も回転ナデ調整を施しており、回転ヘラケズリ調整はみられない。体部および頸部の外面、底部内面には自然釉が付着していた。また、口縁部内面には灰を被る。口径8.5cm、器高22.9cm、体部最大径16.0cmを測る。焼成は堅緻である。

21 は須恵器脚台付長頸壺である。壺の体部下方から底部にかけては回転ヘラケズリ調整を施す。また、外面の頸部から体部にかけては灰が被っている。脚台は焼け歪みが著しい。口径9.0cm、器高25.0cm、体部最大径15.7cmを測る。壺本体は青灰色、脚部は灰色を呈し、色調が異なる。これは素地となった粘土の違いによるものであろう。焼成は堅緻である。

24 は須恵器平瓶の口縁部と思われる。25 は小型の須恵器甕もしくは壺の口縁部である。

26 は須恵器廛である。口径は、欠損と焼け歪みのため不明である。図示しているほど大きくないと思われる。頸部の内外面に絞り痕がみられる。外面の体部から底部にかけては、回転ヘラケズリ調整を施す。胎土に黒色粒を含み、淡青灰色ないし青灰色を呈する。焼成は堅緻である。



第118図 国分45号墳出土遺物実測図(3)

京都府遺跡調査報告集 第129冊

27 は須恵器脚付短頸壺である。全体に焼け歪んでいるが、口径 4.8 ~ 5.3cm、器高 15.6cm 前後を測る。脚部は、上下 2 段に透孔を有する長脚のもので、透孔は 2 方向に穿孔される。透孔の間に 2 条の浅い沈線を施す。短頸壺底部外面には回転ヘラケズリ調整を施す。脚部内面および短頸壺外面下半に灰が被るため、焼成時は短頸壺口縁が下であったと考えられる。一部は黒灰色を呈するが、基本的に暗青灰色を呈し、焼成は堅緻である。

28 は須恵器脚台付壺の底部である。脚台は剥離する。壺底部外面にカキメを施す。内面には同心円状の当て具痕がみられる。

29 は須恵器提瓶の体部破片である。閉塞側の外面にカキメを施す。反対面は灰を被るため不明瞭であるが、回転ヘラケズリ調整を施すと思われる。石材廃棄土坑から出土したため、必ずし も国分 45 号墳に伴うものかどうかは不明である。

 $30\sim40$ は土師器杯である。内面に放射状暗文を施すもの $(30\sim39)$ と施さないもの (40) に分類できる。前者は、内面には 1 段の放射状暗文を施し、外面はミガキ調整を施す。口縁部外面にヨコナデ調整を施して、わずかに外反させる。口径 $10.8\sim12.6$ cm、器高 $3.8\sim4.6$ cm を測る。 39 は内面の暗文は確認できないものの、ミガキ調整を施すことから、 $30\sim38$ と同じグループと考えた。これらは、いわゆる「畿内産土師器」 (8) を在地において模倣したものと考えられる。胎土は細砂をわずかに含むものの、比較的精良なものが多い。いずれも淡橙褐色ないし橙褐色を呈し、焼成は堅緻である。

40 は平底気味の底部から内湾しながら立ち上がる口縁部を持つ。口縁部にヨコナデを施し、 内外面にユビオサエやナデ調整を施す。口径 11.4cm、器高 4.2cm である。胎土に砂粒を多く含む。 淡橙灰色を呈し、焼成は良好である。30~39 に比べて、より在地色の強い土師器杯と考えられる。 (平井耕平・筒井崇史)

b. 金属製品

国分 45 号墳出土の金属製品には、武器・馬具・工具・釘類がある。

42 は奥壁に沿って出土した銀装大刀である。全長 72.1cm を測る。刀身のほか、把・鞘の各刀装具が伴っている。以下、各部位についてやや詳細に概観する。

刀身は平背・平造りの鉄製直刀である。全長 72.1cm・刃部幅 2.5cm・同厚 0.8cm を測る。切 先は峰が直線的であるいわゆるカマス切先である。関の形状については不明であるが、茎と刀身 部および鎺との関係からみて、両関になる可能性が高い。茎尻はやや扇形に膨らみ、茎尻から約 3 cm 刀身寄りに、径 0.9cm の円孔を穿っている。目釘穴としては大きく、また、目釘自体も遺存していないため、木製把頭の懸通孔部に伴うものとみられる。現状では把を固定するための目 釘穴については視認できないが、X線写真撮影により鐔寄りに 1 か所存在するようである。なお、肉眼観察およびX線による観察によっても銘文等は確認できない。

把間には銀線が巻き付けられている。銀線は幅 $0.2 \text{cm} \cdot \mathbb{P}$ $\stackrel{?}{=} 0.1 \sim 0.2 \text{cm}$ を測り、現状では 18 条が観察される。螺旋状に巻き付けられているものとみられるが、巻きの方向については明瞭ではない。また、銀線の形状から把間の断面は倒卵形と推測されるが、土圧による変形の可能

性も考慮せざるを得ない状態である。また、喰出鐔から約 1.2cm の間には銀線は認められない。 把口方向の銀線と茎尻方向の銀線との間隔は約 8.5cm であり、把握部の長さもこれに近いもの とみられる。把本体は木製と推測されるが、把木は錆のため視認することができない。柄頭は遺 存していないが、茎先端の円孔部が茎のほぼ中央にくることから方頭であったと考える。

鞘には鞘木および鞘木に塗布された黒漆とみられる被膜が遺存する。足金具は二の足金具が鞘に付いているほか、一の足金具と思われるものが遊離して出土している (43)。鉄地に銀装を施したものである。鞘に遺存する二の足金具は土圧や鞘木の腐蝕に伴い本来の着装位置からややずれている可能性が高い。現状では漆や木質により吊手部と責金具部との位置関係は観察しづらいものの、吊手部はほぼ責金具部の中央にくるものであり、明らかに佩裏側に寄るものではない。責金具側面には2条の沈線が施されている。一の足金具は吊手部と責金具部の一部が遺存するのみであるが、遺存部分からみる限り二の足金具と形態上大きく異なるものではない。また、鞘部を観察する限りでは一の足金具の装着位置を限定することはできなかった。他の事例からみれば鞘口金具の切先方向に接して装着されていた可能性が高い。鞘口金具は全長3.5cmを測る。銀装であるのは間違いないが鉄地なのか、銅地なのかあるいは薄い銀板のみで構成されているのか明確ではない。

鞘には鞘木上に塗布された黒漆の被膜が遺存するが、二の足金具付近で直線的に断裂しており、 足金具装着後に塗布された可能性を考えておきたい。

41 は鉄製鞘尻金具である。鉄刀本体と遊離しているが、切先のほぼ直下から検出されたため、銀装大刀に伴うものとみて間違いない。全長 5.4cm・幅 2.8cm・厚さ 1.6cm を測る。内外面に 黒漆と思われる被膜が観察される。先端部分はやや斜めに仕上げられる。断面は先端で倒卵形、鞘口側で長楕円形を呈する。鋲などの痕跡は確認できない。

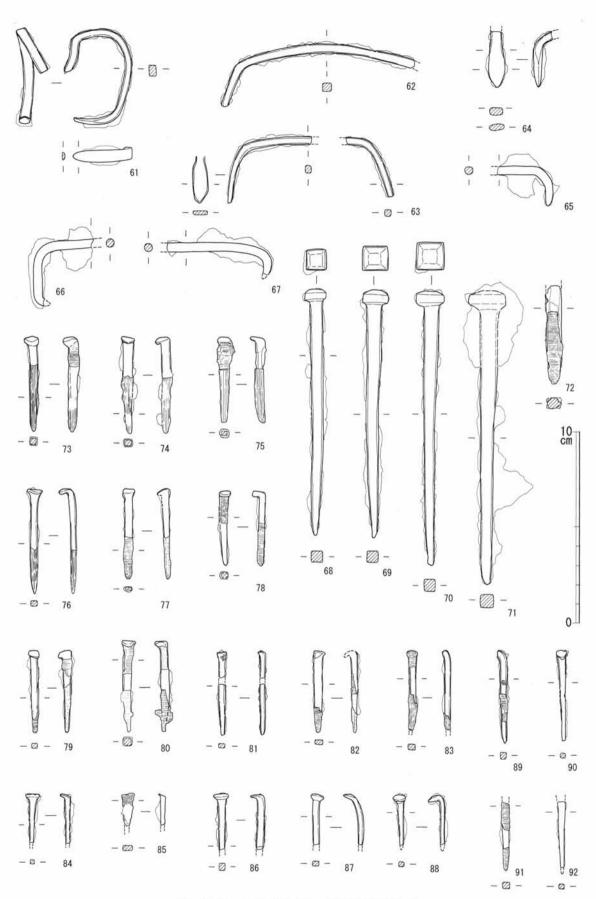
以上、本例は足金具吊手部の位置や、茎の円孔部から飛鳥時代に生産された方頭大刀であると 考える。

43 は先述した、42 に伴う一の足金具である。

44 は大刀の切先である。

45・46 は刀子である。45 は残存状況が良好ではないものの、両関になるものと思われる。 茎には柄と思われる木質が遺存している。46 は茎部分である。やや大形の製品であり、刀子と いうよりは小刀としたほうが妥当かと思われる。柄の痕跡を示す木質が遺存している。

47~57は鉄鏃である。47が刀子状の刃部をもつ長頸鏃、48が短い逆刺をもつ柳葉形の片 刃式長頸鏃である以外は、いずれも、棘状箆被をもつ長頸鏃である。刃部は逆刺を持たない柳葉 形を呈し、断面は片丸もしくは台形を呈する。茎に木質の遺存するものが多いため、矢柄を装着



第119 図 国分45号墳出土遺物実測図(4)

していたものと考えられる。また、当初不明鉄製品として考えた第 119 図 $61 \sim 64$ についても、 棘状箆被を持つ個体が存在したため、断面方形のものや、刃部の存在するものについては鉄鏃と 判断した。

58 は鞍金具である。「凸」字形の鉸具に一方の長い足金具が付く。

59 は鉸具である。鉸具本体の側面は方形に整形され、差し金は軸と一体化したものを装着している。

60 は革金具と考えられる鉄製品である。肉眼では、2か所に鋲を装着した痕跡が確認される。

 $61 \sim 67$ は一端をほぼ直角に折り曲げる鉄製品である。断面が円形を呈するため、変形した 鉄鏃とは考え難い。用途・性格などは不明である。

 $65 \sim 71$ は大形の鉄釘である。頭部を方形に作り出している。断面は方形を呈する。木質の 遺存するものはないため、どのように使用されていたのか不明である。

72は鉄釘の先端部である。横方向の木目が観察される。

 $73 \sim 92$ は小形の鉄釘である。頭部の遺存するものについては全て図示した。頭部を扁平に叩き延ばした後、折り曲げることにより釘の頭としている。木質の遺存するものが多く、頭部側で厚さ $1.5 \, \mathrm{cm}$ 前後、足側で $3.5 \, \mathrm{cm}$ 程度の板材を固定するのに用いられている。

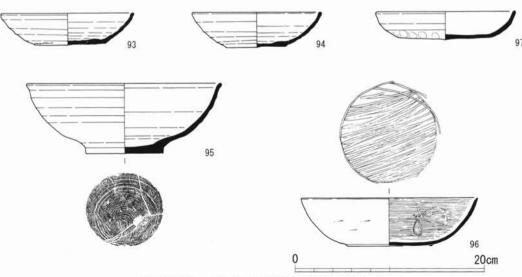
(石崎善久)

c. 平安時代の土器

ここでは古墳の埋葬行為と直接的な関連を持たない土器群について報告する。

93・94 は須恵器杯である。ともに平底の底部からやや内湾気味に外上方にのびる口縁部からなる。口縁端部はわずかに肥厚するようである。底部外面はヘラキリ後ナデ調整を施す。

95 は須恵器椀である。底部は平高台で、そこから内湾気味に立ち上がる体部と、外反する口縁部からなる。底部外面に糸切り痕がみられる。胎土は比較的精良で、灰白色を呈し、焼成も堅緻である。



第120図 国分45号墳出土遺物実測図(5)

京都府遺跡調査報告集 第129冊

96 は黒色土器椀である。平底の底部に内湾気味に立ち上がる体部からなり、そのまま口縁部に至る。口縁端部内面にはわずかに段が認められる。底部には断面三角形の小さな高台を貼り付ける。口縁部にヨコナデ調整を施し、外面はケズリ調整を施すが、ケズリの単位は読み取れない。内面にはミガキ調整を密に施す。底部内面には平行線状暗文を密に施す。内面のみが黒色を呈する。胎土は比較的精良である。外面は橙褐色を呈し、焼成は良好である。

97 は石室内で出土した土器片と石組み土坑 S X 86 で出土した土器片とが接合したものである。口縁部外面に二段ナデ調整を施す。

(筒井崇史)

4国分 46 号墳

位置 国分 46 号墳は、国分 45 号墳と同じ D 4 - 1 地区の拡張区の南西隅で検出した。北側に国分 45 号墳が、東側に国分 44 号墳がほぼ近接して築造されている。他の古墳同様、調査前にその存在を確認することはできなかった。石室床面の標高は 121 mである。

墳丘(第121図) 墳丘と石室の上半部は、後世の削平により失われていた。また、墳丘の西側と南側は水田の造成に伴い、完全に削平されていた。墳丘の東側には幅3.0 mほどの周溝を9.5 m分検出した。東に位置する国分44号墳とは周溝を共有せず、4 mほどの間を空けて別個に周溝が存在する。北側では弧状を呈する墳丘の裾を確認した。北側に位置する国分45号墳との間はやや幅が広く、周溝とは言いがたい。

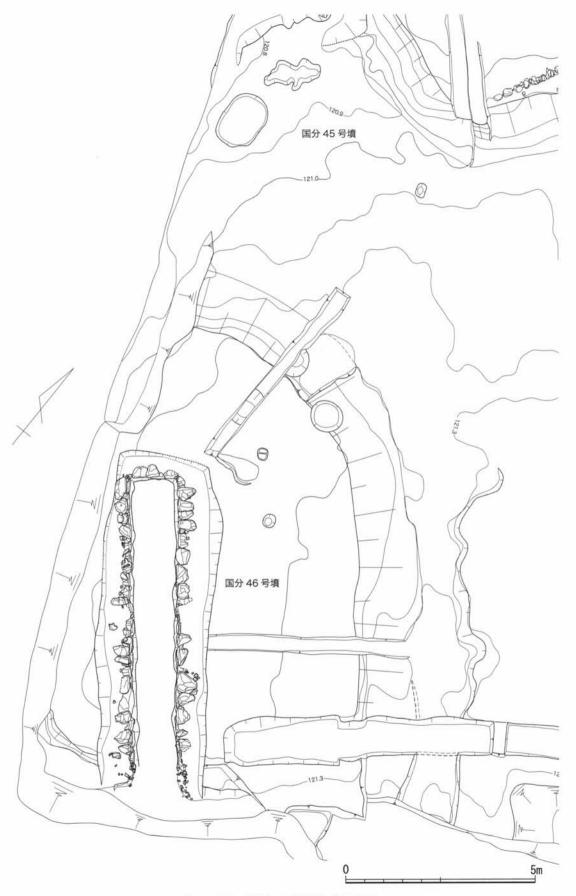
墳丘の形状は、北側と東側の状況から直径 $16 \sim 18$ mの楕円形を呈する円墳であったと考えられる。葺石や列石などの外部施設は検出されなかった。周溝内に転落した石材が認められなかったことから、もともとこれらを備えていなかった可能性が高い。なお、墳丘の削平は、墳丘上に平安時代以降の溝や堆積層 (第 122 図上段、暗橙褐色粘質土層)が見られることから、その頃に行われたと考えられる。

石室(第123・124図) 南東に開口する無袖式の横穴式石室である。ただ、右側壁では、奥壁から約3.3 mのところに、やや大きな石材を立てて用いており、この石材を玄室側にわずかに突出させていることから、右片袖を意識していると考えられる。この点をふまえると石室の規模は次の通りである。石室全長7.6 m、玄室長3.3 m、玄室幅1.3 m、羨道長4.3 m、羨道幅1.2 mを測る。石室の主軸はN40°Wである。石室の上半部は大きく削平されており、基底石と2、3段目の一部が遺存するに過ぎない。残存高は約0.6 mである。なお、石室に用いられている石材は自然石で、人為的な加工痕の認められるものはない。

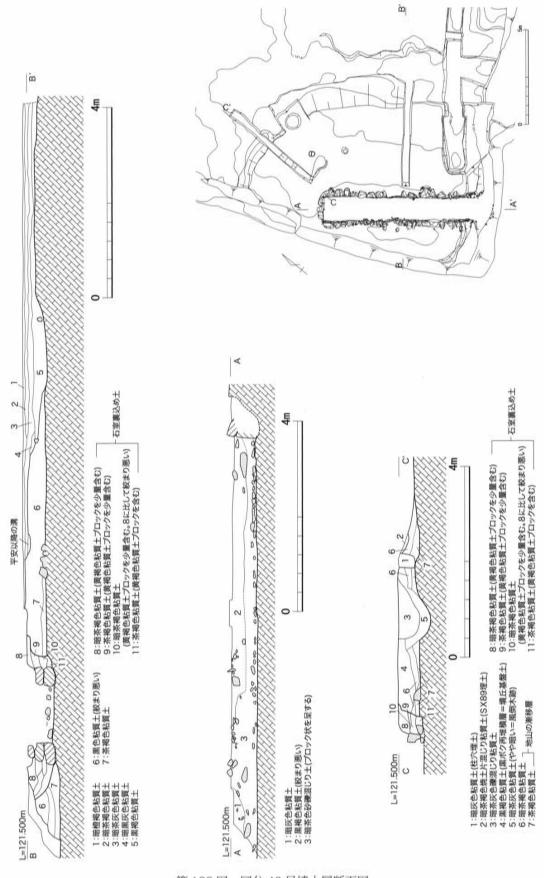
玄室は、一辺 $40\sim60$ cm、厚さ $40\sim60$ cm の石を中心に横積みに用いられている。目地は通っていない。奥壁の基底石は 3石で構成される。現状で、奥壁の持ち送りは認められない。

羨道は、全体的に扁平な石を横積みに用いて構成される。壁面には2段から3段の石材が残存しており、右側壁では、いくつか比較的大きな石を立位に用いる。

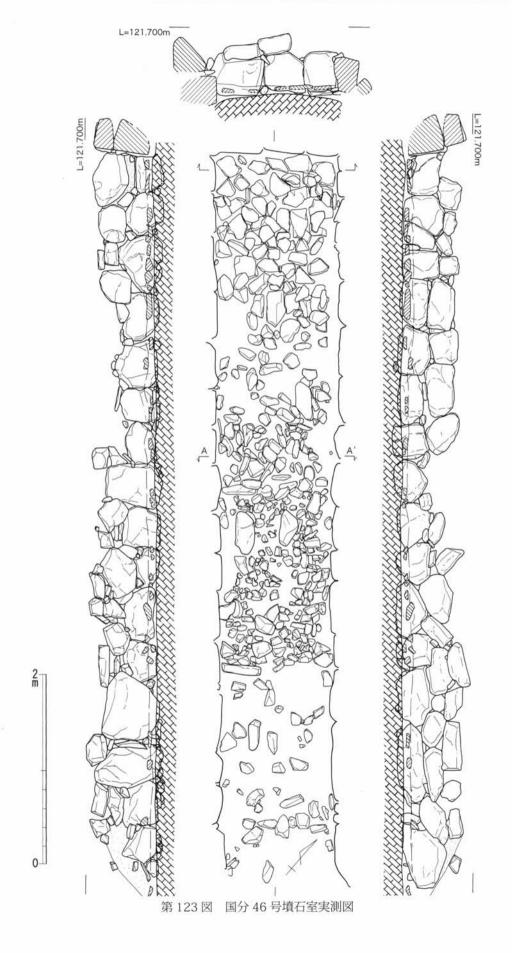
石室床面は、掘形底面の上に土を敷き、その上に礫を敷いている。敷石は、奥壁から約5.4 m付近まで認められる。敷石は石の大きさなどから3つに区分できる。奥壁から約2 mまでは、

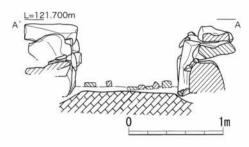


第 121 図 国分 46 号墳墳丘測量図



第 122 図 国分 46 号墳土層断面図





第124図 国分46号墳前壁側見通し図

50cm 大の比較的大きな石材が使用され、整然と石が敷き詰められている。この範囲では、敷石の下からも遺物が出土したことから、少なくとも、この付近までは、初葬以後に敷き直しが行われている可能性が高い。奥壁から2~3.3 m付近では、一部、攪乱も見られるが、20cm ほどの奥壁側よりも小型の石が敷き詰められている。奥壁から3.3~5.4 mの羨道部側は、10cm ほど

の石で構成されている。

敷石の上面には 20~40cm 程度の石が数個みられる。左側壁に奥壁から 0.8 m付近に 2 石存在する。この 2 石より羨道側から 1 mの地点にも、少しずれているが、主軸と平行した石が 1 個存在し、この 3 石で一組の棺台と考えられる。また、右側壁で、奥壁から 3.4 m付近で石室主軸に平行してレベルがほぼ揃っている 6 石がみられることから、この 6 石でもう一組の棺台を構成していたと考えられる。以上から棺台は石室主軸に平行して奥壁の左側壁側と、羨道の右側壁側に二組みられ、棺が 2 棺存在していた可能性がある。また、奥壁側で礫敷の敷き直しがあることから、これに先行する埋葬があったと考えられ、少なくとも 3 体埋葬されていたと考えられる。

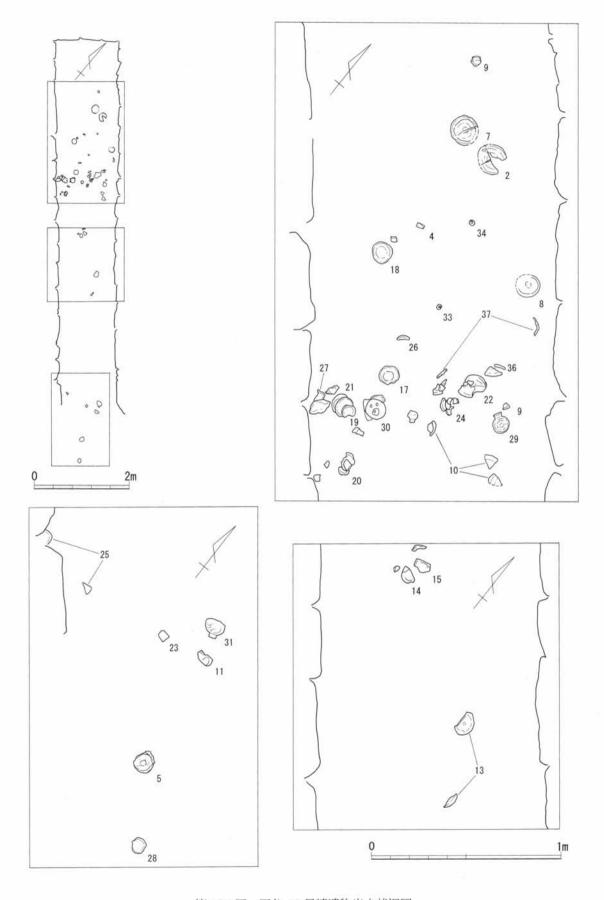
石室の閉塞状況については、閉塞石と考えられる石材が存在せず、閉塞状況については不明である。ただし、第122図の石室縦断面に示す通り、羨門部分では盛り上がったような状況で、第3層が観察され、この部分に小型の角礫が比較的多く見られたことから、羨門部で土と石材を盛ることにより閉塞を行っていた可能性がある。

石室の掘形は、全長 9.2 m、幅 2.6 ~ 3.0 mを測り、隅丸長方形である。検出面から 0.6 mの深さまで掘削し、石室基底石を設置している。掘形底面はほぼ平坦で、基底石を据えるための据え付け穴はなく、わずかに窪む程度である。掘形底部から検出面までは、暗褐色粘質土と茶褐色粘質土を交互に用いて、石材の裏込めを行っている。この作業は石室の構築に伴い、順次、行われたと考えられる。

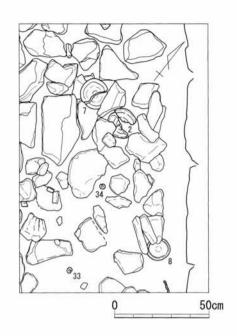
(安井蓉子)

遺物出土状況 (第 125・126 図) 石室床面直上の遺物は、玄室、羨道、羨門付近から出土した。玄室中央付近では、須恵器杯H蓋(2)、同杯H(7・8)、同短脚高杯 (18) が出土した。2・7・8 は、第 126 図に示すように敷石の下から出土した。玄門部付近の中軸線より右側では、須恵器短脚高杯 (17・19・20・21) と須恵器平瓶 (30) が出土した。17 と 21 は正位で出土したが、19 は逆位で、21 の上にかぶさるように乗っていた。20 は横に倒れた状態であった。平瓶 (30) は完形だが倒れている。中軸線より左側では、須恵器杯H(9) と須恵器長脚高杯 (22)、須恵器短脚高杯 (24)、須恵器提瓶 (29) が出土した。また、須恵器短頸壺 (26) が中軸付近で出土し、須恵器杯H(10) と須恵器短頸壺 (27) の破片は中軸線の左右に散乱した状態で出土した。

羨道部では、須恵器の杯G蓋 (13) と杯G (14・15) が出土した。いずれも中心軸付近で出土したが、杯G 2点はやや玄門部側で出土した。前庭部では、杯H蓋 (5)、杯 (11)、高杯 (23)、



第125 図 国分46号墳遺物出土状況図



第 126 図 国分 46 号墳 敷石下部遺物出土状況図

壺もしくは提瓶の口縁部と思われる破片 (25)、短頸壺 (28)、土師器平瓶 (31) などが出土した。25 が西側壁付 近で出土したほかは、いずれも中軸線付近から出土した。

石室埋土から出土した遺物としては、玄室の中央付近で、杯 (12) と短脚高杯 (16) がともに完形で出土した。また、玄門部付近からは杯H蓋 (1・4) が破片で、杯H (6) が完形で出土した。これらは床面から 20~30cm ほど浮いた状態で出土した。しかし、型式からみて初葬時のものである可能性が高い。また、1と4は石室床面直上出土の破片とそれぞれ接合する。また、石室埋土から平安時代の須恵器杯 (32) が出土した。

出土遺物 (第 127・128 図) 国分 46 号墳に伴う遺物として須恵器 30 点、土師器 1 点、耳環 3 点、鉄器 2 点を報告する。また、石室埋土から出土した平安時代

の須恵器1点についても報告する。

a. 土器類

 $1\sim5$ は須恵器杯H蓋である。 2 が完形であるほかは、残存率は $1/2\sim3/4$ 程度である。 口縁部及び口縁部と天井部の境の形状から、 $1\sim4$ と 5 の 2 群に分けられる。 $1\sim4$ は口径 13.2cm、器高 $3.7\sim4.1$ cm 程度のものである。天井部からなだらかに下降し、天井部と口縁部の境の稜をもたない。口縁端部は垂直に下るものと、わずかに外に開くものがある。天井部はいずれもヘラキリ後不調整である。 5 は口径 10.6cm、器高 3.5cm とやや小さいものである。平坦な天井部をもち、天井部と口縁部の境で屈曲する。ナデの回転方向は $2\sim4$ が時計回りである。 $1\sim4$ は、胎土に $1\sim3$ mm 程度の砂粒をやや多く含み、淡青灰色を呈する。焼成は良好である。 5 は灰白色を呈し、焼成は軟質である。

 $6\sim 10$ は須恵器杯Hである。いずれも、ヘラキリ後不調整である。口縁部はやや外反する短い立ち上がりをもつ。 $6\sim 8$ は立ち上がり径 11.0cm 前後、口径 13.0cm 前後、器高 4.0cm 未満の大きさである。一方、10 は立ち上がり径 10.4cm、口径 11.7cm、器高 3.2cm と、他の個体に比べ小さい。 $6\sim 8$ 、10 は一部欠損するもののほぼ完形である。また、9 は立ち上がり径 10.6cm、口径 12.2cm、器高 3.9cm を測る。残存率は、直接には接合しない破片 2 つを合わせて 3/4 ほどである。 $6\sim 8\cdot 10$ は上記杯H蓋の $1\sim 4$ に類似した胎土、色調、焼成を呈する。 9 は青灰色を呈し、焼成は堅緻である。

11 は須恵器杯である。口径 10.5cm、器高 3.5cm を測る。やや平坦な底部から緩やかに内湾して立ち上がり、外反気味の口縁部に至る。口縁部は短い。後述する須恵器杯 G とは若干異なった器形を呈する。ナデの回転方向は時計回りである。淡青灰色ないし青灰色を呈し、焼成は堅緻

である。

12 は須恵器椀である。完形で、口径 12.6cm、器高 4.6cm を測る。底部はやや扁平で、口縁部が外方に向かってほぼ直線的に開く。底部外面は回転ヘラケズリの後にナデ調整を施す。淡青灰色ないし青灰色を呈し、焼成は堅緻である。

13 は須恵器杯G蓋で、完形である。天井部に宝珠つまみがつく。つまみはわずかに稜をもつがほぼ球形である。天井部にわずかな平坦面をもち、外方に開きながら緩やかに下降する。ナデの回転方向は時計回りで、天井部外面には同じく時計回りのヘラケズリを施す。かえり径8.3cm、口径9.0cm、器高3.4cmを測る。暗青灰色ないし青灰色を呈し、焼成は堅緻である。

14・15 は須恵器杯Gである。14 は完形で、15 は 1/6 程度しか残存しない。どちらも底部は 平坦で、口縁は外方に向かって開く。14・15 は口径 9.5cm 強、器高 3.5cm 程度のやや小さい ものである。淡青灰色ないし青灰色を呈し、焼成は堅緻である。

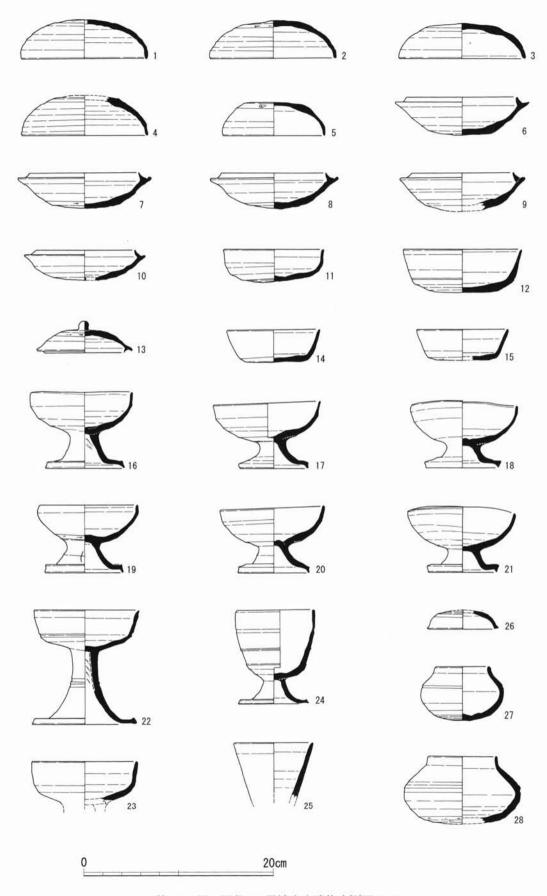
 $16\sim21$ は短脚の須恵器高杯である。16 の口縁部と 19 の脚部が一部欠損するほかは、すべて完形である。口径 $10\sim12$ cm、器高 $7\sim8$ cm 程度のもので、いずれも全体を回転ナデにより成形し、回転方向の分かるものはみな時計回りである。19 は杯底部外面に回転ヘラケズリを施す。杯部と脚部の高さの比率は、16 がほぼ 1:1 であるほかは 4:3 程度の短い脚がつく。これらは口縁部の形状から、外反するものと内湾するものの 2 つに大別できる。前者は、 $16\cdot17\cdot20$ が該当する。16 の脚部が他と比べて長いが、脚端部が外反気味であるという共通点をもつ。後者は $18\cdot19\cdot21$ が該当する。 $18\cdot21$ は脚端部が内傾し、19 はやや外反気味である。 $16\cdot18\cdot19\cdot21$ は暗青灰色ないし青灰色を呈し、焼成は堅緻である。 $17\cdot20$ は淡青灰色ないし暗灰色を呈し、焼成は良好である。

22・23 は長脚の須恵器無蓋高杯である。回転ナデによる成形後、杯底部外面に回転ヘラケズリを施す。22 は口径約 11.0cm、器高 12.0cm、底径 11.0cm を測る。残存率は杯部で 2/3、脚部で 3/4 程度である。口縁部はやや外に開いて立ち上がる。脚部に透孔はない。杯部の底部外面付近に 1条、脚部中位には 2条の沈線をめぐらす。脚端部はヨコナデ調整によりつまみ出されている。脚部内面には絞り痕が認められる。23 は脚部を欠損し、口縁部のみが 1/2 程度残存する。脚部の接合部には透孔を切り取った際のヘラの切り込み痕が見られる。淡青灰色を呈し、焼成は堅緻である。

24 は脚台付椀である。杯部高 7.5cm、脚台高 2.3cm を測り、杯部と脚台の高さの比率が 3: 1以上ある。沈線やナデにより、段状の突帯を表現している。脚部は椀の底部外面に回転へラケズリを施した後に貼り付け、そののちに回転ナデを施す。端部には強いナデによる屈曲部がある。脚部は完形で、杯部は口縁部で 1/4 ほどが残存する。口径 7.1cm、器高 9.8cm、底径 7.4cm である。 淡青灰色を呈し、焼成は堅緻である。

25 は長頸壺もしくは提瓶の口縁部と思われる。内外面ともに灰を被る。直接には接合しないが同一個体と思われる破片を合わせると残存率は 1/2 程度で、復原口径は 8.3cm である。

26 は須恵器で、短頸壺の蓋と思われる。回転ナデで成形したのち、天井部に回転ヘラケズリ



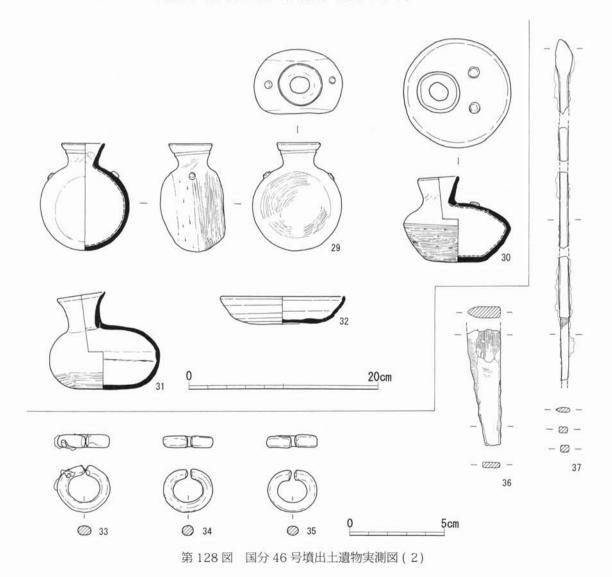
第127 図 国分46号墳出土遺物実測図(1)

を施す。口縁端部に幅 0.5cm 程度の面をもつ。残存率は 5/6 程度で、口径は 6.6cm である。

27・28 は須恵器短頸壺である。ともに肩部が張るもので、沈線を 1 条めぐらす。口縁部は短く直立ぎみに立ち上がる。口縁部及び体部の外面上半は丁寧なナデ、体部下半には反時計回りのヘラケズリを施す。27 はほぼ完形で、口径は 5.6cm、器高 5.6cm を測る。青灰色を呈し、焼成は良好である。28 の残存率は 1/3 程度で、口径 7.0cm、器高 6.6cm である。淡青灰色を呈し、焼成は良好である。

29 は須恵器提瓶で、完形である。ほぼ円形の体部とラッパ状に開く頸部からなる。体部の片面に回転へラケズリを、もう片面に同心円文状のカキメを施し、肩部に矮小化したボタン状の把手を取り付ける。また、口縁部は頸部を絞って製作している。口径 4.4cm、器高 11.4cm を測る。青灰色を呈し、焼成は堅緻である。

30 は須恵器平瓶で、完形である。口縁部内面には体部との接合痕が観察できる。口径 4.1cm、体部最大径 11.3cm、器高 8.1cm を測る。口縁部及び体部上半面には回転ナデを、下半面にはヘラケズリののちカキメを施す。青灰色を呈し、焼成は堅緻である。



-171 -

京都府遺跡調査報告集 第129冊

31 は土師器の平瓶である。体部最大径は 11.6cm、器高 10.4cm を測る。緩やかな肩部をもち、全体的に丸みのある体部に、ほぼ垂直な頸部とわずかに内湾する口縁部がつく。体部上方と下方は別作りで、底部には粗いミガキを施す。把手の痕跡はない。胎土は砂粒をほとんど含まない比較的精良なものである。淡橙褐色を呈し、焼成は良好である。

(田中奈津子)

32 は須恵器杯である。平底の底部からやや内湾気味に外上方にのびる口縁部からなる。口縁端部内面がわずかに肥厚する。口径 13.0cm、器高 3.0cm を測る。底部外面はヘラキリ後ナデ調整を施す。平安時代中期の土器と考えられる。

(筒井崇史)

b. 金属製品

33~35 は耳環である。国分46 号墳からは3点の耳環が出土しているが、大きさや質感から、34と35 がセットになる。両者ともやや細身の作りであり、表面の鍍金は良好に遺存し、緑青の付着はほとんど認められない。33 は表面の鍍金がわずかに遺存するのみである。前2者に比してやや大形である。緑青の付着が著しい。

36 は大きさからみて大刀の茎部分と思われる。断面形から斜め関の大刀であった可能性が考えられる。柄と思われる木質の下層に横方向の繊維質の痕跡が観察される。

37 は長頸鏃である。刃部は柳葉形の両丸造、頸部の関は直角関である。木質が茎に遺存しているため、矢柄が装着されていたものと判断される。

(石崎善久)

⑤国分1号墳

国分 1 号墳は、今回の整備事業から現地保存ということで地区除外されたが、D 4-1 地区および D 8-1 地区の調査で、国分 1 号墳に関連すると思われる遺構を検出した。ここでは、D 4-1 地区で検出した溝 S D 74 について報告する。

溝SD74は、国分1号墳の南西側で検出した弧状を呈する溝状の遺構である。検出長9m、最大幅3.6m、深さ0.5m前後である。ただ、検出された遺構としては、極端に深い点が古墳の周溝として妥当かどうか問題があると思われる。この点については周辺の削平が著しいため、明らかにしがたいが、国分1号墳に沿って弧状を呈することから、少なくとも古墳の周溝を反映する遺構であると思われる。埋土は、下層から暗茶灰色砂礫混じり土、黒ボク層の再堆積層と思われる黒褐色粘質土、暗茶灰色粘質土の3層である。最下層から土師器甕(第139図27)などが出土したものの、国分1号墳に伴うものとは考えていない。

(筒井崇史)

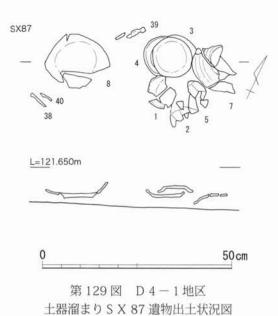
(2) 平安時代の遺構・遺物

平安時代の遺構は、おもに D 4-1 地区西半部で検出した。検出した遺構としては土器溜まり 2 か所、石組みの土坑 2 基、土坑 1 基などを検出した。時期の定かでない柱穴の中にはこの時期 に属するものもあると考えられる。

①検出遺構

土器溜まりSХ87(第129図) 国分45号墳の墳丘検出作業中に確認した土器溜まりである。確認後は、掘形の検出作業を行ったが、確認できなかった。土器の出土状況から、もともと掘形を伴わず、地面の上に土器を重ねて置いた可能性もある。土師器杯3点、土師器皿5点、鉄器3点が出土した(1~8・38~40)。

土器溜まりSХ 92 国分 43 号墳の墳丘検出作業中に確認した土器溜まりである。上記 S X 87 と同様に掘形を検出することはできなかったので、地面の上に直接置かれたものと考えられる。土師器皿 2 点が出土した (36・37)。



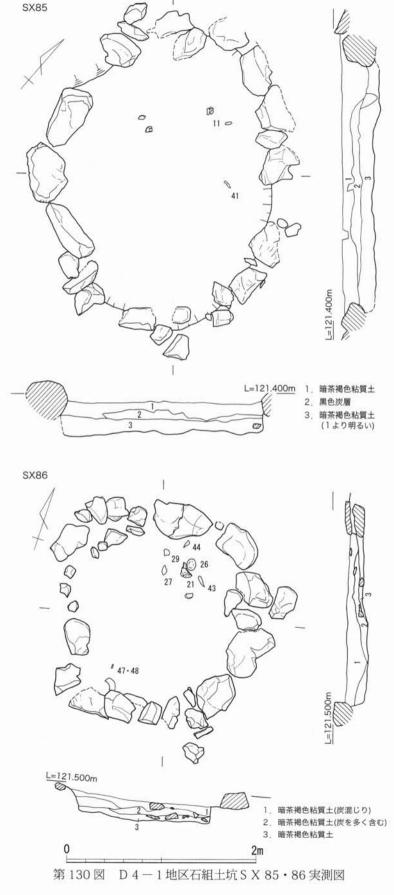
石組み土坑 $S \times 85$ (第 130 図上段) 国分 45 号墳と国分 46 号墳の間で検出した。30~70cm 程度の角礫を楕円形に並べた石組みの土坑である。長軸 2.8 m、短軸 2.2 m、深さ 0.2 m程度である。礫は検出面のみで確認でき、複数の礫を積み上げたような状況にはない。 $S \times 85$ は、国分 45 号墳と国分 46 号墳の間の空隙地がある程度埋没した後に掘削されている。土坑内には 炭層が確認された。土坑内からは土師器皿 ($9 \sim 19$) や鉄器 ($41 \cdot 42$) などが出土した。

石組み土坑 $S \times 86$ (第 130 図下段図) 石組み土坑 $S \times 85$ と近接して検出した。 $S \times 85$ と同様に、 $25 \sim 60$ cm 程度の角礫をほぼ円形に並べた石組みの土坑である。直径は $1.7 \sim 1.8$ m ほどで、 $S \times 85$ よりも一回り小さい。構造的には $S \times 85$ とほぼ同じである。 $S \times 85$ と同様、 炭を多く含む層を確認した。土坑内からは土師器皿 $(20 \sim 29)$ や鉄器 $(43 \sim 48)$ などが出土した。

土坑 S K 91 石組み土坑 S X 85・86 を除去し、国分 45 号墳と国分 46 号墳の間の周溝の検出作業中に検出した。土器片が出土したため、精査を加えたが、土坑の平面形は不整形な形状をし、規模も不正確である。国分 45 号墳のほぼ正面に位置するが、これと直接的な関係はないものと判断される。土師器皿などが出土した $(30 \sim 35)$ 。このうち、 $30 \cdot 31 \cdot 34$ は精査中に出土したもので、必ずしも S K 91 から出土したものではないが、検出状況から S K 91 に属するものと判断した。

②出土遺物

土器溜まりS X 87(第 131 図 $1 \sim 8$ ・第 132 図 $38 \sim 40$) 出土遺物としては土師器、鉄器がある。 $1 \sim 5$ は土師器皿である。このうち $1 \sim 3$ は口縁部外面に強いヨコナデ調整を施し、口縁端部をわずかにつまみ上げたような形状を呈する。いわゆる「て」字状口縁で、やや厚手である。 $4 \cdot 5$ もいわゆる「て」字状口縁を呈するが、口縁端部のつまみ上げが弱くなる。 $6 \sim 8$ は土師器杯である。いずれも回転台を利用して成形されており、底部外面に糸切り痕が見られる。底部から内湾気味に立ち上がった後、口縁部中位付近から大きく外反する。ただし、明確な稜は形成



しない。内外面とも回転ナデ調整を施し、ナデ痕跡が明瞭に残る。

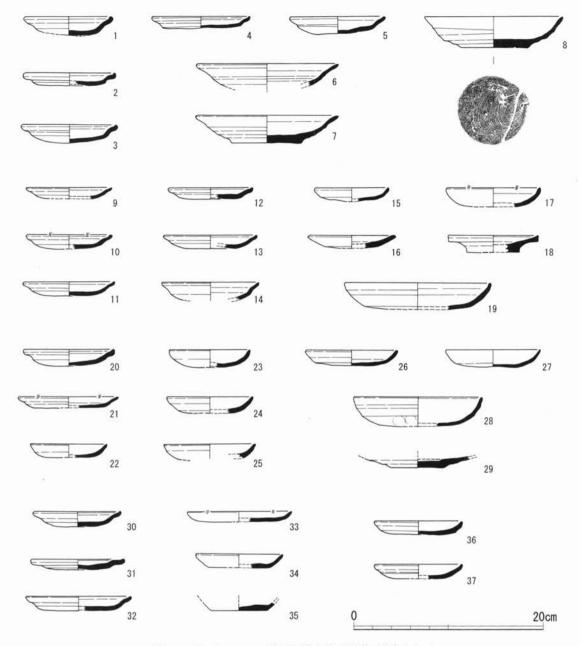
(筒井崇史)

SX87出土鉄器には鉄釘2 点、不明棒状鉄器1点がある。 鉄釘(38・39)は頭部を折り曲 げて造り出す。両者とも2種類 の木目が観察されるため、木製 容器等に用いられたと考える。 棒状鉄器(40)は頭部を扁平に 仕上げている。鉄釘の可能性が ある。

(石崎善久)

石組み土坑 S X 85(第131図

9~19、第132 図 41·42) 出土遺物としては、土師器、鉄 器がある。土師器はいずれも皿 で、9~18は小型品、19は 大型品である。前者は、その形 態や製作技法から4つの器形に 分けられる。9~14は口縁部 外面にヨコナデ調整を施し、口 縁端部をわずかにつまみ上げ たような形状を呈する。いわゆ る「て」字状口縁であるが、S X87出土の「て」字状口縁土 師器皿に比べると、つまみ上げ が弱くなっており、退化した形 態と考えられる。15・17 は底 部から口縁部が内湾気味に立ち 上がるものである。15 は口径 7.7cm で、かなり小型品である。 16 は底部から斜め上方に口縁 部がのびるものである。底部は

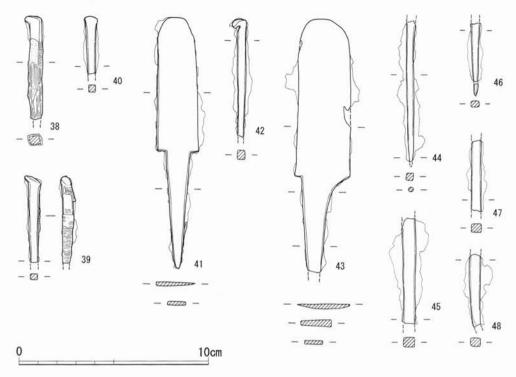


第131図 D4-1地区遺構内出土遺物実測図(1)

糸切りで切り離している可能性がある。18 は平高台状の底部に短く斜め上方に口縁部がのびるものである。口縁部外面に面をもち、端部はわずかにつまみ上げたような形状である。余り例を見ない器形を呈する。19 は口径 15.4cm で、ほかの出土土師器皿に比べ大きい点が注意される。口縁部外面に2段のヨコナデ調整を施すが、口縁部は外反せず、ほぼ直立したような形状を呈する。

(筒井崇史)

SX 85 出土鉄器には刀子状鉄製品 1 点 (41)、鉄釘 1 点 (42) がある。刀子状鉄製品 (41) は両関であり、一方に刃部を形成する。切先は丸く収められているため、通常の刀子とは性格の異なる刃物であると考える。茎尻は鋭くおわり、肉眼では目釘孔などは観察できない。鉄釘 (42) は



第132 図 D4-1地区遺構内出土遺物実測図(2)

頭部を扁平に整形した後屈曲させるものである。

(石崎善久)

石組み土坑 $S \times 86$ (第 131 図 20 ~ 29、第 132 図 43 ~ 48) 出土遺物としては、土師器、鉄器がある。 $20 \sim 28$ は土師器皿で、 $20 \sim 25$ は小型品、 $26 \cdot 27$ は中型品、28 は大型品である。20 は口縁部外面にヨコナデ調整を施し、口縁端部をわずかにつまみ上げたような形状を呈する。いわゆる「て」字状口縁である。21 は平底の底部から外反気味なものの、ほぼ直線的に外上方に伸びる。 $22 \sim 25$ は内湾気味に立ち上がる口縁部を持つもので、口縁部にヨコナデ調整を施す。 $26 \cdot 27$ も内湾気味に外上方に立ち上がる口縁部を持つもので、口縁部にはヨコナデ調整を施す。28 は口縁部外面に2 段のヨコナデ調整を施す。口縁部は外反せず、外上方にほぼまっすぐに立ち上がる。29 は土器溜まり 3×87 出土の 3×87 出土の 3×87 や 3×87 出土の 3×87 や 3×87 出土の 3×87 のような土師器杯の底部と考えられる。摩滅が著しく調整は不明である。

(筒井崇史)

S X 86 出土鉄器には刀子状鉄製品 1 点 (43)、棒状鉄製品 5 点 $(44 \sim 48)$ がある。刀子状鉄製品 (43) は S X 85 出土のものと同じく切先を丸くおさめる。関は両関であるが、刃関側が直角関、背関側が斜め関を呈し S X 85 出土のものとは若干様相を異にする。棒状鉄製品 $(44 \sim 48)$ は先端の確認できるもの 2 点 $(44 \cdot 46)$ を除き小片である。木質などの遺存は確認できず用途不明である。

(石崎善久)

土坑 S K 91(第 131 図 30 \sim 35) 出土した土器は、いずれも土師器皿である。 31 \sim 33 は口縁部外面に強いヨコナデ調整を施し、口縁端部をわずかにつまみ上げたような形状を呈する。い

わゆる「て」字状口縁の退化形態と考えられ、また厚手となっている。「て」字状口縁の土師器 皿の中でも、後出する一群と考えられる。33 は口径がやや大きいものの、浅い皿である。34・ 35 は平底の底部に斜め上方に短く伸びる口縁部からなる。回転台を使用して成形したと考えられ、摩滅が著しいものの、底部の切り離しに糸切りを利用したと思われる。

土器溜まりSX 92(第 131 図 36・37) ともに小型の土師器皿である。口縁部に 2 段のヨコナデ調整を施す。

(筒井崇史)

(3)中世の遺構・遺物

中世の遺構はD4-1地区、D4-2地区において検出した。D4-1地区では柱穴や溝などを検出したが、遺構の分布密度は比較的希薄である。しかし、遺物は石室を破壊した際の石材廃棄土坑などから多数出土した。これらについては包含層出土遺物として扱った。

一方、D4-2地区では土坑、溝、柱穴などを多数検出した。遺構の大半は地山面上で検出したが、調査区南端では若干の黒褐色土の堆積があり、遺物包含層と判断した。黒褐色土からは若干の遺物が出土したものの、その下層では遺構は検出されなかった。

①検出遺構

a. D4-1地区検出遺構

柱穴SP 05(第 134 図) 国分 43 号墳の墳丘上で検出した不整形な柱穴である。切り合い関係を確認できなかったが、2基以上の柱穴が切り合っている可能性もある。長軸 0.7 m、短軸 0.3 m前後、深さ 0.2 m前後である。土師器皿 (1・2)が出土した。

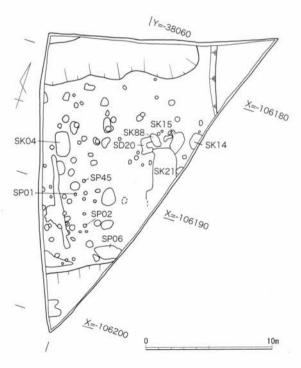
柱穴 S P 06 後述する溝 S D 07 の上面で検 出した柱穴である。直径 0.3 m、深さ 0.28m で ある。土師器皿 (6) が出土した。

溝SD07 国分 43 号墳の墳丘上で検出した弧状を呈する溝である。検出長 3.8 m、深さ 0.05 m程度である。土師器皿 (7) などが出土した。

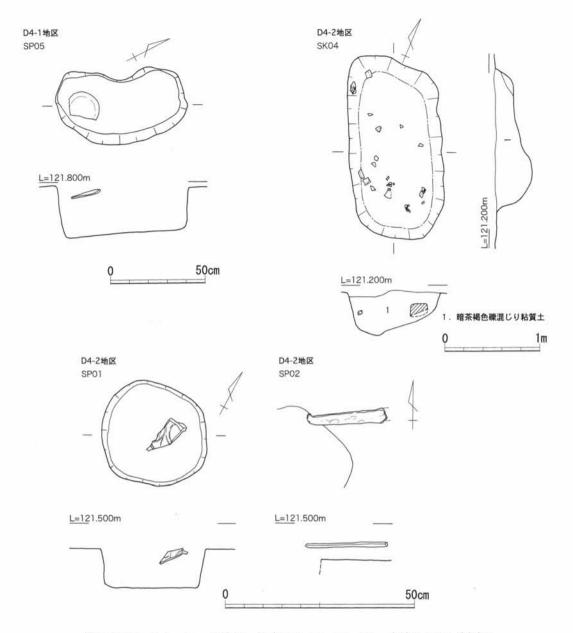
石垣状遺構 S X 83 石組み土坑 S X 85・ S X 86 の西側で検出した石垣状の遺構であるが、詳細は不明である。石自体も整然と積み上げられたような状態ではなかった。土師器皿(3~5)などが出土した。

b. D4-2地区検出遺構

土坑 S K 04(第134図) D 4-2地区の中 央部西寄りで検出した。平面形が長方形を呈し、 南北方向に主軸を持つ。全長1.9 m、幅1.0 m、



第133 図 D4-2地区 検出遺構配置図(1/300)



第134 図 D4-1・2地区 柱穴SP01・02・05、土坑SK04 実測図

深さ $0.4~\mathrm{m}$ である。土坑底面は平坦でなく、やや凹凸がみられる。土坑からは瓦器椀や同皿、土師器皿などが比較的多数出土した (第 $136~\mathrm{M}$ $1\sim 13$)。

土坑 S K 88 D 4-2 地区の中央部東寄りで検出した。長径 0.7 mほどの平面形が円形を呈する土坑である。土坑内からは瓦器椀や土師器皿、土師器鍋、白磁椀など多数の土器が出土した (第 136 図 $14\sim32$)。なお、この土坑と隣接する柱穴とは切り合い関係にあり、遺物の一部が接合した。

溝SD20 土坑SK88の近くで検出した「L」字状を呈する溝状遺構である。どのような性格のものであるか不明である。深さは $5\sim10$ cm である。埋土から土師器皿などが出土した(第 137 図 $36\cdot37$)。

柱穴SP 01(第134図) D4-2地区の中央部やや南寄りで検出した。平面形は円形を呈す

る。直径 0.3 m、深さ 0.1 mである。 柱穴内から青磁椀と土師器皿が出土 した (第 137 図 38・39)。

以上のほか、柱穴 S P 02 に近接して、折損した鉄刀が出土した (第 142 図 6)。掘形等を伴わず、遺物包含層として取り上げた。また、土坑 S K 14・15・85、柱穴 S P 27・73・83・84・87 などからも土師器皿や土錘などが出土した (第 136 図 33 ~ 35、第 137 図 42 ~ 47)。

4 4 5 5 6 6

第135 図 D4-1 地区遺構内出土遺物実測図

②出土遺物

a. D4-1地区出土遺物

石垣状遺構 $S \times 83$ (第 135 図 3 \sim 5) ともに小型の土師器皿である。特に 3 は口径 6.0cm、器高 1.4cm と非常に小さい。 5 の底部外面に糸切り痕がみられる。

柱穴SР 06(第 135 図 6) 小型の土師器皿である。口縁部をユビオサエやナデ調整によって 整形する。

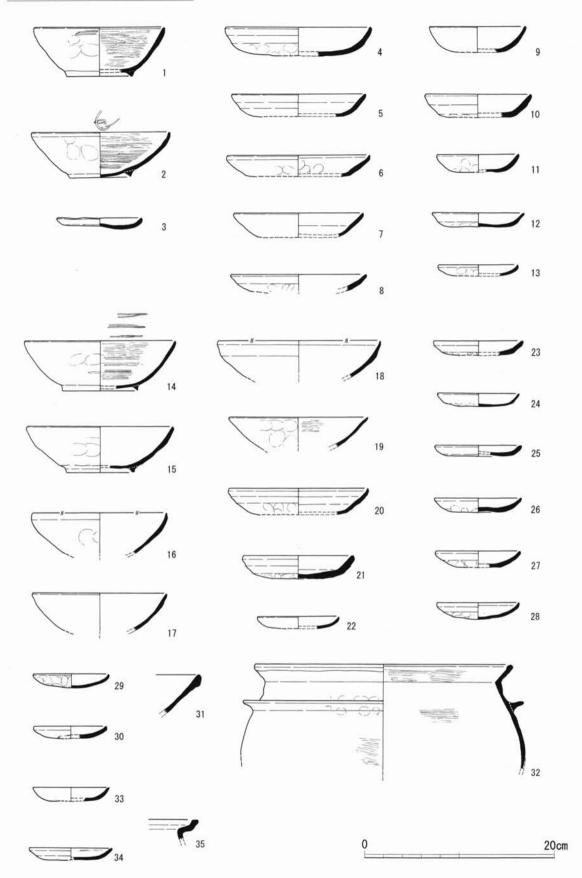
溝SD 07(第135 図7) 小型の土師器皿である。

柱穴SP 05(第 135 図 1・2) 土師器皿が出土した。1は大型の土師器皿である。口縁部をナデ調整やユビオサエで整形する。1の底部外面全体にはヘラ状工具による直線状暗文のようなものを密に施す。口径 19.0cm、器高 2.4cm である。2 は中型の土師器皿である。口縁部をユビオサエやナデ調整によって整形する。底部から口縁部への立ち上がりの外面に成形時のシワなどが確認できる。

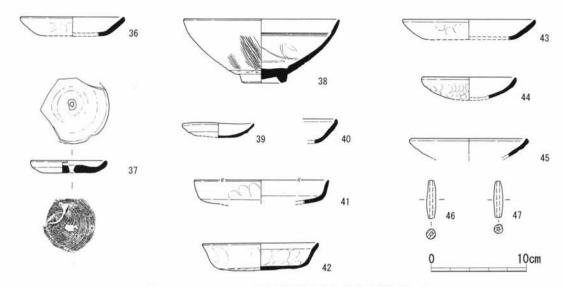
b. D4-2地区出土遺物

土坑 S K 04(第 136 図 $1 \sim 13$) $1 \sim 2$ は瓦器椀である。内面にミガキ調整を密に施す。外面にユビオサエ痕が確認できる。底部には断面三角形の高台を貼り付ける。 1 は口径 13.6cm、器高 5.1cm である。 2 は底部内面に暗文を施す。口径 14.6cm、器高 4.9cm である。 3 は瓦器皿である。 $4 \sim 8$ はやや大型の土師器皿である。 $4 \cdot 5$ は口縁部に 2 段のヨコナデ調整を施す。 6 は口縁端部をつまみ上げる。 $9 \cdot 10$ は中型の土師器皿で、 10 は口縁部に 2 段のヨコナデ調整を施す。 $11 \sim 13$ は小型の土師器皿である。

土坑 S K 88 (第 136 図 $14 \sim 32$) $14 \sim 19$ は瓦器椀である。14 や 19 は摩滅気味であるが、内面にミガキ調整を施していることがわかる。底部には断面形が三角形を呈する高台を貼り付ける。14 は口径 15.6cm、器高 5.2cm である。15 は口径 15.3cm、器高 4.9cm である。 $15 \sim 18$ は摩滅が著しく、調整不明である。20 は大型の土師器皿、21 は中型の土師器皿である。どちらも口縁部外面に 2 段のヨコナデ調整を施す。 $22 \sim 30$ は小型の土師器皿である。31 は白磁椀の



第136図 D4-2地区遺構内出土遺物実測図(1)



第137図 D4-2地区遺構内出土遺物実測図(2)

小破片である。32 は土師器の羽釜である。やや球形に近い体部と外上方に直線的にのびる口縁部からなる。口縁端部内面は肥厚する。全体にハケ調整を施すが、体部内外面はさらにナデ調整を加える。外面に煤が付着する。口径 27.0cm、残存高 11.0cm である。

土坑SK 14(第136 図33) 小型の土師器皿である。

土坑SK 15(第136 図34) 小型の土師器皿である。

土坑SK 85(第136 図35) 瓦質土器の羽釜と考えられる。小破片である。

溝SD20(第137 図36・37) 36・37 は土師器皿である。37 は底部中央に直径 0.8cm 程度 の小孔がある。焼成後に穿孔している。また、底部外面に糸切り痕がみられる。

柱穴SP 01(第137 図38・39) 38 は同安窯系の青磁椀である。底部が1/2程度残存するものの、口縁端部はほとんど残存しない。底部は削り出し高台である。39 は小型の土師器皿である。

その他の柱穴 (第 137 図 $40 \sim 47$) $40 \sim 43$ はいずれも平底の底部を有する土師器皿である。 $44 \cdot 45$ はやや丸底気味の土師器皿である。口縁部の形態が複数あり、斜め上方に立ち上がるものや、内湾気味に立ち上がるもの、ほぼ直立するもの、などがある。 $46 \cdot 47$ は土錘である。 長さ 3 cm 前後、最大径 1 cm である。

(筒井崇史)

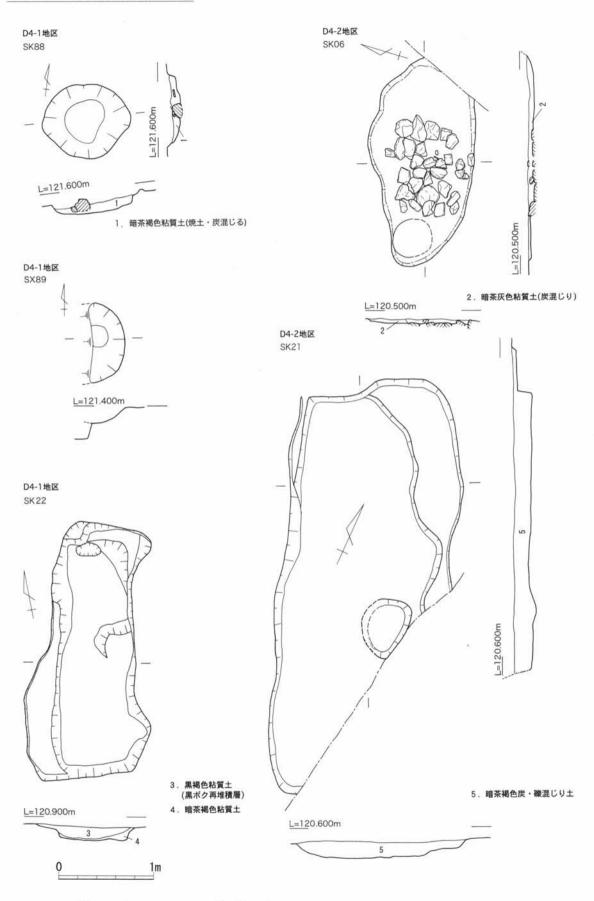
(4)時期不明の遺構

土坑 S K 22(第 138 図) D 4-1 地区で検出した。国分 1 号墳の西側で検出した長方形を呈する土坑である。全長 2.65 m、幅 0.8 m前後、深さ 0.18m 前後である。土壙墓等の可能性も考えられたが、出土遺物等がなく、遺構の性格、時期はいずれも不明である。

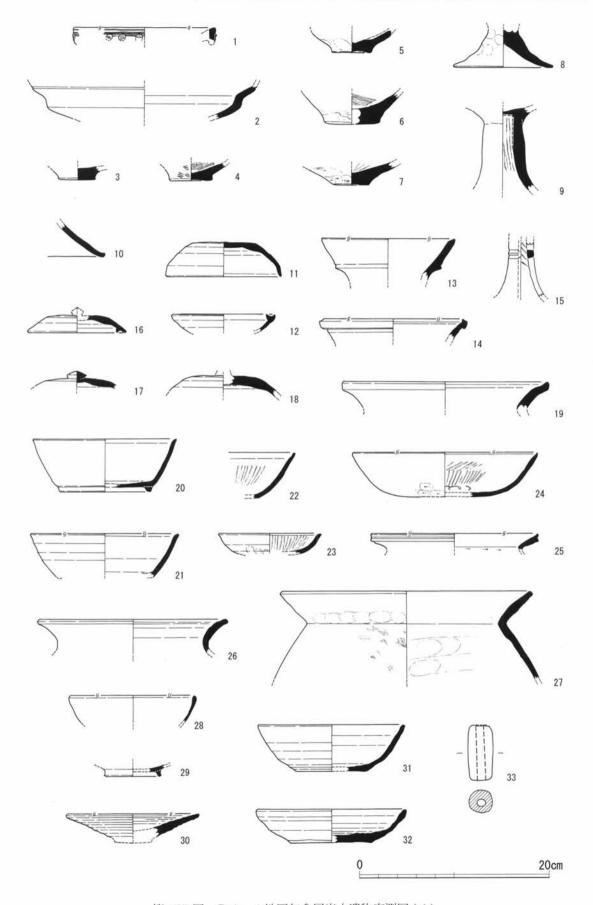
焼土坑 $S \times 88$ (第 138 図) D 4 - 1 地区の国分 46 号墳の墳丘上で検出した焼土坑である。 直径 $0.8 \sim 0.9$ m程度のほぼ円形を呈し、土坑底面は赤褐色に変色していた。土器の小破片が出土したものの、時期は不明である。

焼土坑SX89(第138図) SX89と同様、国分46号墳の墳丘上で検出した焼土坑である。

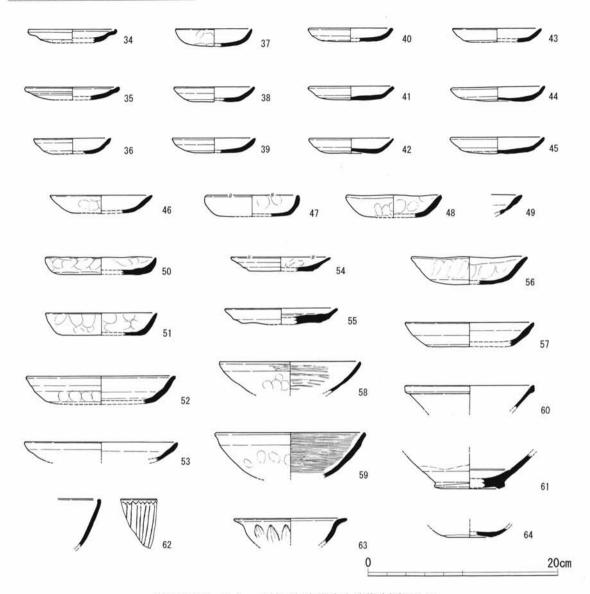
京都府遺跡調査報告集 第129冊



第138 図 D4-1・2地区焼土坑SX88・89、土坑SK06・21・22 実測図



第139 図 D4-1地区包含層出土遺物実測図(1)



第140図 D4-1地区包含層出土遺物実測図(2)

46 号墳の墳丘断ち割り中に確認したため、平面的にはおよそ半分程度を検出したものである。 推定直径 0.8 m程度の円形を呈し、土坑底面が部分的に赤褐色を呈していた。出土遺物がなく、 時期は不明である。

土坑 S K 06(第 138 図) D 4-2 地区の南半部で検出した。平面形が長方形を呈し、東西方向に主軸を持つ。検出面から $7 \sim 8$ cm ほど下げたところで、 $10 \sim 20$ cm ほどの扁平な石を敷き詰めた状態を検出した。全長 2.2 m、幅 1.1 mである。時期は不明である。

(5)包含層出土遺物

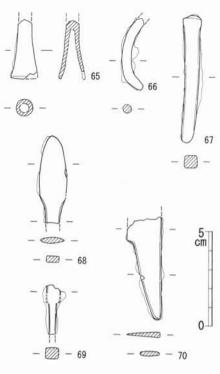
① D 4 - 1 地区包含層出土遺物 (第 139 ~ 141 図)

弥生土器、須恵器、土師器、瓦器、白磁、青磁、鉄器などがある。これらは石室内や周溝の埋

土、あるいは石材を廃棄した土坑などから出土した。

 $1\sim10$ は弥生土器である。1 は器台もしくは広口壺の口縁部の一部である。擬凹線文と円形浮文を確認できる。2 は高杯の杯部と思われる。 $3\sim7$ は壺または甕の底部である。5 は鉢の底部かもしれない。 $8\cdot9$ は高杯の脚部である。8 は低脚のものである。9 は脚柱部で、内面に絞り痕がみられる。10 は脚裾部である。

11~21 は飛鳥時代から奈良時代にかけての須恵器である。11 は杯H蓋である。天井部外面はヘラキリ後不調整である。12 は杯Hであるが、杯G蓋の可能性もある。13・14 は壺の口縁部と思われる。15 は長脚で上下2段に透孔を有する高杯の脚部である。16・17 は須恵器杯G蓋である。おそらく国分古墳群のいずれかに伴うものであろう。18 も蓋であるが、詳細は不明である。19 は甕の口縁部である。20 は杯Bである。断面逆台形の高台を底部の周囲に貼り付ける。口径15.1cm、器高5.6cm、底径9.6cmである。



第141図 D4-1地区 包含層出土遺物実測図(3)

22~27 は飛鳥時代から奈良時代にかけての土師器である。22・24 は土師器杯Aである。放射状暗文を22 は1段、24 は2段施す。24 は底部内面に螺旋状暗文も確認できる。23 は土師器杯Cである。内面に放射状暗文を1段施す。25 は土師器甕の口縁部である。外面に沈線状の凹線がめぐる。26 も土師器甕の口縁部である。強いヨコナデ調整によって内面に3条程度のナデの痕跡がみられる。27 は「く」字状に屈曲する頸部と、外上方にまっすぐのびる口縁部からなる。口縁部はヨコナデ調整を施す。体部内外面とも摩滅が著しいが、外面はハケ調整の痕跡がみられる。

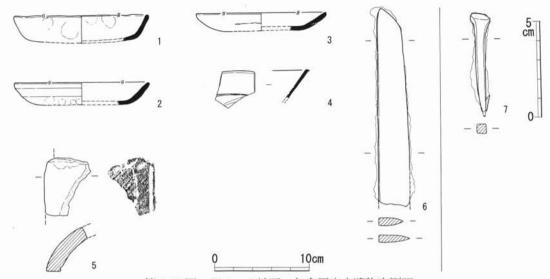
28 は須恵器椀である。29 は黒色土器椀と思われる土器の底部である。30 は土師器杯である。 回転ナデ調整の痕跡が明瞭に残る。31 は土師器椀である。底部外面に糸切り痕がみられる。32 は土師器と思われ、杯である。底部外面に糸切り痕がみられる。33 は土錘である。

 $34 \sim 57$ は土師器皿である。 $34 \cdot 35$ は口縁部がいわゆる「て」字状口縁を呈する土師器皿である。 52 は口縁部に 2 段のヨコナデ調整を施す。 $54 \cdot 55$ は底部外面に糸切り痕がみられる。

 $58 \cdot 59$ は瓦器椀である。内面にミガキ調整を施す。 $60 \cdot 61$ は白磁椀である。61 は削り出し高台である。 $62 \cdot 63$ は青磁椀である。64 は白磁椀もしくは皿の底部と考えられる。

(筒井崇史)

第141 図 68 ~ 80 は国分 43 号墳と国分 45 号墳の間の周溝 S D 84 から出土した鉄器である。 周溝埋土掘削中に出土したため、包含層出土遺物として扱った。出土鉄器には刀子 1 点 (70)、 鉄鏃 2 点 (68・69) がある。刀子は茎から刃部の一部が遺存する。関は刃関であり、茎は鋭利に



第142 図 D4-2地区 包含層出土遺物実測図

おわる。目釘孔などは現状では確認できない。鉄鏃 (68) は鏃身部のみ遺存する。逆刺のない柳葉形を呈し、鏃身部長 4 cm を測る。鉄鏃 (69) は頸部から茎の一部である。錆のため詳細は不明であるが、直角関があるものと推測される。これらの鉄製品のうち、2点の鉄鏃については横穴式石室墳に伴っていたものと考えられる。

D4-1地区包含層出土鉄器は先述した周溝SD84出土鉄器を含め6点を図示した。

65 は袋状の鉄製品である。先端を欠損しているため、全体像は不明である。残存長 3.1cm を 測る。

66 は棒状鉄製品である。断面は円形を呈し、緩やかに屈曲する。先端はやや尖り気味におわる。 67 は鉄釘である。全体に錆膨れ、剥離が著しいが、断面は方形を呈する。全長 6.7cm を測る。 (石崎善久)

② D 4 - 2 地区包含層出土遺物 (第 142 図 1 ~ 7)

D4-2地区包含層出土遺物として7点を図示した。また、土坑SK88出土鉄器も便宜上、この項で報告を行う。

1~3は土師器皿である。4は青磁椀である。5は瓦である。

(筒井崇史)

D4-2地区出土鉄製品として、鉄刀1点(6)、鉄釘1点(7)を図示した。

鉄刀(6)は包含層より出土した。刀身の一部のみ遺存する。刀身部幅 3.3cm・最大厚 0.8cm・ 残存長 20.4cm を測る。刀身の反りはみられない。

鉄釘 (7) は土坑 S K 88 より検出された。断面方形を呈し、頭部はやや膨らみをもつ。先端を欠損するが、わずかに木質の付着がみられる。残存長 5.1cm を測る。

(石崎善久)

7.80・81トレンチ、D8地区

80・81トレンチは、掘削が遺構面に達する水路部分の調査を目的として、D4-1地区の北東側に設けた調査区である。当初は西半分のみであったが、その後、遺構面に達する箇所が新たに確認されたので、東へ調査区を延長した。設置される水路との関係上、不整形な「Y」字形を呈する。調査区のほぼ中央で古墳1基を検出した(国分41号墳)。また、弥生時代の可能性のある遺構と、時期不明の遺構を検出した。

一方、D8地区はD4-1地区の東側に位置する国分 1 号墳の周囲で切り土となる箇所について設定した調査区である。国分 1 号墳の西側の調査区をD8-1地区、東側の調査区をD8-2地区とした。D8-1地区では国分 1 号墳に関連する遺構を、D8-2地区では時期不明の柱穴群を検出した。

(1)弥生時代の遺構・遺物

①検出遺構

弥牛時代の遺構の可能性があるものとして、80・81トレンチで溝SD09を検出した。

溝SD09 80・81トレンチのほぼ中央で検出した。検出長 $3.4 \,\mathrm{m}$ 、幅 $2.0 \,\mathrm{m}$ 、深さは $0.3 \,\mathrm{m}$ 0.8 mである。溝の断面形は「U」字形ないし緩い「V」字形を呈する。検出範囲が狭いので、どのようにのびるのか不明である。ただし、延長部と思われる遺構は $0.4 \,\mathrm{m}$ 1 地区では検出していない。埋土から弥生土器片が出土した (第 $0.4 \,\mathrm{m}$ 1 (第 $0.4 \,\mathrm{m}$ 1 (1 $0.4 \,\mathrm{m}$ 1 $0.4 \,\mathrm{m}$ 2 $0.4 \,\mathrm{m}$ 2 $0.4 \,\mathrm{m}$ 3 $0.4 \,\mathrm{m}$ 2 $0.4 \,\mathrm{m}$ 3 $0.4 \,\mathrm{m}$ 3 $0.4 \,\mathrm{m}$ 3 $0.4 \,\mathrm{m}$ 3 $0.4 \,\mathrm{m}$ 4 $0.4 \,\mathrm{m}$ 3 $0.4 \,\mathrm{m}$ 4 $0.4 \,\mathrm{m}$ 5 $0.4 \,\mathrm{m}$ 6 $0.4 \,\mathrm{m}$ 5 $0.4 \,\mathrm{m}$ 5 $0.4 \,\mathrm{m}$ 6 $0.4 \,\mathrm{m}$ 9 $0.4 \,\mathrm{m}$ 6 $0.4 \,\mathrm{m}$ 9 $0.4 \,\mathrm{$

②出土遺物

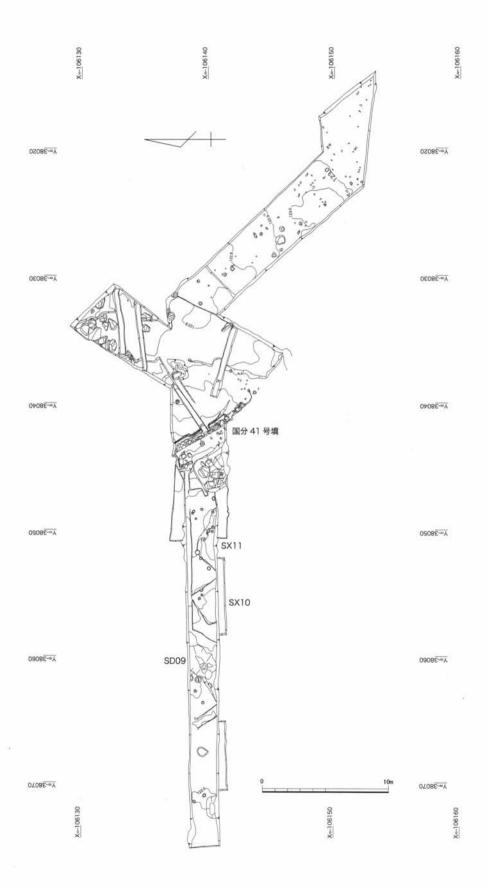
満SD09(第148図1~6) 1~3は甕の口縁部で、小破片のため口径や傾きは推定である。 $1 \cdot 2$ は「く」字状に外反する。 3は口縁端部を内上方へつまみ上げる。 $4 \sim 6$ は甕の底部である。 いずれも弥生時代後期のものと考えられる。

(2) 古墳・飛鳥時代の遺構・遺物

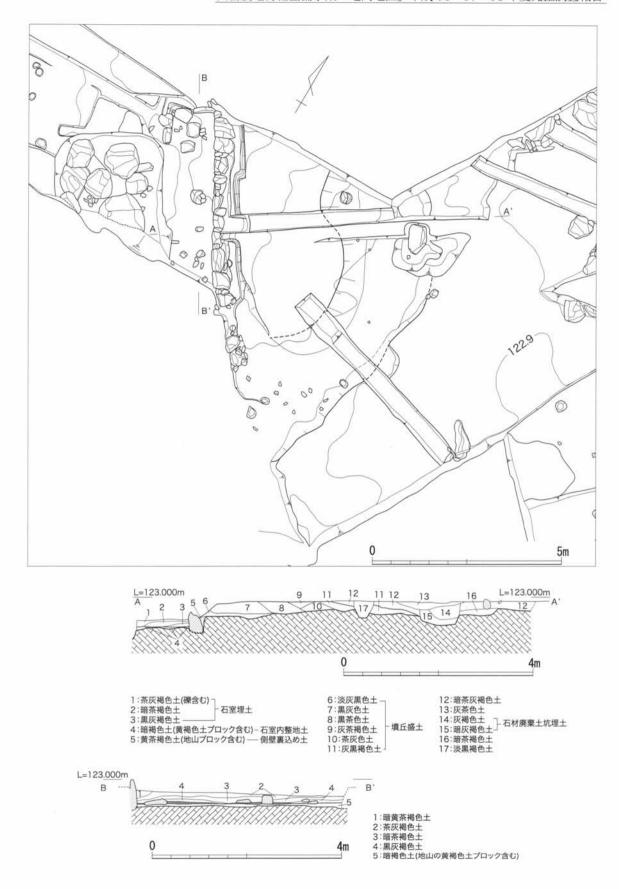
①国分 41 号墳

位置 80・81トレンチのほぼ中央で検出した。南東側に国分1号墳が所在する。石室床面の標高は122.4 mである。

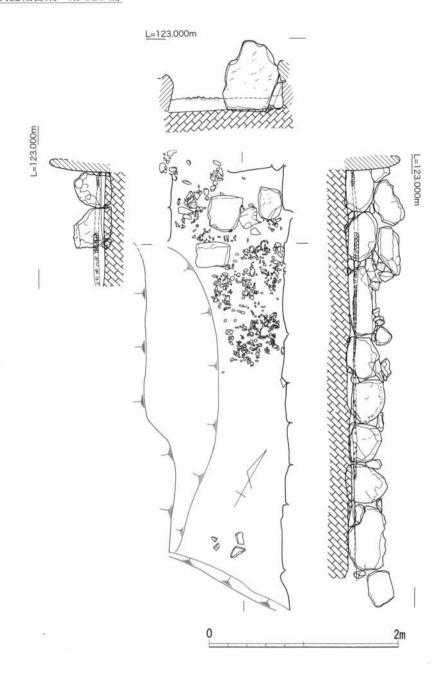
墳丘 (第 144 図) 国分 41 号墳に伴う墳丘は、石室の右側壁から西側と墳丘上部を大きく削平されて遺存しない。墳丘の東側で、弧状を呈する墳丘の斜面と、浅いながらも周溝をかろうじて検出することができた。周溝の幅は 2 m前後、深さ 0.25 mである。一方、墳丘の北側裾や南



第143 図 80・81 トレンチ検出遺構配置図 (1/300)



第144図 国分41号墳墳丘測量図および土層断面図



第 145 図 国分 41 号墳横穴式石室実測図

側裾などは調査区外となるため未確認である。東側で検出した周溝の形状から復原できる古墳の 墳形・規模は直径 10 m程度の円墳と考えられる。

また、墳丘断面の観察から、墳丘の構築方法は、墳丘中軸側に傾斜させて、周縁側へ盛土を順 次盛り上げていったことが確認できる。

石室 (第 145 図) 南東に開口する無袖式の横穴式石室と考えられる。上述のように古墳の南端は調査区外になることから、石室についても羨門部等について確認することができない。調査し得た石室の規模は、石室検出長 4.6 m、奥壁側石室幅 1.2m、奥壁残存高 0.6m である。石室の主軸は N 29° Wである。

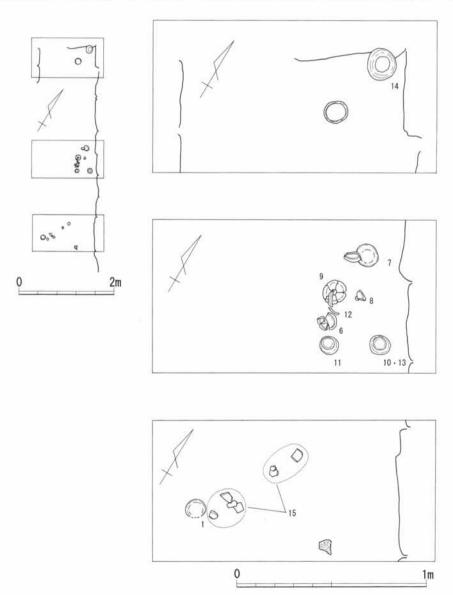
奥壁はやや大振りの石を2石用いているが、西側の奥壁は抜き取られており、東側の1石のみ

残存していた。側壁の大半は基底石のみが残存しており、左側壁の奥壁寄りで2段目の石が2石だけ残存していた。西側壁は奥壁寄りの2石を残して大きく削平されている。基底石は幅40~70cm、高さ30~40cm程度のものを横位に据え付けている例が多い。

石室床面には直径 $2 \sim 4$ cm 程度の礫が $3 \sim 4$ cm 程度の厚さで敷かれていた。今回調査した 古墳群の中で、このような小礫を敷き詰めて床面を形成していた例はない。また、床面上では一辺 $25 \sim 35$ cm 程度の石を水平な状態で検出した。棺台の可能性も考えられたが、石室中央の石の下から須恵器杯 G 蓋 1 点 (9) が出土したことから、棺台とは考えられない。石材が石室内に 転落もしくは落とされたものかもしれない。

石室掘形は左側壁側のみ確認することができた。掘形と石材の間には、地山ブロックを含む黄 褐色土で埋めて、裏込め土としている。

遺物出土状況 (第146図) 石室床面から須恵器杯H蓋(1)、須恵器杯G蓋(6~9)、須恵器



第 146 図 国分 41 号墳石室内遺物出土状況図

杯 G (10 \sim 13)、須恵器短頸壺 (14)、土師器杯 A (15) などが出土した。このうち、須恵器杯 H と短頸壺 (14) は奥壁寄りで出土した。ともに正位置での出土である。ただし、この杯 H は摩滅が著しく、実測に耐えられないので図示することができなかった。

須恵器杯G蓋 $(6\sim9)$ と須恵器杯 $G(10\sim13)$ は、石室中央部のやや左側壁に寄ったところで出土した。まとまっているものの、積み重なっているものや逆位のもの、破損しているものなどがあることから、埋葬時のままの状態ではないと判断される。また、上述のように石の下から9が出土したが、他の個体はこの石の周辺でまとまって出土していることから、何らかの撹乱を受けている可能性は高い。ただ、これらの土器が撹乱以前に、この周辺に存在したことは確実である。

須恵器杯H(1)と土師器杯A(15)は石室羨門部寄りで出土した。図示していないが、須恵器 甕の破片なども出土した。他の個体に比べ細片化している上、やや広く散ったような状態で出土 した。

石室掘形から須恵器杯H(4・5)が出土した。古墳の築造時期を考える上で参考になる資料である。

また、石室を構成していた石材の廃棄土坑 S K 01 からは、平安時代から中世にかけての土器 とともに、須恵器杯H $(2 \cdot 3)$ が出土した。このほか、石室検出面の石材の間から瓦器椀が 1 点出土している。石室の破壊時期を考える上で参考になる資料である。

出土遺物 (第 147 図) 国分 41 号墳に伴う出土遺物として、須恵器、土師器がある。また、石室破壊以後の混入と考えられる瓦器椀がある。

1は口縁端部がやや内傾する須恵器杯H蓋である。ただし、これとセットになる杯Hが確認できないので、杯の可能性もある。口径 10.0cm、器高 2.9cm である。

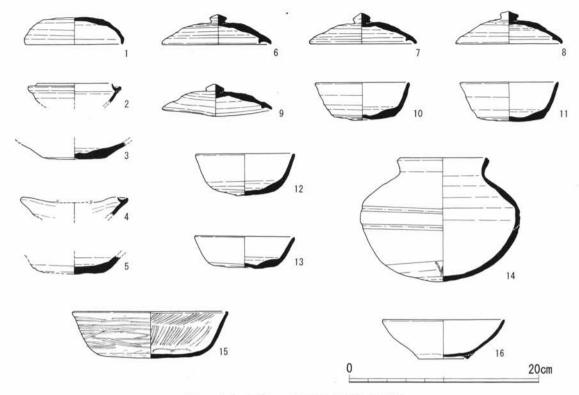
 $2\sim5$ は須恵器杯Hである。いずれも石室内に副葬されたものではない。 $4\cdot5$ は掘形出土で、 $6\sim13$ の杯 G 蓋・杯 G とほぼ同時期のものと考えられる。

 $6 \sim 9$ は須恵器杯 G 蓋である。ほぼ同形同大のもので、9 は焼け歪みが著しい。口径 9.9cm 前後、器高 3.3cm 前後である。天井部は回転ヘラケズリ調整を施す。

 $10 \sim 13$ は須恵器杯Gである。ほぼ同形同大で、口径 $10.2 \, \mathrm{cm}$ 前後、器高 $4.2 \, \mathrm{cm}$ 前後である。ただし、13 はやや器高が低く、 $3.4 \, \mathrm{cm}$ である。底部外面はヘラキリ後不調整もしくはナデ調整である。

14 は須恵器短頸壺である。口縁部はわずかに外方に開き、端部をつまみ上げ気味にして外面側に面を持つ。全体に摩滅が著しいが、底部外面は回転ヘラケズリ調整を施す。そのほかは回転ナデ調整を施したと考えられる。体部中位に 2条の沈線を施す。口径 9.0cm、器高 12.9cm、体部最大径 16.9cm である。

15 は土師器杯Aである。口縁端部内側が肥厚する。口縁部外面は横方向のミガキ調整を施す。 底部外面はケズリ調整を施した後にナデ調整を加える。口縁部内面に2段の放射状暗文を、底部 内面に螺旋状暗文をそれぞれ施す。口径16.2cm、器高5.0cmである。胎土が密で細砂を少し含



第147 図 国分41号墳出土遺物実測図

み、橙褐色を呈する。以上のような特徴から、15は、いわゆる畿内産土師器と考えられる。

16 は瓦器椀である。全体に摩滅が著しく、調整は不明である。口径 12.8cm、器高 4.1cm、 底径 5.2cm である。

②国分1号墳

D8-1地区では、国分1号墳の北西側の墳丘斜面および墳丘裾を検出した。斜面上部に当たる東端部では、1号墳の石室を破壊した際の石材廃棄土坑を検出した。墳丘斜面裾では須恵器甕1点がつぶれたような状態で出土した。しかし、口縁部がなく、接合作業を行ったものの、十分に復原をすることができなかったため、図示していない。

また、1 号墳に伴う遺構としては D4-1 地区で検出した溝 SD74 があるが、より高所側の D8-2 地区では 1 号墳の墳形を示すような遺構は全く検出されなかった。

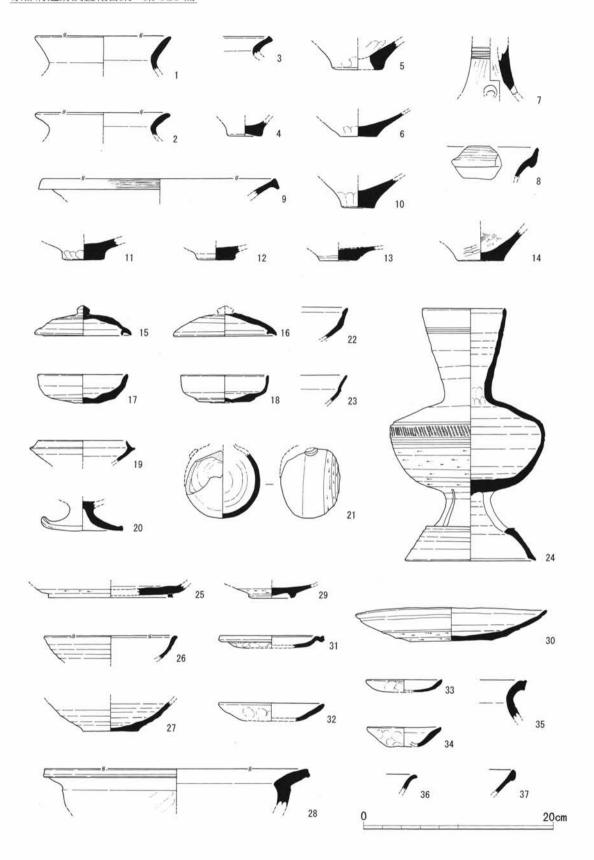
(3)時期不明の遺構

80・81トレンチでは、時期不明の遺構として、不明遺構 S X 10・ S X 11を検出した。調査 範囲が狭いため、遺構の全体の形状や規模等は不明である。遺構内からは弥生土器の破片などが 出土しているが、形状等から人為的な遺構と判断するのは躊躇される。自然地形の可能性も残る。

また、D8-2地区では柱穴や小規模な土坑を多数検出した。しかし、これらは掘立柱建物跡としてまとまるようなことはなく、個々の柱穴からも時期を示すような遺物は出土しなかった。 D8-2地区では精査中に出土した弥生土器片 2点を図示したのみである (第 148 図 10・11)。

(4)包含層出土遺物(第148図)

10・11・25・33・34 は D 8 地区出土遺物である。 そのほかはすべて 80・81 トレンチ出土



第148 図 D8地区包含層ほか出土遺物実測図

遺物である。

 $7 \sim 14$ は弥生土器である。7 は高杯の脚部である。外面に5 条の沈線を施す。円形の透孔が1 個認められる。8 は広口壺の口縁部と考えられる。外面に5 条の擬凹線文を施す。9 は広口壺ないし器台の口縁部の破片である。口縁端部外面に3 ないし4 条の擬凹線文を施し、わずかであるが垂下する。 $10 \sim 14$ は壺または甕の底部である。14 は外面にタタキ調整が認められるので甕の底部と考えられ、その他は壺の底部と考えられる。

15~24 は古墳時代ないし飛鳥時代の土器と考えられる。特に15~18・24 は国分 41 号墳の周溝もしくは、その東側で出土したことから、これらを副葬していた古墳の存在が予想される。15・16 は須恵器杯G蓋である。天井部外面に回転ヘラケズリ調整を施した後につまみを貼り付ける。口径9.0~9.8cm、器高3.2cm前後である。17・18 は須恵器杯である。19 は須恵器杯 Hである。20 は須恵器高杯の脚部で、焼け歪みが著しい。21 は小型の提瓶である。閉塞部にナデ調整を施し、その反対側には回転ヘラケズリ調整を施す。22・23 は須恵器であるが器種は不明である。杯の口縁部として図示したが、天地逆の可能性もある。24 は須恵器脚台付長頸壺である。上述の15~23の土器に比べ、やや古相の特徴を持つと考えられる。口縁部外面に2条の沈線を施す。体部最大径付近には沈線を3条施し、1条目と2条目の間に櫛状工具による刺突文を施す。体部下半には回転ヘラケズリ調整を施す。脚台部には幅0.4cm、長さ4cmほどの透孔を3方向に施す。口径8.6cm、器高26.4cm、底径13.6cm、体部最大径16.2cmである。

25 は奈良時代の須恵器杯Bの底部である。底径 13.0cm である。

26~31 は平安時代の土器である。26・27 は須恵器椀である。ともに回転ナデ調整によるナデの痕跡が明瞭にみられる。26 は口縁端部がやや肥厚する。27 は底部外面に糸切り痕がみられる。28 は土師器鍋である。やや厚手の作りで、口縁部と内面にヨコナデ調整を施す。29 は灰釉陶器椀の底部と考えられる。高台は削り出しである。30 は須恵器皿である。ただ胎土が他の須恵器とは異なり、灰釉陶器の胎土に近いようである。焼け歪みが著しい。底部外面に回転ヘラケズリ調整を施す。31 は土師器皿である。いわゆる「て」字状口縁部を呈する。

 $32 \sim 37$ は中世の土器である。 $32 \sim 34$ は土師器皿である。外面のユビオサエ痕がみられる。 35 は底部中央を押し上げた形態を呈すると思われる。36 は青磁椀の、37 は白磁の小破片である。 (筒井崇史)

おわりに

以上、蔵垣内第4次・国分古墳群の調査について概要を記してきた。次年度に報告を行う古墳 やその他の遺構・遺物も多数存在するため、国分古墳群や、蔵垣内遺跡の詳細な検討は次年度に 行う予定であるが、いくつか、簡潔にまとめと問題点の提起を行っておきたい。

①国分古墳群について

今回、調査を実施した古墳は総数 24 基にのぼる。横穴式石室あるいは小石室を内部主体に採用する後・終末期群集墳といえる。亀岡市域で、このように大規模に群集墳の調査が実施されたことはかつてなく、今後、各古墳を詳細に比較検討することにより、細かな築造時期の問題や、被葬者像の問題、群の構成などについて検討を行っていく必要がある。

墳丘には八角形墳や円墳、方墳などがあり、石室にも、両袖、無袖、片袖のものがあり、多彩 な様相を示す古墳群であることが明らかとなった。

特に、石室の規模・形態と、副葬品の内容には密接な関係があるようである。また、個人埋葬 とみられる小石室墳や同一墳丘内に2つの石室をもつ国分36号墳の存在も、この古墳群の性格 を考えていく上で、重要と考える。

これらの点については次年度の報告のなかで検討を加えていきたい。

②国分 45 号墳について

本文でも述べたように、国分 45 号墳の墳形はやや不整形な八角形墳に復原することができる (第 149 図)。しかし、八角形という形状をもって、王権中枢や大王との関係を強調するのは短絡的にすぎる。むしろ兵庫県宝塚市中山荘園古墳 (**) や同安富町塩野六角古墳 (**)、広島県新市町尾市 1 号墳 (**) など、地方において、飛鳥時代にみられる墳丘装飾としての列石、多角形墳として評価すべきであろう。ただ、これらの多角形墳の多くは単独墳であり、今回のような明確な群集墳の中に造営されていることはほとんどない。この点に国分 45 号墳の特色があると言える。

ところで、国分45号墳の築造時期であるが、石室内からは須恵器・土師器・鉄器などが出土した。本来ならば、古墳群全体の出土土器の検討をふまえて時期等を述べるべきであるが、その詳細は次年度に報告する予定の古墳と併せて行うこととし、ここでは、飛鳥地域の土器編年と比較して、おおよその年代観を提示するにとどめたい。まず玄室で出土した土師器杯はいわゆる畿内産土師器の模倣と考えられ、模倣されたのは杯Cであろう。これらの径高指数は33~36で、山田寺下層出土資料ないし、飛鳥池遺跡溝SD809灰緑色粘砂層出土資料に近い。また須恵器杯Gは、口径が8.7~10.7cmで、藤原京下層SK2355出土資料に近い。前者は飛鳥IIの標式資料である(12)。これによって国分45号墳に追葬があったとみるかどうかはここでは議論しない。この土器群は古墳築造時期の上限と下限を示していると考え、国分45号墳の築造時期を7世紀の第3四半期頃と考えたい。

土器からみた年代観と、八角形墳あるいは多角形墳が盛行する時期とはおおむね一致するとい うことだけ今回は確認しておきたい。

③弥生時代の集落について

今回、蔵垣内遺跡の北東部を中心に弥生時代後期の住居跡群を確認することができた。この段 丘上では、かつて、国分寺の下層から弥生時代後期の竪穴式住居跡が検出されており、弥生時代 後期の集落の存在が指摘されてきた。しかしながら、今回の調査地とは距離的に離れており、一 連の集落として把握すべきか否かは検討の余地が残っている。今後、周辺部で検出されている遺 物との比較を行うことにより、集落の実態を検討していく必要がある。

④中世の蔵垣内遺跡について

中世の遺構は密度が低いながら、今回報告した地区の大部分で確認することができた。掘立柱 建物跡群や土坑、ピットなどが存在し、集落を形成したとみられる。この段階の遺構については 次年度報告を実施するB地区やD7地区を中心に遺構密度が高く、また、中世国分寺と密接な関 連をもっていたとみられる。この点に関しては次年度報告を行う中で改めて検討を加えたい。

(石崎善久・筒井崇史) 列石残存部 墳形復原線 10m 第 149 図 国分 45 号墳墳丘復原案 (1/200)

-197 -

注 調査参加者は以下のとおりである(順不同・敬称略)。

一平成17年度一

調査補助員 天池佐栄子・奥 浩和・村上奈弥・井上 亮・北森さやか・草彅大蔵・武田雄志・田中洸太郎・平井耕平・松本景太・大道真由美・坂内裕志・関 正樹・中村 領・豊田洋貴・田部直樹・橋本翔太・野崎文人・吉村駿吾・梅村大輔・稲畑航平・杉崎哲郎・村田 豊・安井蓉子・原口彰太・平田和範・山口由希子・中嶋直樹・藤本卓司・谷上真由美・古川史高・桂 啓輔・松村龍哉・早川真也・後藤大輝・加藤純平・副井克哉・松川考男・木村充哉・加藤千尋・守本裕一・槌田哲也・南部直志・大下 永・小野宏一郎・平井将吾・平井祐成・中屋啓太・作野大介

整理員 山本弥生・荻野富沙子・中島恵美子・西村香代子・松下道子・高田眞由美・関口睦美・藤井矢壽子・柿谷悦子・松元順代・堤 百合美・中川由美子・中川香代子・長尾美恵子・川村真由美作業員 浅田圭二・浅田節子・浅田昌子・浅田義幸・飯田久美子・小川益次郎・奥田 宏・河原 博・川村敏雄・川村フクエ・北村 博・才津鈴美・堤 明・堤 和代・堤 清子・堤 純子・堤 末夫・堤 達也・堤 智恵子・堤 千鶴・堤 務・堤 真凡・堤 洋一・中川恵美子・中川しづゑ・中川末男・中川 坦・中川章代・中川まゆ子・中澤一雄・中澤多美・中澤一義・中澤隆征・中澤次雄・中澤まゆみ・中澤美津子・中澤 豊・中澤義己・中島千恵子・名倉清司・埜々下英美利・野々村 桂・橋本幸子・畑 和樹・畑 正彦・畑 弥生・林 節子・林 八郎・林 儀治・平岩敬子・藤井多恵子・椋本好美・村上英子・森 江津子・安藤孝司・安藤美智子・茨木福夫・岡本晴子・面屋龍憲・亀谷憲二・河島信晴・北口泰正・小泉正男・近藤正裕・澤田 勲・島津イトコ・島津伴一・杉崎和雄・杉崎征夫・武内征男・谷尻小ちゑ・谷尻文夫・寺町為三・寺町義則・名倉峯子・西村眞弓・橋本辰彦・平野かすみ・平野寿美枝・平野博美・平野由紀子・広瀬征夫・広瀬秀夫・松田弘和・松田義兼・森川セイ・八木まゆみ・山田 優

一平成 18 年度一

調査補助員 天池佐栄子・稲畑航平・吉村駿吾・千國ひろ子・草彅大蔵・大道真由美・後藤大輝・ 秋山信也・奥 浩和・村上奈弥・坂内裕志・平井耕平・梅村大輔・谷口翔平・井上亮・宇留野達彦・ 杉江貴宏・山口由希子・白川晴章・森田善久・福重麻木・中島一博・橋爪侑也・大黒浩二・向井菜都子・ 伊藤佑香・原口彰太・平田和範・安井蓉子・出畑歩美・国府恵利・田中奈津子・黒田玲子・木村 悟・黒 慶子・木村涼子・寺尾多慧子・山花可奈子・岩塚祐治・小原康子・米山紗矢香・坂下 実・ 平井祐成・加藤吉人・平田陽一・魚谷典主

整理員 高田眞由美・柿谷悦子・松元順代・堤 百合美・中川由美子・陸田初代・長尾美恵子・荒川仁佳子・稲垣あや子・春日満子・荻野富沙子・山本弥生・中島恵美子・藤井矢壽子・松村弘子・中澤一義

作業員 浅田圭二・浅田マサ子・浅田義幸・足達ひろみ・飯田久美子・井上美代子・岩間絵里香・ 興津嘉子・奥田 宏・河原伍逸・河原祐輔・川村フクエ・川村有加子・北村博・才津鈴美・堤 藍 子・堤 明裕・堤 明・堤 清子・堤 純子・堤 末夫・堤 達也・堤 智恵子・堤 務・堤 翼・ 堤 富子・堤 謹子・堤 廣子・堤 政茂・堤 真凡・堤 操・堤 悠代・堤 洋一・中川恵美子・ 中川しづゑ・中川末男・中川寛之・中川まゆ子・中川良三・中澤一雄・中澤多美・中澤紀男・中澤春美・ 中澤まゆみ・中澤美津子・中澤美代子・中澤 豊・中澤義己・中島千恵子・中野和子・中野美代子・ 名倉清司・名倉達雄・名倉艶子・名倉 恵・橋本幸子・畑 克己・畑 純子・畑 信弘・畑 正彦・ 畑 宗樹・畑 きく恵・林 勝代・林 彩和子・林 節子・林 八郎・林 儀治・平岩利男・藤井 多恵子・堀口慶子・堀口茂徳・俣野明美・三浦禮司・村上英子・良原南吉・安藤美智子・伊東文美枝・ 茨木福夫・岡本晴子・面屋龍憲・亀谷憲二・鴨井秋夫・川勝明子・河島信晴・北口泰正・小泉正男・ 近藤正裕・澤田 勲・島津イトコ・杉崎和雄・杉崎征夫・武内征男・竹岡裕代・田中康民・谷尻小ち ゑ・寺町義則・中村幸二・名倉峯子・西田和則・西村眞弓・野々村 紘・橋本辰彦・平野かすみ・平 野博美・広瀬征夫・広瀬宗吾・広瀬秀夫・森川加代子・森川セイ・森川久男・八木まゆみ・八木美代 子・山田 優・吉田 満

また、現地作業および整理作業に関しては以下の関係諸機関、個人から様々なご教示、ご指導を受けた。

京都府教育委員会・亀岡市教育委員会・一瀬和夫・太田宏明・小川裕見子・高橋克壽・高橋照彦・菱田哲郎・和田晴吾

- 注1 本報告では石室の記述に際し、奥壁から前壁を向いた場合の向かって右側を右、左側を左として記述 した。
- 注2 これら石室石材については七谷川流域で採集できることを地元の造園業の方からうかがう事ができた。かつては、庭石として多くの石材が七谷川上流域で採集されていたそうである。
- 注3 飛鳥時代から奈良時代にかけての須恵器・土師器の器種名については、原則として、奈良文化財研究 所が使用している器種分類を用いる。ただし、古墳出土の高杯や壺については、形態の特徴を表す通 有的な器種名を用いる。

奈良国立文化財研究所『平城宮発掘調査報告VII』(『奈良国立文化財研究所学報』第 26 冊) 1976 奈良国立文化財研究所『飛鳥・藤原宮発掘調査報告Ⅱ』(『奈良国立文化財研究所学報』第 31 冊) 1978

奈良国立文化財研究所『平城宮発掘調査報告XI』(『奈良国立文化財研究所学報』第 40 冊) 1981 奈良文化財研究所『山田寺発掘調査報告』(『奈良文化財研究所学報』第 63 冊) 2002

奈良文化財研究所『平城宮発掘調査報告XVI』(『奈良文化財研究所学報』第70冊) 2002 ほか参照。

- 注4 本報告では、須恵器杯Hの法量を次のように表す。口径は、杯H蓋の口縁部端が杯Hの受部に接するところとし、従来、一般に口径と呼ばれているところを立ち上がり径と表現する。これによって、蓋と杯の口径の値が同じ大きさとして表現されるので、比較作業が容易になるという利点がある。このような方法による須恵器杯Hの検討方法としては、以下の文献を参照下さい。
 - 筒井崇史「飛鳥時代須恵器杯Hの地域性について」(『京都府埋蔵文化財論集』第5集 (財)京都府 埋蔵文化財調査研究センター) 2006
- 注5 人骨の部位特定に関しては、谷畑美帆・鈴木隆雄『考古学のための古人骨調査マニュアル』(学生社)2004 を参考に現地にて同定を石崎が実施した。出土した人骨は残念ながら遺存状況が悪く、検出段階ですでに細片化しており、出土状況を保ったまま取り上げることの不可能なものが大部分であった。
- 注6 補助ケズリは、菱田哲郎ほか「八代宮ノ谷窯跡出土の須恵器」(『鬼神谷窯跡発掘調査報告』(『竹野町文化財調査報告』第7集 竹野町教育委員会) 1990)によって定義、命名されたもので、ロクロ台から須恵器を切り離す際に、ヘラキリの前に底部の周囲を1周程度の回転ヘラケズリを行うものである。したがって補助ケズリの痕跡は通常の回転ヘラケズリとは逆になることで区別できる。補助ケズリは、須恵器杯H、同蓋のほか、須恵器杯Gにおいても確認できる。
- 注7 石崎善久「『青野型甕』について」(『京都府埋蔵文化財論集』第3集 (財)京都府埋蔵文化財調査 研究センター) 1996

京都府遺跡調査報告集 第129冊

- 注8 林部 均氏によると、「畿内のとくに大和・河内」において多く見ることができる「精製された粘土をつかい、ていねいに暗文やヘラ磨きをくわえ、赤褐色に焼き上げた土師器」を指すとされる。 林部 均「西日本の飛鳥・奈良時代の畿内産土師器」(『考古学研究』第39巻第3号 考古学研究会) 1992
- 注9 直宮憲一・猪熊兼勝ほか『中山荘園古墳発掘調査報告書』(『宝塚市文化財調査報告』第19集 宝塚市教育委員会) 1985
- 注 10 垣内 章・猪熊兼勝ほか『塩野六角古墳』(『安富町文化財調査報告』 2 安富町教育委員会) 1994
- 注11 鹿見啓太郎・尾多賀晴吾『尾市1号墳発掘調査概報』(新市町教育委員会) 1985
- 注12 土器の年代観の比定には下記の文献を参照した。

奈良国立文化財研究所『飛鳥・藤原宮発掘調査報告 II』 (『奈良国立文化財研究所学報』第 31 冊) 1978

奈良国立文化財研究所『飛鳥・藤原宮発掘調査報告IV』(『奈良国立文化財研究所学報』第55冊) 1995

奈良文化財研究所『山田寺発掘調査報告』(『奈良文化財研究所学報』第63冊) 2002